

森 町

石倉 2 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

森 町

石 倉 2 遺 跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

八雲

N

- 本内川右岸遺跡 →
- 三次郎川左岸遺跡 →
- 三次郎川右岸遺跡 →
- 石倉 5 遺跡 →
- 石倉 4 遺跡 →

- 石倉 3 遺跡 →

- 石倉 2 遺跡 A 地区 →

- 石倉 2 遺跡 B 地区 →



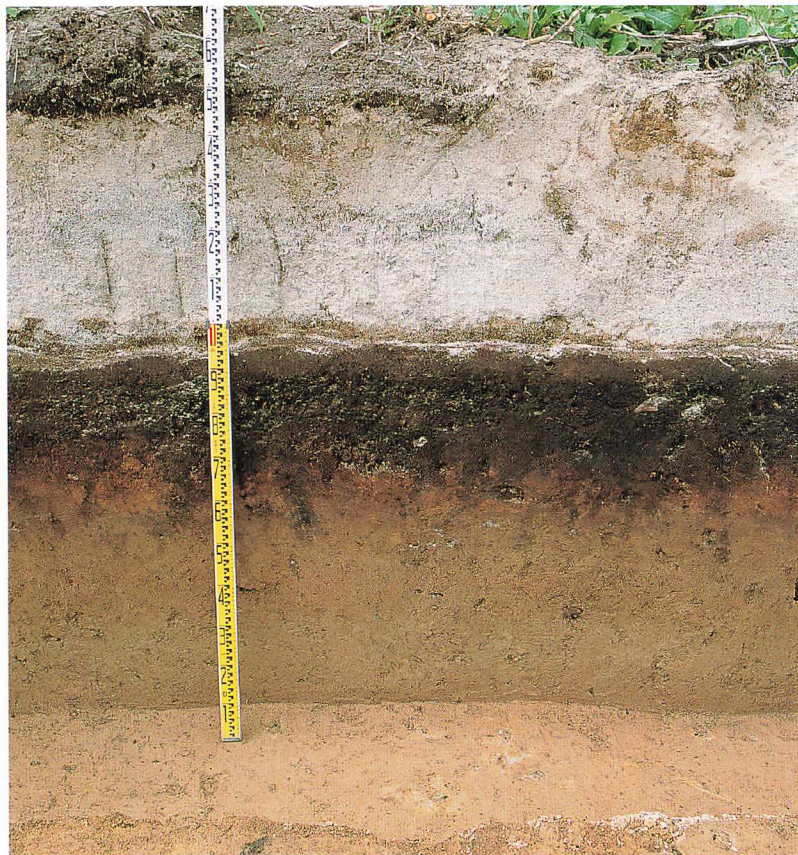
函館

1 遺跡遠景 (北海道新聞2003年10月7日夕刊地方版より)

口絵 2



1 遺跡遠景（北西から）



- I層 表土
- II層 (Ko-d、1640年降下)
- III層 <B-Tm
- IV層 主な遺物包含層
- V層 (Ko-g含む)
- VI層

2 基本土層

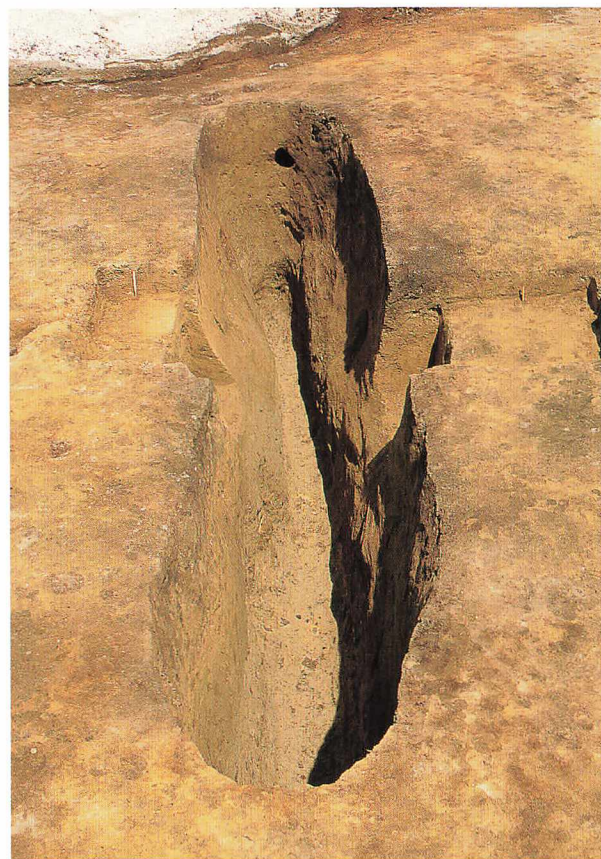


1 B地区竖穴住居跡群調査風景（南から）

口絵 4



1 フラスコ状ピット (IP-2) 土層断面 (南西から)



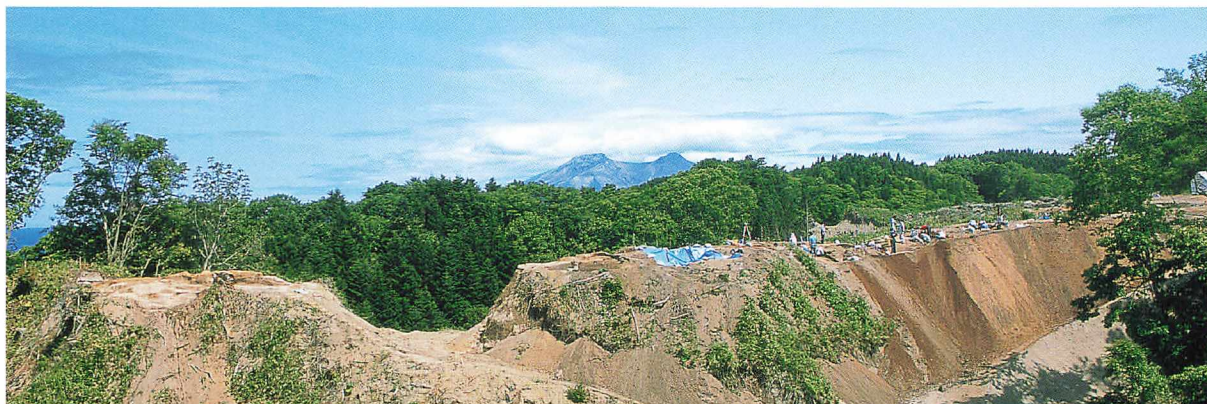
2 Tピット (TP-6) 完掘 (南東から)



3 IP-8 土器出土状況 (南東から)



4 土器集中1 (縄文時代晩期) (北東から)



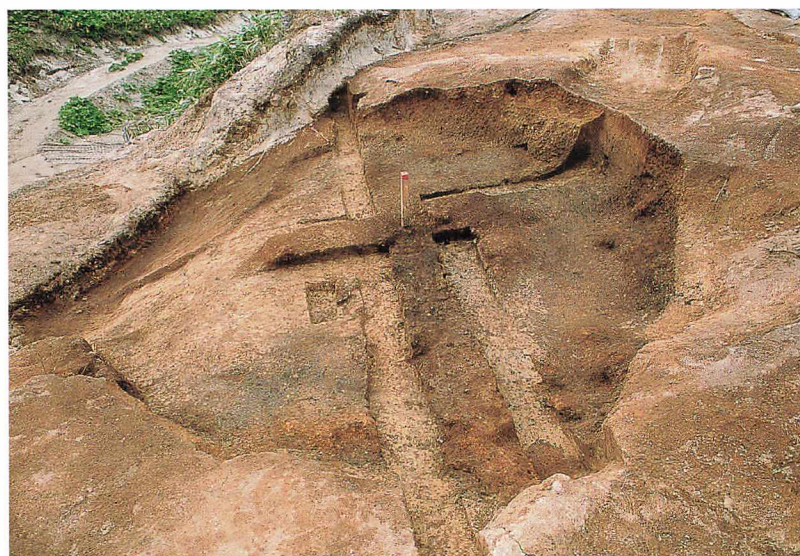
1 B地区遠景（北西から）



2 IH-6 炭化材出土状況（北西から）



3 埋設土器断面（北西から）



4 IH-3 焼土・炭化物検出状況（南から）



5 石棒出土状況（北西から）



1 豎穴住居跡出土の榎林式土器



2 IH-3 出土の石棒

例 言

1. 本書は、日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15（2003）年度に発掘調査を実施した、森町石倉2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第2調査課が担当した。
3. 本書の執筆は、村田大、阿部明義、石井淳平が行い、編集は阿部が行った。各章・節などの執筆者は文末に記名している。
4. 遺構は調査を担当した調査員がそれぞれ整理した。遺物は土器等およびフローテーション試料を阿部が、石器・礫等を村田が担当した。
5. 発掘での写真撮影は各担当の調査員が行い、室内での遺物の写真撮影・焼付けなどは村田が行った。
6. 分析・同定について、下記に依頼・委託した。
（¹⁴C年代測定） 地球科学研究所
（炭化材樹種同定） ㈱パリノ・サーヴェイ
（種実遺体同定） ㈱パリノ・サーヴェイ
7. 石器等の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡正光の指導のもと、村田が行った。
8. 出土資料および記録類は、森町教育委員会で保管する。
9. 調査にあたっては、下記の諸機関および人々の指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。
北海道教育庁生涯学習部文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、七飯町教育委員会
森町教育委員会：藤田 登・荻野幸男・佐藤 稔・八重柏誠・山田あや子・本山志郎・渡辺明美、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：安西雅希・吉田 力、七飯町教育委員会：（故）石本省三・山田 央、南茅部町教育委員会：阿部千春・福田裕二、南茅部町埋蔵文化財調査団：小林 貢・輪島慎二・坪井睦美、函館市教育委員会：長谷部一弘・野村祐一、私設北海道考古学研究所：横山英介、静岡産業大学：中村羊一郎

記号等の説明

1. 遺構名・遺構図について

- (1) 遺構名は以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。なお、発掘区と区別するため、アルファベット1文字の略号は石倉2遺跡の頭文字「I」を頭に付している。

I H：竪穴住居跡 H P：住居跡内の柱穴 H F：住居跡内の焼土
I P：土壇 T P：Tピット I F：焼土
(C P)：土器集中 I S：礫集中 F C：フレイクチップ集中

- (2) 掲載した遺構図等の縮尺は、原則として以下のとおりであり、各図面にスケールを付した。

遺構図 1：40 遺物出土状況 1：20

- (3) 調査区の設定は道路公団の工事設計図を基にした。これは函館側を起点としたものであり、森町内では大きく曲がった路線となっている。このため作成した図面は、地図の基本である「北が上」の体裁をとっていない。

以上の理由により、遺構図にはグリッド線に従って方位記号を付した。真北は南北方向の基線に対して西偏44度11分23秒である。レベルは標高(単位m)を示す。

- (4) 遺構の規模は以下の要領で示した。なお一部破壊されているものや不明確なものについては、現存長を「()」で、不明のものは「-」で示した。

住居跡・土壇・Tピットなど……確認面の長軸長／床面・壇底面の長軸長×確認面の短軸長／
床面・壇底面の短軸長×最大の深さ(単位：m)
焼土など……確認面の長軸長×確認面の短軸長×最大厚
遺物集中など……確認範囲の長軸長×短軸長

- (5) 出土遺物分布図等での表示は、遺物の種類別に以下のシンボルマークで示したものがあ

●・○：土器・土製品 ▲・△：剥片石器・剥片 ■・□：礫石器・礫
黒塗りは床面・壇底面出土、白抜きは覆土出土
また焼土・炭化物集中等はスクリーントーンで示したものがあ

2. 遺物について

- (1) 掲載した実測図等の縮尺は、原則として以下のとおりであり、各図面にスケールを付した。

復元土器 1：3 土器拓影 1：3 土製品・石製品 1：2
剥片石器 1：2 磨製石器 1：2 礫石器 1：3 (一部1：4)

- (2) 石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお破損しているものについては現存最大長を()で示した。

最大長×最大幅×最大厚(単位：cm)

3. 土層について

- (1) 基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。

- (2) 土層の混合状態を表現するために、以下のように表記してある。

A + B：AとBが同量混じる。 A > B：AにBが少量混じる。
A ≧ B：AにBが微量混じる。 A ≐ B：AとBはほぼ等しい。

- (3) 土層の色調には『新版標準土色帖』(小山・竹原1967)を使用し、カラーチャートの番号を付したものがあ

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 章 調査の概要	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	1
4. 調査の方法	3
(1) 発掘区の設定	
(2) 発掘調査の方法	
(3) 土層の区分	
(4) 整理作業の方法	
(5) 遺物の分類	
5. 調査結果の概要	9
II 章 遺跡の立地と周辺の遺跡	11
1. 位置と環境	11
2. 周辺の遺跡	13
III 章 A 地区の調査とその遺物	17
1. 概要	17
2. 遺構とその遺物	19
(1) フラスコ状ピット [IP-2・5・7]	
(2) 土壌 [IP-1・3・4・6・8]	
(3) Tピット [TP-1~10]	
(4) 焼土 [IF-1・2]	
(5) 土器集中 [1~4]	
(6) フレイクチップ集中 [FC-1・2]	
3. 包含層の遺物	50
表	58

IV章 B地区の調査とその遺物	61
1. 概要	61
2. 遺構とその遺物	63
(1) 竪穴住居跡 [IH-1~11]	
(2) 土壌 [IP-9]	
(3) 礫集中 [IS-1]	
3. 包含層の遺物	116
表	124
V章 自然科学的手法による分析・鑑定	133
1. ¹⁴ C年代測定結果(地球科学研究所)	133
2. 石倉2遺跡から出土した炭化木片の樹種(パリノ・サーヴェイ)	137
3. フローテーションによる微細遺物の採集と分析	143
4. 石倉2遺跡から出土した種実遺体について(パリノ・サーヴェイ)	145
VI章 まとめ	149
1. 遺構について	149
(1) 竪穴住居跡について	
(2) フラスコ状ピットについて	
2. 遺物について	154
(1) 榎林式土器について	
(2) 縄文時代中期の石棒について	
(3) 石倉2遺跡出土のイルカ頭骨	
引用・参考文献	162
写真図版	163
・ A地区調査状況	
・ A地区出土遺物	
・ B地区調査状況	
・ B地区出土遺物	

報告書抄録

挿図目次

図 I - 1	遺跡の位置	2	図 IV - 10	IH - 2 出土遺物(1)	72
図 I - 2	2003年度北海道縦貫自動車道(森町内) 調査遺跡位置図	3	図 IV - 11	IH - 2 出土遺物(2)	73
図 I - 3	発掘区設定図	5	図 IV - 12	IH - 3 (1)	76
図 I - 4	基本土層	6	図 IV - 13	IH - 3 (2)	77
図 I - 5	遺構位置図	10	図 IV - 14	IH - 3 (3)	78
図 II - 1	遺跡周辺の地形(1)	12	図 IV - 15	IH - 3 出土遺物(1)	79
図 II - 2	遺跡周辺の地形(2)	13	図 IV - 16	IH - 3 出土遺物(2)	80
図 II - 3	周辺の遺跡	15	図 IV - 17	IH - 3 出土遺物(3)	81
図 III - 1	A地区地形測量図	17	図 IV - 18	IH - 3 出土遺物(4)	82
図 III - 2	A地区遺構位置図	18	図 IV - 19	IH - 4 (1)	84
図 III - 3	IP - 2 (1)	21	図 IV - 20	IH - 4 (2)・IH - 4 出土遺物(1)	85
図 III - 4	IP - 2 (2)	22	図 IV - 21	IH - 4 出土遺物(2)	86
図 III - 5	IP - 5 と出土遺物	23	図 IV - 22	IH - 4 出土遺物(3)	87
図 III - 6	IP - 7	24	図 IV - 23	IH - 5	89
図 III - 7	IP - 1 と出土遺物	27	図 IV - 24	IH - 5 出土遺物	90
図 III - 8	IP - 3・4・6	28	図 IV - 25	IH - 6 (1)	92
図 III - 9	IP - 4 出土遺物	29	図 IV - 26	IH - 6 (2)	93
図 III - 10	IP - 8 と出土遺物	30	図 IV - 27	IH - 6 出土遺物(1)	94
図 III - 11	TP - 1・2	34	図 IV - 28	IH - 6 出土遺物(2)	95
図 III - 12	TP - 3・4	35	図 IV - 29	IH - 6 出土遺物(3)	96
図 III - 13	TP - 5・6	36	図 IV - 30	IH - 7	98
図 III - 14	TP - 7・8	37	図 IV - 31	IH - 7 出土遺物	99
図 III - 15	TP - 9	38	図 IV - 32	IH - 8	101
図 III - 16	TP - 10	39	図 IV - 33	IH - 8 出土遺物	102
図 III - 17	IF - 1・2	40	図 IV - 34	IH - 9	104
図 III - 18	土器集中 1・土器集中 1 出土遺物(1)	43	図 IV - 35	IH - 9 出土遺物(1)	105
図 III - 19	土器集中 1 出土遺物(2)	44	図 IV - 36	IH - 9 出土遺物(2)	106
図 III - 20	土器集中 1 出土遺物(3)	45	図 IV - 37	IH - 9 出土遺物(3)	107
図 III - 21	土器集中 2 と出土遺物	46	図 IV - 38	IH - 9 出土遺物(4)	108
図 III - 22	土器集中 3 と出土遺物	47	図 IV - 39	IH - 10	109
図 III - 23	土器集中 4 と出土遺物	48	図 IV - 40	IH - 10 出土遺物	110
図 III - 24	FC - 1・2	49	図 IV - 41	IH - 11 と出土遺物	112
図 III - 25	A地区包含層出土土器分布図	51	図 IV - 42	IP - 9	113
図 III - 26	A地区包含層出土の土器	52	図 IV - 43	IS - 1 礫石器	114
図 III - 27	A地区包含層出土石器分布図(1)	54	図 IV - 44	IS - 1	115
図 III - 28	A地区包含層出土石器分布図(2)	55	図 IV - 45	B地区包含層出土土器分布図	117
図 III - 29	A地区包含層出土の石器(1)	56	図 IV - 46	B地区包含層出土の土器	118
図 III - 30	A地区包含層出土の石器(2)	57	図 IV - 47	B地区包含層出土石器分布図(1)	120
図 IV - 1	B地区地形測量図	61	図 IV - 48	B地区包含層出土石器分布図(2)	121
図 IV - 2	B地区遺構位置図	62	図 IV - 49	B地区包含層出土の石器(1)	122
図 IV - 3	IH - 1 (1)	64	図 IV - 50	B地区包含層出土の石器(2)	123
図 IV - 4	IH - 1 (2)	65	図 V - 1	年代測定試料採取地点	133
図 IV - 5	IH - 1 出土遺物(1)	66	図 V - 2	フローテーション試料採取位置	143
図 IV - 6	IH - 1 出土遺物(2)	67	図 VI - 1	石倉 2 遺跡竪穴住居跡	151
図 IV - 7	IH - 2 (1)	69	図 VI - 2	プラスチック状ピット	153
図 IV - 8	IH - 2 (2)	70	図 VI - 3	石倉 2 遺跡出土榎林式土器集成	155
図 IV - 9	IH - 2 (3)	71	図 VI - 4	榎林式土器の例	156
			図 VI - 5	縄文時代中期後半の石棒	159

表目次

表Ⅰ-1	出土遺物一覧	9
表Ⅱ-1	森町の遺跡一覧	16
表Ⅲ-1	A地区遺構規模一覧	58
表Ⅲ-2	A地区遺物集計	58
表Ⅲ-3	A地区掲載土器一覧	59
表Ⅲ-4	A地区遺構出土掲載石器一覧	60
表Ⅲ-5	A地区包含層出土掲載石器一覧	60
表Ⅳ-1	B地区遺構規模一覧(1)	124
表Ⅳ-2	B地区遺構規模一覧(2)	124
表Ⅳ-3	B地区遺物集計	125
表Ⅳ-4	B地区掲載土器一覧(1)	126
表Ⅳ-5	B地区掲載土器一覧(2)	127
表Ⅳ-6	B地区掲載土器一覧(3)	128
表Ⅳ-7	B地区掲載土器一覧(4)	129
表Ⅳ-8	B地区掲載土製品一覧	130
表Ⅳ-9	B地区遺構出土掲載石器一覧(1)	131
表Ⅳ-10	B地区遺構出土掲載石器一覧(2)	132
表Ⅳ-11	B地区包含層出土掲載石器一覧	132
V章1.表1	放射性炭素年代測定分析試料一覧	133
V章2.表1	樹種同定結果	138
V章3.表1	フローテーション結果	144
V章4.表1	石倉2遺跡出土種実遺体同定結果	146
表Ⅵ-1	竪穴住居跡一覧	150

写真図版目次

口絵 1

- 1 遺跡遠景
(北海道新聞2003年10月7日夕刊地方版より)

口絵 2

- 1 遺跡遠景(北西から)
- 2 基本土層

口絵 3

- 1 B地区竪穴住居跡群調査風景(南から)

口絵 4

- 1 フラスコ状ピット(IP-2)土層断面
(南西から)
- 2 Tピット(TP-6)完掘(南東から)
- 3 IP-8土器出土状況(南東から)
- 4 土器集中1(縄文時代晩期)(北東から)

口絵 5

- 1 B地区遠景(北西から)
- 2 IH-6炭化材出土状況(北西から)
- 3 埋設土器断面(北西から)
- 4 IH-3焼土・炭化物検出状況(南から)
- 5 石棒出土状況(北西から)

口絵 6

- 1 竪穴住居跡出土の榎林式土器
- 2 IH-3出土の石棒

V章-2

- 図版 1 炭化材(1)
図版 2 炭化材(2)
図版 3 炭化材(3)

V章-4

- 図版 1 石倉2遺跡出土種実遺体

写真図版

[A地区の調査]

図版 1

- 1 調査前状況(北西から)
- 2 火山灰(Ko-g)除去作業(北から)
- 3 包含層調査状況(北から)
- 4 調査状況(南西から)
- 5 A地区完掘(南西から)

図版 2

- 1 IP-1土層断面(南から)
- 2 IP-1フレイク出土状況(東から)
- 3 IP-2確認(東から)
- 4 IP-2調査状況(東から)
- 5 IP-2土層断面(南西から)
- 6 IP-2完掘(南西から)

図版 3

- 1 IP-3完掘(西から)
- 2 IP-3土層断面(西から)
- 3 IP-4遺物出土状況(東から)
- 4 IP-4土層断面(南から)
- 5 IP-5確認(南東から)
- 6 IP-5土層断面(南東から)
- 7 IP-5完掘(南東から)

図版 4

- 1 IP-6土層断面(北東から)
- 2 IP-7確認(東から)
- 3 IP-7土層断面(東から)
- 4 IP-7完掘(北東から)
- 5 IP-8土器出土状況(南東から)
- 6 IP-8土器出土状況(南西から)
- 7 IP-8土層断面(南西から)
- 8 IP-8調査風景(東から)

図版 5

- 1 TP-1土層断面(南から)
- 2 TP-1完掘(南から)
- 3 TP-2土層断面(南から)
- 4 TP-2完掘(南から)

図版 6

- 1 TP-3土層断面(南東から)
- 2 TP-3完掘(南東から)

3 TP-4 土層断面 (南から)

4 TP-4 完掘 (南から)

図版 7

1 TP-5 確認 (南西から)

2 TP-5 確認 (北東から)

3 TP-5 土層断面 (東から)

4 TP-5 完掘 (北東から)

5 TP-6 土層断面 (南東から)

6 TP-6 完掘 (南東から)

図版 8

1 TP-7 土層断面 (南から)

2 TP-7 完掘 (南から)

3 TP-8 土層断面 (南から)

4 TP-8 完掘 (南から)

図版 9

1 TP-9 土層断面 (西から)

2 TP-9 完掘 (西から)

3 TP-10土層断面 (南から)

4 TP-10完掘 (南から)

図版 10

1 IF-1 土層断面 (北から)

2 IF-2 確認 (北から)

3 土器集中1 確認状況 (北から)

4 土器集中1 調査状況 (東から)

5 土器集中1 調査状況 (北から)

図版 11

1 土器集中2 (北から)

2 土器集中2 (南から)

3 土器集中3 (南東から)

4 土器集中4 (南東から)

5 FC-1 確認 (北から)

6 FC-2 確認 (南から)

図版 12

1 IP-5 出土の土器

2 IP-1 出土の石器

3 IP-4 出土の石皿

4 IP-8 出土の土器①

5 IP-8 出土の土器②

図版 13

1 土器集中1 出土の遺物①

図版 14

1 土器集中1 出土の遺物

2 土器集中2 出土の遺物

図版 15

1 土器集中2～4 出土の遺物

図版 16

1 A地区包含層出土の土器

2 A地区包含層出土の石器①

図版 17

1 A地区包含層出土の石器②

[B地区の調査]

図版 18

1 B地区調査前状況 (北西から)

2 B地区調査前状況 (北から)

図版 19

1 IH-1 確認 (南西から)

2 IH-1 土層断面 (南西から)

3 IH-1 調査状況 (南から)

4 IH-1 土層断面 (南から)

図版 20

1 IH-1 土層断面 (西から)

2 IH-1 土器出土状況 (北東から)

3 IH-1・HP-1 土層断面 (東から)

4 IH-1・HP-5 土層断面 (西から)

5 IH-1 完掘 (南から)

図版 21

1 IH-2 確認 (東から)

2 IH-2 調査状況 (東から)

3 IH-2 土層断面 (西から)

4 IH-2 調査状況 (南から)

5 IH-2 土層断面 (南西から)

図版 22

1 IH-2 小礫出土状況 (南西から)

2 IH-2 土器出土状況 (北東から)

3 IH-2・HP-3 確認 (西から)

4 IH-2・HP-12・13土層断面 (北から)

5 IH-2・HP-11土層断面 (西から)

6 IH-2 完掘 (南東から)

図版 23

1 IH-3 土層断面 (南西から)

2 IH-3 焼土粒・炭化物堆積状況 (北から)

3 IH-3 調査状況 (西から)

4 IH-3 焼土粒・炭化物確認状況 (南東から)

図版 24

1 IH-3 土器出土状況 (北から)

2 IH-3 土器出土状況 (南西から)

3 IH-3・HP-1 土層断面 (北西から)

4 IH-3 石棒片出土状況 (西から)

5 IH-3 玉出土状況 (西から)

6 IH-3 埋設土器土層断面 (西から)

7 IH-3 完掘 (南東から)

図版 25

1 IH-4 土層断面 (北から)

2 IH-4 土層断面 (北から)

3 IH-4 土器出土状況 (北西から)

4 IH-4 埋設土器出土状況 (西から)

5 IH-4 埋設土器土層断面 (西から)

6 IH-4 完掘 (北東から)

図版 26

1 IH-5 土層断面 (南東から)

2 IH-5・HP-1 土層断面 (北から)

3 IH-5 埋設土器土層断面 (北から)

4 IH-5 小礫出土状況（北西から）

5 IH-5 完掘（北から）

図版27

1 IH-6 土層断面（西から）

2 IH-6 土層断面（南西から）

3 IH-6 調査状況（西から）

4 IH-6 炭化材確認状況（北東から）

5 IH-6 炭化材確認状況（西から）

図版28

1 土器出土状況①（北東から）

2 土器出土状況②（北東から）

3 土器出土状況③（南西から）

4 IH-6・HP-1 土層断面（西から）

5 IH-6・HP-3 土層断面（南西から）

6 IH-6 埋設土器土層断面（西から）

7 IH-6 完掘（西から）

図版29

1 IH-7 土層断面（西から）

2 IH-7 土層断面（南から）

3 IH-7 完掘（西から）

図版30

1 IH-8 土層断面（南東から）

2 IH-8 土層断面（南西から）

3 IH-8 埋設土器出土状況（北東から）

4 IH-8・HP-4 土層断面（北東から）

5 IH-8・HP-1 土層断面（南から）

6 IH-8 完掘（南東から）

図版31

1 IH-9 土層断面（南から）

2 IH-9 砥石出土状況（南西から）

3 IH-9 小礫出土状況（西から）

4 IH-9 埋設土器確認（北から）

5 IH-9 埋設土器出土状況（西から）

6 IH-9 埋設土器土層断面（西から）

7 IH-9 完掘（南から）

図版32

1 IH-10 土層断面（西から）

2 IH-10 完掘（南から）

3 IH-10 埋設土器出土状況（北西から）

4 IH-10 埋設土器土層断面（北西から）

5 IH-10・HP-1 土層断面（南西から）

6 IH-10・HP-1 完掘（南西から）

7 IH-11 埋設土器出土状況（南から）

8 IH-11 完掘（西から）

図版33

1 IP-9 土層断面（東から）

2 IP-9 完掘（北から）

3 IS-1 調査状況（西から）

4 IS-1 出土状況（北から）

5 IS-1 出土状況（南から）

6 IS-1 出土状況（南東から）

図版34

1 住居跡群調査状況（南から）

2 住居跡群調査状況（北から）

3 包含層調査状況（北西から）

4 住居跡群完掘（南から）

図版35

1 IH-1 出土の土器

2 IH-1 出土の石器

図版36

1 IH-2 出土の土器

図版37

1 IH-2 出土の石器

図版38

1 IH-3 出土の土器

図版39

1 IH-3 出土の土器・石器

図版40

1 IH-3 出土の石棒

2 IH-3 出土の動物遺体（イシイルカ）

図版41

1 IH-4 出土の土器

図版42

1 IH-4 出土の土器・石器

図版43

1 IH-5 出土の遺物

2 IH-6 出土の土器

図版44

1 IH-6 出土の土器

2 IH-6 出土の石器

図版45

1 IH-7 出土の遺物

2 IH-8 出土の遺物

図版46

1 IH-9 出土の土器

2 IH-9 出土の石器

図版47

1 IH-9 出土の石器

2 IH-9 出土の砥石

図版48

1 IH-10・11 出土の遺物

2 B地区出土の土器片再生円盤

図版49

1 IS-1 出土の石器

図版50

1 B地区包含層出土の土器

2 竪穴住居跡出土の土器

図版51

1 B地区包含層出土の石器

図版52

1 B地区包含層出土の石器

I 調査の概要

1. 調査要項

遺跡名：石倉2遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-15-32）
事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委託者：日本道路公団北海道支社
所在地：茅部郡森町字石倉町306、308-1ほか
調査面積：2,324m²
発掘期間：平成15年5月6日～8月8日
整理期間：平成15年10月27日～平成16年3月31日

2. 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長	森重 楯一
専務理事	宮崎 勝
常務理事	畑 宏明
総務部長	下村 一久
第1調査部長	畑 宏明（兼務）
第2調査課長	種市 幸生（発掘担当者）
主任	村田 大（発掘担当者）
主任	阿部 明義
文化財保護主事	石井 淳平（平成15年6月30日まで）

3. 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路（函館～名寄）は、函館を起点として室蘭・苫小牧・札幌・旭川の各都市を經由し、名寄市に至る総延長488kmの路線である。長万部町国縫IC～剣淵町士別剣淵IC間はすでに供用され、七飯～長万部間については平成5年11月から建設が進められている。

平成2年4月、日本道路公団北海道支社から事業区間の埋蔵文化財調査に関して北海道教育委員会へ事前協議が提出され、協議を受けた北海道教育委員会では、平成2年4月と平成7年11月に所在確認調査を、平成7年10月以降に試掘による範囲確認調査を実施している。

函館工事事務所の管内に所在する石倉2遺跡では、平成14年10月に北海道教育委員会文化課によって試掘調査が実施され、発掘を必要とする面積3,614m²が提示された。当該地域における路線の変更は不可能なことから、当センターが発掘調査を実施することになった。当初、現地調査期間は平成15年5月から6カ月間を予定していたが、斜面部分の遺物包含層が存在しないことが判明したため、平成15年8月に調査を終了した。

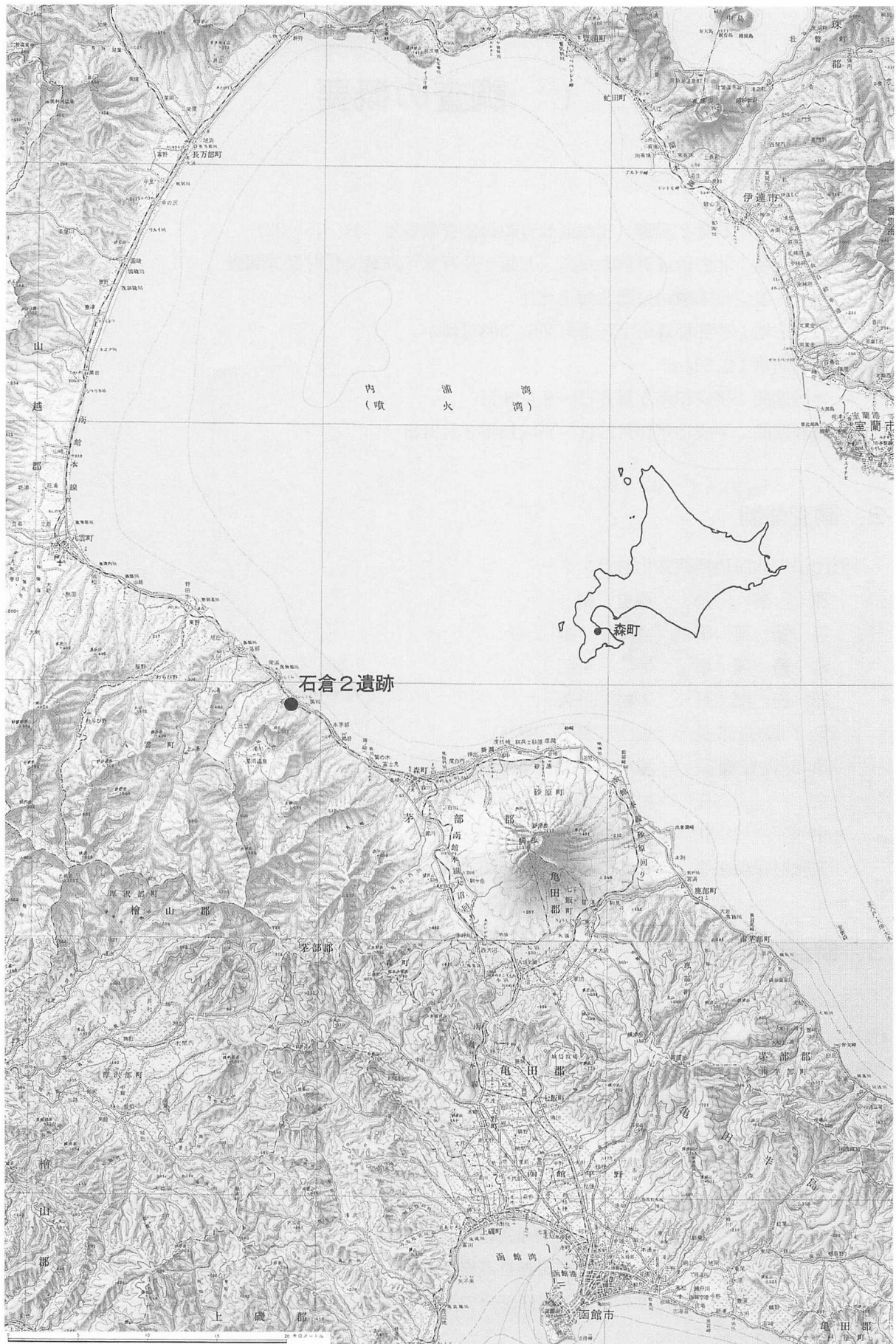


図 I - 1 遺跡の位置 (この図は国土地理院発行20万分の1地形図、「室蘭」を複製、加筆したものである)

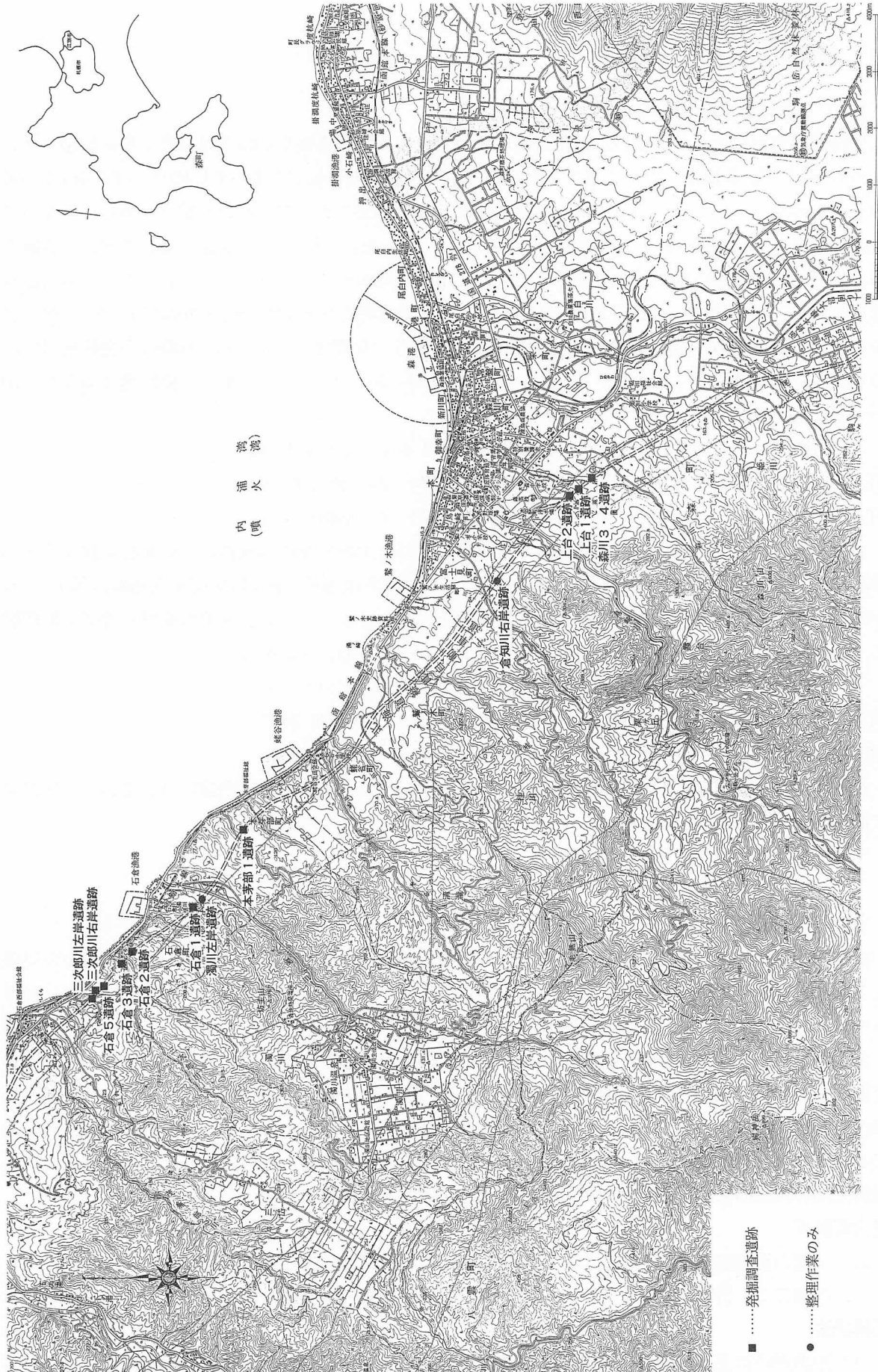


図 I - 2 2003年度北海道縦貫自動車道（森町内）調査遺跡位置図

4. 調査の方法

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定に当たっては日本道路公団北海道支社の「北海道縦貫自動車道石倉工事平面図(2) 1,000分の1図」を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭である STA.460と STA.461を通る線を基軸のMラインとし、STA.460を基準に4m方眼を設定した。Mラインと並行に南西へ向かってL、K、J……、北東へ向かってN、O、P……とした。更に、STA.461を通りそれに直行する線を30ラインとし、北西へ向かって31、32、33……、南東へ向かって29、28、27……とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する(例：STA.460はM-30)。更に必要に応じて2m方眼に4分割または1m方眼に16分割し小発掘区とした。2m方眼の小発掘区は杭のある側から反時計回りにa、b、c、dを付し(例：M-30-a)、1m方眼の小発掘区は南端から南西へ順に1、2、3、4とした(例：M-30-1)。

この方眼の日本測地系による平面直角座標は第X I系で以下のとおり。

STA.460 (調査区杭番号M-30) X=-204813.7574 Y=18532.8915

STA.461 X=-204742.0573 Y=18463.1910

また、測量法の改正に伴い、平成14年4月1日にそれまでの平面直角座標系(昭和43年建設省告示第3059号)は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第9号)が施行された為、世界測地系による平面直角座標を併記しておく。なお、座標の変換には国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト「TKY2JGD」を使用した。

この方眼の世界測地系による平面直角座標は第X I系で以下のとおり。

STA.460 (調査区杭番号M-30) X=-204558.9603 Y=18236.2802

STA.461 X=-204991.7644 Y=18166.5342

水準測量は北海道茅部郡森町字石倉町34番地先に所在する、1等水準点第5971号を用いて、各測量に使用した。

1等水準点第5971号 H=9.2160m

(2) 発掘調査の方法

調査範囲は山地から海岸方向へ延びる2つの狭い尾根上に位置する。八雲町側の石倉川沿いの尾根を「A地区」、森町側の尾根を「B地区」と呼称し調査を行った。両地区は涸れ沢を挟んで約40m程離れている。

試掘調査の結果から、多量の遺物の出土と遺構の検出が予想されたため、調査予定範囲全てを通常発掘範囲とした。調査に先行し重機により表土、火山灰を除去した。遺物包含層の黒色土は尾根の先端へ向かって薄くなる傾向が見られた。B地区は伐採工事によるものと思われるが、建設用重機の通路を確保するために遺物包含層を削平し、平坦に整地した跡が確認された。そのため、遺物包含層と遺構上部の覆土の大部分が失われていた。また、斜面部分に遺物包含層は存在していなかった。

包含層調査

Ⅲ～Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。

遺構調査

包含層調査時に土層の変化により確認された遺構については、その平面長軸と短軸に土層観察用の

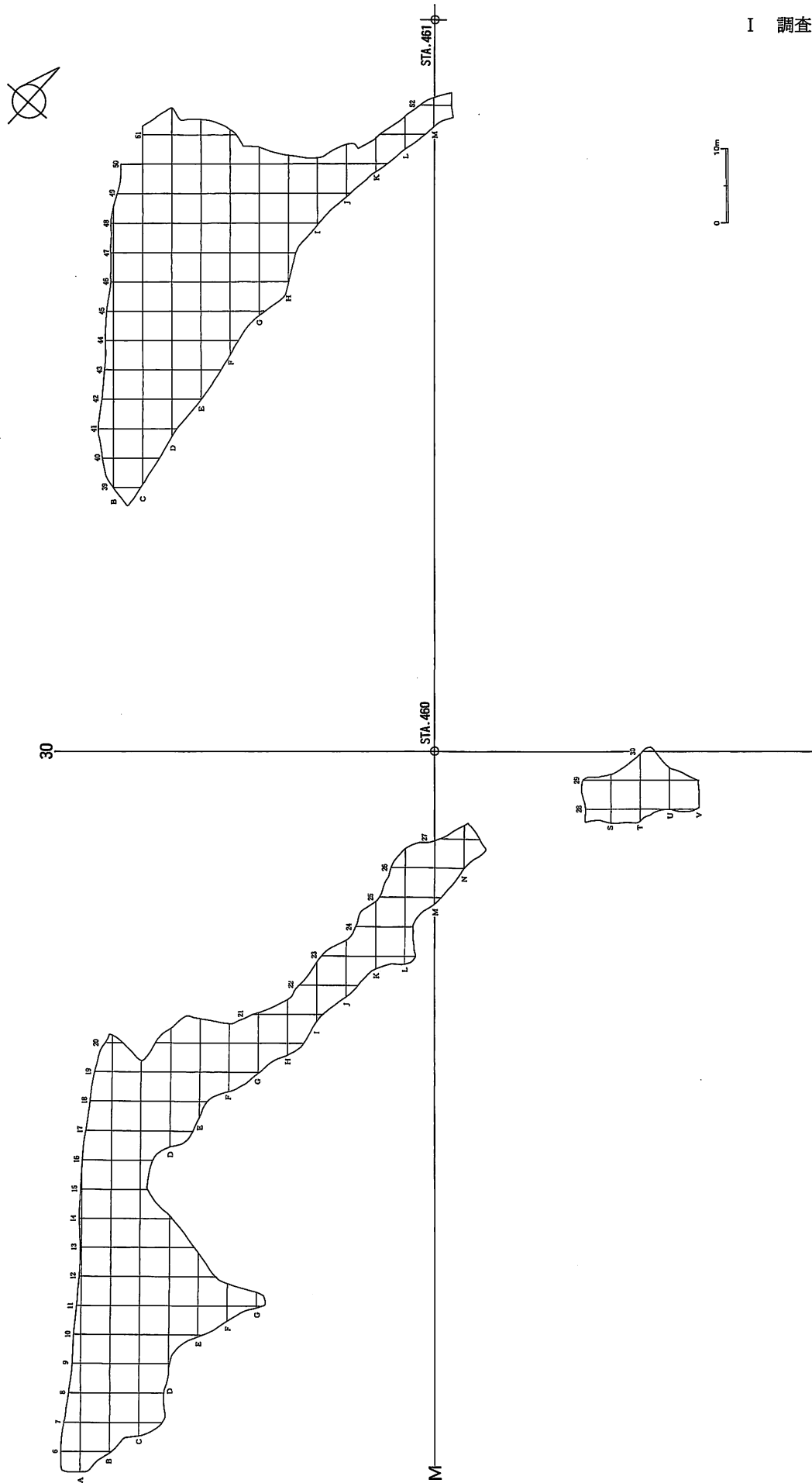


図 I-3 発掘区設定図

ベルトを残して掘り下げた。

遺物の取上げ

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での取上げとした。出土状況に応じて、小発掘区による取り上げ、写真や出土状況図の作成など詳細な記録化に努めた。遺構出土の遺物は、遺構上部の自然堆積層(Ⅲ層・Ⅳ層に相当)に包含されていたものについては、遺構および層位を記録して取上げた。覆土、床面または塙底面出土の遺物は、図面、台帳等に出土位置を記録し、遺構単位で連続番号を付して取上げた。ただし、調査の都合により、覆土から出土した遺物の一部は、層位ごとによる取上げを行っている。(村田 大)

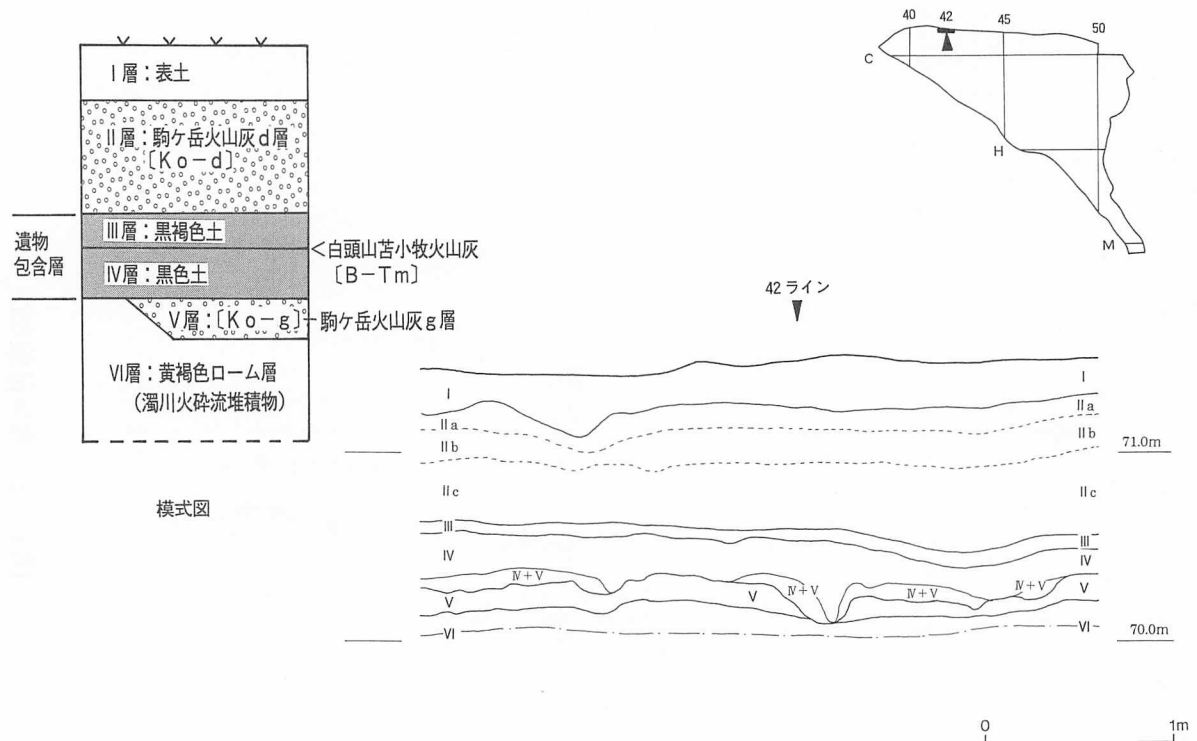


図 I - 4 基本土層

(3) 土層

基本土層は、石倉2遺跡に近い、平成13・14年度に当センターが調査した森町濁川左岸遺跡の設定をおおむね踏襲している。Ⅲ～Ⅳ層が遺物包含層である。A地区・B地区とも尾根の先端部に向かって層厚は薄くなり、欠落する層位がある。

I層：表土 黒色～黒褐色(10YR 2/1～2/2)で、しまりは弱く、粘性中。調査前の現況は松などが植林された山林で、木根を多量に含む。

II層：駒ヶ岳火山灰d層(Ko-d) 1640年に降下。層厚は70～80cmであるが、尾根の先端方面ではかなり薄く、斜面に流出したと考えられる。全体的には灰黄褐色～にぶい黄褐色(10YR 6/2～5/3)を呈し、しまりはない。基本土層図では、3細分した。

II a ……細砂、径0.1～1mm。

II b ……細砂礫、径0.2mm程度が主体。上位の粒子がやや大きい。

II c ……径0.5mm程度が主体。上位の粒子が大きく、下位が細かい。

- Ⅲ層：暗褐色土(10YR 3/2) 層厚は山側で5～10cm、海側の尾根の先端部方面で0～5cm。粘性やや強く、しまりはやや強い。木根多く含む。下端境界はやや明瞭である。
- 〔B-Tm〕白頭山ー苫小牧火山灰……灰白色～灰黄褐色(10YR 7/1～6/2)で、非常に細かい粒子。Ⅲ層とⅣ層の境界前後に斑点状に分布し、窪みなどにやや厚く堆積している。
- Ⅳ層：黒色土(10YR 2/1) 層厚は山側で20～30cm、海側の尾根の先端部方面で5～10cm。粘性やや強く、しまりは中。下端境界は漸遷。
- Ⅴ層：黄褐色土(10YR 5/6) 駒ヶ岳火山灰g層〔Ko-g〕に由来する橙褐色砂質土を多量含む。ただし尾根の先端方面ではかなり薄く、斜面に流出したと考えられる。
- Ⅵ層：黄褐色ローム層 約12,000年前に噴出した濁川火砕流堆積物層である。少なくとも3m以上の堆積層が観察される。上位は褐色(10YR 4/6)～オリーブ褐色(2.5Y 4/6)を呈し、シルト質で均質的である。砂礫層や砂質粘土層などの互層になっている。(阿部明義)

(4) 整理作業の方法

現地では野外作業と並行して遺物の水洗、分類、遺物台帳作成、注記作業を行った。注記は小片や微細なものを除いた遺物に、遺跡名略号(İK2)・遺構名または発掘区・遺物番号・層位名を記入した。また、竪穴住居の炉と焼土付近から採取した土壌のフローテーション作業を行っている。冬期の整理作業で、土器の接合・復元、石器・礫の接合、分析試料の抽出、土器、石器等の実測・製図、計測、集計、写真撮影、記録類の整理、遺物の収納を行った。(村田)

(5) 遺物の分類

土器

分類規準は、当センター通有の大別(縄文時代五大別と続縄文・擦文時代にそれぞれⅠ～Ⅶ群を付す)を踏襲し、主体時期は細分した。

- Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群。今回の調査では出土していない。
- Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群。今回の調査では出土していない。
- Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群。
- a類：円筒上層式・サイベツⅦ群・見晴町式に相当するもの。今回の調査では出土していない。
- b類：円筒上層式に後続する土器群。榎林式・大安在B式・ノダツⅡ式・煉瓦台式に相当するもの。特に榎林式は今調査の主体をなす。
- Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群。
- a類：初頭～前葉の土器。天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津Ⅶ群・白坂3式に属するもの。わずかに出土している。
- b類：中葉の土器。ウサクマイC式・手稻式・鮎潤式併行に属するもの。今回出土していない。
- c類：後葉の土器。堂林式・「三ツ谷式」・湯の里3式に属するもの。今回出土していない。
- Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群。
- a類：大洞B・BC式に属するもの。今回の調査では出土していない。
- b類：大洞C1・C2式、聖山Ⅰ式に属するもの。
- c類：大洞A・A'式、聖山Ⅱ式に属するもの。Ⅲ群b類に次いで出土している。
- Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群。今回の調査では出土していない。
- Ⅶ群 擦文時代に属する土器群。今回の調査では出土していない。(阿部)

石器等

石器は剝片石器類、礫石器類に大別し、形態ごとに分類した。分類の原則と区分を以下に示す。細分記号は付していない。なお、複数の器種が複合している場合は使用痕の多寡により一方の器種にまとめている。

剝片石器類

石鏃：押圧剝離により両面が調整され、尖頭形を呈する 5 cm 未満のもの。

ポイント・ナイフ：押圧剝離や平坦剝離によって両面が調整され、尖頭形を呈する 5 cm 以上のもの。

石錐：錐状の突出部が作り出されたもの。

つまみ付きナイフ：抉り状の加工によって、端部につまみが作り出されたもの。

篋状石器：両面が調整された石器で、一端に直線状ないし弧状の刃部が形成されるもの。

スクレイパー：剝離が素材の側縁に連続的に加えられたもの。

両面調整石器：剝離が素材の両面に施されるが尖頭形でないもの。

ピース・エスキュー：剝片もしくは礫を素材とし、対向する小剝離が素材の両端部にあるもの。

R フレイク(二次加工ある剝片)：不定形な剝片を素材とし、縁辺の一部に二次加工が認められるもの。

剝片：石核・石器から剝離されたもので、二次的な剝離が見られないもの。

石核：石器の素材と成り得る剝片を剝離した痕跡があるもの。

原石：石器素材と成り得る礫の内、剝片の剝離が行われていないか、不明瞭なもの。

礫石器類

石斧：打ち欠き・敲打・研磨により形成され、一端に刃部を作り出したもの。

たたき石：敲打痕のあるものの内、持ち運び可能なもの。

すり石：擦り痕のあるものの内、持ち運び可能なもの。

扁平打製石器：周囲もしくは両端部を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕を有するもの。

扁平打製石器原材：周囲もしくは両端部を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕が認められないもの。石錘に形状が似る。

北海道式石冠：打ち欠き・敲打により、整形されたもので、下面に擦り痕を有するもの。

砥石：凹んだ砥面をもつもの。

台石・石皿：擦り痕もしくは敲打痕があるものの内、持ち運びが困難なもの。

石製品：加工が加えられた石製の遺物の内、狩猟・採集具および加工具ではないもの。 (村田)

5. 調査結果の概要

遺跡は、森町中心部から北西へ約10km、標高約70mの内浦湾(噴火湾)に臨む海岸段丘上に位置する。調査区は、段丘から海へのびる2つの細い尾根からなり、周囲は小河川や沢によって開析され急崖となっている。

調査は、八雲町側の石倉川沿いの尾根を「A地区」、森町側の尾根を「B地区」と呼称して行った。当初、調査予定面積は3,614m²であったが、斜面部に包含層が存在しないことが確認されたため、最終的な調査面積は、A地区1,042m²、B地区1,282m²の合計2,324m²となった。また、調査期間は5月から10月の6カ月間を予定していたが、調査面積の減少と包含層の層厚が尾根部分で想定より薄かったことなどから、8月8日に現地の調査を終了した。

検出した遺構はA地区・B地区合わせて、竪穴住居跡11軒、土壇9基、Tピット10基、焼土2カ所、土器集中4カ所、フレイク集中が2カ所、礫集中1カ所で、すべて縄文時代のものである。遺物は土器・石器等約1万7千点が出土した。以下、地区ごとに述べる。

A地区

遺構は、土壇8基、Tピット10基、焼土2カ所、土器集中4カ所、フレイク集中2カ所である。土壇のうち、IP-2・5・7はフラスコ状ピットで、最も大きいIP-2は壇底面の直径約2.5m、確認面からの深さが約1.9mで、壇底中央に円形の小ピットを持つものである。IP-3は覆土が埋め戻されたもので、土壇墓の可能性もある。また、IP-8の壇口部からほぼ完形のⅢ群b類土器が2個体出土している。TピットはTP-4を除き、西側の石倉川沿いの段丘縁辺部から検出された。土器集中4カ所のうち、縄文時代中期後半のもの1カ所のほかは晩期後半のものである。

遺物は、6,920点出土した。土器6,126点、石器等794点である。土器はV群c類のものが多く、他はⅢ群b類のものである。土器、石器ともに遺物集中域からの出土が大半である。

B地区

遺構は、竪穴住居跡11軒、土壇1基、礫集中1カ所である。竪穴住居跡は尾根の先端から山側にかけて連なるように検出された。重複は1カ所あるが、出土した土器からⅢ群b類榎林式期のものと考えられる。斜面の崩落により大半の住居跡は一部が失われているが、平面形は楕円形あるいは隅丸方形で、規模は長軸3～5m程である。柱穴は数個程検出できたが、規則的な配列は見られなかった。竪穴の中央部付近の床面に、炉として使用したと考えられる、埋設土器があるものが多い。また、覆土に多量の炭化物、焼土粒などを含む焼失住居が多いことが特徴である。IH-6からは、構造材と思われる炭化材が多量に出土した。また、IH-3の壁際の焼土付近から、破碎された長さ50cm弱の円柱状の石棒が、蛇紋岩製の玉類と焼けたイシイルカの頭骨を伴って出土したことが特記される。

遺物は、9,628点出土した。土器6,085点、石器等3,543点である。ほとんどが竪穴住居跡からの出土で、土器は大半がⅢ群b類榎林式のものである。石器はスクレイパー、石鏃、扁平打製石器が多い。

(村田)

表 I - 1 出土遺物一覧

	地区	A地区	B地区	合計		地区	A地区	B地区	合計
土器	Ⅲ b	922	6003	6925	石器	たたき石	1	3	4
	Ⅳ a		41	41		くぼみ石		1	1
	Ⅴ c	5204		5204		すり石	4	8	12
土製品	ミニチュア		17	17		石錘		5	5
	土器片再生円盤		20	20		砥石	1	10	11
	粘土塊		4	4		台石	1	7	8
	土器等合計	6126	6085	12211		石皿	2	13	15
石器	石鏃	5	27	32		Rフレイク	4	14	18
	石槍		2	2		フレイク	678	952	1630
	石鏃		3	3		石核	2		2
	つまみ付きナイフ		1	1	石製品	石製品	1	3	4
	ポイントナイフ		2	2		石棒		135	135
	スクレイパー	7	48	55	礫	有孔自然礫	2	12	14
	石斧	5	6	11		礫	78	2272	2350
	ヘラ状石器		2	2	石器等合計	794	3543	4337	
	扁平打製石器	3	17	20	遺物合計	6920	9628	16548	

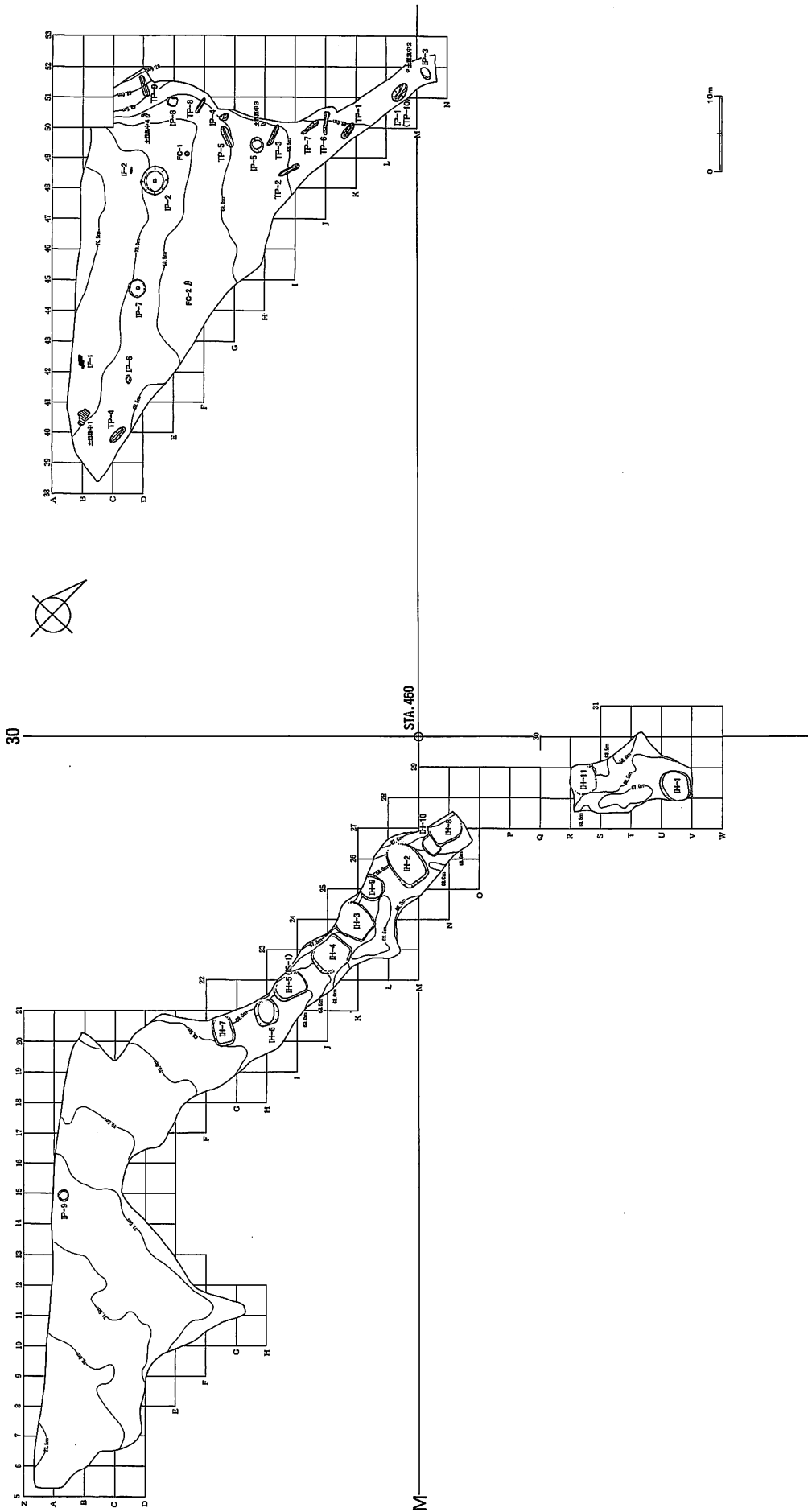


图 I-5 遺構位置图

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地と環境 (図II-1・2)

位置と地名の由来

遺跡の所在する森町は、内浦湾（噴火湾）に面する渡島半島のほぼ中央に位置し、渡島支庁管内茅部郡に属する。東側は駒ヶ岳山頂から押出沢を境に砂原町と、南側は宿野^{しゅくのべ}辺川を挟んで大野町、七飯町と、南西側は渡島山地を分水嶺として厚沢部町と、西は茂無^{もなしべ}部川を挟んで八雲町と接し、北は内浦湾（噴火湾）に臨んでいる。

遺跡は森町市街地から北西へ約10kmの石倉地区に所在し、石倉川右岸の高位河岸段丘上に立地している。石倉川の対岸の高位段丘上に石倉3遺跡がある。遺跡の標高は68～71mである。

「石倉」地区は元名を「ショウンナイ」と呼ばれ、アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）、「ウン」（…のある所）、「ナイ」（川・沢）で、滝のある沢を意味し、現在の石倉川にそそぐ小川から得た名である。また「石倉」は、箱館戦争時（1869年）榎本軍の石倉三左衛門の名に由来するという説もある。JR函館本線の駅名にもある「本石倉」の「本」^{ほん}は、「ポン」（小さな）より出ているものと考えられるが、和名として「元」の意味も考えられ、不詳である。

遺跡周辺の地形・環境

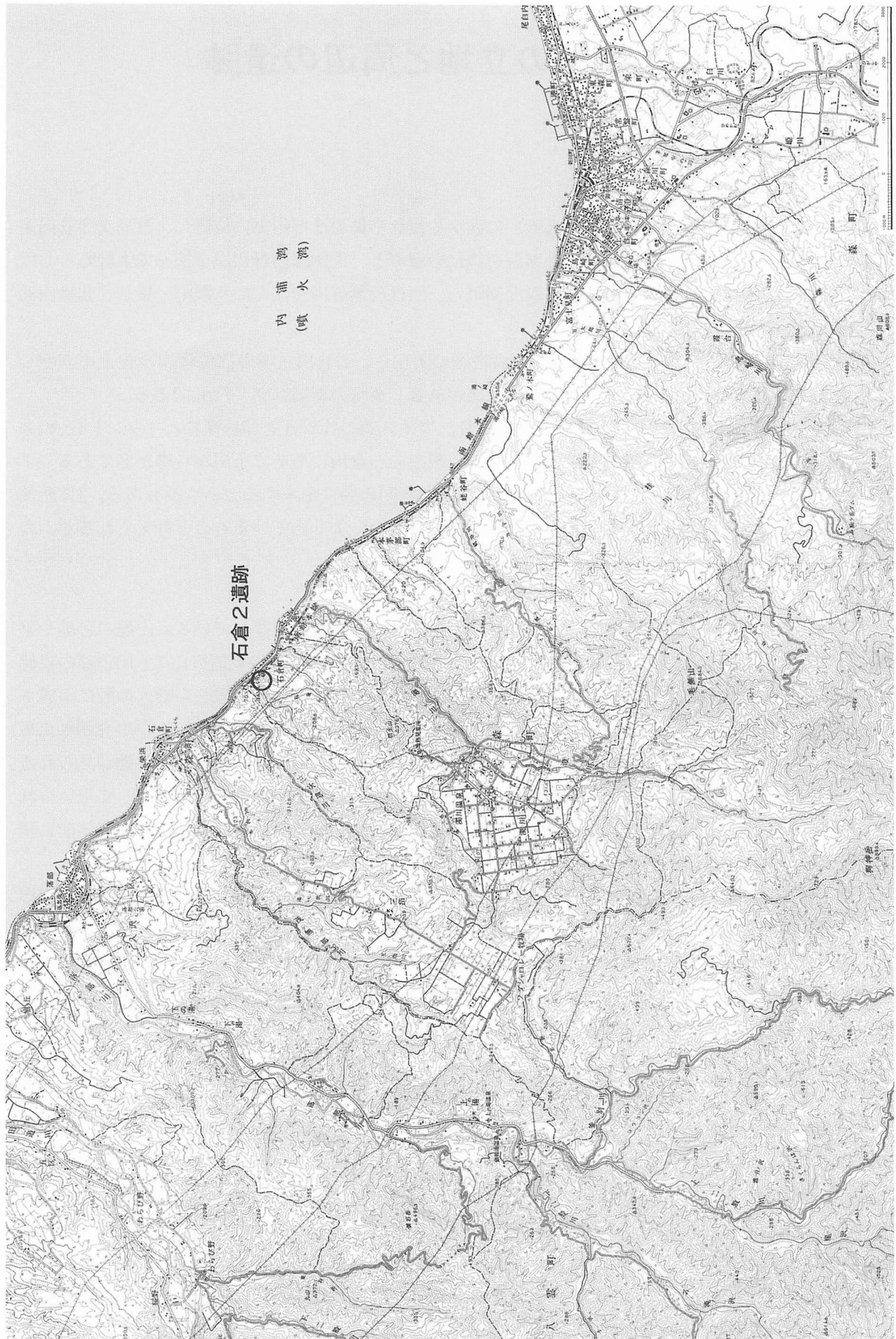
森町の南東に駒ヶ岳がそびえ立ち、東～北～北西に緩やかな傾斜面をなしている。山麓の台地や平地には、開析された小谷が所々に形成されている。駒ヶ岳は標高1,131mの成層火山で、山頂部の東側は馬蹄形に火口が崩壊して開いている。これは特に1,640年の山体崩壊を伴う激しい噴火の際に形成されたもので、山麓に約2mの火山灰（Ko-d）を堆積させた。それ以前の噴火では、折戸川を堰き止め大沼などの湖沼を残すなど、有史以来大小の噴火を幾度もくり返しており、現在でも活動が見られる。これらの噴火に起因する火山灰は、道南地域の発掘調査において時期を知る「鍵層」として用いられている。石倉地区では、Ko-d火山灰が80cm前後の厚さをもって堆積しているほか、約6,000年前に降下したKo-g火山灰が10cm前後堆積している（濁川火砕流堆積物層より上位）。

石倉地区のある森町北部の地形は全般的には丘陵性で、渡島山地から北東に向かって傾斜し、海岸段丘を経て内浦湾（噴火湾）に面している。また遺跡から約4km南西方向には濁川カルデラ盆地がある。濁川カルデラは約20,000～12,000年前に噴火し、火砕流台地を形成した後、火口を陥没させカルデラを生成した。その火砕流堆積物が森町内に厚く堆積し、特に石倉地区の海岸線の崖では約6mの厚さに達し「石倉層」と呼ばれる軽石流堆積物を形成している。石倉2遺跡でも開削された崖面などで観察される。

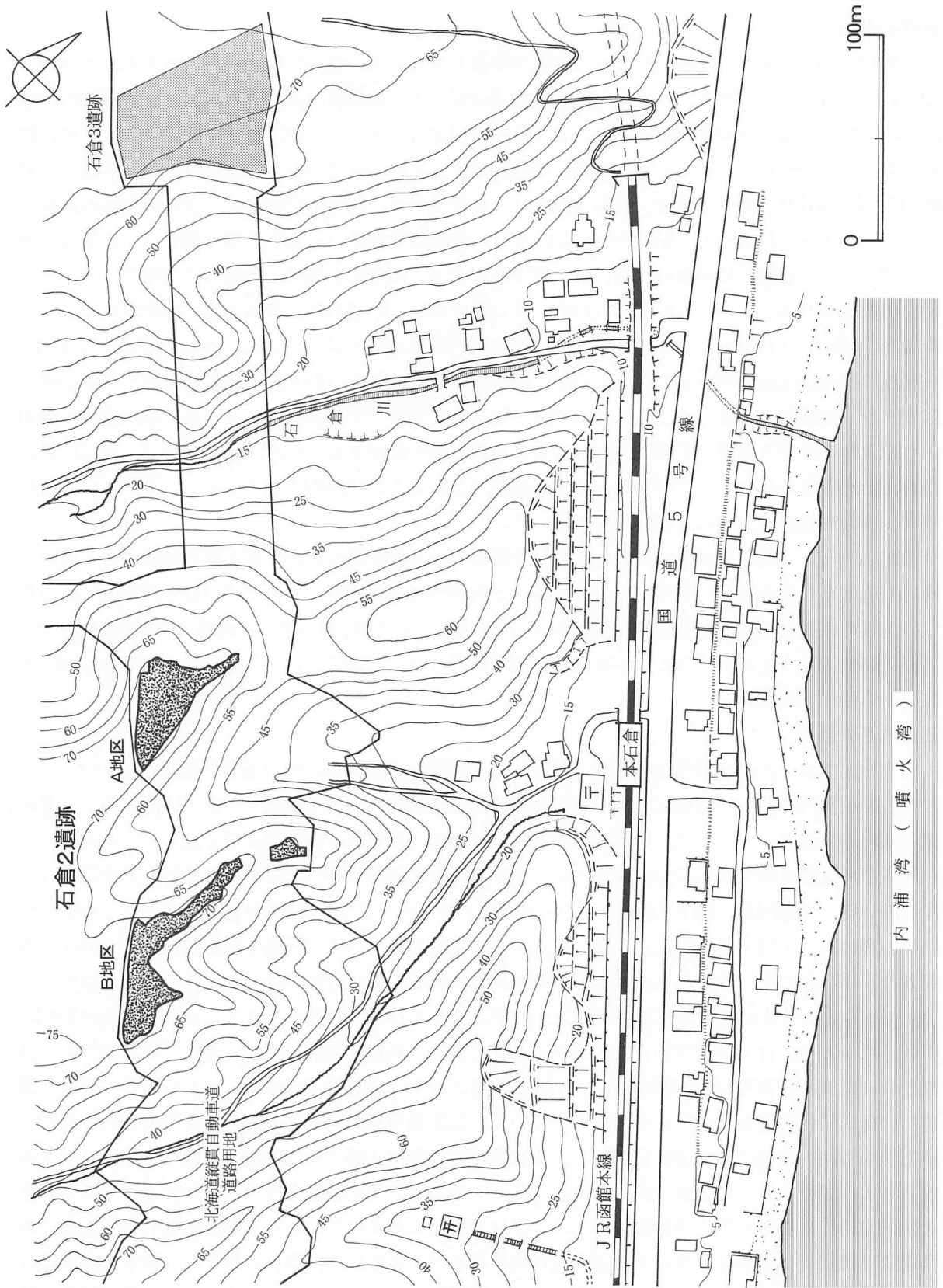
河川は後背の渡島山地を源にした小規模なものが多く、石倉地区には濁川、石倉川、三次郎川、本内川、茂無部川などの内浦湾（噴火湾）に注ぐ中小の河川がある。これらの河川に面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には多くの遺跡が確認されている。

石倉2遺跡付近の地形は、内浦湾（噴火湾）方向にのびる細い尾根状の高位段丘が連続している。遺跡の北西側に石倉川、A地区とB地区の間に小谷、南東側に無名の小さな沢があり、崖面となっている。石倉川との比高は50～60mである。遺跡の南西側は、ほぼ平坦な山林となっている。

遺跡からは南東方向に駒ヶ岳の頂、北東方向に内浦湾を臨む。晴天の日には北方向に羊蹄山や有珠山、そして北東方向には室蘭市の白鳥大橋が目視できることがある。（阿部）



図II-1 遺跡周辺の地形(1)



図II-2 遺跡周辺の地形(2)

2. 周辺の遺跡 (図II-3・表II-1)

森町の遺跡

平成16(2004)年3月現在、41カ所の遺跡が登載されている。過去に調査が行われた主なものは、昭和27(1952)年から29年にかけて東京大学駒井和愛による尾白内貝塚^{おしろない}の調査があり、縄文時代恵山式の土器、石器、骨角器が出土している。尾白内貝塚は昭和55(1980)年と平成4(1992)年に町教育委員会で調査が行われている。また、昭和30年代から40年代にかけては熊野喜蔵による姫川1遺跡(旧姫川A遺跡)、姫川2遺跡、森川1遺跡などが調査され、縄文時代前期から中期が主体の遺跡であることが確認されている。昭和38(1963)年には函館博物館による森川貝塚の調査で、縄文時代前期の円筒土器下層式、縄文時代恵山式、擦文式の土器、陶磁器、鉄器、古銭などが出土した。その他、町教育委員会によって、昭和46(1971)年に蛭谷遺跡^{えびや}、昭和49年に鳥崎遺跡^{とりさき}、昭和51年にオニウシ遺跡、昭和59(1984)年・平成5(1993)年に御幸町遺跡^{みゆき}などが調査され、おもに縄文時代中期から後期の様相が次第に明らかになっている。最近では北海縦貫自動車道建設工事に伴う調査が繰り返し行われ、町教育委員会による鷺ノ木4遺跡・鷺ノ木5遺跡や当センターによる濁川左岸遺跡・倉知川右岸遺跡・森川3遺跡など継続中のものも含め20遺跡が調査されている。特に平成15(2003)年に行われた町教育委員会による鷺ノ木5遺跡の調査では、縄文時代後期前葉のストーンサークルおよび竪穴に複数の墓が検出され、注目を集めている。

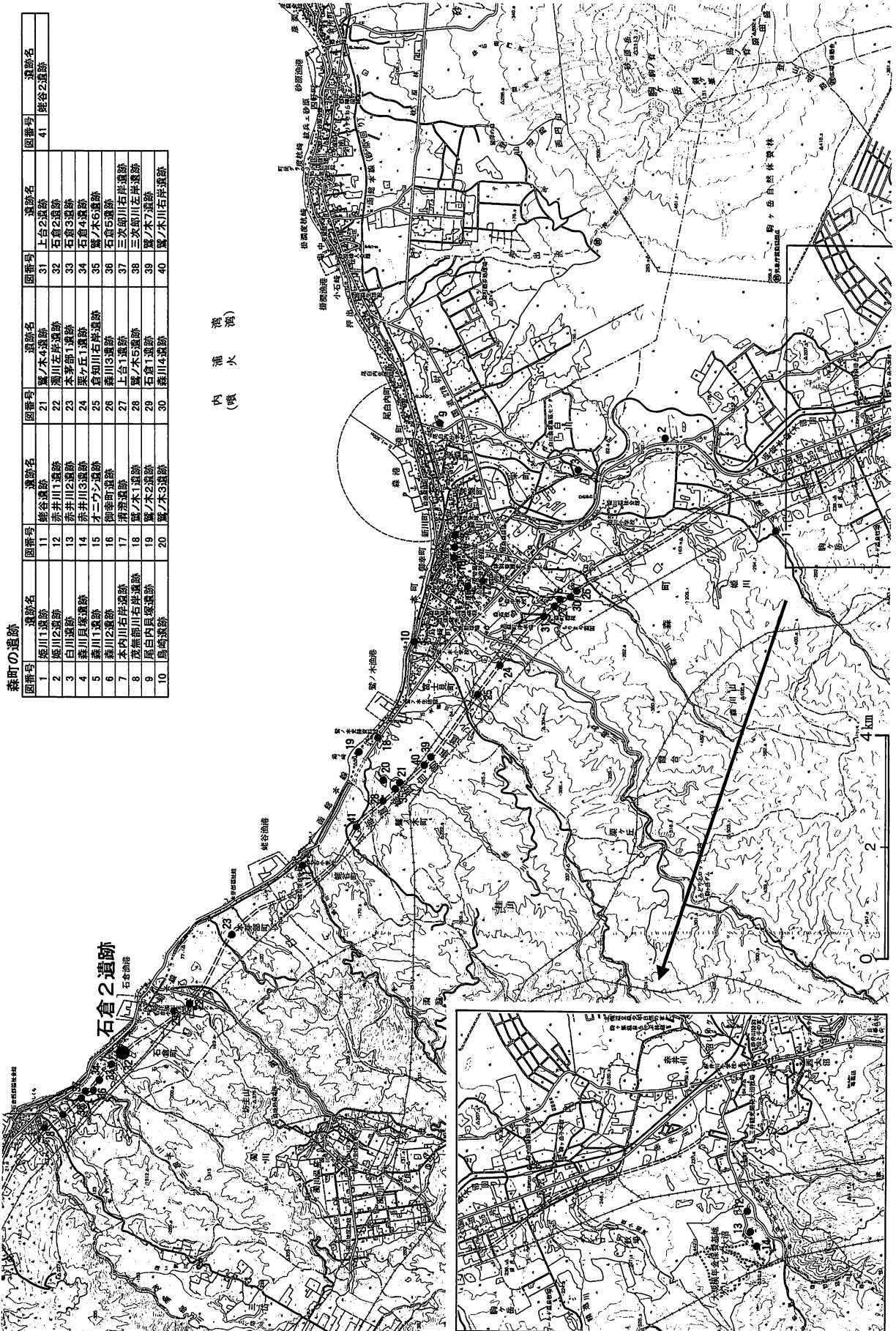
遺跡の分布は、尾白内川中流域と七飯町との境界である宿野辺川流域に数カ所の遺跡がある他は、森町市街地から茂無部川にかけての海岸段丘上と内浦湾(噴火湾)にそそぐ河川沿いに集中している。この地域の時期は、縄文時代中期から後期のものが大半であるが、河川沿いの遺跡は、内陸部に向かって縄文時代後期を主体とするものが増加する傾向が見られる。縄文時代の遺跡は、森町市街地の低位の海岸段丘上に多い。

石倉地区の遺跡

石倉地区では、北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で10カ所の遺跡が確認されている。このうち発掘調査を行った遺跡は、濁川左岸遺跡、石倉1遺跡・石倉2遺跡・石倉3遺跡・石倉5遺跡、三次郎川右岸遺跡・三次郎川左岸遺跡、本内川右岸遺跡^{ほんないがわ}の8遺跡(調査継続中を含む)である。

濁川左岸遺跡は2001・2002年に調査され、主に縄文時代前期後半～後期前半の集落跡が確認された。住居跡19軒、土壇94基、焼土(石組炉含む)36カ所、柱穴状小ピット307基などが検出されている。土壇は、埋め戻しの覆土の土壇墓とみられるものも多く含まれている。石倉1遺跡は2002・2003年に調査され、壇口部に大型礫のある土壇などが検出されている。縄文時代中期～後期初頭の土器が多く出土しており、わずかに縄文時代早期貝殻文土器が出土している。試掘によりさらに濃密な遺跡範囲が確認されており、2004年度以降に調査が予定されている。石倉3遺跡は石倉2遺跡とほぼ同時期に調査され、縄文時代後期初頭の配石を伴う土壇が検出された。配石は三つのまとまりがある。石倉5遺跡は、縄文時代中期の土器片などが出土している。三次郎川左岸遺跡は二段の小さな段丘面に位置し、縄文時代中期～後期の遺物包含地である。三次郎川右岸遺跡は縄文時代中期～後期を主体とする集落跡である。埋甕をもつ住居跡や配石遺構、フラスコ状ピットや大型礫を伴う土壇など多様である。また縄文時代に属する焼土が多数検出され、骨片が多量に含まれていることが確認された。本内川右岸遺跡^{ほんない}は縄文時代中期を主体とする遺物包含地であるが、調査区の大部分が耕作や土取り、農地造成などによって地形改変が進んでいた。茂無部川右岸遺跡^{もなしべがわ}は森町の北端部に位置する。試掘の結果、縄文時代中期～後期の遺物包含層とされている。(阿部)

森町の遺跡			
図番号	遺跡名	図番号	遺跡名
1	坂川1遺跡	11	鎌谷遺跡
2	坂川2遺跡	12	赤井川1遺跡
3	白川遺跡	13	赤井川2遺跡
4	森川1遺跡	14	赤井川3遺跡
5	森川2遺跡	15	オニウツ遺跡
6	森川3遺跡	16	御座町遺跡
7	本内川古墳群跡	17	湖邊遺跡
8	茂無部川古墳群跡	18	鷺ノ木1遺跡
9	馬白内貝塚遺跡	19	鷺ノ木2遺跡
10	馬崎遺跡	20	鷺ノ木3遺跡
		21	鷺ノ木4遺跡
		22	通川左岸遺跡
		23	本茅部1遺跡
		24	栗ヶ丘1遺跡
		25	倉知川右岸遺跡
		26	森川3遺跡
		27	上合1遺跡
		28	鷺ノ木5遺跡
		29	石倉1遺跡
		30	藤川4遺跡
		31	上合2遺跡
		32	石倉2遺跡
		33	石倉3遺跡
		34	石倉4遺跡
		35	鷺ノ木6遺跡
		36	石倉6遺跡
		37	三次郎川右岸遺跡
		38	三次郎川左岸遺跡
		39	鷺ノ木7遺跡
		40	鷺ノ木川右岸遺跡
		41	鎌谷2遺跡



図II-3 周辺の遺跡

表 II - 1 森町の遺跡一覧

登録番号	名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
1	姫川1遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳132-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	
2	姫川2遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳17-216、-217、-6	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	
3	白川遺跡	遺物包含地	字白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文晩期・擦文	貝塚あり
4	森川貝塚遺跡	貝塚	森川町76~79ほか	海岸段丘	13~15	縄文前期、続縄文(恵山)、擦文、中近世	
5	森川1遺跡	遺物包含地	森川町69-2ほか	海岸段丘	15~18	縄文前(円筒下層b)・中期、続縄文(恵山)	1982「森川A遺跡」森町教委
6	森川2遺跡	遺物包含地	字霞台34-1、35-2	台地	80~100	縄文中~晩期、擦文	2002 森町教委発掘調査
7	本内川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b、ノダップII)・後期(天祐寺)	2003「森町本内川右岸遺跡」北埋調報182
8	茂無部川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中~後期	
9	尾白内貝塚遺跡	貝塚	字尾白内926、929-1ほか	海岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A')・続縄文(恵山)	1981「尾白内」、1993「尾白内2」森町教委
10	鳥崎遺跡	遺物包含地	鳥崎31-1、字富士見町13ほか	海岸段丘	15~30	縄文後期	1975「鳥崎遺跡」森町教委
11	蛭谷遺跡	遺物包含地	字蛭谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	1971 森町教委発掘調査
12	赤井川1遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175~195	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
14	赤井川3遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウシ遺跡	集落跡	字上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早(東銅路Ⅲ)~中期(円筒上層)	1977「森町オニウシ遺跡発掘調査報告書」
16	御幸町遺跡	遺物包含地	字御幸町132-2、字清澄3-1ほか	海岸段丘	8~20	縄文中期(円筒上層)	1985「御幸町」、1994「御幸町2」森町教委
17	清澄遺跡	遺物包含地	字清澄27、29-2	海岸段丘	33~39	縄文中期(円筒上層)	
18	鷺ノ木1遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2遺跡	台場跡	字鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷺ノ木3遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘	40~45	縄文中期(円筒上層)、続縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木506~510	河岸台地	45~50	縄文中(円筒上層)・晩(タンネトウL)・続縄文(恵山)	2001~2003 森町教委発掘調査
22	濁川左岸遺跡	集落跡	字石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層)・後期前葉	2003「森町濁川左岸遺跡-B地区-1」北埋調報190
23	本茅部1遺跡	遺物包含地	字本茅部町205、272~274、294	海岸段丘	80~85	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層、見晴町)・晩期(大洞C2)	2003「森町本茅部1遺跡」北埋調報191、2004「森町本茅部1遺跡(2)」北埋調報199
24	栗ヶ丘1遺跡	遺物包含地	字栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文中・後期	2001・02森町教委発掘調査
25	倉知川右岸遺跡	集落跡	字栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文中(円筒上層、サイベ沢Ⅶ)・後期(トリサキ)	2004「森町倉知川右岸遺跡」北埋調報196
26	森川3遺跡	集落跡	字森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前・中期、続縄文(恵山)	2002・03道埋文発掘調査
27	上台1遺跡	遺物包含地	字上台33-1、42-1、364	丘陵	90	縄文後期	2003 道埋文発掘調査
28	鷺ノ木5遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文後期	2003 森町教委発掘調査
29	石倉1遺跡	遺物包含地	字石倉町395~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文中・後期	2002・2003 道埋文発掘調査
30	森川4遺跡	遺物包含地	字森川町317-18	河岸段丘	90	縄文前・中・後・晩期	2003 道埋文発掘調査
31	上台2遺跡	集落跡	字上台町326-5	河岸段丘~緩斜面	90~100	縄文中~後期	2003 道埋文発掘調査
32	石倉2遺跡	集落跡	字石倉町146、623-1・3・4、624-1、306	河岸段丘	65~72	縄文中・晩期	2004「森町石倉2遺跡」北埋調報197
33	石倉3遺跡	遺物包含地	字石倉町482、483、490	河岸段丘	65~75	縄文後期(天祐寺、トリサキ)	2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報205
34	石倉4遺跡	遺物包含地	字石倉町511、520、521	河岸段丘	60	縄文後期	
35	鷺ノ木6遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木505、511	河岸段丘	65~70	縄文後期	
36	石倉5遺跡	遺物包含地	字石倉町512、513、519	河岸段丘	55~60	縄文中期	2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報205
37	三次郎川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町513、516	河岸段丘	40~47	縄文前・中・後期、続縄文	2003 道埋文発掘調査
38	三次郎川左岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文前・中・後期、続縄文	2003 道埋文発掘調査
39	鷺ノ木7遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木町397-1ほか	尾根	60	縄文	
40	鷺ノ木川右岸遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木町396	台地	60	縄文	
41	蛭谷2遺跡	遺物包含地	字蛭谷町281	台地	80	縄文	

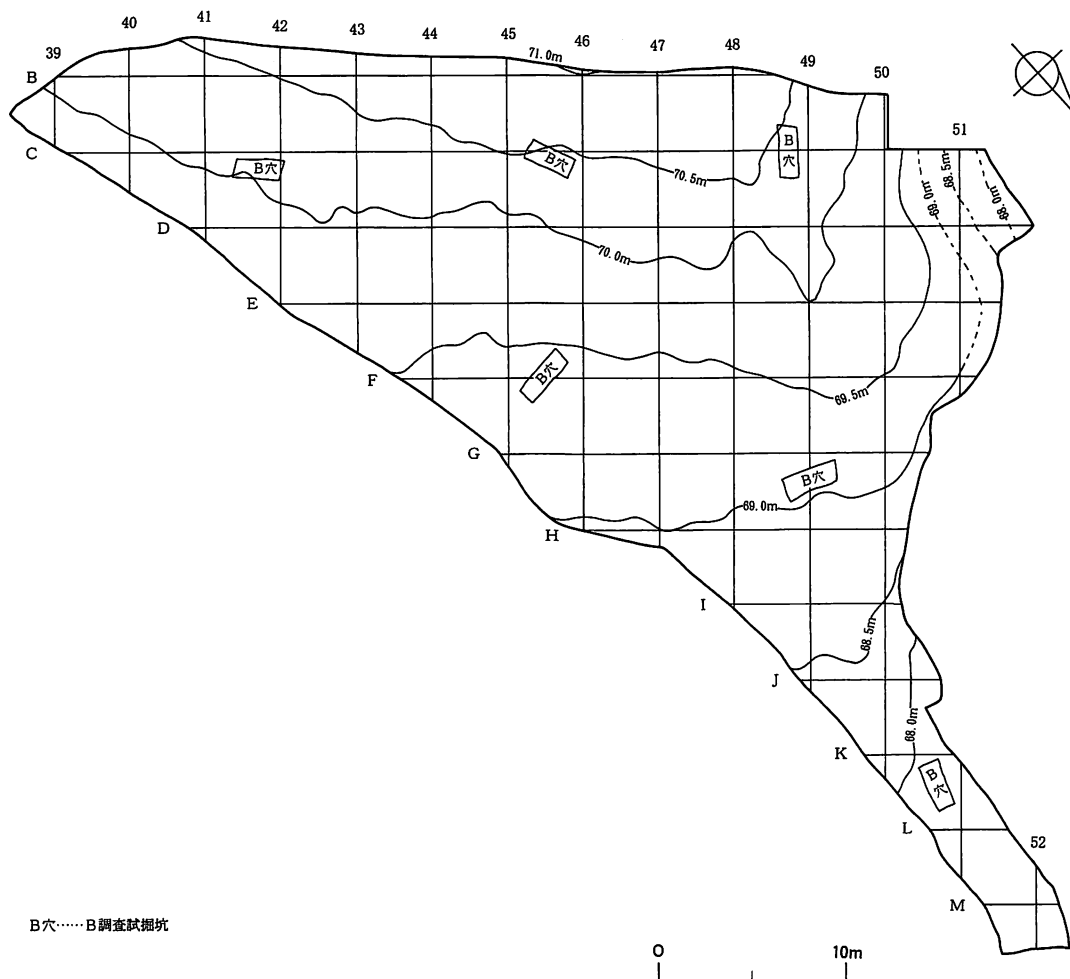
III A地区の調査とその遺物

1. 概要

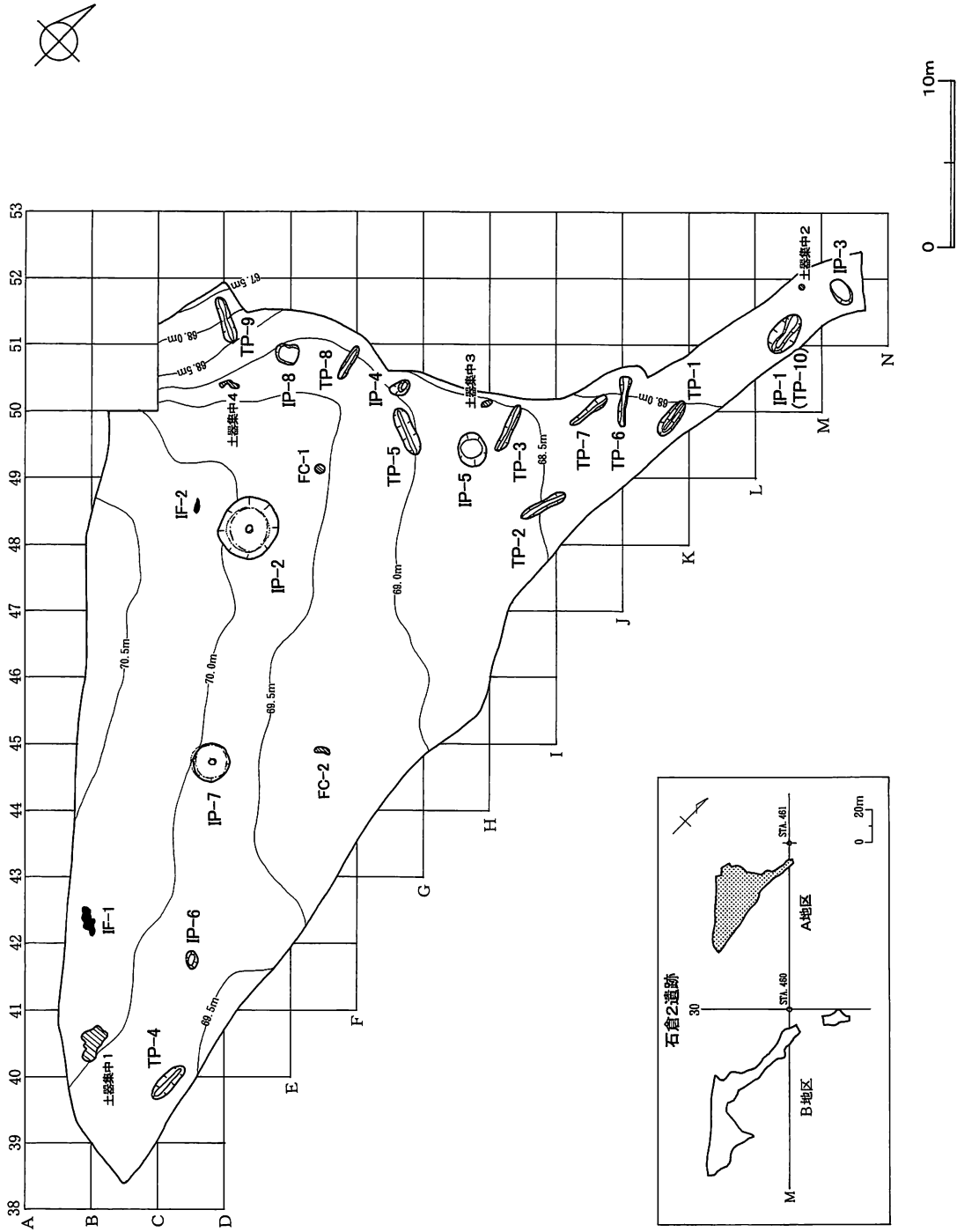
A地区は南の山側の高位段丘から北に張り出す細い尾根上、標高67.5～71mに位置する。尾根の両側は急崖で、北西側は石倉川に面している。南東側は沢をはさんでB地区の細い尾根に対面している。調査区内は南から北側に緩やかに下る斜面である。遺物包含層の黒色土層は薄く、特に尾根の先端部ではほとんど残っていない。

遺構は土壇8基、Tピット10基、焼土2カ所、土器集中4カ所、フレイク集中2カ所が検出された。土壇のうち3基はフラスコ状ピットで、最も大きいIP-2は深さ約1.9mを測る。そのほか、覆土上面からフレイクチップがまとまって出土した土壇(IP-1)や、2個体の土器がほぼ完形で出土した土壇(IP-8)がある。Tピットは尾根の石倉川寄りの縁辺部で9基、南東側の沢寄りの縁辺部で1基検出された。大きさはおおむね類似するが、長軸方向や間隔は一定でない。土器集中は縄文中期後半のもの1カ所、晩期後半のもの3カ所が検出された。

遺物は総数6,915点出土した。土器は6,126点、石器・礫等789点である。土器は縄文時代中期後半が921点、晩期後葉が5,205点出土であるが、このうち4,500点ほどが土器集中域から出土している。石器・礫等では、フレイクが681点と86%を占めており、定形的石器はわずかである。(阿部)



図III-1 A地区地形測量図(地形はKo-d直下)



図III-2 A地区遺構位置図 (地形はV層上面)

2. 遺構とその出土遺物

(1) フラスコ状ピット

I P-2 (図III-3・4、図版2・12)

位置・立地：C・D-47・48 細い尾根の基部、標高70m 付近の緩斜面

規模：3.68/2.58×3.32/2.55×1.88m

長軸方向：N-11°W

平面形：ほぼ円形

確認・調査：II層除去後、III層が円形に大きく落ち込みその周囲が幾分盛り上がっている、およそ3mの範囲を確認した。竪穴住居跡を想定しておおむね東西・南北方向に十字形に土層観察用の壁面を残し、トレンチを入れながら掘り進めた。III～IV層に相当する黒色土を掘り下げたところ、やや不均質なロームが堆積していることが分かりさらに掘り進めた。その結果、壁がオーバーハングし、深さが1.5mを超える大型のフラスコ状ピットであることが確認できた。土層断面図は2方向それぞれ作成し、さらに長軸・短軸方向それぞれにエレベーション図面を作成した。

また検出時において、遺構周辺の特に関北～西側がやや高くなっていることが確認されていたので、掘上土が存在することを想定して調査を行った。土層断面観察の結果、周辺包含層と堆積状況に大きな差は見られず、掘上土としては認められなかった。

覆土：周辺からの土砂の流入、壁の崩落、腐植などが繰り返されて形成されたと考えられる。人為的に埋め戻したと考えられる堆積はなく、すべて自然堆積とみられる。

土層は大きく三層に分けられる。上位の土層1～12は基本土層のIII～IV層に相当する黒色腐植土層を主体とし、ロームや軽石を多く含んだ薄い層が黒色土と互層をなしている。雨水などとともに土砂が時折流入して堆積した様子が観察される。また土層2はB-Tm降下火山灰で、窪地に堆積した状況が明瞭であり、最大厚6cmと比較的厚く堆積している。中位の土層13～28は、全体的に明るい色調で厚い堆積層が多く、土層のしまりは弱い。壁面上部からの大小の崩落と周辺からの土砂の流入による間層の繰り返しとみられ、比較的短い期間で形成されたものと推測できる。下位の土層29～37はやや暗い色調の各層が薄く堆積しており、堅く引き締まっている。雨水などとともに流入した土砂の堆積とみられる。

壙底・壁：壙底面は平坦で強く緻密である。壁は壙底でオーバーハングし、中位はゆるやかに直立するが、崩落により凹凸が著しい。上位でくびれて大きく外反する。壙底面のほぼ中央に確認面44×39cm・壙底面30×24cm・深さ17cmのほぼ円形の掘り込みがある。

遺物出土状況：3点が出土した。覆土の上位から縄文時代晩期後葉の土器片が1点出土したが、この遺構との直接的な関係はないとみられる。また、覆土の中位および下位から小型の礫がそれぞれ1点ずつ出土した。

時期：遺構周辺出土の遺物から、縄文時代中期後半に属するものと思われる。

(阿部)

I P-5 (図III-5、図版3・12)

位置・立地：G-49 標高約68.8mの平坦面に位置する。

規模：2.0/1.2×1.68/1.2×1.12m

長軸方向：N-43°-W

平面形：楕円形

確認・調査：V層上面で円形の黒色土として確認した。壙口部に土器片の集中が見られたため、実測図の作成と写真撮影を行い、遺物を取り上げた。確認面を精査し、断面観察用の壁面を設定し掘り下

げたところ、覆土の上層は基本土層と同様の自然堆積層が確認された。壙口部の土器は、土壙が埋まった後、くぼみに廃棄されたものであった。形態からフラスコ状ピットと考えられる。

覆土：3つに大別できる。覆土1層～覆土3層が自然堆積層。覆土4層～15層が主に崩落後の流入土。覆土16層がオーバーハング部と壁の崩落土である。

壙底、壁：壙底は平坦で壁は急に立ち上がる。

遺物出土状況：土壙が埋まった後のくぼみから、縄文時代晩期の土器が1個体出土している。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半と考えられる。 (村田)

掲載遺物：土器 1は縄文時代晩期後葉聖山II式の深鉢形土器。平縁で、口縁下に2条の浅い幅広の沈線が施されている。3つの接合破片で口径を求めた。器壁は薄く、焼成は良好である。接合できなかった同一個体の小破片が多数残存している。 (阿部)

IP-7 (図III-6、図版4)

位置・立地：C-44 高位段丘の標高70mほどの緩斜面

規模：2.19/2.30×2.07/2.41×1.97m

長軸方向：-

平面形：円形

確認・調査：II層除去後、III層上面で灰白色の火山灰が円形に堆積しているのを確認した。埋まりきらない大型の遺構に火山灰が堆積した可能性を考え、南北方向に幅約20cmのセクションベルトを設定し、これを残したまま周囲の包含層をV層上面まで掘り下げて、平面形の確認を行った。V層上面で検出した平面形はほぼ円形であった。先に設定したセクションベルトをそのまま残し、これの両側で遺構を掘り下げた。

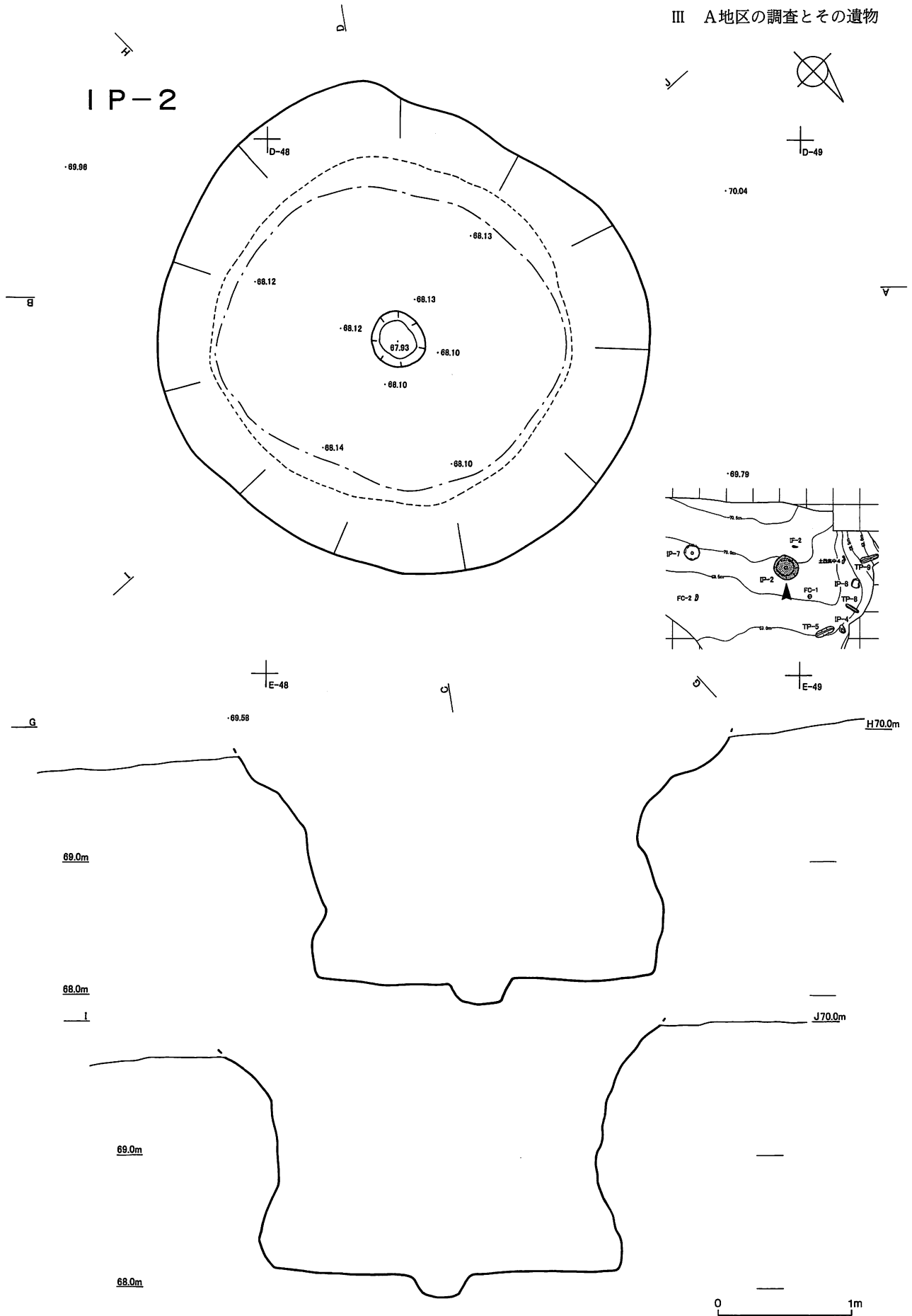
覆土：覆土は崩落と周辺からの土砂の流入、腐植の形成の3つから成り立ち、人為的に埋め戻された痕跡は確認できない。土層は三層に大別した。土層1～3はこの遺構の埋没後に堆積した腐植の形成と火山灰の降下による堆積層である。土層1は灰白色の火山灰、土層2、3はそれぞれ基本層序III層、IV層に相当する。土層4～25は壁面上部からの崩落土と、周辺の包含層から流入した土砂による堆積である。このうち土層4～19は黒色～暗褐色土を主体とし、周囲の包含層からの流入土である。土層20～25は黄褐色土を主体とし、壙口付近の壁面崩落土に由来する。土層26～28は、にぶい褐色土を主体とし、土壙下位の壁面崩落土に由来する。また、土層29、30は周辺から雨水などとともに流入した土砂の堆積である。

壙底・壁：壙底は平らで、壁は壙底付近でオーバーハングし、中位では垂直、壙口部付近では開きながら立ち上がる。壙底中央には長径約40cm、短径約32cm、深さ約15cmの浅い掘り込みが存在する。

遺物出土状況：覆土上位で礫2点が出土した。周辺の包含層から流入したものとする。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期または晩期と考えられる。 (石井淳平)

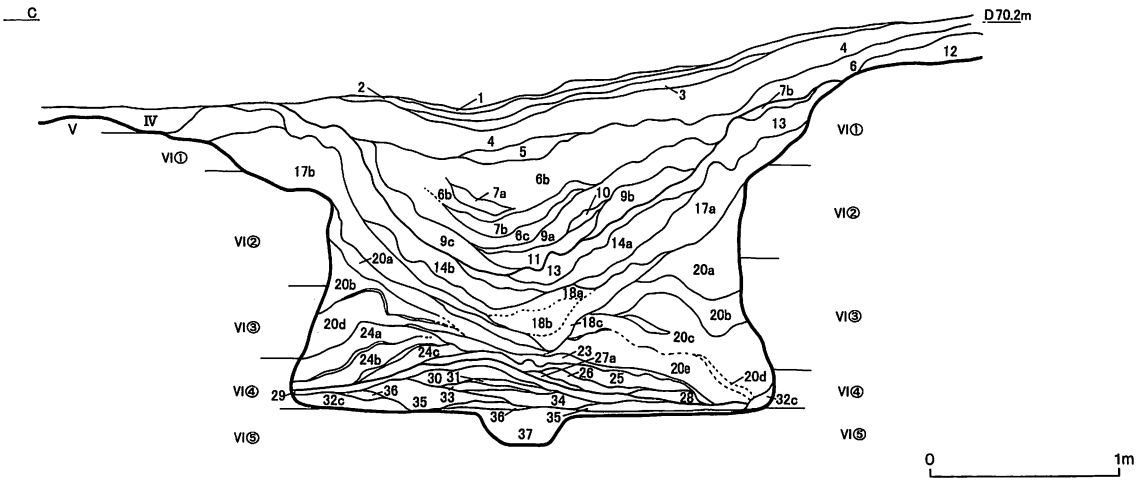
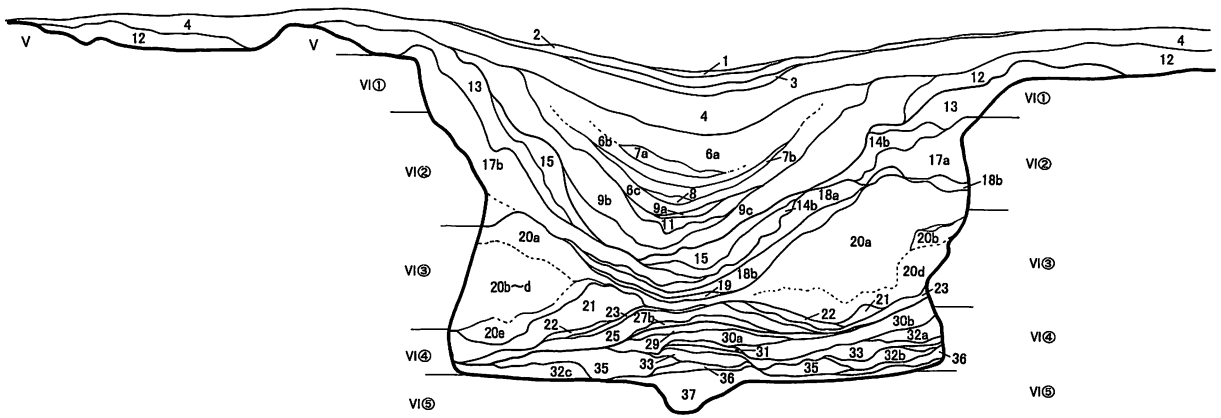
IP-2



Ⅲ-3 IP-2(1)

IP-2

B70.2m



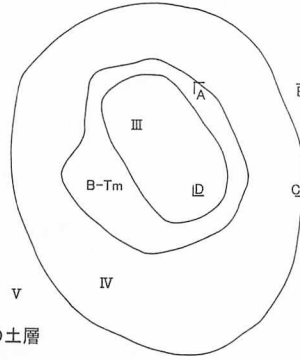
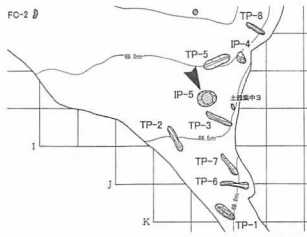
IP-2の土層

- | | |
|--|---|
| <p>1 〔黒〕 黒色 (7.5YR 3/1) しまり強、粘性弱。</p> <p>2 〔B-Tm+黒〕 褐灰色 (7.5YR 4/1~6/1) しまり非常に強、やや不均質。粒子細かい。</p> <p>3 〔黒〕 黒色 (7.5YR 2/1) しまり非常に強、粘性弱。炭化物少量含む。</p> <p>4 〔Ⅲ層相当〕 極暗褐色 (7.5YR 2/3) しまり非常に強、粘性弱。</p> <p>5 〔Ko-g>黒〕 褐色~極暗褐色 (7.5YR 4/4~2/3) しまり非常に強、粘性やや弱、不均質。層界やや不明瞭。</p> <p>6 a 〔Ⅳ層相当〕 黒色 (10YR 1.7/1) しまりやや強、粘性やや強。中央部付近はしまりやや弱。</p> <p>6 b →6 aと同様。</p> <p>6 c →6 aと同様。</p> <p>6 d →6 aと同様だが、若干0-Lが混入。</p> <p>7 a 〔Ko-g<黒〕 黒褐色~黒色 (7.5YR 2/2~2/1) しまり中、粘性やや強。均質的。やや不明瞭。</p> <p>7 b →7 aと同様。</p> <p>8 〔Ko-g<黒〕 →5と同様。</p> <p>9 a 〔黒>Ko-g〕 黒褐色~極暗褐色 (7.5YR 2/2~2/3) しまりやや強、粘性中。均質的。</p> <p>9 b →9 aと同様。</p> <p>10 〔0-L?0-L?〕 褐色 (10YR 4/4) しまりやや弱、粘性やや強。不均質。</p> <p>11 〔0-L+黒〕 褐色~黒褐色 (10YR 4/4~2/2) しまりやや弱、粘性やや強。不均質。</p> <p>12 〔0-L+Ko-g>黒〕 しまりやや強。やや不均質。</p> <p>13 〔0-L主体〕 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) しまりやや強、粘性やや強~弱。不均質。</p> <p>14 a 〔黒>0-L・軽石〕 黒色 (10YR 2/1) ~黒褐色 (2.5Y 3/2) しまりやや弱だが下位は強。粘性不均質。層界明瞭。</p> <p>14 b →9 aと同様だが不均質。</p> <p>15 〔0-L>黒〕 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) しまりやや強、粘性やや弱。やや不均質。径1~2cmのプロック状のローム。</p> <p>16 →6 dと同様。</p> <p>17 〔0-L〕 黄褐色 (10YR 5/6) 〔V層+M層〕 しまり弱、粘性やや弱。均質的。</p> <p>18 a 〔黒>0-L・軽石〕 黒色 (10YR 2/1) ~黒褐色 (2.5Y 3/2) しまり中。粘性やや強。均質的。</p> <p>18 b 〔黒+0-L・軽石〕 黒褐色~暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/1~3/3) しまり中、粘性中。やや不均質。</p> <p>18 c 〔黒<0-L・軽石〕 黒褐色~暗灰黄褐色 (2.5Y 2/1~4/2) しまりやや強、粘性やや弱。不均質。</p> <p>19 〔0-L>黒〕 →15と同様。</p> <p>20 a 〔0-L〕 黄褐色 (10YR 5/6) しまり弱、粘性やや弱。均質的。</p> <p>20 b 〔0-L+背黒〕 黄褐色 (2.5Y 5/6) 〔M層ローム〕 しまりやや弱、粘性弱。砂質。均質的。</p> <p>20 c 〔0-L〕 →20 aと同様。</p> <p>20 d 〔0-L+背〕 →20 bと同様。</p> <p>20 e 〔背黒〕 →20 aと同様だが、しまりやや弱。やや砂質。</p> | <p>21 〔砂質0-L (背)〕 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3~4/4) しまりやや強、粘性弱。均質的。</p> <p>22 〔0-L〕 褐色 (10YR 4/4) しまりやや強、粘性やや強。均質的。</p> <p>23 〔0-L+背〕 褐色 (10YR 4/4) ~暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) しまりやや強、粘性やや強。やや不均質。</p> <p>24 a 〔汚れた0-L〕 黄褐色~黒褐色 (10YR 5/6~2/3) しまりやや強、粘性やや強。ロームが多く、黒色の粒が多量に混入。</p> <p>24 b →27と同様。</p> <p>24 c →28と同様。</p> <p>25 〔0-L〕 褐色 (10YR 4/6) しまりやや弱、粘性中。砂質。均質的。</p> <p>26 〔背黒〕 黒色 (2.5Y 2/1) しまりやや強、粘性強。軽石わずかに含む。均質的。</p> <p>27 a 〔0-L>背黒〕 褐色 (10YR 4/4) ~黒褐色 (2.5Y 3/2) しまりやや弱、粘性中。やや不均質。</p> <p>27 b 〔背黒>0-L〕 黒褐色 (2.5Y 3/1) ~にぶい黄褐色 (10YR 4/3) しまりやや強、粘性やや強。砂質。軽石10~20%、ローム含む。不均質。</p> <p>28 〔0-L (砂質)〕 褐色 (10YR 4/6) しまりやや弱、粘性中。砂質。均質的。</p> <p>29 〔硬質砂質0-L〕 暗黄灰色~オリーブ褐色 (2.5Y 4/2~4/3) しまり非常に強、粘性弱。やや不均質。</p> <p>30 a 〔0-L (砂質)〕 →28と同様だが非常に堅い。</p> <p>30 b 〔硬質砂〕 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3~4/4) しまり強、粘性弱。砂質。均質的。</p> <p>31 〔背黒>0-L〕 →27 bと同様だが堅い。</p> <p>32 a 〔背灰+軽石〕 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3~3/3) しまり弱、粘性やや弱。砂質。軽石10~20%含む。不均質。</p> <p>32 b →32 aと同様。</p> <p>32 c →32 aと同様。</p> <p>33 〔0-L (砂質)〕 →28と同様。</p> <p>34 〔背黒+軽石>0-L〕 黒褐色~暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/1~3/3) しまりやや弱、粘性中。均質的。</p> <p>35 〔硬質砂〕 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) しまり強、粘性弱。砂質。均質的。</p> <p>36 〔0-L (砂質)〕 黄褐色 (10Y 5/6) しまりやや強、粘性中。均質的。</p> <p>37 〔背黒+軽石〕 黒褐色 (2.5Y 3/1) しまりやや弱、粘性やや強。ローム・軽石10%程度で下位はやや多量。</p> |
|--|---|

- VI① 黄褐色粘質ローム
- VI② オリーブ褐色砂質ローム
- VI③ シルト質粘土
- VI④ 砂質ロームと背灰色砂層の互層
- VI⑤ 暗灰黄褐色 (2.5Y 5/2) シルト質粘土

図III-4 IP-2(2)

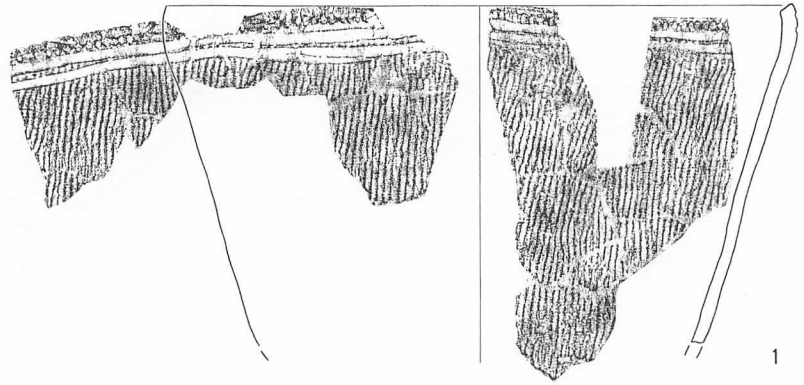
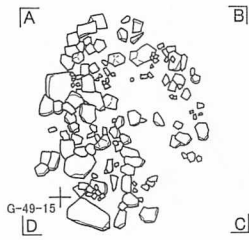
IP-5



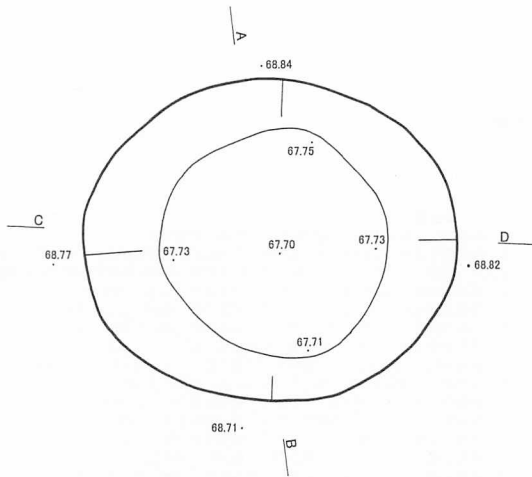
確認面の土層

H-49

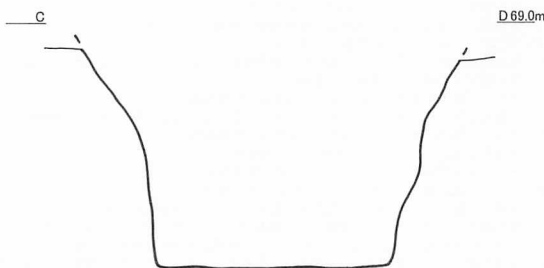
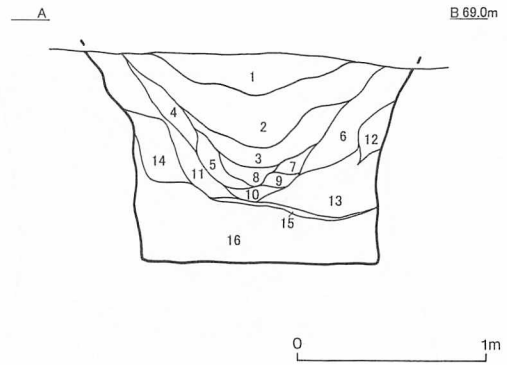
0 1m



0 10cm



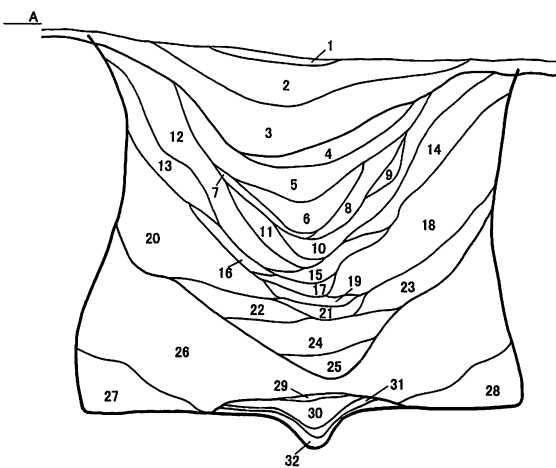
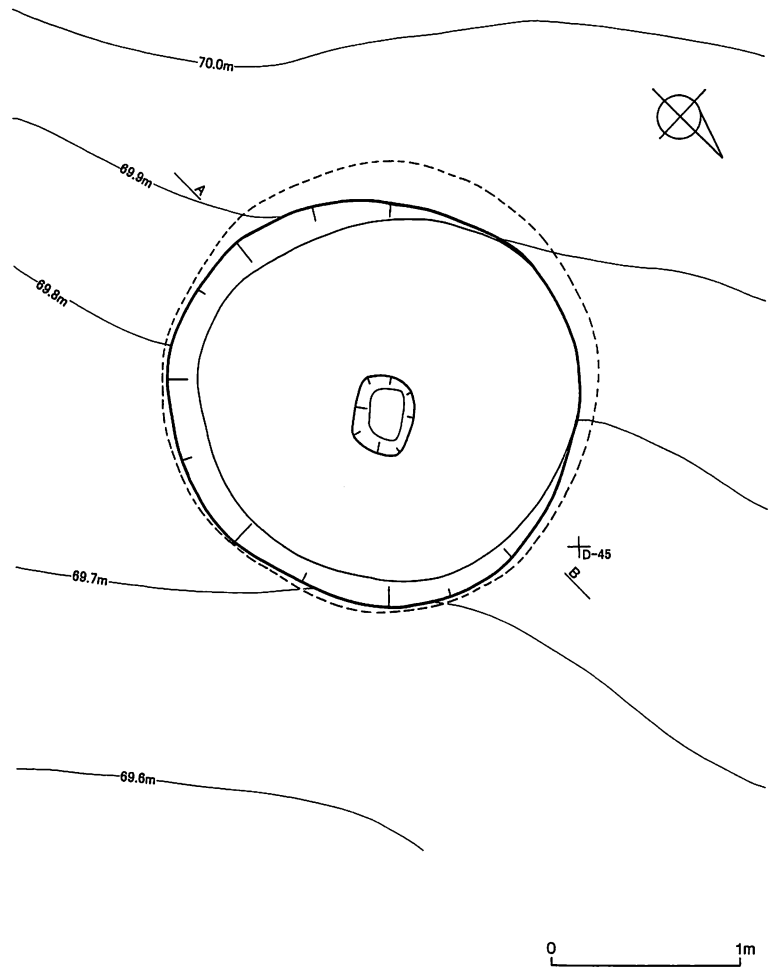
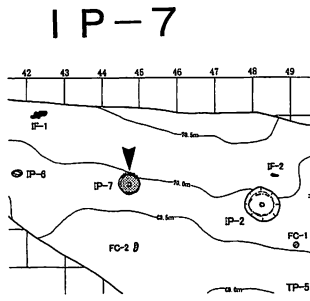
H-49



IP-5の土層

- 1 黒色土 (10YR1.7/1) V
- 2 黒色土 (10YR2/1) N>>V しまりあり
- 3 黒色土 (10YR1.7/1) V やわらかい
- 4 黒色土 (10YR2/2) V>V Vはブロック状
- 5 褐色土 (10YR4/4) V>M Vは斑状
- 6 褐色土 (10YR4/4) V>M Vは斑状、かたい
- 7 褐色土 (10YR4/6) V>M Vはブロック状
- 8 黒色土 (10YR2/1) N>>V やわらかい
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) V>V しまりあり
- 10 黒色土 (10YR2/1) N>V やわらかい
- 11 暗褐色土 (10YR3/3) V+V かたい
- 12 黄褐色土 (10YR5/6) V主体
- 13 褐色土 (10YR4/4) V+VI 崩落
- 14 黄褐色土 (10YR5/6) ≒12 V
- 15 黒色土 (10YR2/1) V主体 やわらかい
- 16 褐色土 (10YR4/4) V+VI 崩落、かたい、しまりあり

図III-5 IP-5と出土遺物



B 70.0m

IP-7の土層

- 1 灰黄褐色シルト質壤土 (10YR 4/2) 粘性弱 堅密度軟
- 2 黒褐色埴壤土 (10YR 2/3) 粘性中 堅密度堅 基本層序Ⅲ層に対応する自然堆積層
- 3 黒色埴壤土 (10YR 1.7/1) 粘性中 堅密度堅 基本層序Ⅳ層に対応する自然堆積層
- 4 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅 褐色土30%含む
- 5 黒褐色埴壤土 (10YR 2/3) 粘性中 堅密度堅 黒褐色土25%含む
- 6 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度軟 褐色土30%含む
- 7 褐色壤土 (10YR 4/4) 粘性中 堅密度堅 黒色土25%含む
- 8 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 (径5mm) 2%含む
- 9 褐色壤土 (10YR 4/4) 粘性中 堅密度軟 暗褐色土30%含む
- 10 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度軟 ローム10%含む
- 11 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性中 堅密度軟 暗褐色土10%含む
- 12 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度軟 ローム7%含む
- 13 黄褐色壤土 (10YR 5/6) 粘性弱 堅密度堅 黒褐色土5%含む
- 14 黄褐色壤土 (10YR 5/6) 粘性弱 堅密度堅 黒褐色土15%含む
- 15 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度軟 ローム粒 (径10mm) 5%含む
- 16 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性中 堅密度軟 黒褐色土3%含む
- 17 黒色埴壤土 (10YR 1.7/1) 粘性中 堅密度堅 ローム25%含む
- 18 褐色埴壤土 (10YR 4/4) 粘性中 堅密度堅
- 19 褐色壤土 (10YR 4/4) 粘性弱 堅密度堅 黒褐色土5%含む
- 20 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性弱 堅密度軟
- 21 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度軟 パミス、ローム粒 (径5~10mm) 3%含む
- 22 褐色壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅
- 23 オリーブ褐色砂壤土 (2.5Y 4/4) 粘性弱 堅密度軟
- 24 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 (径10mm) 10%含む
- 25 オリーブ褐色砂壤土 (2.5Y 4/4) 粘性弱 堅密度軟
- 26 黄褐色砂壤土 (2.5Y 5/4) 粘性弱 堅密度堅
- 27 オリーブ褐色壤土 (2.5Y 4/3) 粘性弱 堅密度堅
- 28 オリーブ褐色壤土 (2.5Y 4/3) 粘性強 堅密度堅
- 29 黒褐色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度しょう 黄褐色砂5%含む
- 30 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度軟 ローム粒 (径3mm) 3%含む
- 31 にぶい黄褐色壤土 (10YR 4/3) 粘性中 堅密度しょう 暗褐色土7%含む
- 32 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度しょう ローム粒 (径5~7mm) 2%含む

図III-6 IP-7

(2) 土壌

I P - 1 (図III-7、図版2・12)

位置・立地：L-50・51 標高約68mの細い尾根上に位置する。

規模：2.56/1.96×1.32/0.8×0.32m

長軸方向：N-11°-W 平面形：楕円形

確認・調査：V層上面で楕円形の黒色土として確認した。楕円形の形態から当初、Tピットを想定し、短軸に土層観察用ベルトを設定して掘り下げた。その結果、TP-10が埋まった後上位の黒色土を掘り込んだ土壌であることがわかった。

覆土：IV層を主体とする自然堆積である。

墳底、壁：墳底は中央がやや凹み、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土中から石鏃1点、スクレイパー1点、フレイク33点、礫1点が30cmほどのまとまりとして出土した。フレイクの石材は黒曜石、メノウ、頁岩がある。メノウと頁岩は、色調が赤みを帯びるものや白色のものなど、それぞれ3個の母岩に分けられる。

時期：遺構周辺の遺物から、縄文時代中期後半と考えられる。

掲載遺物：石器 1はメノウ製の石鏃。2は黒曜石製のスクレイパーで、片面調整の刃部を持つもの。
(村田)

I P - 3 (図III-8、図版3)

位置・立地：L-51 標高約68mの細い尾根上に位置する。

規模：1.72/1.44×1.36/0.64×1.08m

長軸方向：N-8°-E 平面形：楕円形

確認・調査：V層上面で楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し掘り下げたところ、明瞭な壁が認められたので、土壌と判断した。埋め戻しの覆土と形態から判断して、土壌墓の可能性を指摘できる。

覆土：覆土1～3層はIV層を主体とする自然堆積で、覆土4層～13層は壁面の崩落土と埋め戻し土の堆積である。

墳底、壁：墳底は平坦で、壁は急に立ち上がる。

遺物出土状況：土壌との関連は不明だが、南側の墳口部に人頭大の台石が1点見られた。また、自然堆積層と遺構覆土の間から、直径5cm以下の小礫が26点出土した。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期後半と考えられる。
(村田)

I P - 4 (図III-8、図版3)

位置・立地：G-50 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高69m前後の斜面

規模：1.30/0.69×0.75/0.49×0.31m

長軸方向：N-12°-E 平面形：不整楕円形

確認・調査：調査区北西端の段丘崖付近で検出した。IV層調査中に石皿が出土したので、遺構の存在を予測した。周辺をV層上面まで掘り下げて精査したところ、不整形の暗褐色土を確認した。石皿との関係を確認するために幅約15cmのトレンチを北東～南西方向に設定して掘り下げた。トレンチ調査の結果、石皿下に黒色土の落ち込みを確認した。掘り込みは墳底と壁との境界が不明瞭であること、墳底が平坦でないことから、人為的な掘り込みか、自然のくぼみが埋まったものかは判断できなかった。

た。

覆土：暗褐色～褐色土が主体で、埋め戻しによる堆積か自然堆積かは判断できない。

墳底・壁：墳底は断面形が丸く、壁は下部がやや広がっている。墳底と壁との境界は不明瞭である。

遺物出土状況：覆土上位で石皿が使用面を下にして出土した。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期後半と考えられる。 (石井)

掲載遺物：石器 1 は安山岩製の石皿。全面敲打による調整が施され、一部に擦り調整が見られる。

(村田)

IP-6 (図III-8、図版4)

位置・立地：G-50 高位段丘の標高69.7mほどの緩斜面

規模：0.93/0.63×0.67/0.36×0.18m

長軸方向：N-40°-W

平面形：楕円形

確認・調査：V層中で黒色土の楕円形のまとまりを確認した。幅約10cmのセクションベルトを設定し、両側を掘り下げた。覆土と周囲の地山との境界が不明瞭であることから、人為的な掘り込みかどうか判然としなかった。

覆土：IV層土に似た黒色土が主体で、混入物を含まない自然堆積である。

墳底・壁：墳底は断面形が丸く、壁との境界は不明瞭である。

遺物出土状況：覆土下位で楕円形の小礫が出土した。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期または晩期と考えられる。 (石井)

IP-8 (図III-9、図版4・12)

位置・立地：D・E-50 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高69mの緩斜面

規模：1.38/1.22×1.04/0.80×0.44m

長軸方向：-

平面形：不整形

確認・調査：調査区北西の段丘崖付近で黒色土のまとまりとして検出した。IV層調査中にIII群b類土器2個体が出土したことから遺構の存在を予測した。周囲を精査したところ、直径約1mの不整形の平面形を確認した。南北方向にセクションベルトを設定し、両側を掘り下げた。セクションベルトを残して掘り下げたところ、先に検出した2個体の土器は、いずれも口縁部を上にした状態で埋まっていることが判明した。この出土状況から、これらの土器は覆土上位に埋納されたものと推測した。平面形は掘削前に検出したとおり不整形で、複数の遺構が切り合っている可能性も考えたが、底面が平らであること、断面で複数の遺構の存在を確認できないことから、単一の遺構と判断した。

覆土：ロームを多く含む黒褐色～褐色土が主体で、埋め戻しによる堆積と考える。

墳底・壁：墳底は平らで、壁は外傾して直線的に立ち上がる。

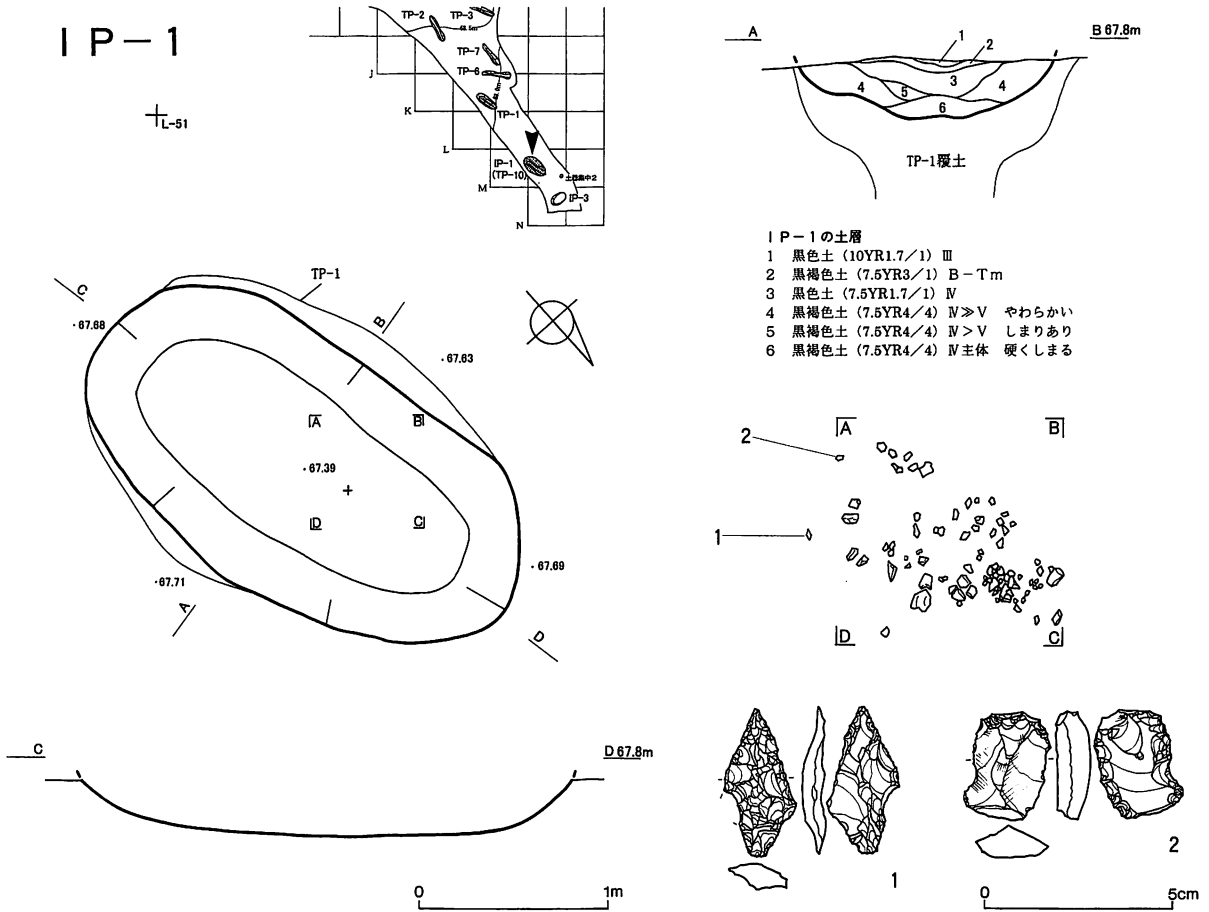
遺物出土状況：III群b類土器2個体と、扁平な円礫が出土した。いずれも埋納されたものとする。

時期：III群b類土器が埋納されていたことから、縄文時代中期後半である。 (石井)

掲載遺物：土器 1・2 は縄文中期後半に属する小型の深鉢形土器。

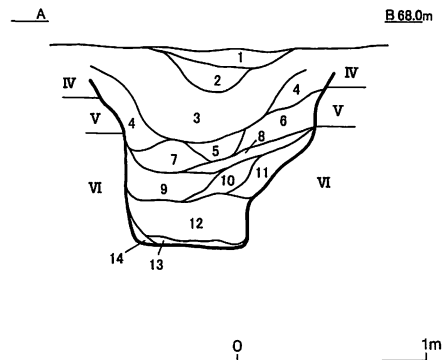
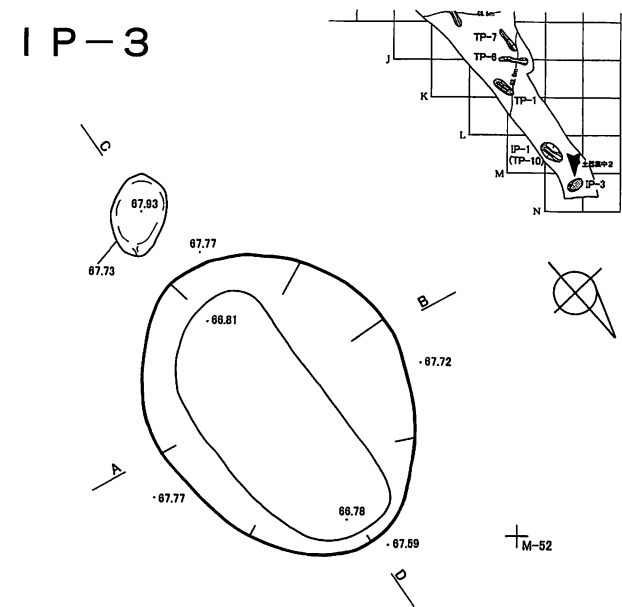
1 は上半が墳口部から、下半が覆土の上位から出土し、接合した。口縁は直立し、胴部が緩やかにふくらみ最大径をもつ。底部の張り出しは弱い。口縁部に把手が2カ所あり、把手と口唇上に連続刺突が施されている。胴部には横走沈線とそこから垂下する蛇行沈線がえがかれている。器壁はやや厚く、焼成はやや不良である。外面口縁～胴上部に多量の炭化物が付着している。

2はほぼ完形で出土した。口縁が外反し、底部が張り出す。口唇はやや丸みを帯びている。地文はやや太い無節縄文が密に施されている。器壁はやや薄く、焼成は良好である。外面上半に炭化物が付着している。
(阿部)



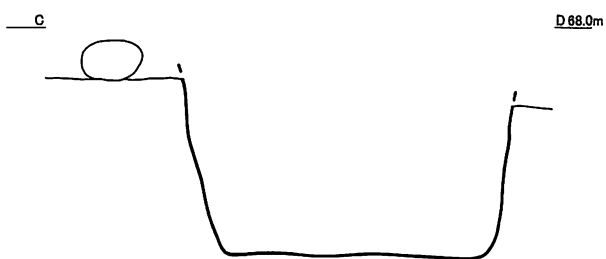
図III-7 IP-1と出土遺物

IP-3

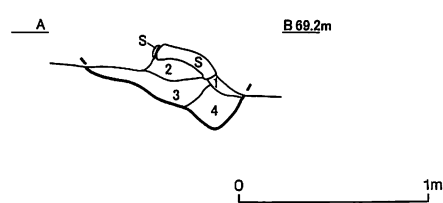
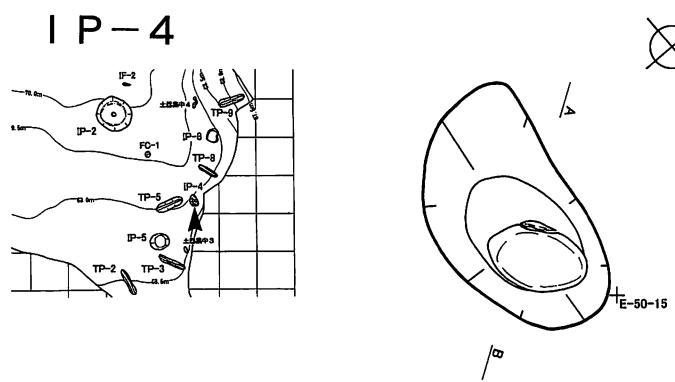


IP-3の土層

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) III + B - Tm
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) VI > V やわらかい
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) IV主体
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) V > IV かない
- 5 褐色土 (10YR4/4) V やわらかい
- 6 明褐色土 (7.5YR6/6) V 崩落
- 7 褐色土 (10YR4/4) IV + V + VI VIは粘土質、ブロック状
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IV + V 炭化物含む
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) IV + V ぼそぼそ、砂質
- 10 褐色土 (10YR4/4) V > IV 砂質、やわらかい
- 11 黄褐色土 (10YR6/6) V 崩落
- 12 褐色土 (10YR4/4) V主体、しまりあり
- 13 暗褐色土 (10YR3/3) IV + V しまりあり
- 14 明黄褐色土 (10YR6/6) IV + V + VI VIは粘土、崩落



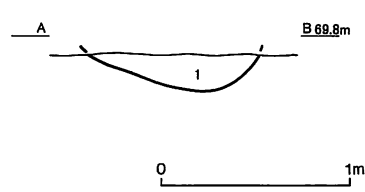
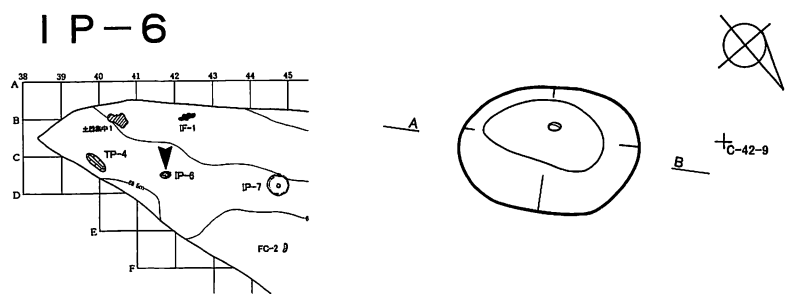
IP-4



IP-4の土層

- 1 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度軟
- 2 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅
- 3 黒褐色埴壤土 (10YR 3/2) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 (10mm) 10%含む
- 4 褐色埴土 (10YR 4/4) 粘性中 堅密度堅

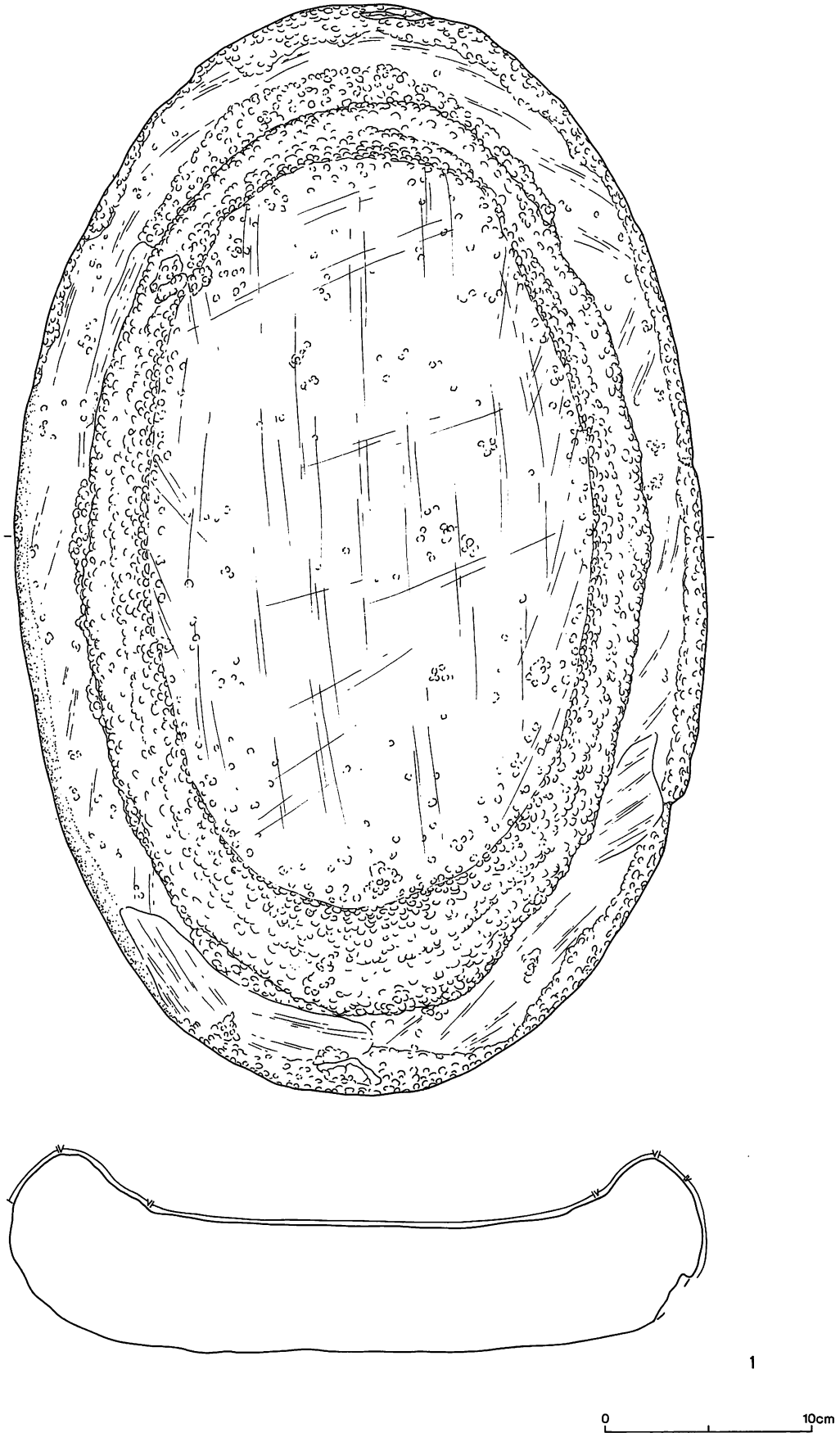
IP-6



IP-6の土層

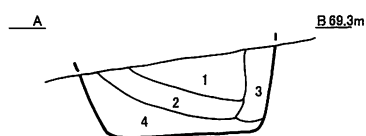
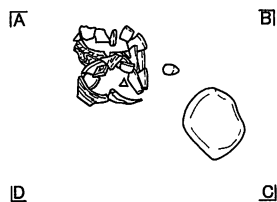
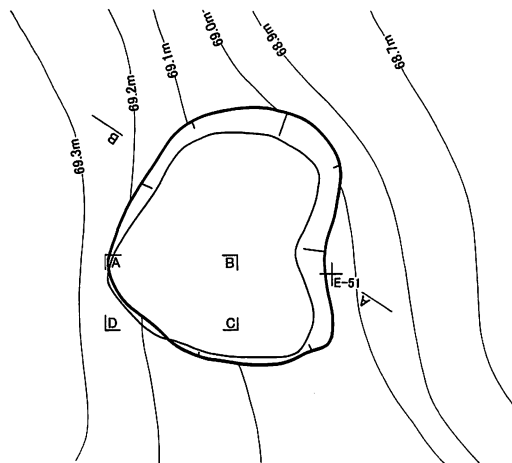
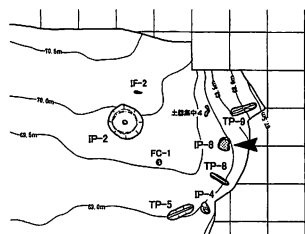
- 1 黒色埴土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅

図III-8 IP-3・4・6



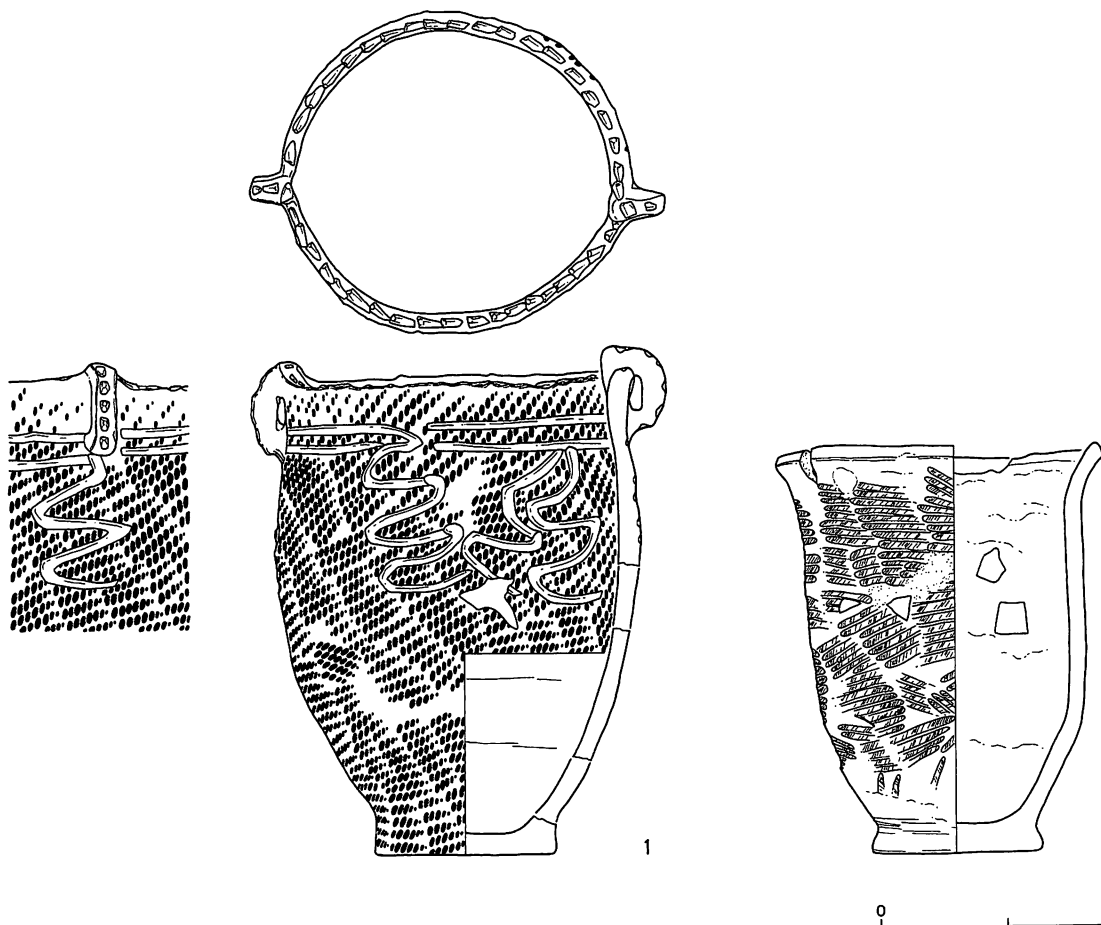
図III-9 IP-4 出土遺物

IP-8



IP-8の土層

- 1 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 (径5mm) 7%含む
- 2 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 (径5mm) 7%、炭化物1%含む
- 3 黒褐色埴壤土 (10YR 3/2) 粘性中 堅密度堅 ローム粒 15%含む
- 4 暗褐色壤土 (10YR 3/3) 粘性中 堅密度堅 黒褐色土 10%含む



図III-10 IP-8と出土遺物

(3) Tピット

TP-1 (図III-11、図版5)

位置・立地：J・K-49・50 標高約68.5mの細い尾根上に位置する。

規模：2.52/1.96×1.0/0.16×1.0m

長軸方向：N-80°-W 平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったのでTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積土の互層である。

壙底、壁：壙底は細長く平坦である。壁は東側の長軸端でオーバーハングしている。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(村田)

TP-2 (図III-11、図版5)

位置・立地：H・I-48・49 標高約68.5mの細い尾根上に位置する。

規模：2.84/2.26×1.08/0.2×1.48m

長軸方向：N-18°-W 平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったのでTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積土の互層である。

壙底、壁：壙底は細長く中央付近が凹む。「く」字状に曲がっており、南側の長軸端部は円形で、北側の端部は切り出し状を呈する。壁は長軸端でオーバーハングしている。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(村田)

TP-3 (図III-12、図版6)

位置・立地：H-49・50 標高約68.5mの細い尾根上に位置する。

規模：3.04/3.04×0.8/0.12×1.08m

長軸方向：N-20°-W 平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったのでTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積土の互層である。

壙底、壁：壙底は細長く平坦である。壁は壙底付近では垂直に立ち上がり、壙口部では崩落のため開き気味となる。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(村田)

TP-4 (図III-12、図版6)

位置：B・C-39・40

規模：2.51/2.19×1.01/0.17×1.58m

長軸方向：N-1°-E 平面形：長楕円形

確認・調査：V層調査中に楕円形の黒色土として検出した。長軸方向にセクションベルトを設定し、両側を掘り下げたところ、深さ約60cmのところでは黄褐色のロームを検出した。当初はこれを壙底と誤認し、この時点で土層断面図を作成し、セクションベルトを除去した。後日、壙底面を再度精査した

ところ、この黄褐色ロームが遺構の覆土であることに気づいた。改めて短軸方向にセクションベルトを設定し、両側を掘り下げた。

覆土：最初に掘り下げを行った、検出面から上位約60cmは、黒色～黒褐色土主体で、それより下位の土層1～9は褐色～黄褐色ローム砂質土を主体とする。

壙底・壁：壙底は平らで、壁は壙底から約80cmまでは垂直に立ち上がり、それより上位では開きながら立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：遺構周辺出土の遺物から、縄文時代中期または晩期に属するものと思われる。 (石井)

TP-5 (図III-13、図版7)

位置・立地：F-49・50 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高69mの緩斜面

規模：2.93/2.90×0.96/0.20×1.42m

長軸方向：N-70°W

平面形：長楕円形

確認・調査：III～IV層を掘り下げ、V層上面において長楕円形の黒色土を確認した。短軸方向に土層観察用の壁面を残し掘り下げたところ、断面がV字状の土壌となり、Tピットと認定した。

覆土：やや暗い色調で砂粒を多く含む薄い層（土層13・11・9・7・5ほか）と、明るい色調でロームを主体とするやや厚い層（土層12・10・8・6・4）が互層になっている。周囲からの土砂の流入と壁面の崩落土とみられ、すべて自然堆積と考えられる。

壙底・壁：壙底は細長く、ほぼ平坦である。壁は長軸端ではオーバーハングしている。側面側はほぼ直立して立ち上がり、中位からやや外反し、上位はゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土上面から大小2つの礫が、覆土上位から頁岩のフレイク1点が出土した。しかしいずれも遺構と直接の関係があるかどうかは不明である。

時期：遺構周辺出土の遺物から、縄文時代中期後半に属するものと思われる。 (阿部)

TP-6 (図III-13、図版7)

位置・立地：I・J-49・50 標高約67.5m～68mの細い尾根上に位置する。

規模：2.88/3.08×0.72/0.16×1.04m

長軸方向：N-39°W

平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったのでTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積土の互層である。

壙底、壁：壙底は段になり、斜面下方にあたる北西側が一段低い形態である。長軸端が膨らんでいる。壁は壙底付近では垂直に立ち上がり、壙口部付近で崩落のため開き気味となる。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。 (村田)

TP-7 (図III-14、図版8)

位置・立地：I-49・50 標高約68mの細い尾根上に位置する。

規模：2.68/2.76×0.64/0.16×1.24m

長軸方向：N-7°E

平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、

掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったのでTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積層の互層である。

壙底・壁：壙底は斜面下方にあたる北側が、やや下がっている。「く」の字状に曲がり端部はオーバーハンクしている。崩落が少なく、壙口部付近まで細長い形状を呈している。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(村田)

TP-8 (図Ⅲ-14、図版8)

位置・立地：F-49・50 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高69mの緩斜面

規模：2.16/2.15×0.51/0.16×1.12m

長軸方向：N-12°-W

平面形：長楕円形

確認・調査：調査区北西で長楕円形の黒色土を検出した。段丘平坦面と崖の境界に位置し、周囲の地形は北に向かって、約10°の下り勾配となっている。短軸方向にセクションベルトを設定し、両側を掘り下げた。

覆土：土層1～3は周辺からの土砂の流れ込み又は腐植の形成による堆積である。土層1は基本層序Ⅲ層、土層2は基本層序Ⅳ層にそれぞれ相当する。土層4～7は壁面崩落土に由来し、褐色～黄褐色土を主体とする。土層6のみ軟質の黒褐色土で、周辺から壙底に流入した土砂による堆積である。

壙底・壁：壙底は平らで、周囲の地形同様、北に向かって約10°の下り勾配となる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壙口付近は崩落のため開き気味となる。

遺物出土状況：覆土上位で礫1点が出土した。周囲の包含層から流入したものである。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(石井)

TP-9 (図Ⅲ-15、図版9)

位置・立地：C・D-51 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高67.5～68.5mの斜面

規模：2.81/2.49×0.66/0.10/1.16m

長軸方向：N-61°-W

平面形：長楕円形

確認・調査：調査区北西の斜面で長楕円形の黒色土を検出した。周囲の地形は北西に向かって約25°の下り勾配となっている。遺構の南東側1/3を掘り下げた段階で確認したため、Ⅲ層上面からのセクションベルトを残して、遺構北西側のプランの検出を行った。Ⅴ層上面で長楕円形の平面形を確認し、Tピットと判断した。先のセクションベルトの両側を掘り下げた。

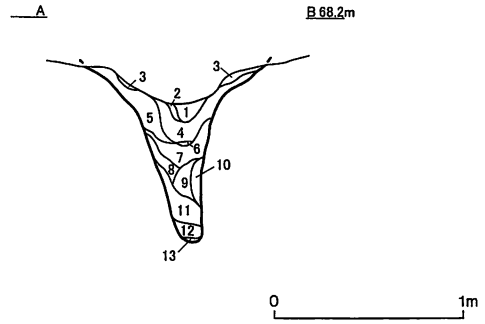
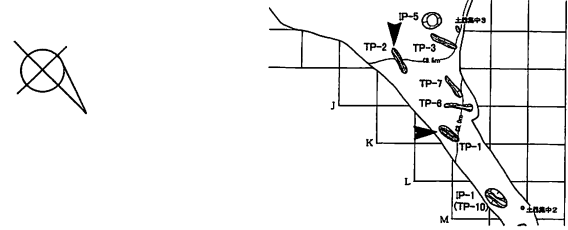
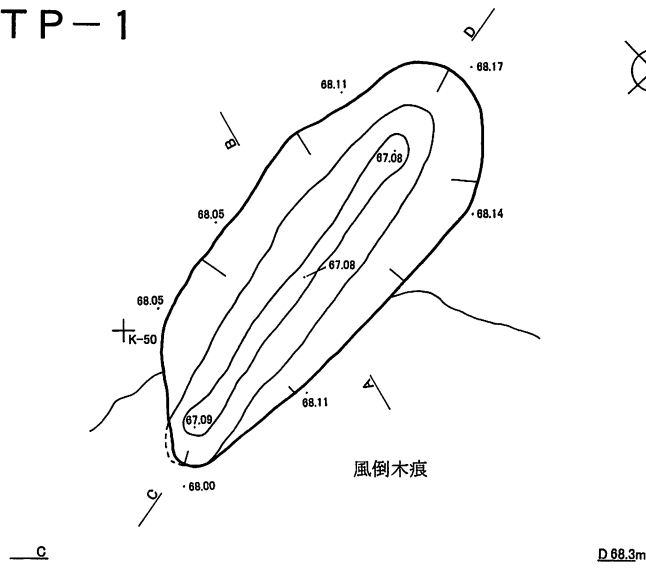
覆土：土層1～4は遺構埋没後に形成された腐植および降下火山灰の堆積層である。土層5、6は周辺の黒色～暗褐色土が主体で、周辺から流入した土砂が堆積したものである。土層7～9は壁面の崩落による堆積である。

壙底・壁：壙底は平らで、周囲の地形同様、北西に向かって約25°の下り勾配となる。壁は壙底付近ではほぼ垂直に立ち上がり、徐々に開き気味となる。

遺物出土状況：覆土上位で石器が数点出土した。埋没がある程度進行した段階で廃棄又は流入したもので、この遺構との直接の関わりはないと判断する。

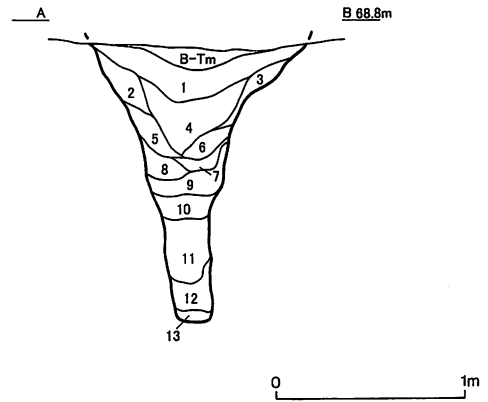
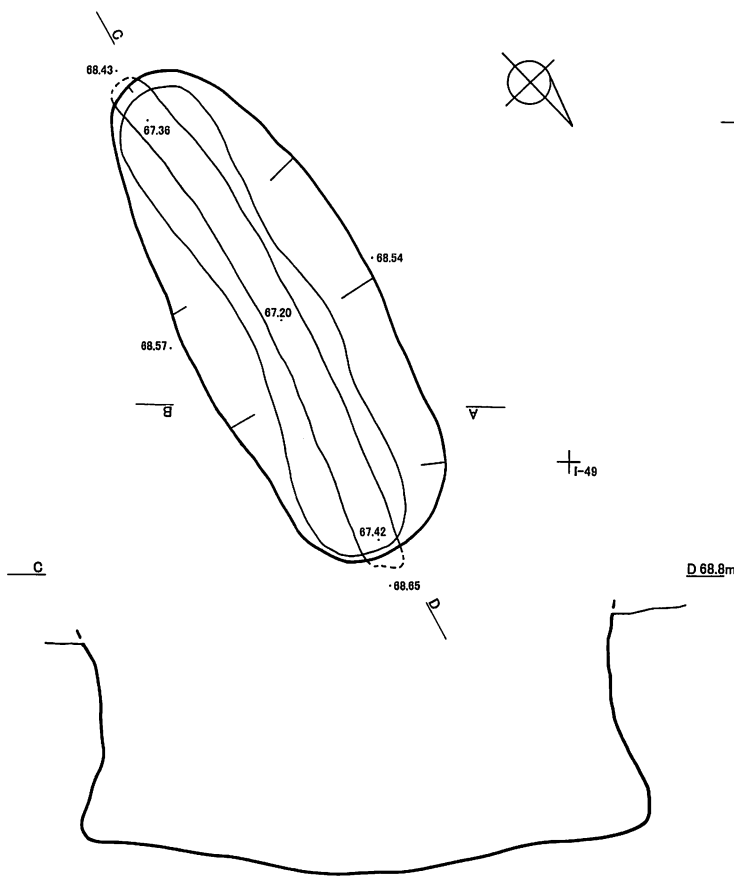
時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。(石井)

TP-1



- TP-1の土層
- 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) やわらかい、IV>V Vはブロック状
 - 2 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) VII主体 粘土
 - 3 暗褐色土 (10YR2/3) IV+V
 - 4 褐色土 (7.5YR4/4) V>IV やわらかい
 - 5 黄褐色土 (10YR5/6) V+VI
 - 6 暗褐色土 (7.5YR3/4) IV主体 ぼそぼそ
 - 7 褐色土 (7.5YR4/4) V>IV ぼそぼそ
 - 8 褐色土 (7.5YR4/3) V>IV ぼそぼそ
 - 9 褐色土 (7.5YR4/3) V>IV ぼそぼそ、砂質
 - 10 褐色土 (10YR4/4) Vの砂質、IVブロック状に混じる
 - 11 褐色土 (10YR4/6) やわらかい
 - 12 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘土
 - 13 黒色土 (10YR2/1) 粘りあり

TP-2

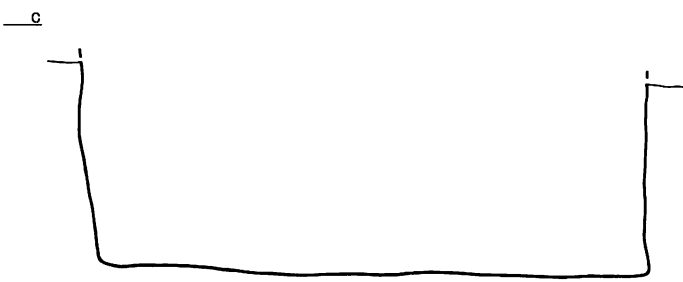
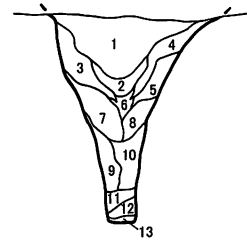
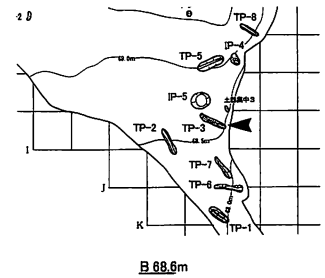
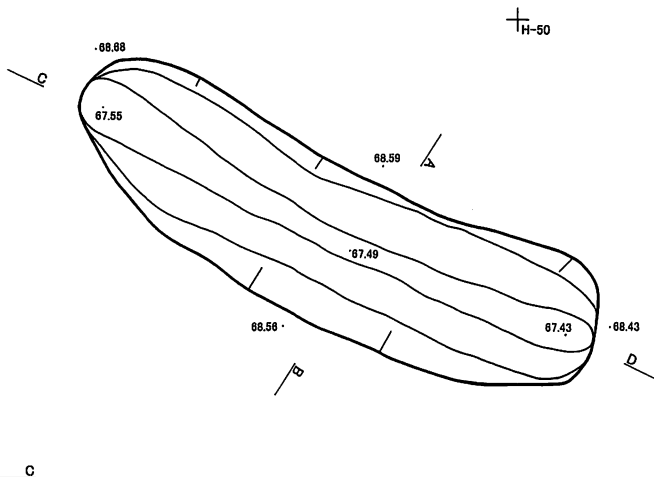


- TP-2の土層
- 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまりあり、IV>V
 - 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) IV+V 崩落
 - 3 褐色土 (7.5YR4/4) IV+V Vはブロック状、崩落
 - 4 黒色土 (7.5YR2/1) IV>V やわらかい
 - 5 黒褐色土 (10YR2/2) V>IV IVは斑状、やわらかい
 - 6 黒褐色土 (10YR2/2) V>IV IVは斑状、かたい
 - 7 褐色土 (10YR4/4) IV+V+VI ブロック状
 - 8 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) V主体、崩落
 - 9 黒褐色土 (10YR2/3) IV>V+VI
 - 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V>IV、やわらかい
 - 11 褐色土 (10YR4/4) V主体、やわらかい
 - 12 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) VIの砂質土主体、しまりあり
 - 13 黒褐色土 (10YR3/1) IV>VIの砂質、粘性あり

図III-11 TP-1・2

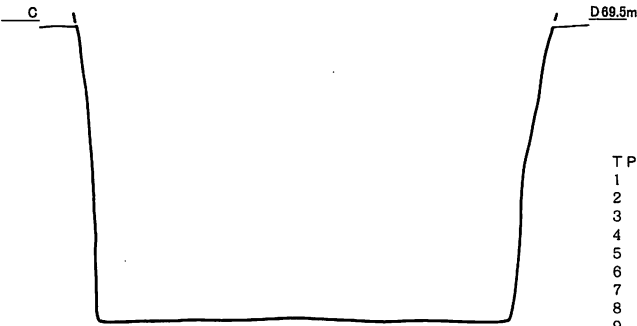
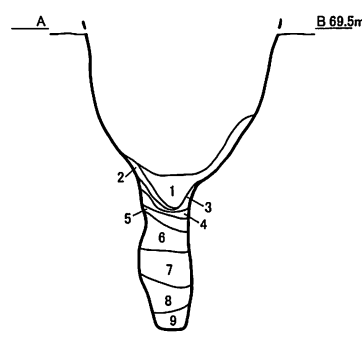
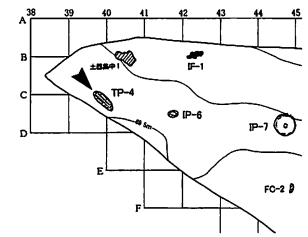
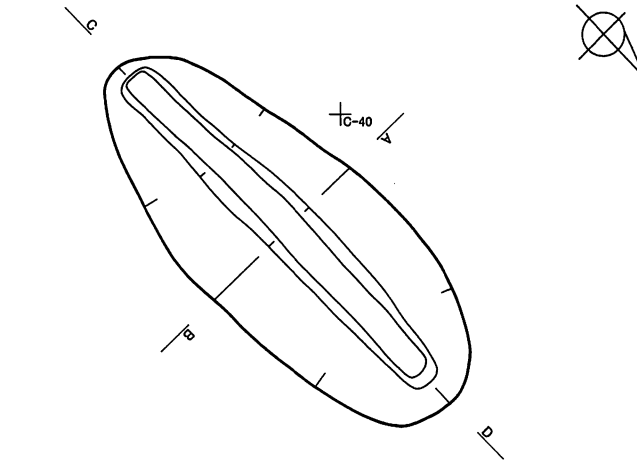
III A地区の調査とその遺物

TP-3



- TP-3の土層
- 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) IV
 - 2 暗褐色土 (10YR3/3) IV > V Vは斑状、しまりあり
 - 3 褐色土 (10YR4/6) V > N 崩落
 - 4 褐色土 (10YR4/4) V > N 掘り揚げ土
 - 5 褐色土 (10YR4/6) V 崩落、しまりあり
 - 6 暗褐色土 (10YR3/4) IV+V かない
 - 7 褐色土 (10YR4/6) V 崩落、やわらかい
 - 8 褐色土 (10YR4/4) V > N、やわらかい
 - 9 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IV 崩落、やわらかい
 - 10 褐色土 (10YR4/4) V+W、崩落
 - 11 暗褐色土 (10YR3/3) IV > V 粘性あり
 - 12 暗褐色土 (10YR3/4) IV+V、ぼそぼそ
 - 13 黒褐色土 (7.5YR2/2) IV > V 粘性あり

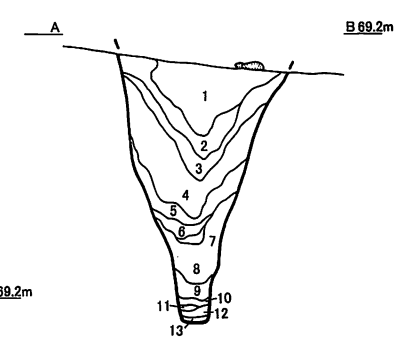
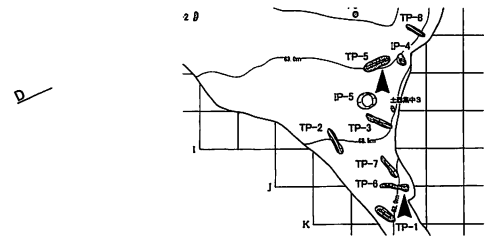
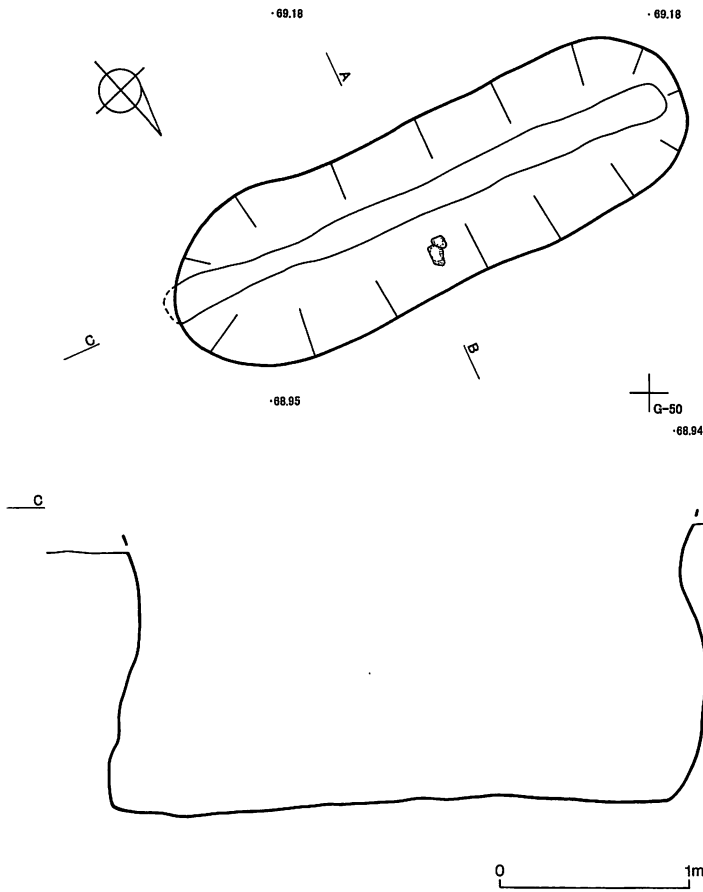
TP-4



- TP-4の土層
- 1 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性中 堅密度堅 パミス (径5mm) 1%含む
 - 2 にぶい黄褐色砂壤土 (10YR 5/4) 粘性弱 堅密度堅 ローム20%含む
 - 3 黄褐色壤土 (10YR 5/6) 粘性中 堅密度軟
 - 4 褐色壤土 (10YR 4/4) 粘性中 堅密度堅 黒色土粒 (径7mm) 1%含む
 - 5 にぶい黄褐色壤土 (10YR 5/4) 粘性中 堅密度堅 黒色土粒 (径5~7mm) 2%含む
 - 6 褐色砂壤土 (10YR 4/6) 粘性弱 堅密度堅 灰白色砂3%含む
 - 7 にぶい黄褐色壤土 (10YR 5/4) 粘性中 堅密度堅 黄褐色ローム粒 (径7mm) 1%含む
 - 8 にぶい黄褐色砂壤土 (10YR 5/4) 粘性弱 堅密度堅
 - 9 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性弱 堅密度堅

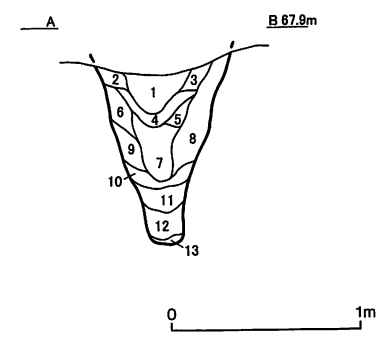
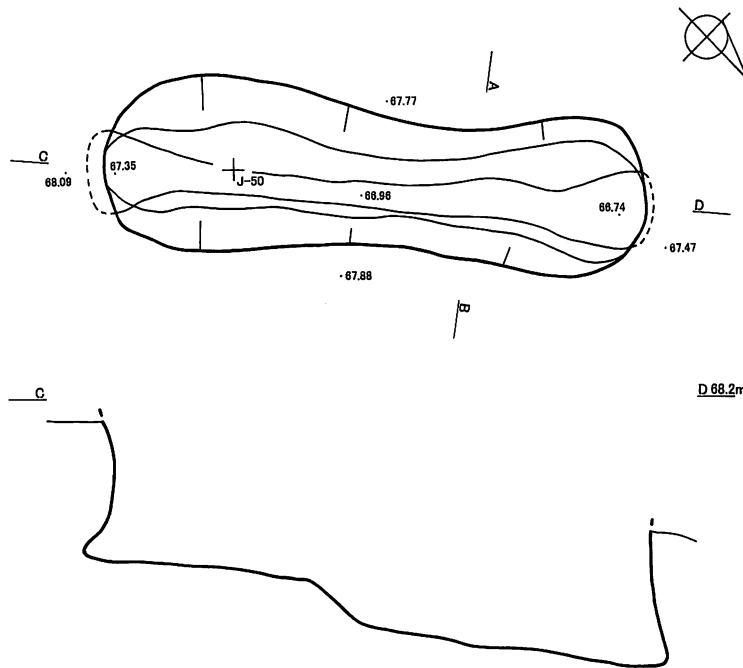
図III-12 TP-3・4

TP-5



- TP-5の土層**
- 1 黒色 (10YR 1.7/1) [IV層] 粘性やや強、しまり強。均質的。
 - 2 黒褐色 (10YR 2/3) [IV層>V層] 粘性やや強、しまり強。黒色土中に不均質にロームが混じる。境界不明瞭。
 - 3 暗褐色～褐色 (10YR 3/3～3/4) [IV層<V層] 粘性中、しまりやや強。不均質。境界不明瞭。
 - 4 黄褐色 (10YR 5/6) [V層+VI層] 粘性やや弱、しまり弱。均質的。
 - 5 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) [VI層] 粘性やや弱、しまりやや弱。やや不均質。
 - 6 黄褐色 (2.5Y 5/6) [VI層砂質ローム] 粘性中、しまり弱。均質的。
 - 7 黒褐色～暗褐色 (10YR 2/2～3/3) [ローム<黒色土] 粘性やや強、しまりなし。黒色土にローム粒が均質的に混じる。
 - 8 6と同様だが、ややしまりあり。
 - 9 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) [VI層砂質ローム] 粘性弱、しまり弱。粒子やや大きい。やや不均質。
 - 10 黄褐色 (10Y 5/6) [VI層ローム] 粘性やや強、しまりやや弱。均質的。
 - 11 9と同様
 - 12 黄褐色 (10Y 5/6) [VI層砂質ローム] 粘性やや強、しまり弱。均質的。
 - 13 黒色 (10Y 2/1) 粘性強、しまりなし。砂粒やや多量含む、ローム粒少量含む。

TP-6



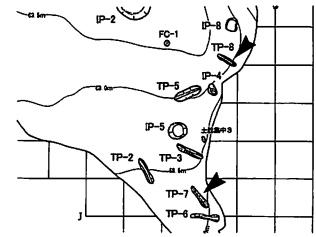
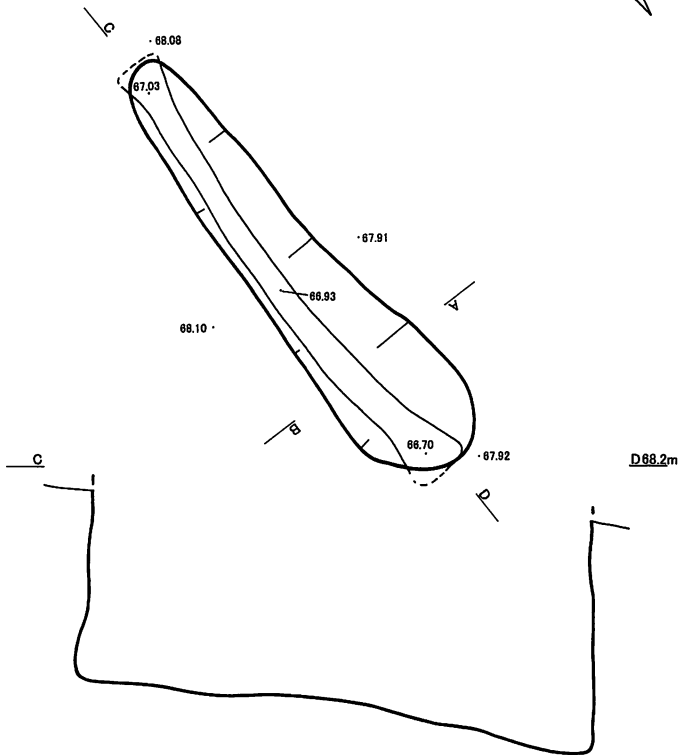
- TP-6の土層**
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) IV
 - 2 黒褐色土 (10YR2/3) III+IV
 - 3 黒褐色土 (10YR2/2) IV>V しまりあり
 - 4 暗褐色土 (10YR3/3) IV+V しまりあり
 - 5 褐色土 (10YR4/6) V 崩落
 - 6 褐色土 (7.5YR4/4) V しまりあり
 - 7 暗褐色土 (7.5YR3/3) V>IV IVはブロック状
 - 8 褐色土 (10YR4/4) V、やわらかい
 - 9 褐色土 (10YR4/4) V≒8 砂質
 - 10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IV>V、Vは斑状、しまりあり
 - 11 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IV+V やわらかい
 - 12 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ≒10 IV>V>IV、しまりあり
 - 13 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ≒11 IV+V 粘性あり

図III-13 TP-5・6

III A地区の調査とその遺物

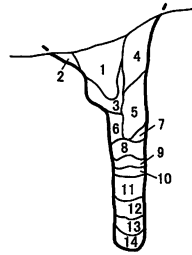
TP-7

F-50



A

B 68.2m



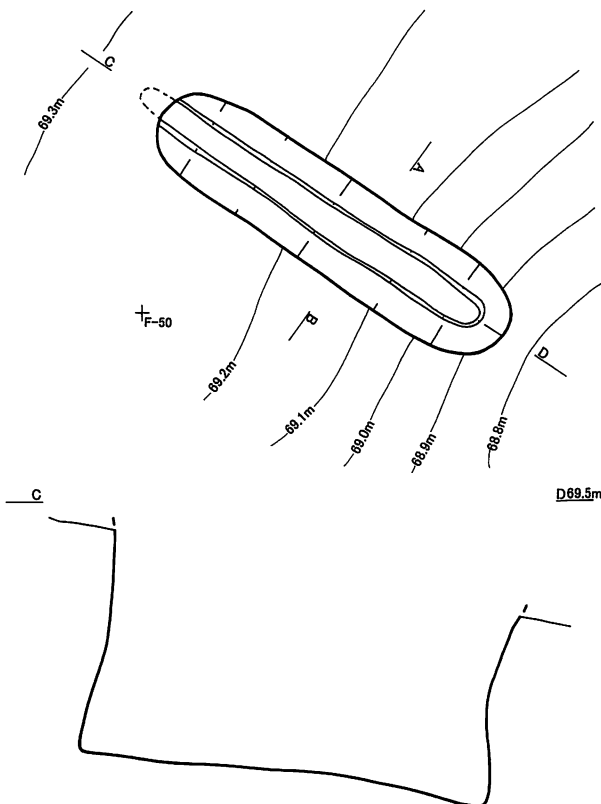
0 1m

TP-7の土層

- 1 黒色土 (10YR1.7/1) IV しまりあり
- 2 極暗褐色土 (7.5YR2/3) IV 木根跡
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) IV+V
- 4 褐色土 (10YR4/4) V 崩落
- 5 褐色土 (10YR4/4) V>VI やわらかい
- 6 暗褐色土 (10YR3/4) V>IV しまりあり
- 7 褐色土 (10YR4/6) V 砂質
- 8 黒褐色土 (10YR2/3) IV>V Vはブロック状
- 9 黄褐色土 (10YR5/6) V やわらかい
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) VI 崩落
- 11 褐色土 (10YR4/4) V ぼそぼそ
- 12 暗褐色土 (10YR3/3) 与 8 IV+V
- 13 褐色土 (10YR4/6) 与 11 IV+VI 粘性あり
- 14 黒褐色土 (10YR2/3) IV>V 粘性あり

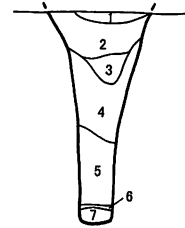
TP-8

F-50



A

B 69.3m



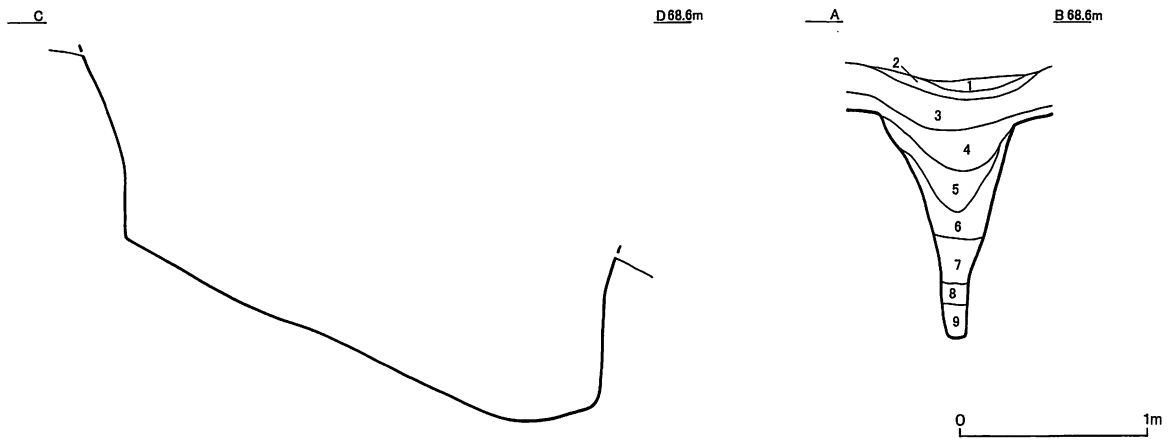
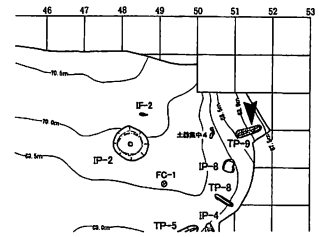
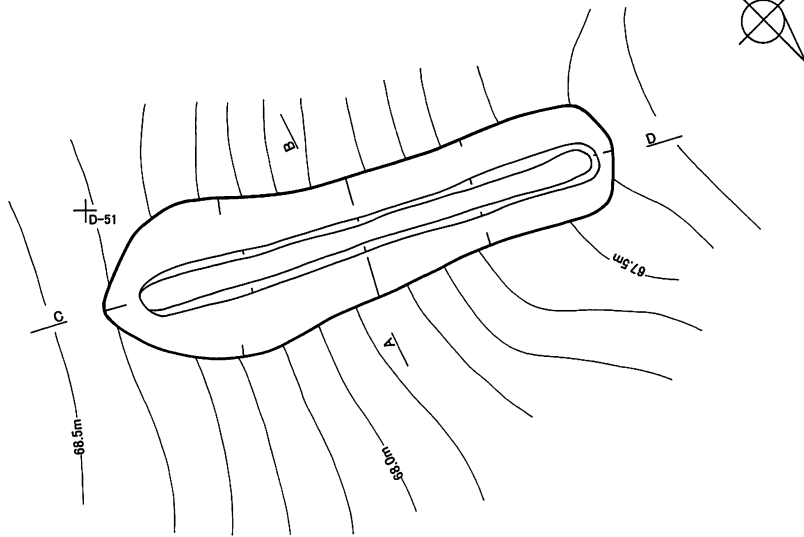
0 1m

TP-8の土層

- 1 黒褐色埴壤土 (10YR 2/3) 粘性中 堅密度堅 基本層序III層に相当
- 2 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅 基本層序IV層に相当
- 3 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅
- 4 褐色埴土 (10YR 4/4) 粘性弱 堅密度軟 黒褐色土 15%含む
- 5 オリーブ褐色砂壤土 (2.5Y 4/6) 粘性中 堅密度軟 ほぼ純粋なVI層土
- 6 黒褐色埴壤土 (10YR 2/2) 粘性中 堅密度堅
- 7 オリーブ褐色砂壤土 (2.5Y 4/4) 粘性弱 堅密度軟

図III-14 TP-7・8

TP-9



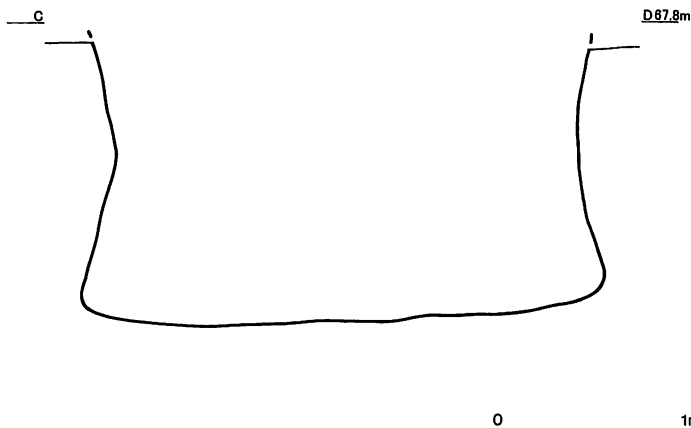
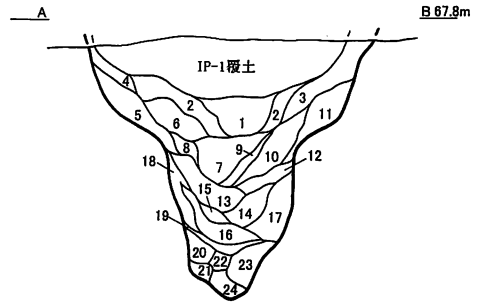
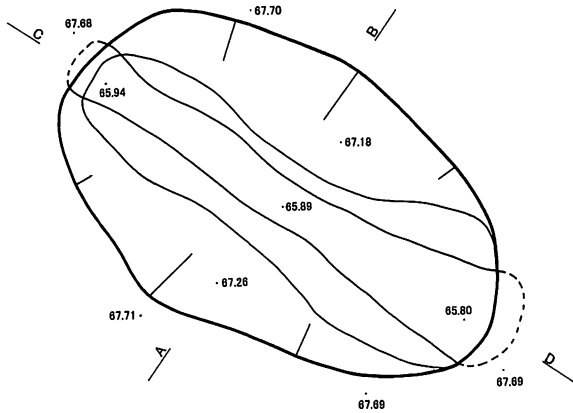
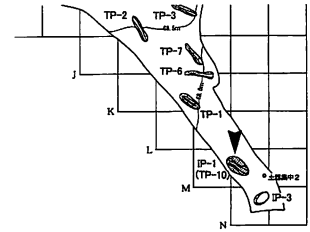
TP-9の土層

- 1 灰黄褐色シルト質壤土 (10YR 4/2) 粘性弱 堅密度軟
- 2 黒褐色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅 基本層序Ⅲ層に相当
- 3 黒褐色埴壤土 (10YR 2/3) 粘性中 堅密度堅 基本層序Ⅲ層に相当
- 4 黒色埴壤土 (10YR 2/1) 粘性中 堅密度堅 基本層序Ⅳ層に相当
- 5 黒褐色埴壤土 (10YR 2/3) 粘性中 堅密度軟 ローム地20%含む
- 6 暗褐色壤土 (10YR 3/4) 粘性中 堅密度軟 ローム15%含む
- 7 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性中 堅密度軟 黒褐色土2%含む
- 8 黒褐色埴壤土 (10YR 3/2) 粘性中 堅密度しょう ローム粒(径10mm)5%含む
- 9 褐色壤土 (10YR 4/6) 粘性中 堅密度軟 暗褐色土10%含む

Ⅲ-15 TP-9

TP-10

L-51



- TP-10の土層
- 1 黒褐色土 (7.5YR2/3) N+V>M かたくしまる
 - 2 極暗褐色土 (7.5YR2/3) N+V>M
 - 3 暗褐色土 (10YR3/4) V>N やわらかい
 - 4 褐色土 (10YR3/3) V+N やわらかい
 - 5 褐色土 (10YR4/4) V>N Vの崩落
 - 6 黒色土 (10YR2/1) N+V ブロック状
 - 7 暗褐色土 (10YR3/3) N+V 硬い
 - 8 褐色土 (10YR3/4) V>N しまりあり
 - 9 褐色土 (10YR3/4) N 8 やわらかい
 - 10 褐色土 (10YR4/4) V
 - 11 黄褐色土 (10YR5/6) V+M 崩落
 - 12 明褐色土 (7.5YR5/8) V 硬い
 - 13 褐色土 (10YR4/4) N+V ブロック状
 - 14 明褐色土 (7.5YR5/5) V>N やわらかい
 - 15 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) M 粘質
 - 16 暗褐色土 (10YR3/4) V>N やわらかい
 - 17 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) M 砂質
 - 18 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) M 砂質+粘土質がブロック状に入る
 - 19 暗褐色土 (10YR3/3) N+V
 - 20 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) M 砂質
 - 21 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) M 砂質、ふかふか
 - 22 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) M 粘土>砂
 - 23 褐色土 (10YR4/4) V>M粘土>M砂
 - 24 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) M粘土

0 1m

図III-16 TP-10

TP-10 (図III-16、図版9)

位置・立地：L-50・51 標高約68.7mの細い尾根上に位置する。

規模：2.56/2.76×1.6/0.28×1.4m

長軸方向：N-11°-W

平面形：長楕円形

確認・調査：V層上面で長楕円形の黒色土として確認した。短軸方向に断面観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ、土層断面がV字状を呈する土壌であったためTピットと判断した。

覆土：崩落土と自然堆積層の互層である。墳口部にTP-10が埋まった後のくぼみを利用して構築されたIP-1がある。

墳底、壁：墳底はほぼ平坦で、壁は長軸端がオーバーハングしている。崩落が激しく、墳底付近から開き気味となる。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと思われる。

(村田)

(4) 焼土

I F-1 (図III-17、図版10)

位置・立地：A・B-42 高位段丘の標高70.5mほどの緩斜面

規模：1.84×0.74m

平面形：不整形

確認・調査：II層除去後、黒褐色のIII層上面に赤褐色のまとまりを確認した。III層の上位を少し掘り下げたところ、さらに赤褐色の範囲が拡大し、焼土と認定した。わずかに標高の低い北側に1.8×0.8mの範囲で炭化物が斑点状に検出された。長軸方向に半截し断面観察を行った。下部に非常に明度の高い部分があり、上位にやや明度の低いところがある。その境界は波状をなしている。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周辺出土の土器から判断すると、縄文時代晩期後葉に属するものと思われる。(阿部)

I F-2 (図III-17、図版10)

位置・立地：C-48 細い尾根の基部、標高70.3mの緩斜面

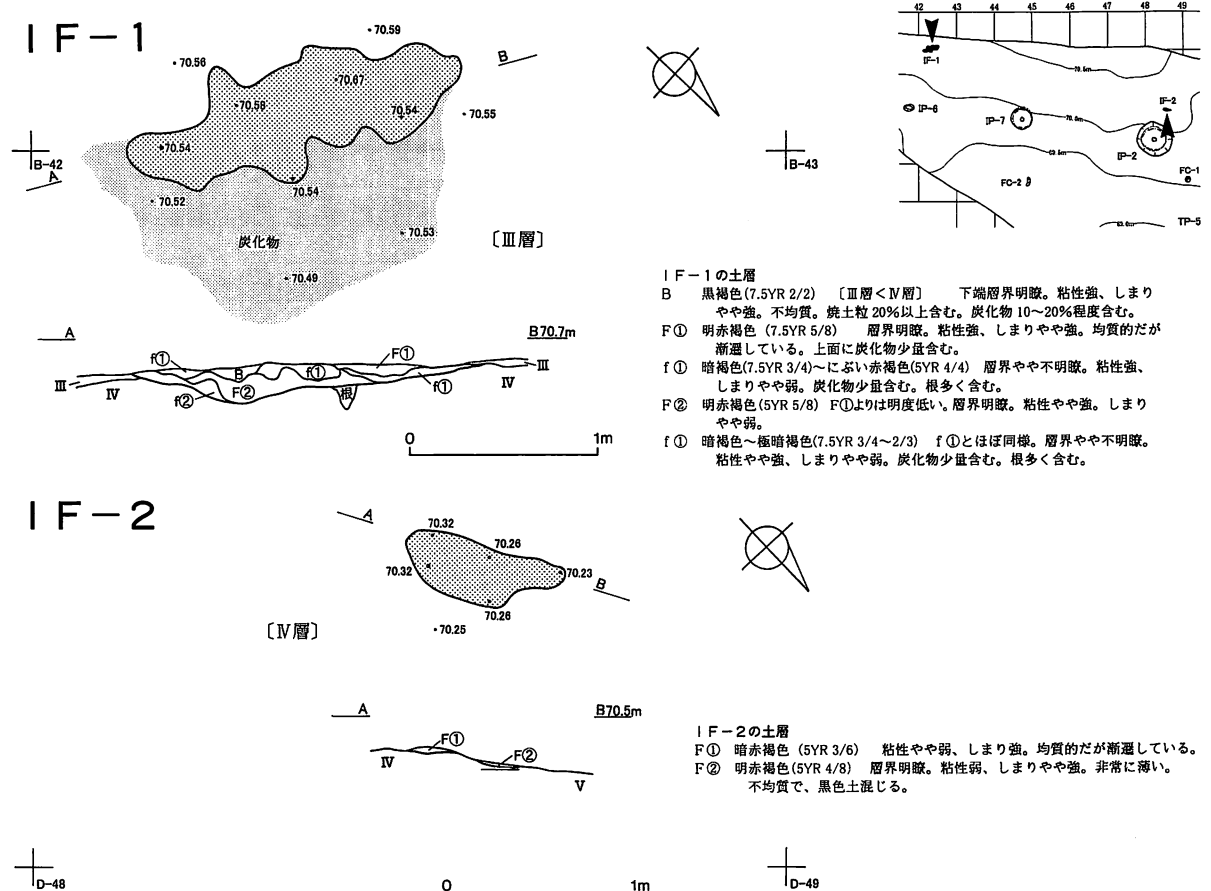
規模：0.86×0.33m

平面形：不整形

確認・調査：V層付近まで掘り下げたところ、赤褐色のまとまりが帯状に確認できた。長軸方向に半截したところ、その断面形が中央部の膨らむレンズ状の赤褐色の部分を確認し、焼土と認定した。範囲は小さくやや不均質で、周囲に炭化物などは確認できなかった。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周辺出土の土器から判断すると、縄文時代晩期後葉に属するものと思われる。(阿部)



図III-17 IF-1・2

(5) 土器集中**土器集中1** (図III-18~20、図版10・13・14)

位置・立地：B-40 高位段丘の標高70.5mほどの緩斜面

規模：2.3m×1.3m

確認・調査：Ⅲ層調査中に土器が2m以上の範囲でまとまって出土した。この土器集中の北東側に風倒木痕が存在し、その南西縁辺に沿って位置する。遺物はⅢ層中に埋没し、廃棄が行われた生活面はⅢ層下位又はⅣ層上面である。土器集中の範囲を確定し、写真撮影と遺物出土状況図を作成した。続いて土器集中と風倒木痕との新旧関係を確認するため、土器集中と風倒木痕を横断するトレンチを設定した。断面観察の結果、風倒木痕が形成された後、土器集中が形成されたことが判明した。また、土器集中下位には何らかの遺構が存在する可能性を予想していたが、掘り込みは確認できなかった。

遺物出土状況：聖山Ⅱ式の土器が小破片を含めて3448点出土している。土圧などの原因で自然に割れたものか、意図的に破碎されたものかは不明である。

時期：出土土器が聖山Ⅱ式であることから、縄文時代晩期後葉である。 (石井)

掲載遺物：土器 1~10は縄文時代晩期後葉の聖山Ⅱ式に属する。器種は大型深鉢(9)・深鉢(1・8・10)・鉢(3~7)などがあり、2は深鉢か広口壺の胴部片である。器壁は薄く、特に深鉢は5mm以下の厚さである。主な文様要素は、幅広の浅い平行沈線(1・4~10)・工字文(2~5・8)・口縁下の連続する三角形突起(1・4・5・8~10)である。地文は細かい節のLRまたはRL縄文が密に施されている。出土した土器破片は幅3~4cmほどの帯状に接合したものが多く、土器製作時における粘土紐の輪積みの跡が推測できる(1・9・10など)。多くの小破片が接合したものがあり、4は33点、9は143点、10は79点が接合している。

1は切出形口唇上に沈線が施されている。2の工字文は、連繫入組文からの変化の跡を残している。3は口縁~胴部と胴部~底部が接合していないが、胴部の径などから推定復元した。底部はやや丸みを帯びている。4・6・7は大型の鉢で、内面口唇下に幅広の浅い沈線が施され段が設けられている。4の口縁の突起は、4単位の対向するA状突起とその間にそれぞれB状突起が2カ所ずつあり、複雑な口縁になっている。6・7は同一個体で、7の大型突起と6のB状突起が配置されている口縁で、その間にも小さな突起がついている。5の胴部の突起は同一の列上にない。9は平縁に突起が付き、内面口縁下に幅広の浅い沈線が施されている。10の胴部突起は一部が剥落しており、地文のLR縄文が現れている。 (阿部)

土器集中2 (図III-21、図版11・15)

位置・立地：L-51 標高約67mの細い尾根上縁辺部に位置する。

規模：0.5×0.36m

確認・調査：Ⅳ層調査中に土器がまとまって出土した。

遺物出土状況：1個体がつぶれた状態で出土した。破片は細かく破碎している。近接するIP-1・3との関係は明確にはできなかった。

時期：出土した土器から判断すると、縄文時代中期後半である。 (村田)

掲載遺物：土器 1は縄文時代中期後半の榎林式の大深鉢。277点の破片が接合したほか、復元の際に残片としたものが多数ある。口縁~胴部と胴部~底部が接合していないが、胴部の径などから推定復元した。全体的に色調が明るい。器壁はやや厚みがある。口縁は平縁に4カ所の波頂部があり、外反する。頸部のくびれは強く、胴部が膨らむ。底部は上げ底で、張り出しは弱い。やや間隔のあいた

絡条体を縦位に回転して地文としている。口縁下に2条の平行沈線、胴部に渦文をえがき、それらを連繋する横走・縦走沈線がえがかれている。(阿部)

土器集中3 (図Ⅲ-22、図版11・15)

位置・立地：G-50 標高約68.3~68.8mの細い尾根上縁辺部に位置する。

規模：0.95×0.84m

確認・調査：Ⅳ層調査中に土器がまとまって出土した。

遺物出土状況：3カ所のまとまりが見られる。破片は細かく破碎している。

時期：出土した土器から判断すると、縄文時代晩期後葉である。(村田)

掲載遺物：土器 すべて聖山Ⅱ式である。鉢(1)、深鉢(2)、広口壺(3)を図示した。節の細かいRL縄文が密に施されている。胎土や色調は同様に、細かい砂粒を多く含み明褐色を呈している。1は口唇直下で外反し、切出状の口唇となっている。口唇上の小突起の剥落跡が数カ所観察できる。2は器壁が3mm前後で特に薄い。底面が平坦である。3は胴部上位に最大径をもち、口唇下で鋭くくびれて外反する。内面口唇下に浅い沈線が施されている。くびれ下に3条の平行沈線がえがかれ、小型の貼瘤が付されている。(阿部)

土器集中4 (図Ⅲ-23、図版11・15)

位置・立地：C・D-50 細い尾根の縁辺部、石倉川に臨む標高69.2m前後の斜面

規模：1.2×0.5m

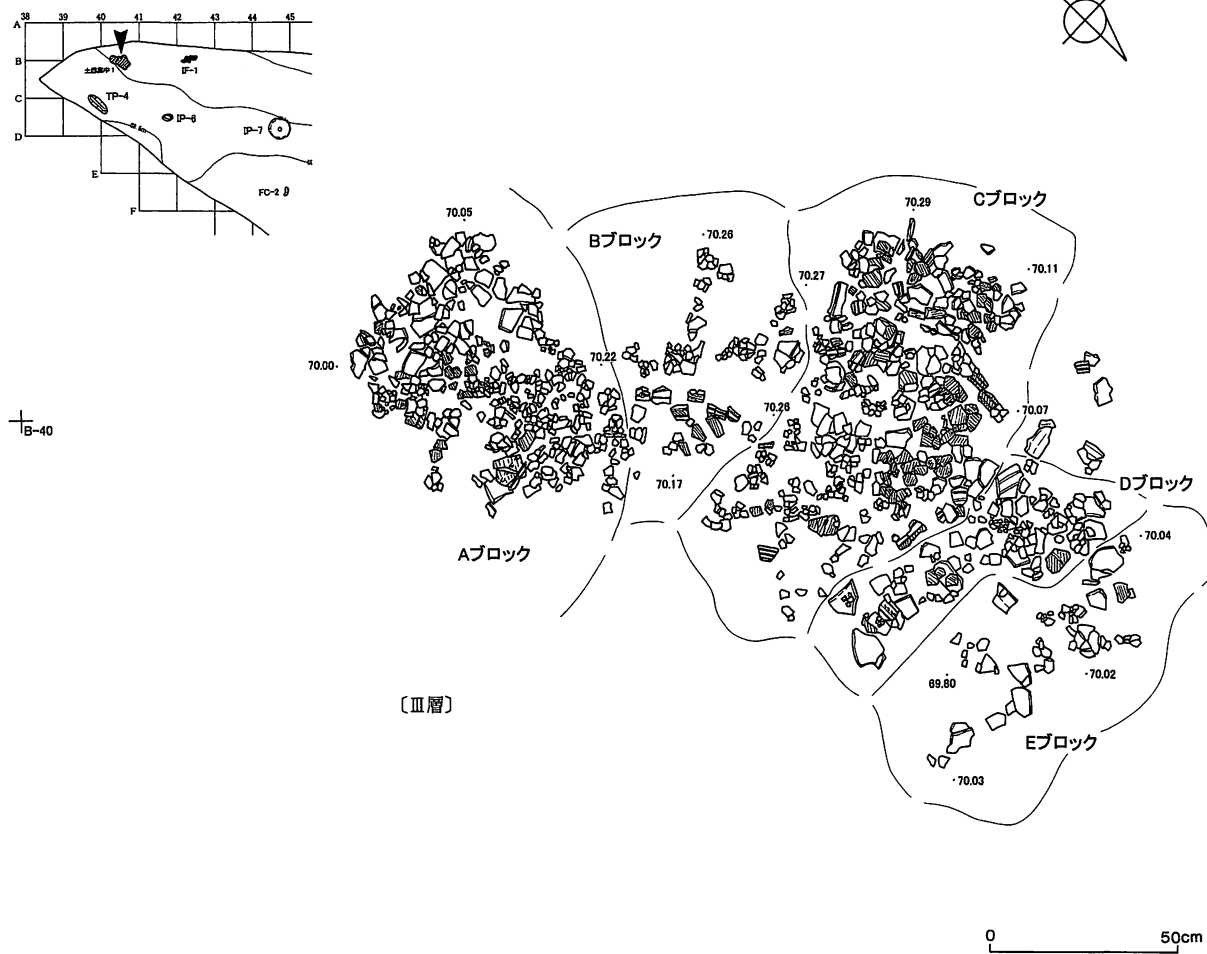
確認・調査：Ⅳ層を掘り下げ中、土器がまとまって出土する範囲を確認した。尾根の基部から石倉川への急斜面に差しかかる縁辺部から約25cmの高低差をもって出土した。

遺物出土状況：聖山Ⅱ式の土器破片134点が出土した。南北2つのまとまりがあるが、他の土器集中と比較して密ではない。土器破片は細かく破碎しているものが多い。意図的に破碎されたものと考えられる。

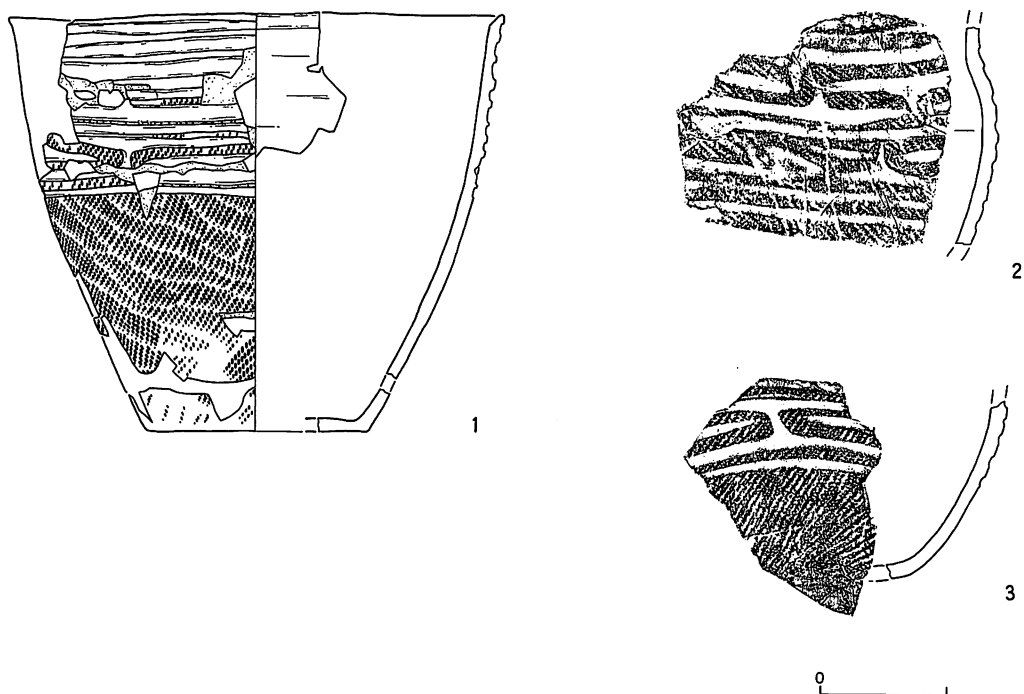
時期：出土土器から判断して、縄文時代晩期後葉である。

掲載遺物：土器 1~3は縄文時代晩期後葉の聖山Ⅱ式に属する。ただし、連繋入組文が変化した跡が見られ、聖山Ⅰ式の要素を残している。1は胴部が「く」の字に屈曲する壺。口頸部は欠損しているが、無文の頸部破片がある。底部は大きく、平坦である。胴部上半に地文および文様を施し、下半は無文で工具により磨かれている。太い沈線で工字文を浮き立たせているが、一部曲線的に沈線がえがかれて入組み状になっている。2は鉢の胴下部。浅い太沈線で工字文を浮き立たせているが、やや曲線的である。内面調整はていねいである。3は弱い段をもつ浅鉢。口唇部には変化したA状突起とその間に小型のB状突起が設けられている。肩部には三角形突起と横に2個並ぶ小突起が繰り返し配置されている。胴下部まで平行沈線が施され、工字文を作出している。口唇上および内面口唇下にも沈線が巡っている。(阿部)

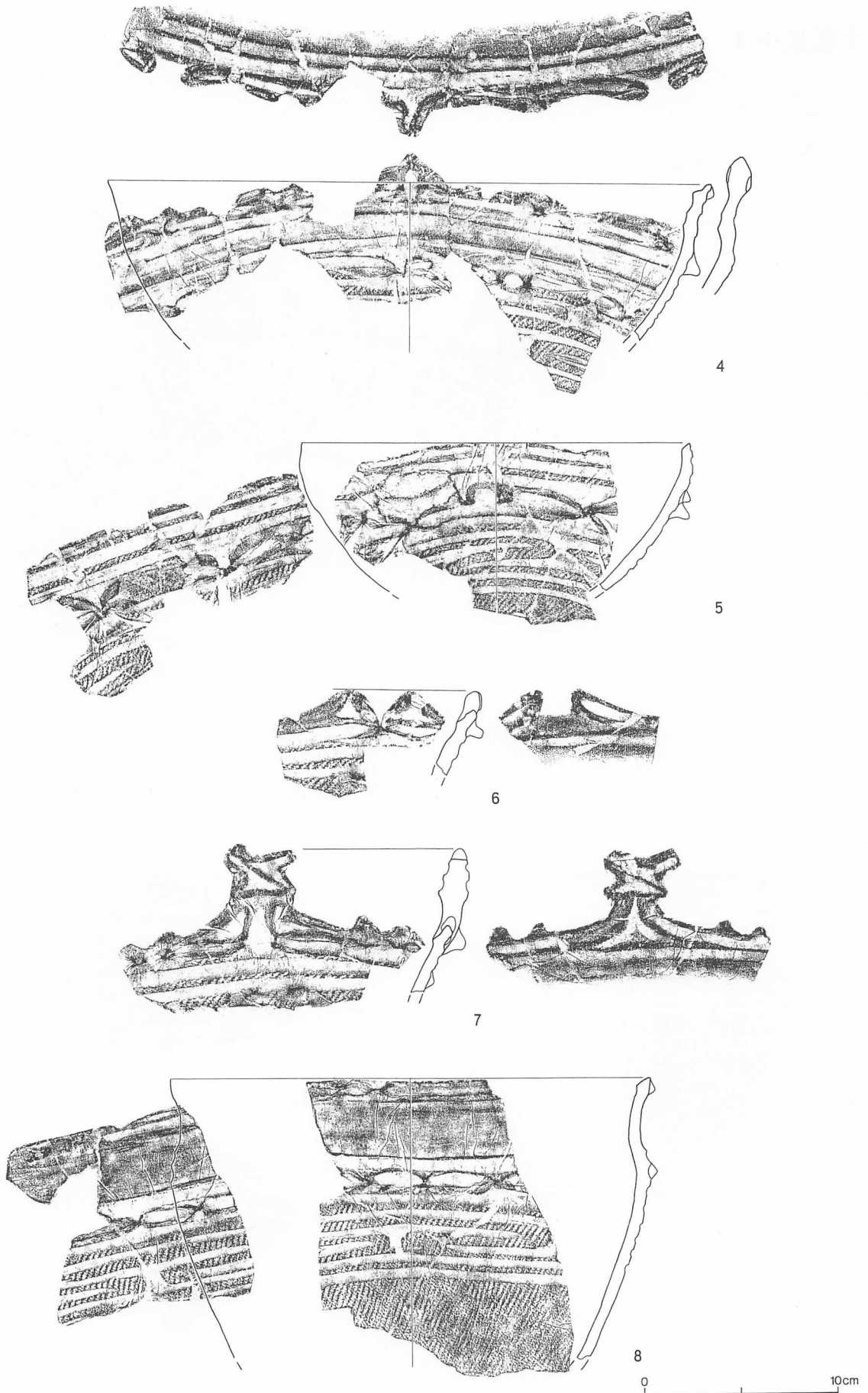
土器集中1



〔III層〕



図III-18 土器集中1・土器集中1出土遺物(1)

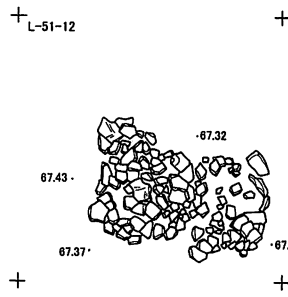
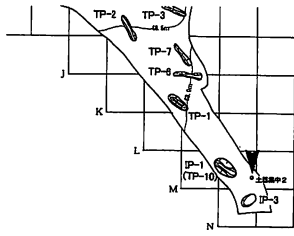


图III-19 土器集中1出土遺物(2)



図III-20 土器集中1出土遺物(3)

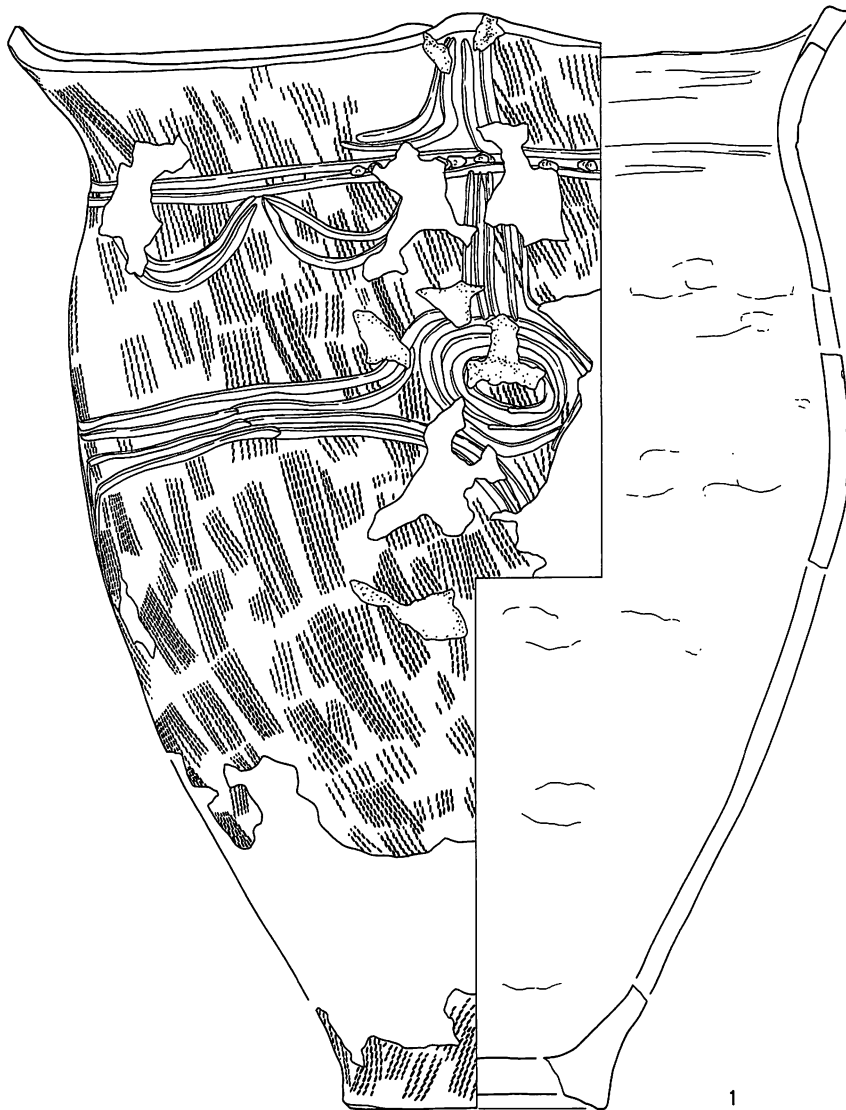
土器集中2



〔IV層〕

M-52

0 50cm

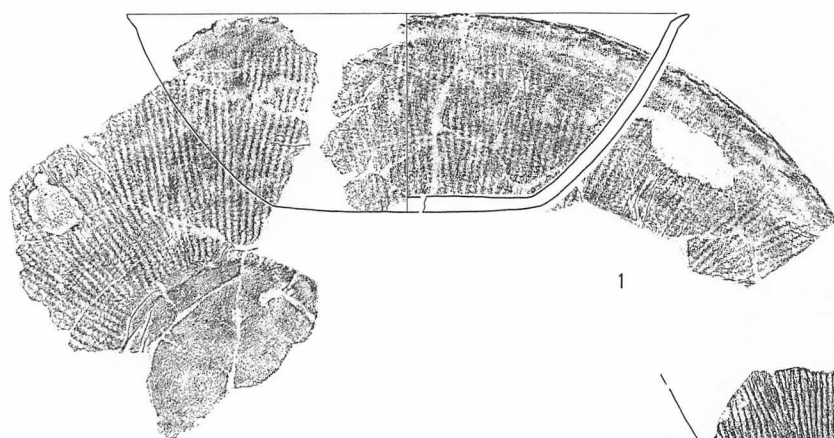
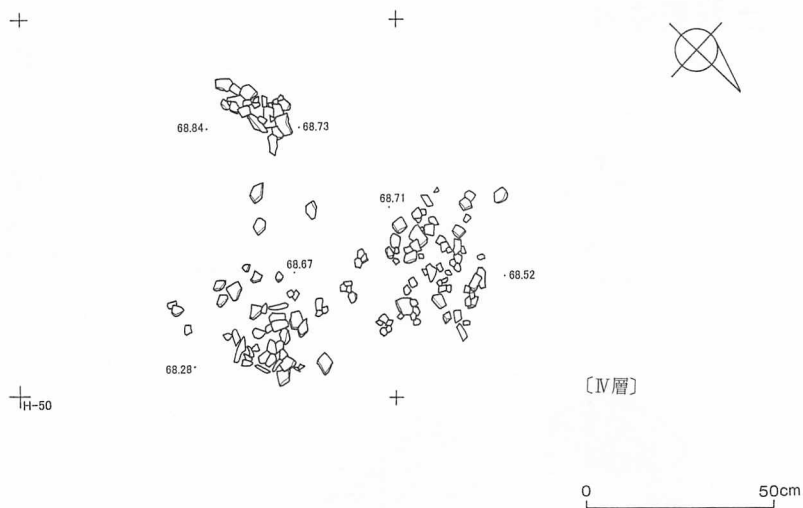
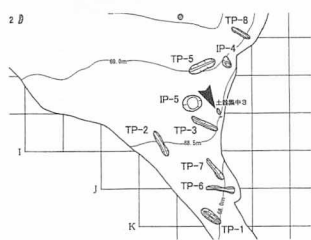


1

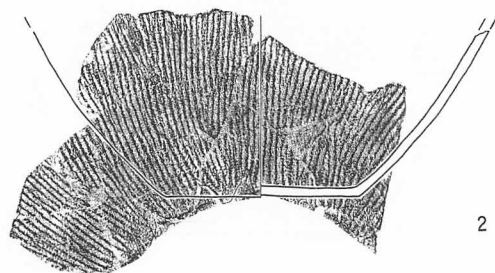
0 10cm

図III-21 土器集中2と出土遺物

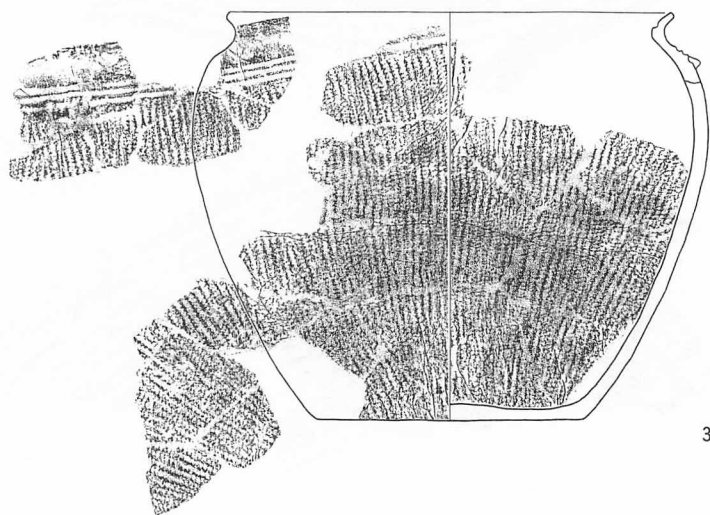
土器集中3



1



2

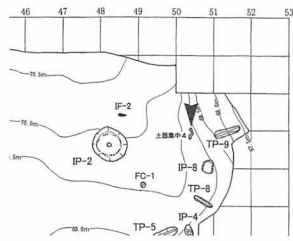


3

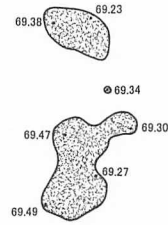


図III-22 土器集中3と出土遺物

土器集中4

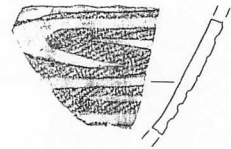
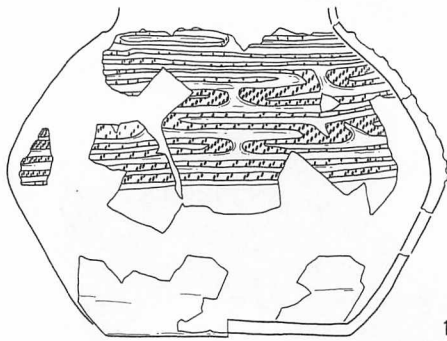


D-50

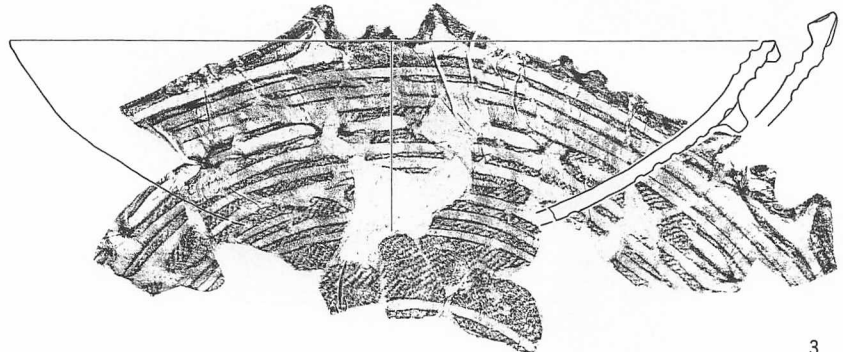


〔IV層〕

0 50cm



2



3

0 10cm

図III-23 土器集中4と出土遺物

(6) フレイクチップ集中

FC-1 (図III-24、図版11)

位置・立地：E-49 細い尾根状の段丘基部、標高69.9m 付近の緩斜面

規模：0.8×0.6m

確認・調査：大型フラスコ状ピット IP-2 の周辺を調査中、III層下位からフレイクチップがまとまって出土した。掘り込みのある遺構を想定し、土層観察用の壁面を残し周辺を掘り下げたが、明確な遺構は検出されなかった。

遺物出土状況：頁岩のフレイク85点が出土した。同一母岩と思われるものが多い。VI層の濁川火砕流堆積物に含まれるものと同様の頁岩であり、土圧などの原因で自然に割れたものか、意図的に破碎されたものかは判然としない。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期または晩期のもと思われる。(阿部)

FC-2 (図III-24、図版11)

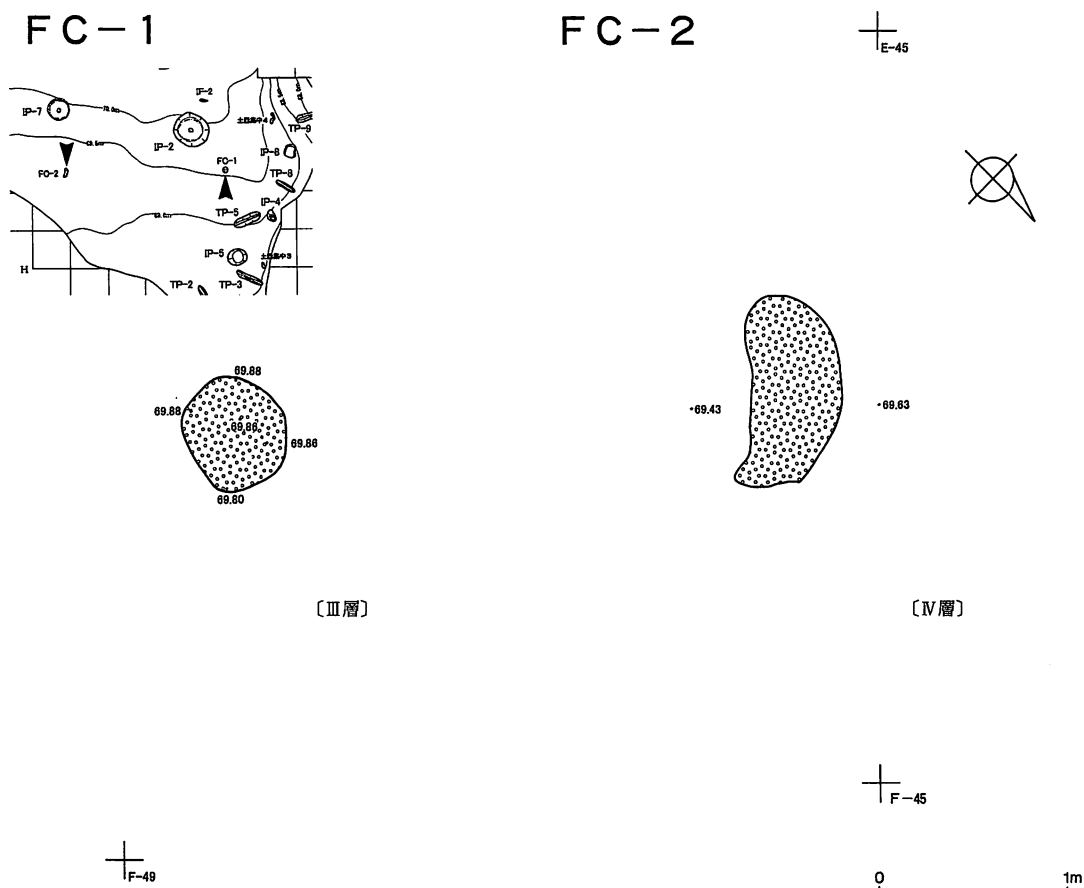
位置・立地：E-44 細い尾根状の段丘基部、標高69.5m 付近の緩斜面

規模：0.8×0.4m

確認・調査：包含層調査中、IV層中からフレイクチップがまとまって出土した。掘り込みのある遺構を想定し、周辺を掘り下げたが、明確な遺構は検出されなかった。

遺物出土状況：頁岩のフレイク62点が出土した。FC-1 と同様である。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期または晩期のもと思われる。(阿部)



図III-24 FC-1・2

3. 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図Ⅳ-25・26、図版16)

分布状況 (図Ⅲ-25)

包含層から951点の土器が出土した。層位別では、Ⅲ層から423点、Ⅳ層から519点、攪乱ほか9点が出土している。分類別では、Ⅲ群b類が430点、Ⅴ群c類が521点である。Ⅲ群b類の大多数は榎林式であるが、貼付隆帯をもつ大安在B式やノグツブⅡ式がわずかに含まれている。Ⅴ群c類は聖山Ⅱ式が大部分であるが、連繫入組文をもつⅤ群b類聖山Ⅰ式の名残がある土器も認められる。

分類ごとに平面分布の濃淡をみると、Ⅲ群b類は調査区北部の尾根上および尾根の基部付近に多い。特に、Tピットや土壌がまとまって検出されたH-48区付近およびJ-49から多く出土している。一方、南部の山側からは4m四方の発掘区につき数点だけ出土しており、全く出土していない発掘区も多い。Ⅴ群c類は調査区中央部から南部、尾根の基部および石倉川に面する斜面縁辺部に多い。土器集中1・3・4付近の発掘区から多く出土しており、B・C-40区、C・D-50区、G-50区がこれにあたる。それ以外では南部の山側、B-46からC-47にかけてと、EからHの47・48区から多い。遺構とは直接関係をもたずに分布しているものが多いと考えられる。

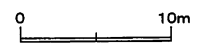
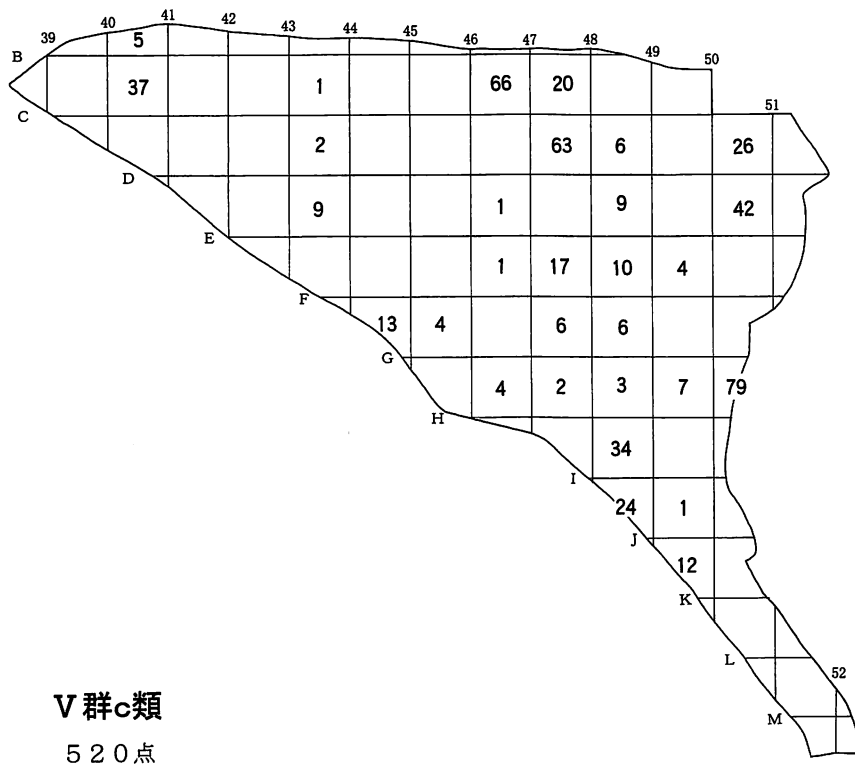
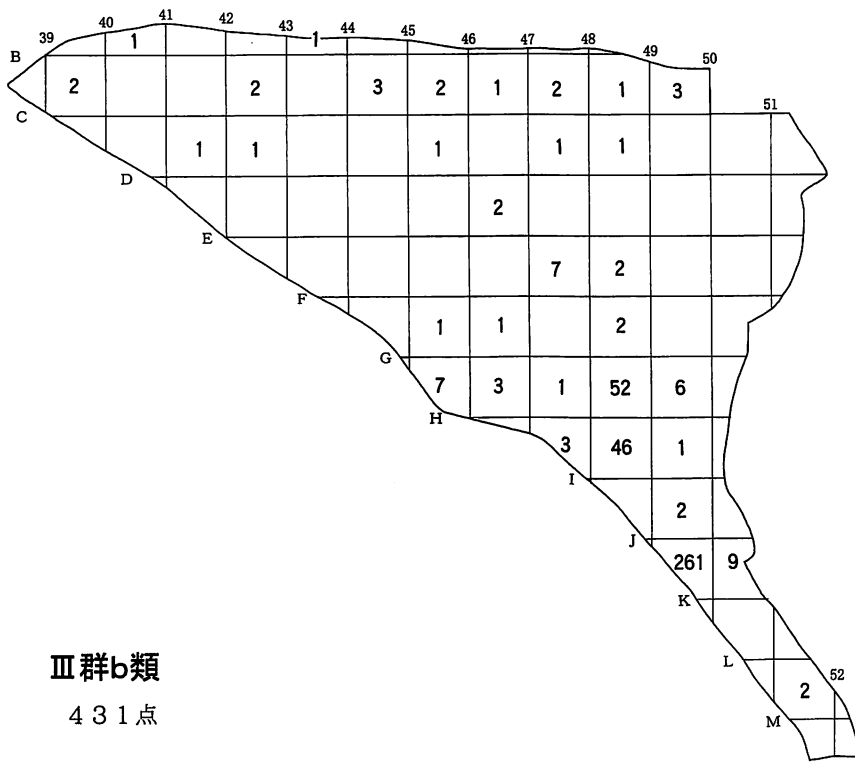
掲載土器 (図Ⅲ-26)

1～6は縄文時代中期後半の榎林式、7～15は晩期後葉の聖山Ⅱ式に属する。

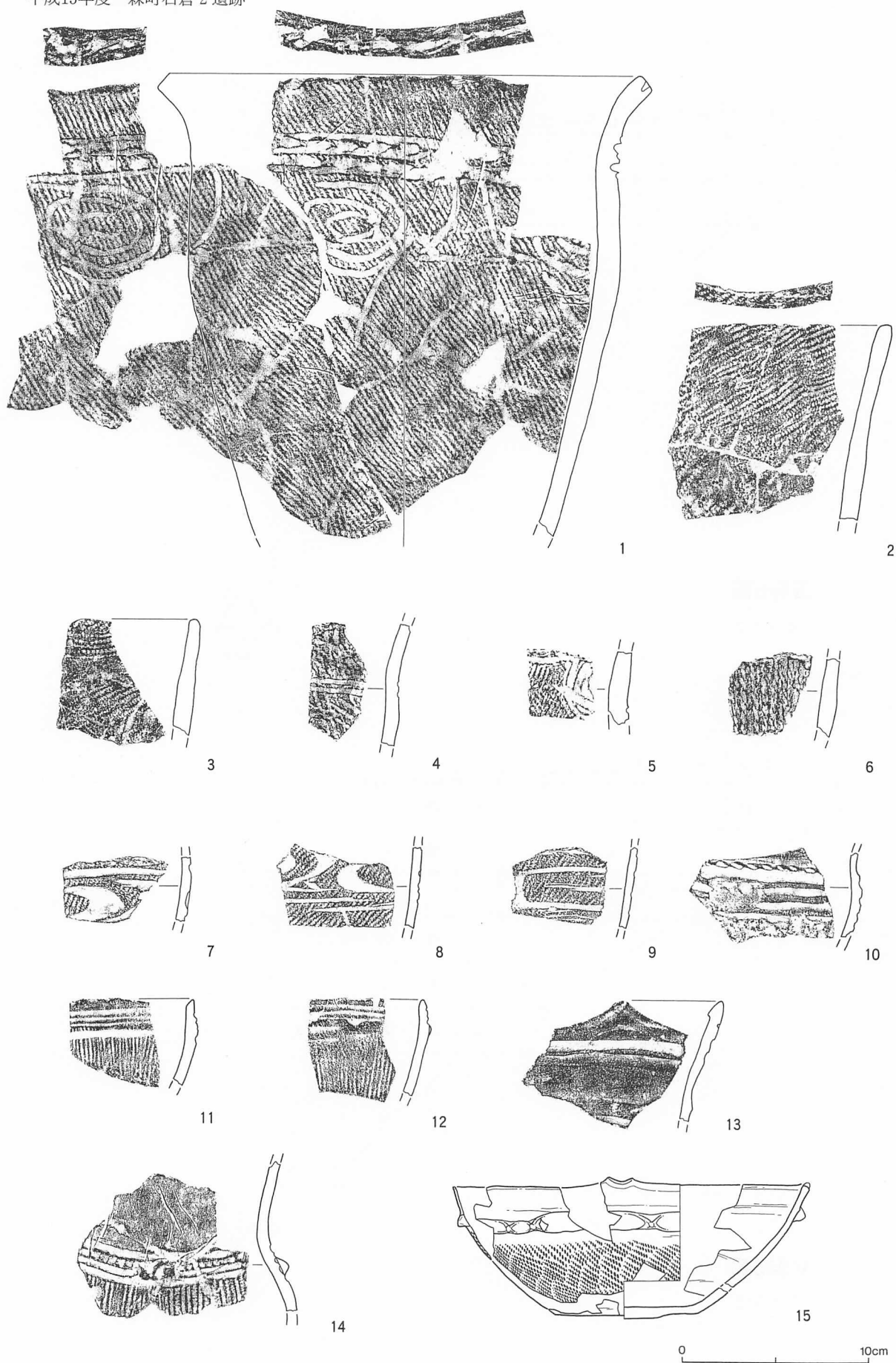
1は細い尾根の基部、TP-2・3、IP-5が検出された付近から出土した破片36点が接合したものの。器壁が厚く12mm前後を測る。全面的に赤褐色を呈し、わずかに炭化物が付着している。頸部のくびれは弱く、口縁は外反する。くびれ部に2列と口唇上に連続刺突を施している。くびれ以下には渦文と剣菱文が繰り返しがかれている。2・3は全面縄文地と見られる深鉢の口縁部。2は口唇上にもLR縄文が施文されている。4は小型の深鉢の胴くびれ部で、捺糸文が多方向に施文されている。5は深鉢の胴くびれ部で平行沈線に接して渦文が施されている。6はやや間隔の広い捺糸文が施文され、渦文の一部とみられる沈線がある。

7・8は連繫入組文の名残があり、陰刻部が広く浅い。9は沈線により工字文が作出されている。10は深鉢の口縁下に弱い段が設けられ、鎖状の文様が作出されている。4条の平行沈線に三角形突起が貼り付けられていた跡が観察できる。内外面とも研磨されている。11・12は同一個体。口縁下に弱い段が設けられ、その上下に平行沈線が施されている。12には張り出さない三角形突起がある。13は口縁に平坦化したA状突起がある。口唇下に浅い沈線がほどこされ、胴部くびれまでの間は無文となっている。14はやや大型の壺の頸部。肩部に平行沈線と連続刺突が施され、S字状の貼瘤が付されている。頸部は無文で磨かれている。15は調査区南部山側のB-46区付近のⅢ層中からある程度まとまって出土した。31点が接合している。やや丸みを帯びた底面をもつ鉢。平縁の口唇に小型のB状突起があり、内面口唇下には浅い溝が設けられている。外面口唇直下は無文で、その下に浅い沈線で2本の微隆線状の文様を浮き立たせている。また三角形突起と横に2個並ぶ小型の突起を一つの単位とするものが繰り返し配されている。

(阿部)



図III-25 A地区包含層出土土器分布図



図III-26 A地区包含層出土の土器

(2) 石器等

出土状況 (図Ⅲ-27・28、図版16・17)

包含層からは406点の石器等が出土した。層位別ではⅢ層から76点、Ⅳ層からは326点である。大半がフレイクである。他に剥片石器11点、磨製石器5点、礫石器11点、礫41点である。小破片が多く図示できるものは少ない。平面の分布状態は、フレイク集中が検出された調査区中央付近で密になっている。

石鏃 (図Ⅲ-29-1~3)

4点出土した。1~3は有茎のもの。石材は1・2が頁岩、3は黒曜石である。

スクレイパー (図Ⅲ-29-4~6)

6点出土した。4は両面から刃部の調整が施されたもの。5は両側縁に刃部を持つもの。6は端部がエンドスクレイパー状に加工が施されている。原石面が一部残っているが、石材の節理などのため除去できなかつたと考えられる。いずれも頁岩製。

たたき石 (図Ⅲ-29-7・8)

2点出土した。7は棒状礫の端部に敲打痕があるもの。8は両面の平坦面に敲打痕があるもの。片側は明瞭でくぼんでいる。

すり石 (図Ⅲ-29-9・10)

4点出土した。9は軽石製で全面に擦痕がある。10は棒状礫の平坦面をたたき石として使用した後に、同じ面をすり面として使用したものである。

扁平打製石器 (図Ⅲ-29-11)

図示した1点が出土した。縁辺部を打ち欠いた粗い調整である。

扁平打製石器原材 (図Ⅲ-30-12・13)

扁平礫の縁辺部、特に両端に打ち欠きによる調整が加えられたもので、未使用である。機能部になるとされる縁辺には加工が加えられていない。11の扁平打製石器と共に、3点がまとめて出土した。

砥石 (図Ⅲ-30-14)

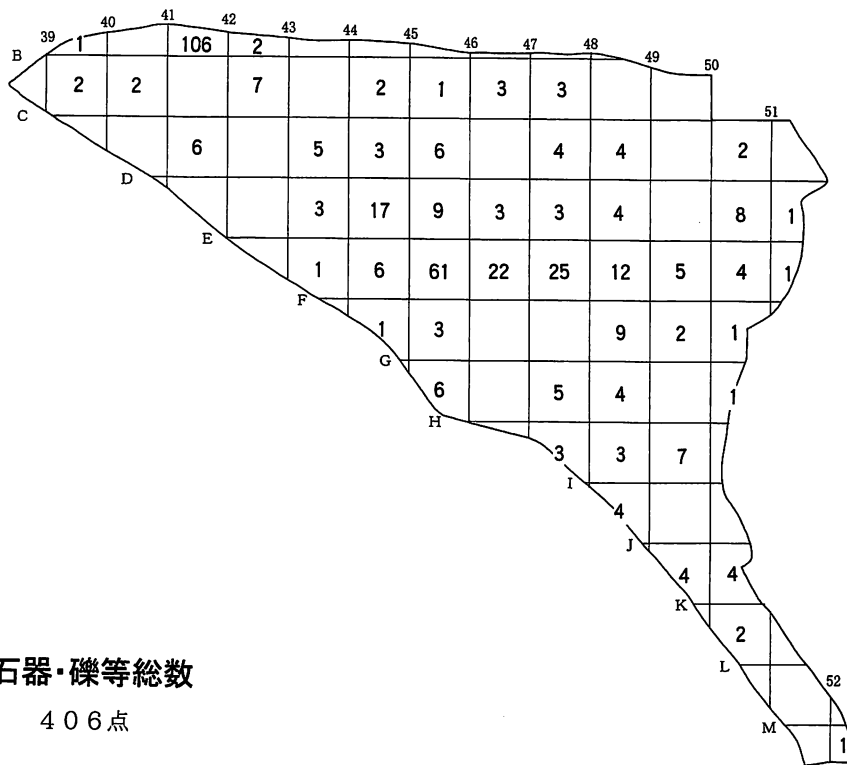
安山岩の礫を板状に剝離し、周辺に打ち欠きの調整を加えている。両面に砥面が認められる。

有孔自然礫 (図Ⅲ-30-15・16)

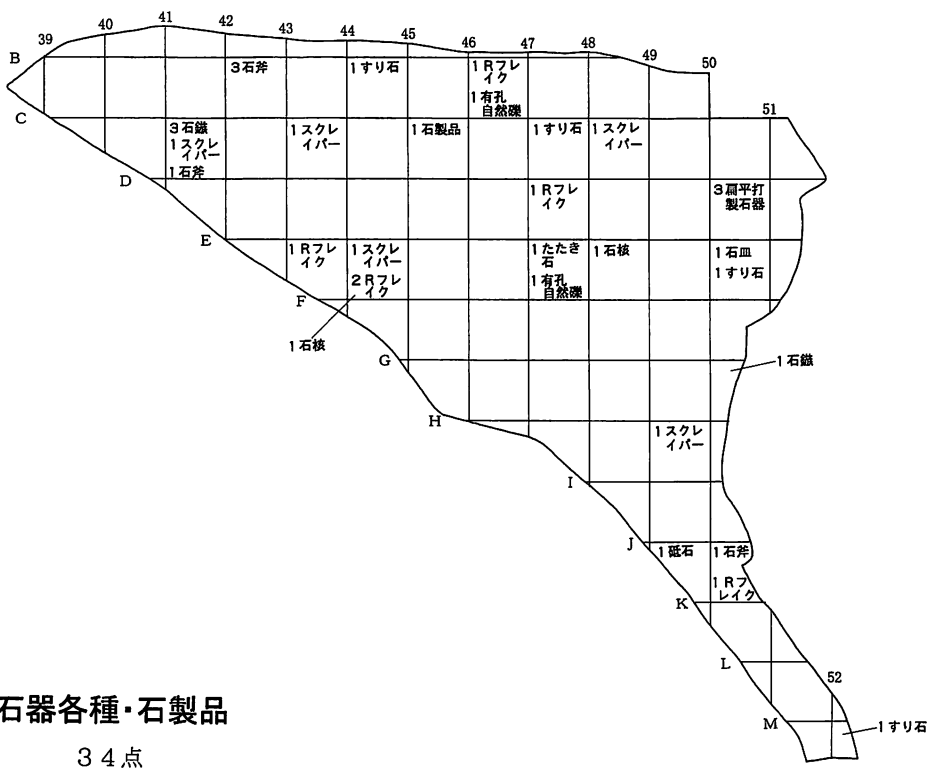
いわゆる虫喰い石と称される凝灰岩の礫である。孔部に紐擦れなどの擦痕は観察されない。B地区においては竪穴住居跡から出土する例があるので図示した。

石製品 (図Ⅲ-30-15)

軽石製で全面に擦痕が見られるもの。すり石の可能性もあるが、溝状の加工や形態から石製品に分類した。(村田)



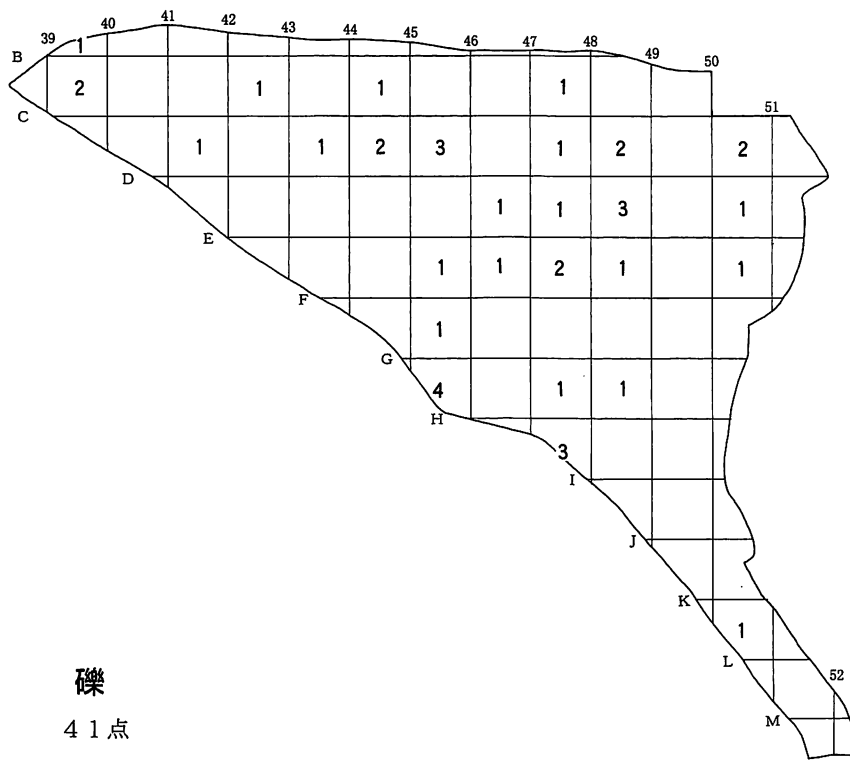
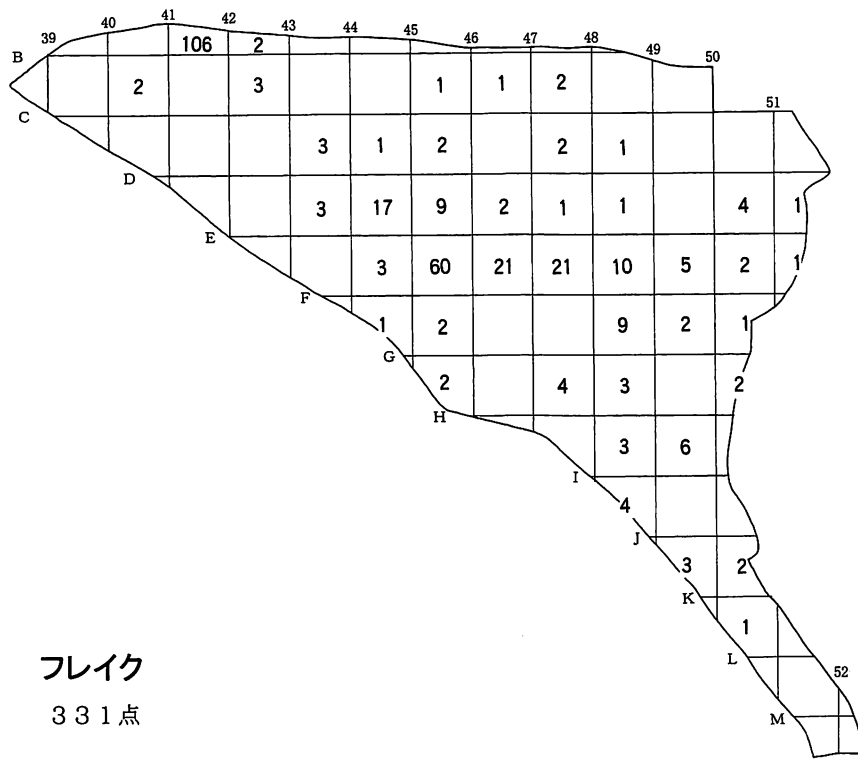
石器・礫等総数
406点



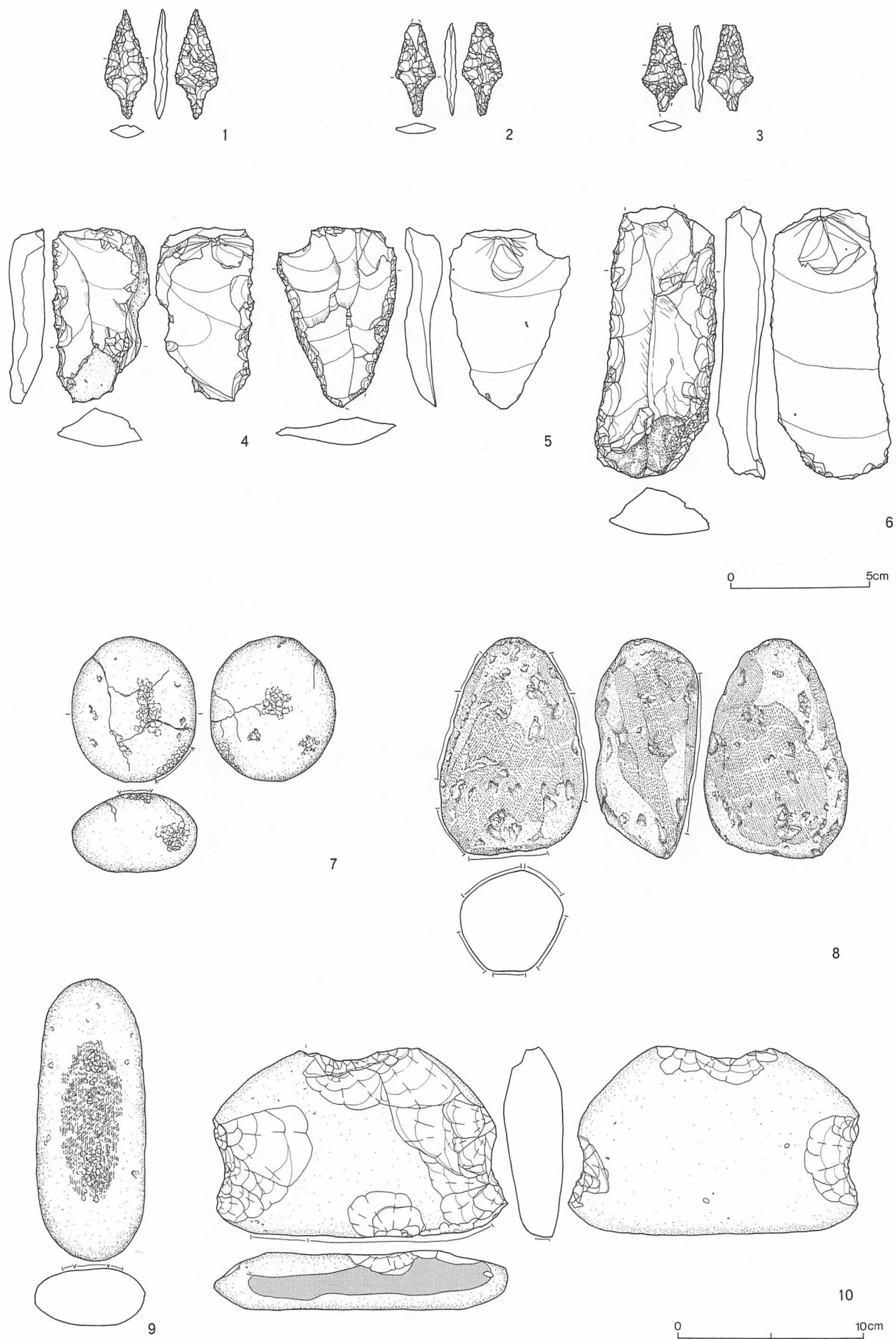
石器各種・石製品
34点



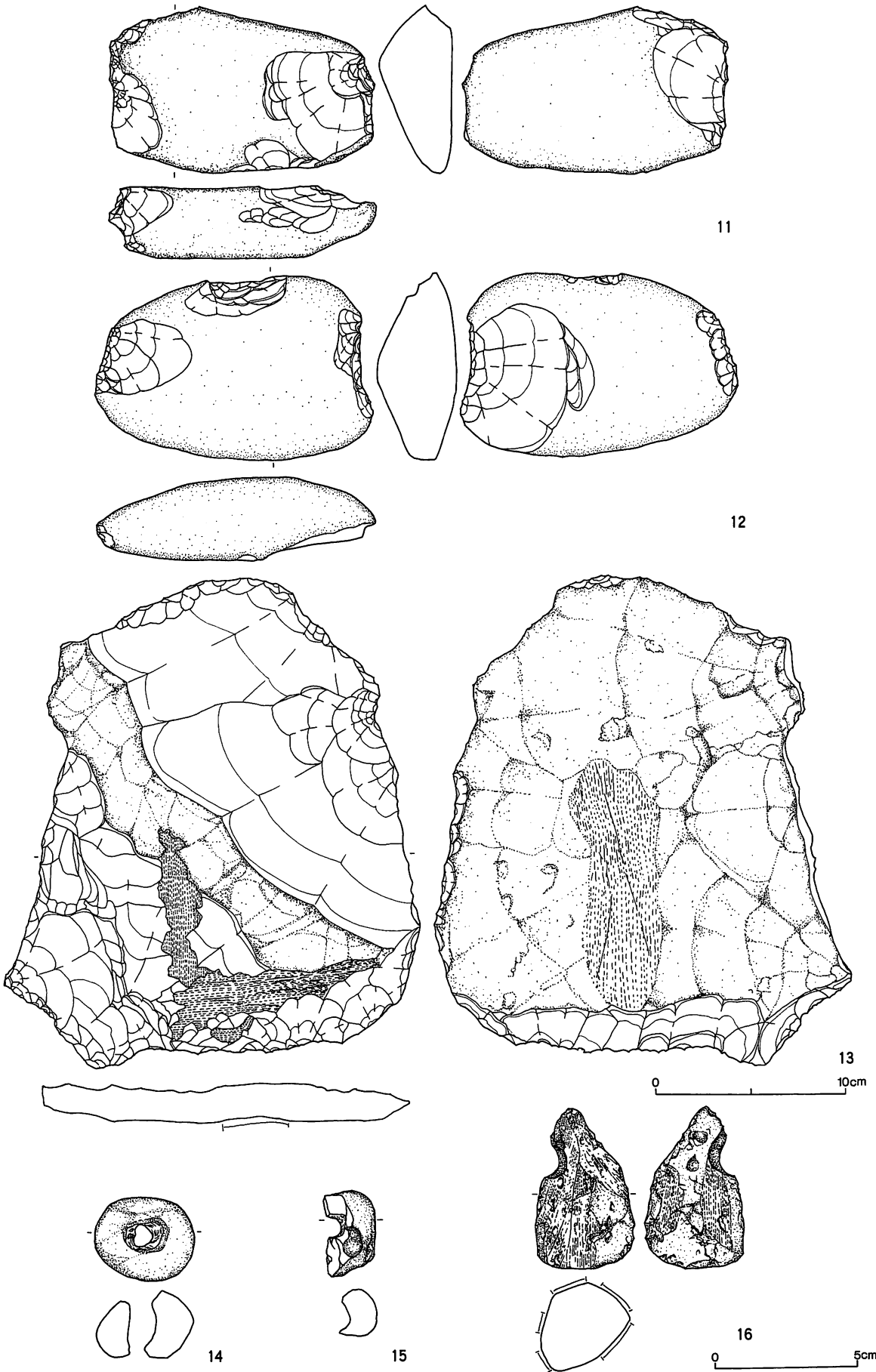
図III-27 A地区包含層出土石器分布図(1)



図III-28 A地区包含層出土石器分布図(2)



図Ⅲ-29 A地区包含層出土の石器(1)



図III-30 A地区包含層出土の石器(2)

表Ⅲ-1 A地区遺構規模一覧

遺構名	発掘区	規模			形状	長軸方位	備考 (時期など)
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)			
		確認面/底面	確認面/底面				
IP-1	L-50・51	2.56 / 1.96	1.32 / 0.8	0.32	楕円形	N-11°W	
IP-2	C・D-47・48	3.68 / 2.58	3.32 / 2.55	1.88	ほぼ円形	N-11°W	縄文時代中期後半?
IP-3	L-51	1.72 / 1.44	1.36 / 0.64	1.08	楕円形	N-8°E	
IP-4	G-50	1.30 / 0.69	0.75 / 0.49	0.31	不整楕円形	N-12°E	
IP-5	G-49	2.0 / 1.2	1.68 / 1.2	1.12	楕円形	N-43°W	縄文時代中期後半?
IP-6	G-50	0.93 / 0.63	0.67 / 0.36	0.18	楕円形	N-40°W	
IP-7	C-44	2.19 / 2.30	2.07 / 2.41	1.97	円形		縄文時代中期後半?
IP-8	D・E-50	1.38 / 1.22	1.04 / 0.80	0.44	不整楕円形		縄文時代中期後半
TP-1	J・K-49・50	2.52 / 1.96	1.0 / 0.16	1.0	楕円形	N-80°E	
TP-2	H・I-48・49	2.84 / 2.26	1.08 / 0.2	1.48	楕円形	N-18°E	
TP-3	H-49・50	3.04 / 3.04	0.8 / 0.12	1.08	楕円形	N-20°W	
TP-4	B・C-39・40	2.51 / 2.19	1.01 / 0.17	1.58	長楕円形	N-1°E	
TP-5	F-49・50	2.93 / 2.90	0.96 / 0.20	1.42	長楕円形	N-70°W	
TP-6	I・J-49・50	2.88 / 3.08	0.72 / 0.16	1.04	楕円形	N-39°W	
TP-7	I-49・50	2.68 / 2.76	0.64 / 0.16	1.24	楕円形	N-7°E	
TP-8	F-49・50	2.16 / 2.15	0.51 / 0.16	1.12	長楕円形	N-12°W	
TP-9	C・D-51	2.81 / 2.49	0.66 / 0.10	1.16	長楕円形	N-61°W	
TP-10	L-50・51	2.56 / 2.76	1.6 / 0.28	1.4	楕円形	N-11°W	
IF-1	A・B-42	1.84	0.74	0.20	不整形		縄文時代晩期後葉?
IF-2	C-48	0.86	0.33	0.03	不整形		縄文時代晩期後葉?
土器集中1	A・B-40	2.3	1.3		不整形		縄文時代晩期後葉
土器集中2	L-51	0.55	0.3		楕円形		縄文時代中期後半
土器集中3	G-50	1.0	0.8		不整形		縄文時代晩期後葉
土器集中4	C・D-50	1.2	0.5		不整形		縄文時代晩期後葉
FC-1	E-49	0.8	0.6		楕円形		
FC-2	E-44	1.0	0.5		不整形		

表Ⅲ-2 A地区遺物集計表

遺物名	地区名	A地区																				遺構合計	包含層	合計
		遺構種別	IP-								TP-				FC-		土器集中							
			遺構番号	1	2	3	4	5	6	7	8	2	5	8	9	1	2	1	2	3	4			
石器	Ⅲ b								65				1			1	424				491	431	922	
	V c		1			531								1		3447		570	134		4684	520	5204	
土器等合計			1			531			65				1	1		3448	424	570	134		5175	951	6126	
石器	石鏃	1																			1	4	5	
	スクレイパー	1																			1	6	7	
	石斧																					5	5	
	扁平打製石器																					3	3	
	たたき石																					1	1	
	すり石																					4	4	
	砥石																					1	1	
	台石			1																	1		1	
	石皿				1																1	1	2	
	Rフレイク																					4	4	
	フレイク	194				1	1		1			3	85	62							347	331	678	
石核																					2	2		
石製品																					1	1		
礫	有孔自然礫																				2	2		
	礫	1	2	26			1		2	1	2	1					1			37	41	78		
石器等合計		197	2	27	1	1	1	1	2	2	2	1	3	85	62		1			388	406	794		
遺物合計		197	3	27	1	532	1	1	67	2	2	1	4	86	62	3448	425	570	134	5563	1357	6920		

表III-3 A地区出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真 図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 番号	点数	分類	器種	部位	文様等；地文等/特徴	整理番号 ほか
図III-5	1	図版12	IP-5	覆土	1	13	V c	深鉢	口~胴	口唇刻み・浅い幅広の平行沈線；RL 縄文/平縁・角型口唇	A-64
			IP-5	覆土	1	9					
			IP-5	覆土	1	4					
図III-10	1	図版12	IP-8	覆土	1	16	III b	深鉢	口~底	口縁下くびれ部に2本の横走沈線・垂下する蛇行沈線・口唇上および把手上連続刺突・把手2カ所；LR 縄文/炭化物多量附着 口径13.8cm・底径7.0cm・器高20.1cm	A-1
			IP-8	覆土上面	2	20					
図III-10	2	図版12	IP-8	覆土上面	3	24	III b	深鉢	口~底	無節L縄文のみ/外面上半炭化物附着 口径12.5cm・底径6.6cm・器高16.2cm	A-2
図III-18	1	図版13	土器集中1	(Cブロック)	10	43	V c	深鉢	口~底	工字文・浅い幅広の平行沈線・三角形突起；LR 縄文/平縁・炭化物附着 口径19.4cm・底径8.6cm・器高16.6cm	A-5
			土器集中1		2	1					
図III-18	2	図版13	土器集中1	(Dブロック)	4	4	V c	広口壺	胴	工字文・平行沈線；RL 縄文	A-57
図III-18	3	図版13	土器集中1	(Eブロック)	9	3	V c	鉢	底	工字文・平行沈線；LR 縄文	A-58
図III-19	4	図版13	土器集中1	(Dブロック)	4	26	V c	鉢	口~胴	工字文・平行沈線・A状突起・B状突起・三角形突起；RL 縄文	A-51
			土器集中1	(Cブロック)	10	7					
図III-19	5	図版13	土器集中1	(Eブロック)	9	12	V c	鉢	口~底	工字文・平行沈線・三角形突起；RL 縄文/平縁	A-54
			土器集中1	(Eブロック)	9	8					
図III-19	6	図版13	土器集中1	(Cブロック)	10	3	V c	深鉢	口縁	大型突起・平行沈線・B状突起・貼瘤；LR 縄文	A-55
図III-19	7	図版13	土器集中1	(Cブロック)	10	7	V c	深鉢	口縁	LR 縄文	A-55
図III-19	8	図版13	土器集中1	(Dブロック)	4	3	V c	深鉢	口~胴	工字文・平行沈線・三角形突起・貼瘤；LR 縄文/平縁	A-56
			土器集中1	(Dブロック)	4	7					
図III-20	9	図版14	土器集中1	(Aブロック)	1	56	V c	大型深鉢	口~底	浅い幅広の平行沈線・A状突起・三角形突起；RL 縄文	A-53
			土器集中1	(Aブロック)	1	12					
			土器集中1	(Aブロック)	1	13					
			土器集中1	(Aブロック)	1	62					
図III-20	10	図版14	土器集中1	(Cブロック)	10	64	V c	深鉢	口~胴	浅い幅広の平行沈線・三角形突起；LR 縄文/平縁 口径28.4cm・器高(24.0)cm	A-52
			土器集中1	(Cブロック)	10	12					
図III-21	1	図版15	土器集中2		1	276	III b	大型深鉢	口~底	平行沈線・渦文・横走および縦走沈線；擦糸文(RL)/平縁+4単位突起・上げ底 口径33.2cm・底径10.4cm・器高43.2cm	A-3
			(L-51)	IV	1	1					
図III-22	1	図版15	土器集中3		1	17	V c	鉢	口~底	RL 縄文/楕円形・口縁やや外反 口径22.3cm・底径19.7cm・器高8.0cm	A-61
			土器集中3		1	13					
図III-22	2	図版15	土器集中3		1	19	V c	深鉢	底	RL 縄文/楕円形	A-62
			土器集中3		1	35					
図III-22	3	図版15	土器集中3		1	9	V c	広口壺	口~底	平行沈線・貼瘤(S字状)；RL 縄文/平縁・頸部強いくびれ・平底	A-60
			土器集中3		1	5					
			土器集中3		1	37					
			土器集中3		1	2					
図III-23	1	図版15	(C-50)	IV	1	2	V c	壺	胴~底	工字文・平行沈線・小型の貼瘤；LR 縄文/平底 胴部最大径17.4cm・底径9.6cm・器高(12.4)cm	A-4
			(C-50)	IV	3	1					
			(D-50)	IV	3	2					
図III-23	2	図版15	土器集中4		1	1	V c	鉢	胴	入組状の工字文・平行沈線；LR 縄文	A-59
図III-23	3	図版15	土器集中4		1	35	V c	浅鉢	口~底	工字文・A状突起・B状突起；LR 縄文	A-63
			土器集中4		1	1					
図III-26	1	図版16	(G-49)	III	3	1	III b	深鉢	口~胴	平行沈線・渦文・剣菱文・曲沈線・連続刺突(口縁下くびれ部および口唇上)；擦糸文(RL)/平縁・角型口唇 口径25.5cm	A-65
			(G-49)	IV	1	2					
			(H-47)	III	2	1					
			(H-48)	III	2	4					
			(H-48)	IV	5	27					
図III-26	2	図版16	(J-50)	III	6	2	III b	深鉢	口縁	LR 縄文(口唇上含む)	A-66
			(J-50)	IV	1	4					
図III-26	3	図版16	(J-50)	III	2	1	III b	深鉢	口縁	LR 縄文	A-67
図III-26	4	図版16	(B-44)	III	1	1	III b	深鉢	胴	平行沈線；擦糸文	A-68
図III-26	5	図版16	(B-45)	III	1	1	III b	深鉢	胴	渦文・横走沈線；LR 縄文	A-69
図III-26	6	図版16	(C-42)	IV	1	1	III b	深鉢	胴	擦糸文	A-70
図III-26	7	図版16	(B-40)	III	3	1	V c	深鉢	胴	入組状の工字文・隠刻；LR 縄文	A-76
図III-26	8	図版16	(B-40)	IV	6	2	V c	深鉢	胴	入組状の工字文・隠刻；LR 縄文	A-75
図III-26	9	図版16	(B-44)	III	3	1	V c	深鉢	胴	工字文；LR 縄文	A-77
図III-26	10	図版16	(C-50)	IV	4	1	V c	深鉢	胴	平行沈線・突起・斜方向への刻み	A-74
図III-26	11	図版16	(C-48)	IV	7	1	V c	深鉢	口縁	平行沈線；RL 縄文	A-73
図III-26	12	図版16	(C-48)	IV	7	4	V c	深鉢	口縁	平行沈線・三角形突起；RL 縄文	A-72
図III-26	13	図版16	(E-47)	IV	2	1	V c	深鉢	口縁	平行沈線	A-71
図III-26	14	図版16	(F-44)	IV	2	5	V c	広口壺	頸~胴	平行沈線・突起・連続刺突；RL	A-78
図III-26	15	図版16	(B-46)	III	2	31	V c	浅鉢	口~底	浅い幅広の平行沈線・三角形突起；RL 縄文/平縁+小型B状突起4単位・炭化物 口径18.9cm・底径7.6cm・器高7.6cm	A-6

表Ⅲ－4 A地区遺構出土掲載石器一覧

図番号	掲載番号	器種名	遺構名	遺物番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
図Ⅲ-7	1	石鏃	IP-1	1	1	4	1.9	0.6	2.5	メノウ	図版12	
図Ⅲ-7	2	スクレイパー	IP-1	2	1	2.9	2.3	0.9	6	黒曜石	図版12	
図Ⅲ-9	1	石皿	IP-4	1	1	53.6	33.3	9.6	14,600	安山岩	図版12	

表Ⅲ－5 A地区包含層出土掲載石器一覧

図番号	掲載番号	器種名	調査区	遺物番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
図Ⅲ-29	1	石鏃	G-50	2	Ⅳ	3.9	1.5	0.5	2	頁岩	図版17	
図Ⅲ-29	2	石鏃	C-41	6	Ⅳ	3.3	1.9	0.4	1.5	頁岩	図版17	
図Ⅲ-29	3	石鏃	C-41	4	Ⅳ	3.1	1.6	0.4	1.4	黒曜石	図版17	
図Ⅲ-29	4	スクレイパー	J-50	4	Ⅲ	6.2	3.5	1.3	37.4	頁岩	図版17	
図Ⅲ-29	5	スクレイパー	C-48	4	Ⅲ	6.4	3.3	1.3	25.1	頁岩	図版17	
図Ⅲ-29	6	スクレイパー	C-43	2	Ⅲ	9.8	4.8	1.6	90.6	頁岩	図版17	
図Ⅲ-29	7	たたき石	E-47	11	Ⅳ	7.8	6.7	4.3	306	安山岩	図版17	
図Ⅲ-29	8	すり石	M-52	1	Ⅳ	11.7	7.7	5.5	242.4	軽石	図版17	
図Ⅲ-29	9	すり石	C-47	6	Ⅲ	15.2	5.9	3.1	462	安山岩	図版17	
図Ⅲ-29	10	扁平打製石器	D-50	6	Ⅳ	10.2	15.7	3.2	890	安山岩	図版17	
図Ⅲ-30	11	扁平打製石器原材	D-50	6	Ⅳ	8.7	13.9	3.8	616	安山岩	図版17	
図Ⅲ-30	12	扁平打製石器原材	D-50	6	Ⅳ	9.6	14.5	4.2	738	安山岩	図版17	
図Ⅲ-30	13	砥石	J-49	9	Ⅳ	25.7	21.9	2	1280	安山岩	図版17	
図Ⅲ-30	14	有孔自然礫	B-46	3	Ⅳ	2.9	3.5	2.4	24.1	泥岩	図版17	
図Ⅲ-30	15	有孔自然礫	E-47	14	Ⅲ	3	1.8	1.7	5.1	泥岩	図版17	
図Ⅲ-30	16	石製品	C-45	3	Ⅳ	5.5	3.5	3.1	22	軽石	図版17	

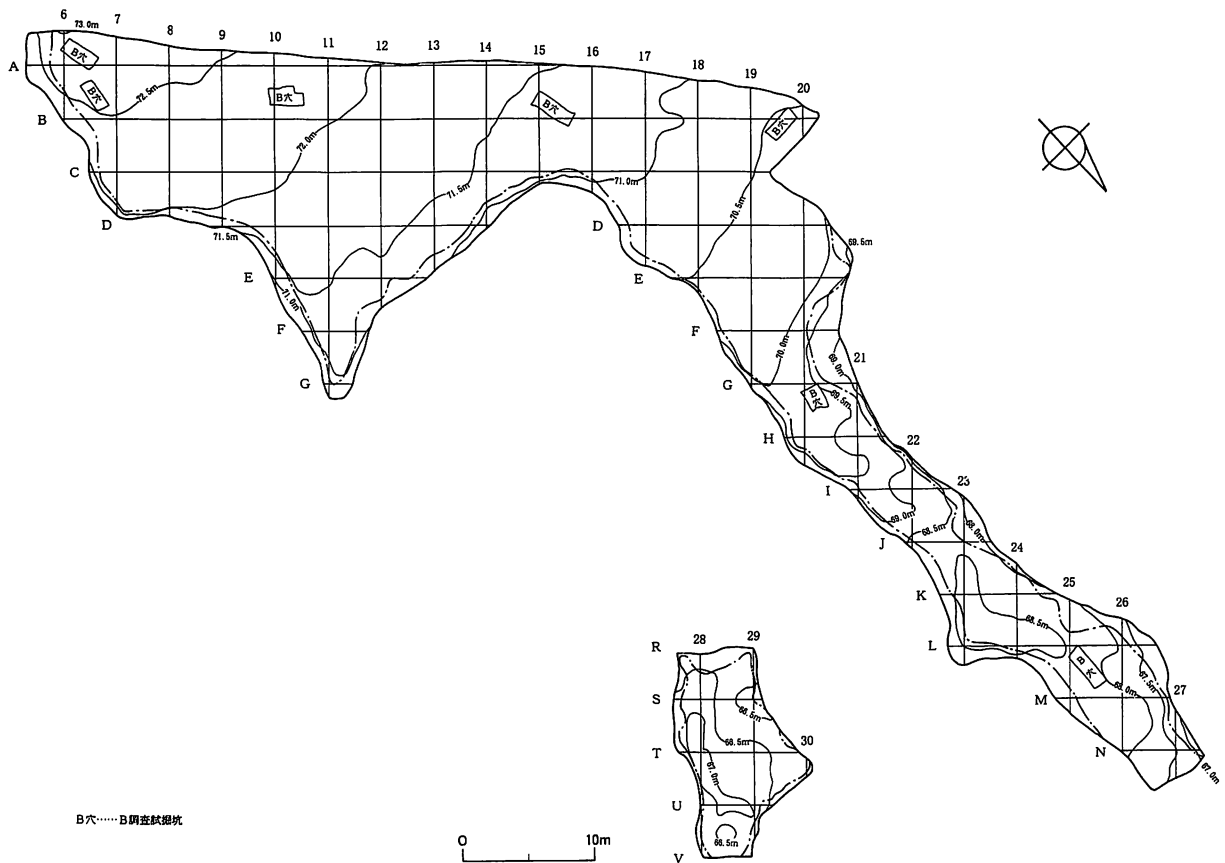
IV B地区の調査とその遺物

1. 概要

B地区は南の山側の高位段丘から北にのびる細い尾根上、標高66.5～73mに位置する。尾根は途中でいくぶん低くなったところがある。尾根の三方は急崖で、南東側は沢に面している。北西側は沢をはさんでA地区の尾根に対面している。調査区内は南から北側に緩やかに下る斜面である。遺物包含層の黒色土層はA地区同様に薄い。

遺構は竪穴住居跡11軒、土壇1基、礫集中1カ所が検出された。遺構の所属時期は出土土器から判断すると、すべて縄文時代中期後半である。竪穴住居跡は、長軸径4～6mの隅丸方形もしくは楕円形で、その多くが埋設土器をもち、柱穴が3～8基不規則に並ぶ。覆土の中位～下位は炭化材や焼土粒、被熱した硬質ロームブロックなどを多量に含む土層が堆積している。また覆土下位から床面付近で個体をなす土器の出土が多い。特記すべきものに、IH-6からは上部構造物と思われる棒状の炭化材が多量に出土し、IH-3の床面付近からは石棒片と骨片が出土したことがあげられる。

遺物は総数9,628点出土した。このうち6,866点が竪穴住居跡出土のものである。土器は6,044点、土製品ほか41点、石器・礫等3,305点、石製品138点である。土器は縄文時代中期後半が6,003点出土しており、そのほとんどが覆林式である。15個体を復元した。この他に後期初頭が41点出土している。土製品は土器片再生円盤とミニチュア土器が出土した。石器・礫等では、フレイク952点、礫2,272点出土しており、定形的石器は71点と少ない。その中では、スクレイパー、石鏃、扁平打製石器が多い。石製品の点数の大部分は、小破片で検出されたIH-3出土の石棒片である。(阿部)



図IV-1 B地区地形測量図(地形はKo-d直下)

2. 遺構とその出土遺物

(1) 竪穴住居跡

I H-1 (図IV-3~6、図版19・20・35)

位置・立地：T・U-27・28 標高66.5~67mの細い尾根の最先端独立部

規模：4.46/3.93×3.82/3.40×0.96m

長軸方向：N-86°E

平面形：楕円形

確認・調査：Ko-dを人力で除去した後、すり鉢状に落ち込む黒色土を確認した。土層観察用に十字形の帯を残し掘り下げたところ、炭化物や被熱したとみられる粘土塊が覆土に含まれていた。さらに掘り下げたところ、焼土のみられるやや硬質の平坦面を確認し、竪穴住居跡と認定した。形状は楕円形であるが、東側はややすぼまっている。南東側は急斜面で崩落しており、木根などの攪乱も受けており輪郭は不明瞭である。覆土の残存状況が良好で、遺物は原位置を保っているものと考えられる。土層断面図を作成し床面を検出した後、柱穴などの付属遺構の精査を行った。

覆土：大きく4層に分けられる。覆土の上位(土層1~3)はⅢ層~Ⅳ層に相当する自然堆積層である。B-Tmが堆積して薄い層をなしている。東方の斜面側は木根などによる腐植土および攪乱土壌である。覆土の中位~下位(土層4~8)はⅥ層の土壌に堅くしまったロームブロックや炭化物を多く含む土層である。一部被熱していると考えられるロームブロックを含んでいる。床面付近(土層10~13)は、炭化物や硬質ロームブロックを含む若干暗色に汚れたⅥ層相当の土壌である。壁際(土層9・V')は、V層を主体としKo-gを多量に含む流入土である。

床・壁：床は平坦で堅くしまっている。Ⅵ層の緻密なシルト質粘土で、極めて細い亀甲状の裂け目に暗色の土壌が入り込んでいる。壁は50°~60°程度の斜度をもって明瞭に立ち上がる。北西側は垂直気味に立ち上がる。東方斜面側は不明瞭である。

付属遺構：柱穴6基と浅い土壇2基を検出した。柱穴は壁際から少し内側の位置で80~120cmの間隔で検出された。規模が類似している。土壇のうち、HP 1は覆土に焼土粒や炭化物を多量含み、HP 5は炭化物をやや多量含んでいる。

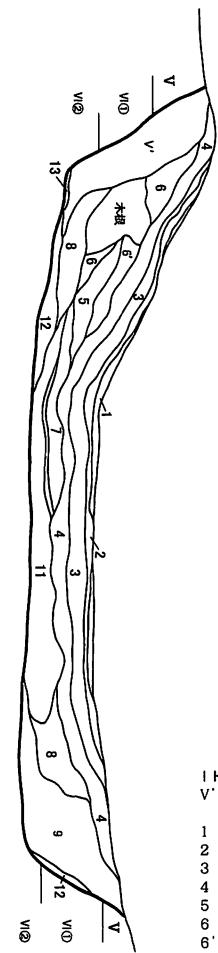
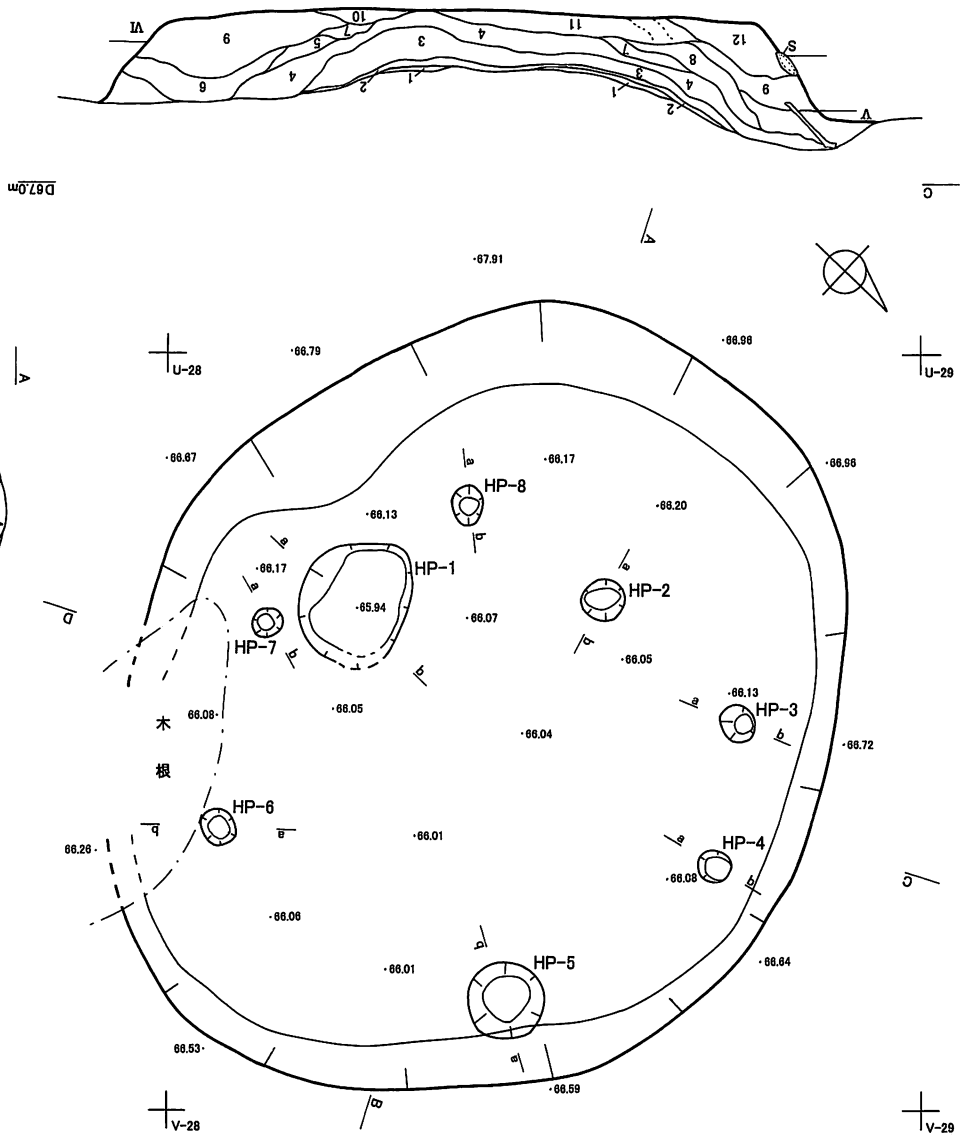
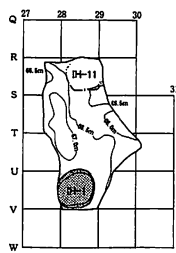
遺物出土状況：床面直上から1点出土したほかは覆土下位および壁際付近からの出土が多い。南西部壁際から土器が1個体まとまって出土しており、付近から大型の台石が出土している。土器538点、土製品2点、定形的石器12点、フレイク43点、礫102点、計697点が出土した。土器は、大多数はⅢ群b類で残り9点はⅣ群a類である。遺物の接合状況を見ると、壁際付近の離れた地点同士で接合する土器が複数ある。また未掲載遺物にもこのような接合が数多く確認できる。

時期：住居跡の構造や出土土器などから、縄文時代中期後半である。

遺物：土器 1~9はⅢ群b類榎林式、10はⅢ群b類榎林式の新しい段階、11はⅣ群a類に属するものと思われる。12はほぼ同時期の土製品。

1は住居跡南側の壁に近い覆土下位からまとまって出土した大型の深鉢。周囲から出土した破片も接合した。頸部のくびれは弱い。波頂部はやや肥厚し、口唇に沈線が短く施文されている。櫛歯状工具による条痕が全面に明瞭に見られる。文様は基本的に2本一組の沈線でえがかれ、一部の文様は2組4本になっている。口縁部には波頂部下に縦走する沈線と、一部に平行沈線が施文されている。頸部には平行沈線をめぐらせ、胴部に円文を配し、円文を中心とする曲沈線の文様がえがかれている。円文は2重および4重のものがある。口縁部から胴部にかけて炭化物が多量に付着しているが、斜めに傾いた範囲で付着しており、廃棄後に焼成を受けたものと考えられる。

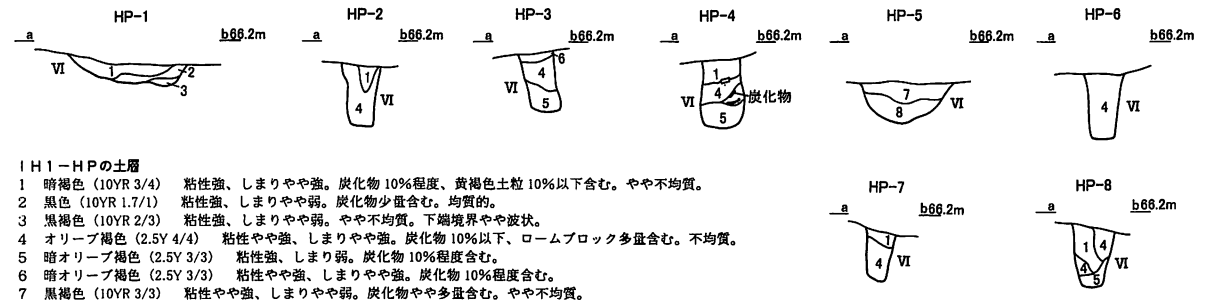
I H-1



I H-1の土層

V' 黄褐色 (10YR 6/6) 粘性やや強、しまりやや弱。均質。層界不明瞭。

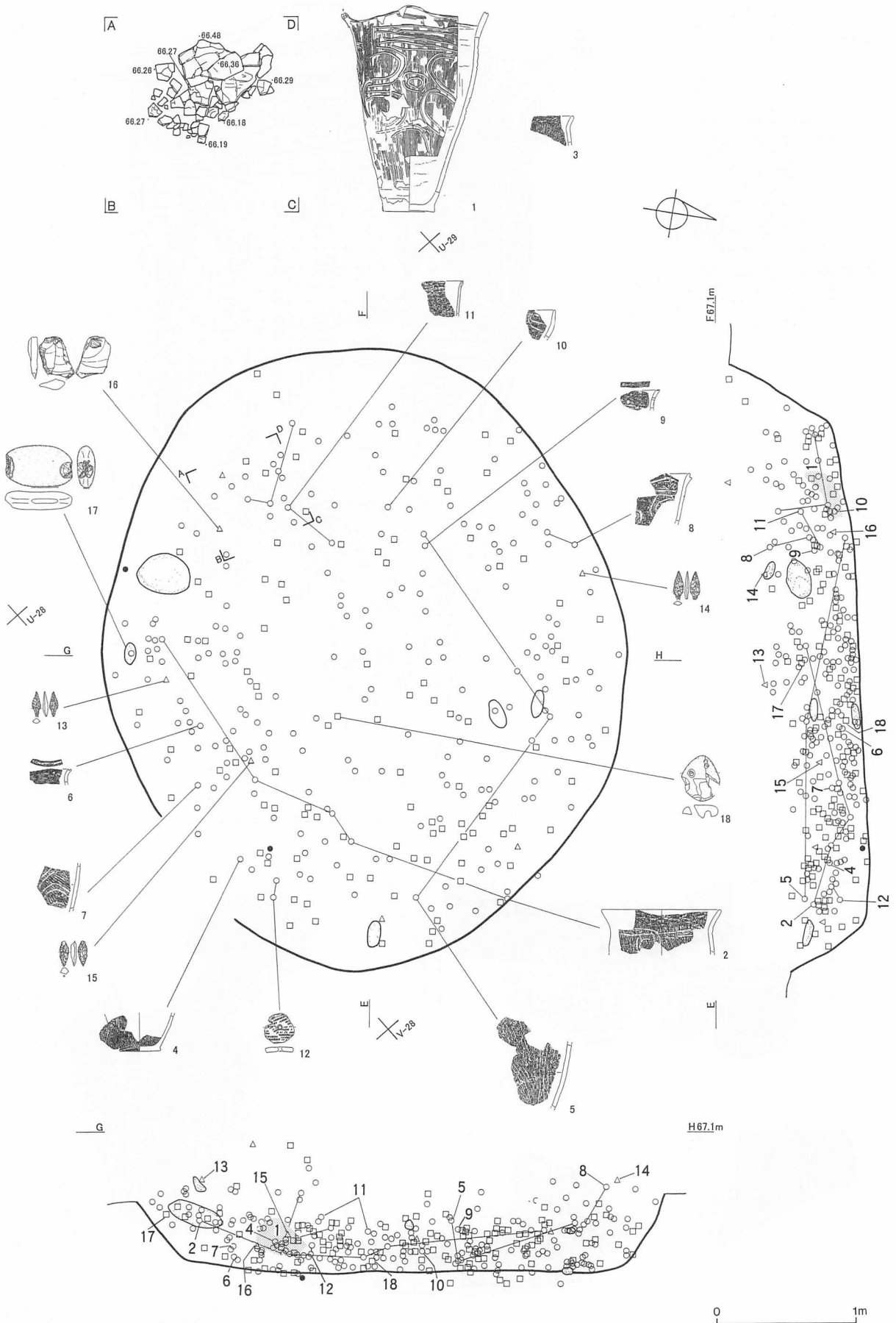
- 1 黒褐色 (10YR 1/3) [Ⅲ層相当] 粘性中、しまりやや強。均質的。下端境界明瞭。
- 2 灰黄褐色 (10YR 5/2) [B-Tm] しまりやや強。粒子細かく、非常に密。均質的。層界明瞭。
- 3 黒色 (10YR 1.7/1) [Ⅳ層相当] 粘性やや強、しまりやや強。均質的。下端層界やや明瞭。下部やや脱色。
- 4 黒褐色 (10YR 2/3) 粘性やや強、しまり弱。やや均質。層界やや不明瞭。木根多量混入。
- 5 黒色 (10YR 2/1) 粘性やや強、しまりやや弱。均質的。下端層界やや明瞭。木根やや多い。
- 6 黄褐色 (10YR 5/6) 粘性やや強、しまり非常に弱。K_o-g 多量含む。木根多量混入。やや均質。層界やや明瞭。
- 6' 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性やや弱、しまりやや弱。K_o-g やや多量含む。やや不均質。層界やや明瞭。
- 7 黒褐色～褐色 (10YR 2/2~4/4) 粘性中、しまり非常に強。ブロック状の堅い褐色土 (被熱?) を多量含む。不均質。層界明瞭。
- 8 暗褐色 (10YR 3/4) 粘性中、しまりやや強。ブロック状の褐色粒子 (被熱?) を少量含む。やや不均質。木根やや多い。層界やや不明瞭。
- 9 褐色 (10YR 4/4) 粘性中、しまりやや弱。均質的。層界やや不明瞭。
- 10 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性やや弱、しまり強。ブロック状の粘土塊少量含む。やや不均質。層界やや不明瞭。
- 11 暗褐色 (10YR 3/4) ~ オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性弱、しまり非常に強。ブロック状の粘土塊少量含む。黒色土・褐色土混入、不均質。
- 12 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性中、しまり強。均質的。
- 13 黒色 (10YR 2/1) 粘性強、しまり弱。均質的。境界明瞭。



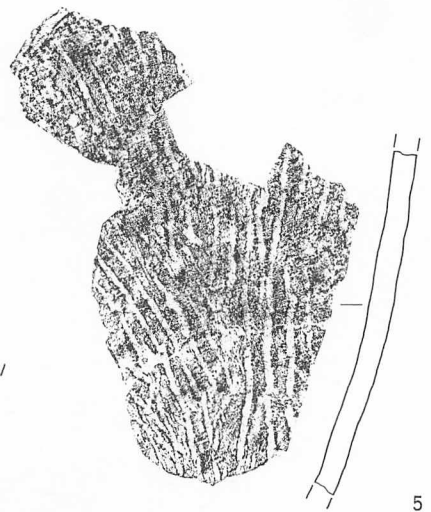
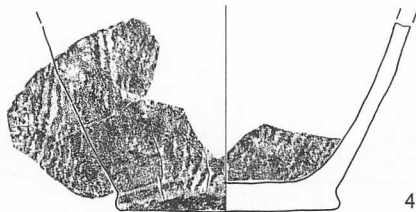
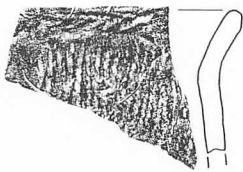
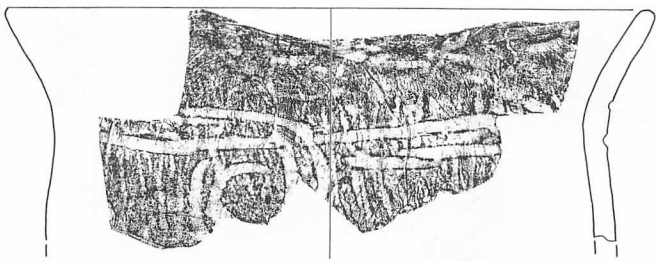
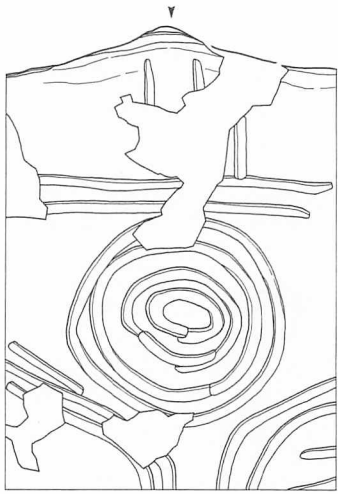
I H-1-HPの土層

- 1 暗褐色 (10YR 3/4) 粘性強、しまりやや強。炭化物 10%程度、黄褐色土粒 10%以下含む。やや不均質。
- 2 黒色 (10YR 1.7/1) 粘性強、しまりやや弱。炭化物少量含む。均質的。
- 3 黒褐色 (10YR 2/3) 粘性強、しまりやや弱。やや不均質。下端境界やや波状。
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性やや強、しまりやや強。炭化物 10%以下、ロームブロック多量含む。不均質。
- 5 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性強、しまり弱。炭化物 10%程度含む。
- 6 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや強、しまりやや強。炭化物 10%程度含む。
- 7 黒褐色 (10YR 3/3) 粘性やや強、しまりやや弱。炭化物やや多量含む。やや不均質。

図IV-3 IH-1(1)

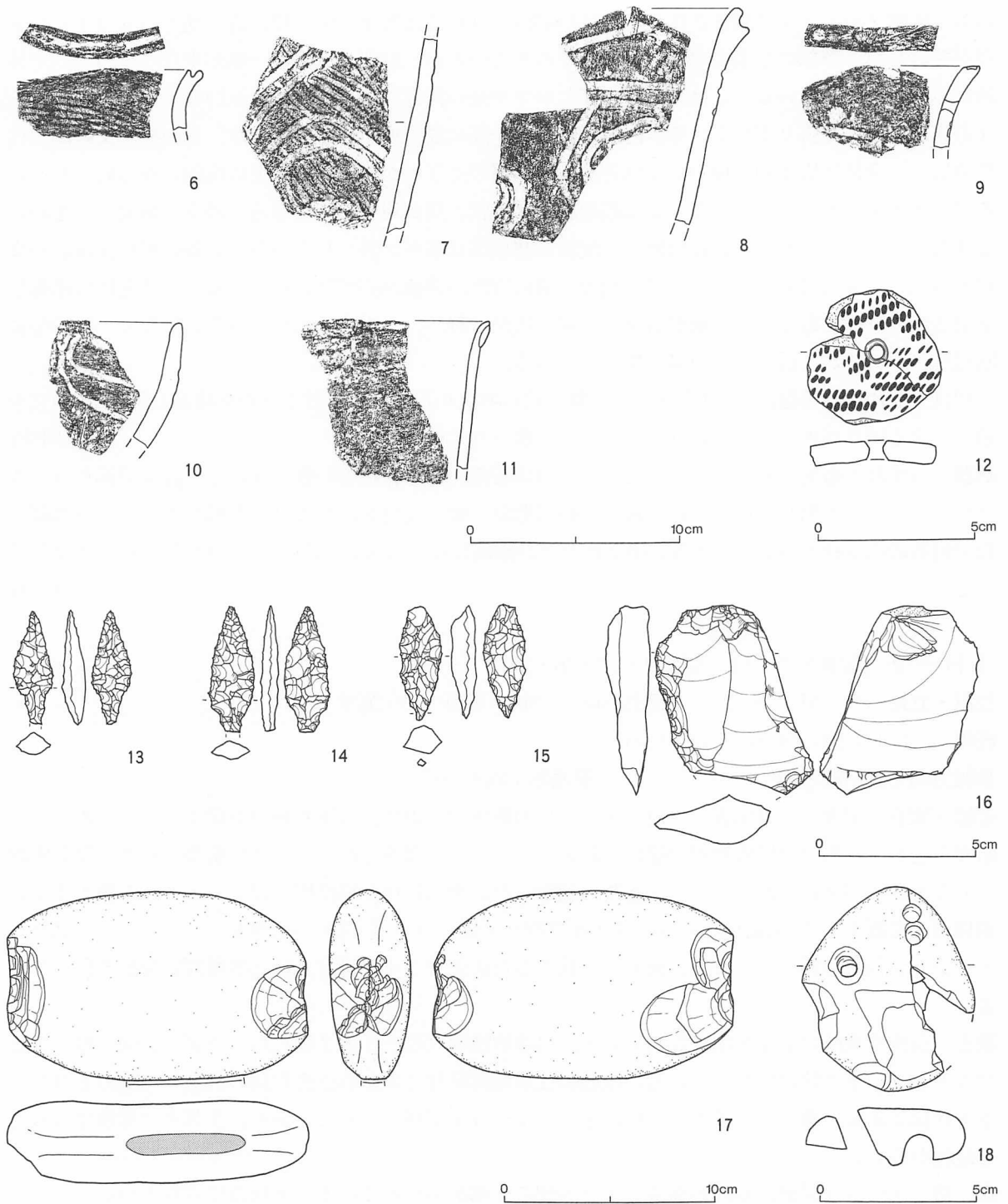


図IV-4 IH-1(2)



0 10cm

图IV-5 IH-1 出土遺物(1)



図IV-6 IH-1出土遺物(2)

2～11の地文は、2～5が撚糸文、6はRL縄文、7は櫛描文が施されている。8は無文部が多いもののLR縄文がわずかに観察され、9～11は地文がない。2は覆土下位の壁に近い地点から出土した9点が接合した。頸部に2条の平行沈線をめぐらせているが、胴部の渦文の一部が重なっている。全体的に赤褐色を呈している。3は頸部のくびれがやや強い深鉢。地文の撚糸文が口唇上にかかっている。4の底部は小さく張り出している。内面と断面の一部に炭化物が付着している。5の撚糸文の間隔はやや広い。全体に炭化物が付着している。6は頸部のくびれが強い。口唇上に沈線が深く施されているが、炭化物が入り込んでいる。7は幅の広い櫛歯状工具が用いられている。渦文と剣菱文と思われる沈線の一部が見られる。8は口唇上に沈線と波頂部に刺突が施されている。2条の平行沈線、渦文がみられる。9は口唇上と2条の平行沈線の間には円形の連続刺突が施されている。10は全体に赤褐色を呈し焼成良好である。11は器壁が薄い。炭化物が付着し、黒褐色を呈している。無文で、口縁部に貼付隆帯があるが、折り返し口縁に類似している。

12は土器片再生円盤。覆土下位のうち、壁に近い地点から出土した破片2点が接合した。LR縄文を地文とする破片が加工されており、側面はよく擦られている。 (阿部)

石器 いずれも覆土からの出土である。13・14は石鏃。15は棒状の石錐。16は1側縁に刃部を持つスクレイパーで、欠損している。17は扁平打製石器で、礫の両端を打ち欠いて整形している。18は凝灰岩で複数の孔を持つ自然礫である。紐擦れなどの擦痕は見られない。IH-2と包含層からも出土している。 (村田)

I H - 2 (図IV-7～11、図版21・22・36・37)

位置・立地：L・M-25・26 標高約68mの狭い尾根上に位置する。

規模：(5.4/4.92)×4.16/3.72×1.04m

長軸方向：N-82°-W

平面形：隅丸方形

確認・調査：試掘坑(B調査、平成14年10月)の断面で、黒色土の落ち込みが確認されたため、この断面を延長する形で土層観察用の壁面を設定し、トレンチ調査を行った。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がり認められたので、住居跡と判断した。遺物は自然堆積層(覆土1・2)を覆土1で、遺構覆土を覆土2で、床面出土のものは床面で取り上げている。炉周辺の土壌をサンプリングしフローテーション作業を行った。また、床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定分析を行っている。

覆土：伐採作業時に上部が削平されている。自然堆積層(覆土1・2層)から下部は、焼土粒、炭化物などがブロック状に堆積している。床面に住居の構造材と思われる炭化材の広がり認められた。焼失住居である。覆土中に被熱し赤色硬化した土や焼土が見られることから、土葺きの屋根であった可能性が高い。

床、壁：床はほぼ平坦、斜面の崩落により西側の一部が失われている。壁は急に立ち上がる。

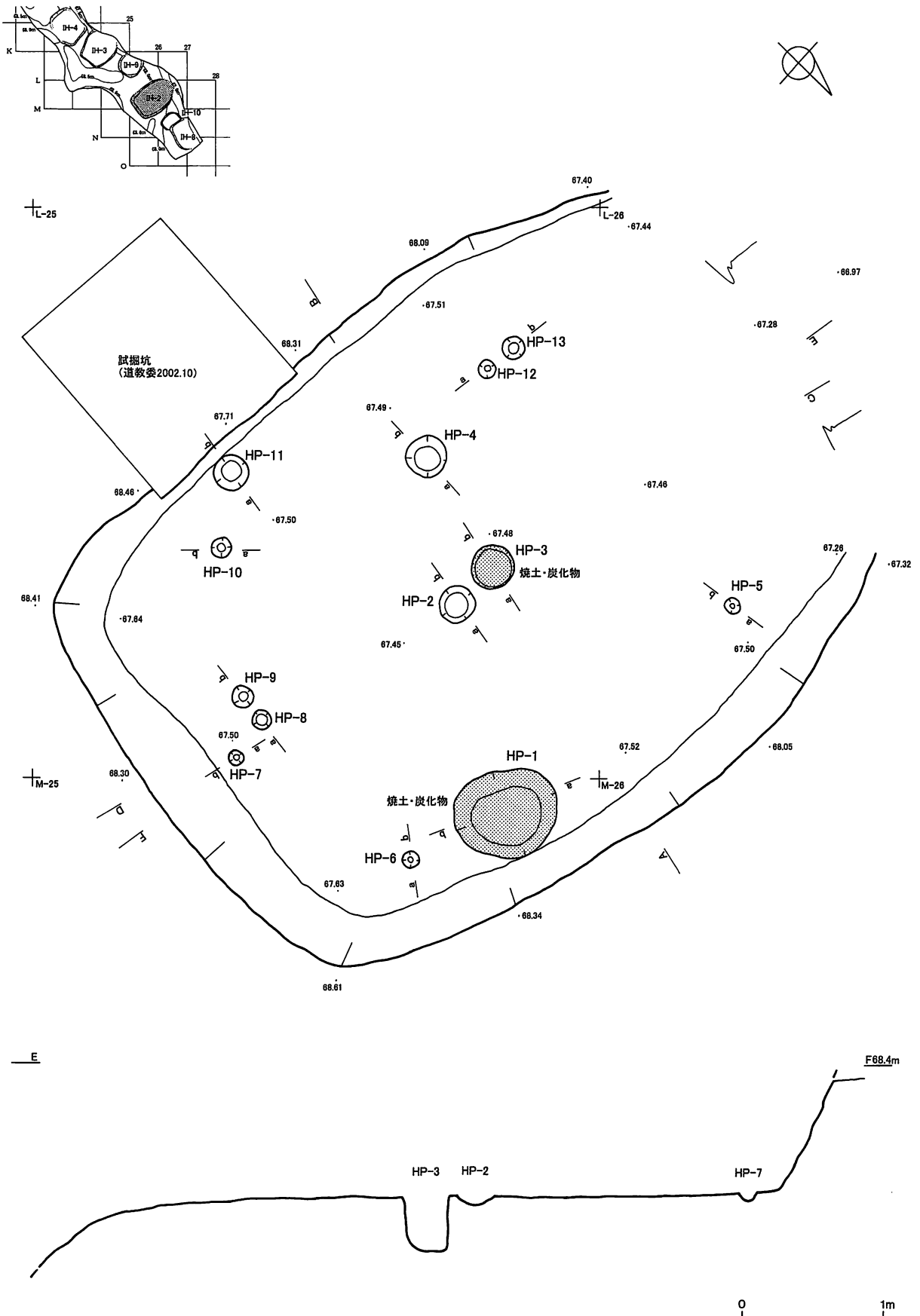
付属遺構：中央付近のHP-3は土器の抜取り痕が見られる。土器を埋設し炉として使用していたと考えられる。北側の壁付近にあるHP-1の覆土には、大量の焼土粒・炭化物が見られる。柱穴状の小ピットを11基検出したが、規則的な配列は認められない。

遺物出土状況：覆土の上層から床面まで出土するが、HP-1付近で、石皿や土器片とともに小礫が18個まとまって出土した。

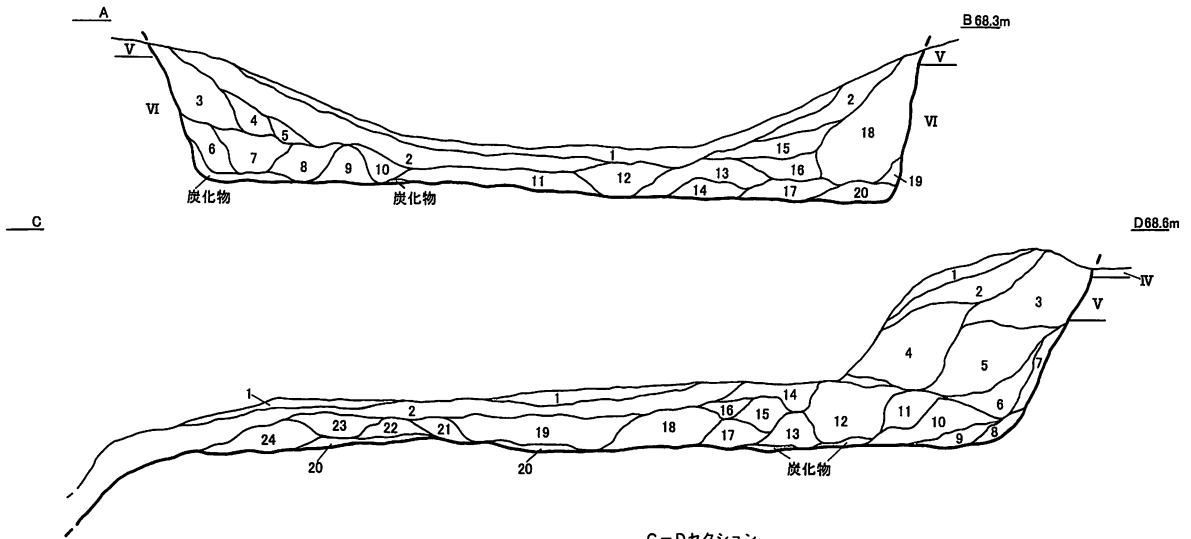
時期：床面出土の遺物から、縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。 (村田)

遺物：土器 1～8はⅢ群b類。ほとんどが榎林式であるが、2・3・8は大安在B式などやや新し

I H-2



図IV-7 IH-2(1)



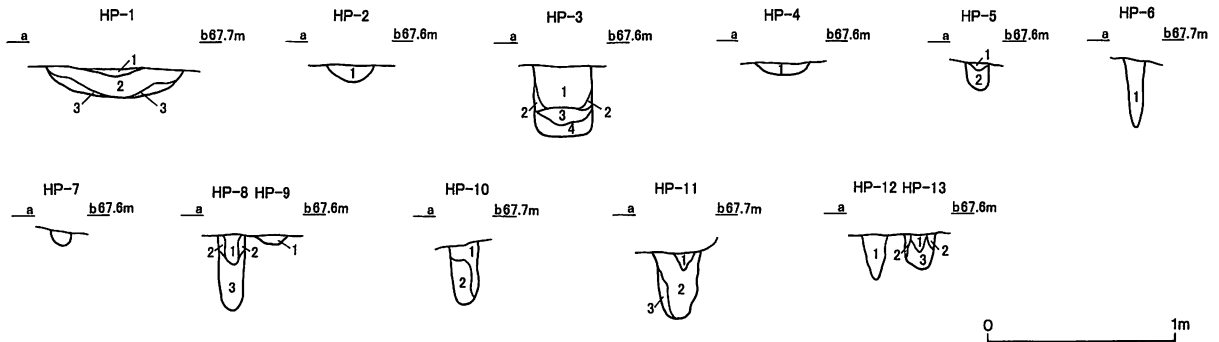
I H-2の土層

A-Bセクション

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) III+B-Tm
- 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) III+IV
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) III+IV+V 炭化物微量含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) III+IV+V Vはブロック状、炭化物含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) IV>III 炭化物微量含む
- 6 褐色土 (7.5YR4/6) 焼土粒多い
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) III+IV 被熱、硬い、炭化物多量に含む
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) III+IV 被熱、硬い、炭化物含む
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) III+IV 被熱、硬い、焼土粒・炭化物少量含む
- 10 黒褐色土 (10YR2/2) N主体、炭化物少量含む
- 11 黒褐色土 (10YR1/3) III+IV しまりあり、炭化物少量含む
- 12 黒褐色土 (10YR2/2) III+IV 被熱、焼土粒・炭化物少量含む
- 13 黒褐色土 (10YR2/3) III+IV 被熱、焼土粒・炭化物少量含む
- 14 暗褐色土 (10YR3/4) 被熱、硬い
- 15 黒色土 (10YR2/1) N しまりあり
- 16 黒褐色土 (10YR2/2) IV やわらかい
- 17 黒褐色土 (10YR3/2) ふかふか、焼土粒・炭化物少量含む
- 18 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) やわらかい、炭化物微量含む
- 19 暗褐色土 (10YR3/3) ふかふか、崩落
- 20 褐色土 (7.5YR4/6) 焼土粒・炭化物含む

C-Dセクション

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) III+B-Tm
- 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) III+IV
- 3 暗オリーブ褐色土 (2.5YR3/3) 炭化物微量含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) やわらかい、炭化物微量含む
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IV主体、炭化物微量含む
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、炭化物少量含む
- 7 黄褐色土 (10YR5/6) Vの崩落
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) Vの崩落
- 9 褐色土 (10YR4/6) 焼土粒・炭化物少量含む
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IV主体、炭化物少量含む
- 11 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) IV>V>M Nはブロック状、やわらかい
- 12 にぶい褐色土 (10YR5/3) N+V+M
- 13 橙色 (7.5YR6/6) 焼土、ブロック状の炭化物
- 14 暗褐色土 (10YR3/3) IV主体、炭化物少量含む
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 焼土粒・炭化物多量
- 16 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
- 17 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 焼土粒・炭化物多量
- 18 暗褐色土 (10YR3/3) 被熱、硬い、焼土粒・炭化物含む
- 19 黒褐色土 (10YR3/1) 被熱、焼土粒多い、炭化物少量含む
- 20 褐色土 (10YR4/4) IV+M しまりあり
- 21 黒褐色土 (10YR2/2) 弱被熱、炭化物少量含む
- 22 黒褐色土 (10YR3/1) N主体、炭化物少量含む
- 23 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土粒・炭化物含む
- 24 黒褐色土 (10YR3/2) 被熱、焼土粒・炭化物微量含む



HP-1

- 1 橙色 (10YR6/6) 焼土
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) IV+V Vはブロック状、焼土粒・炭化物含む
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) M主体、炭化物少量含む

HP-2

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) N主体

HP-3

- 1 黒色土 (10YR2/1) 被熱、硬い、炭化物多量
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) IV>M、炭化物含む
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 被熱、硬い
- 4 黒色土 (10YR1.7/1) 被熱、焼土粒・炭化物多量

HP-4

- 1 黒色土 (10YR2/1) N主体、炭化物含む

HP-5

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V>IV
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) N主体、炭化物少量含む

HP-6

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IV+V+M Mはブロック状

HP-7

- 1 褐色土 (10YR4/6) V>IV

HP-8

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) IV+V 焼土粒・炭化物含む
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) Mの崩落、粘質
- 3 褐色土 (10YR5/3) V+M 焼土粒・炭化物多い、粘質

HP-9

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) IV+V 焼土粒・炭化物含む

HP-10

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土粒・炭化物多い
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) Mの崩落、粘質

HP-11

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) Mの崩落、粘質
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) やわらかい、炭化物少量含む
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) Mの崩落

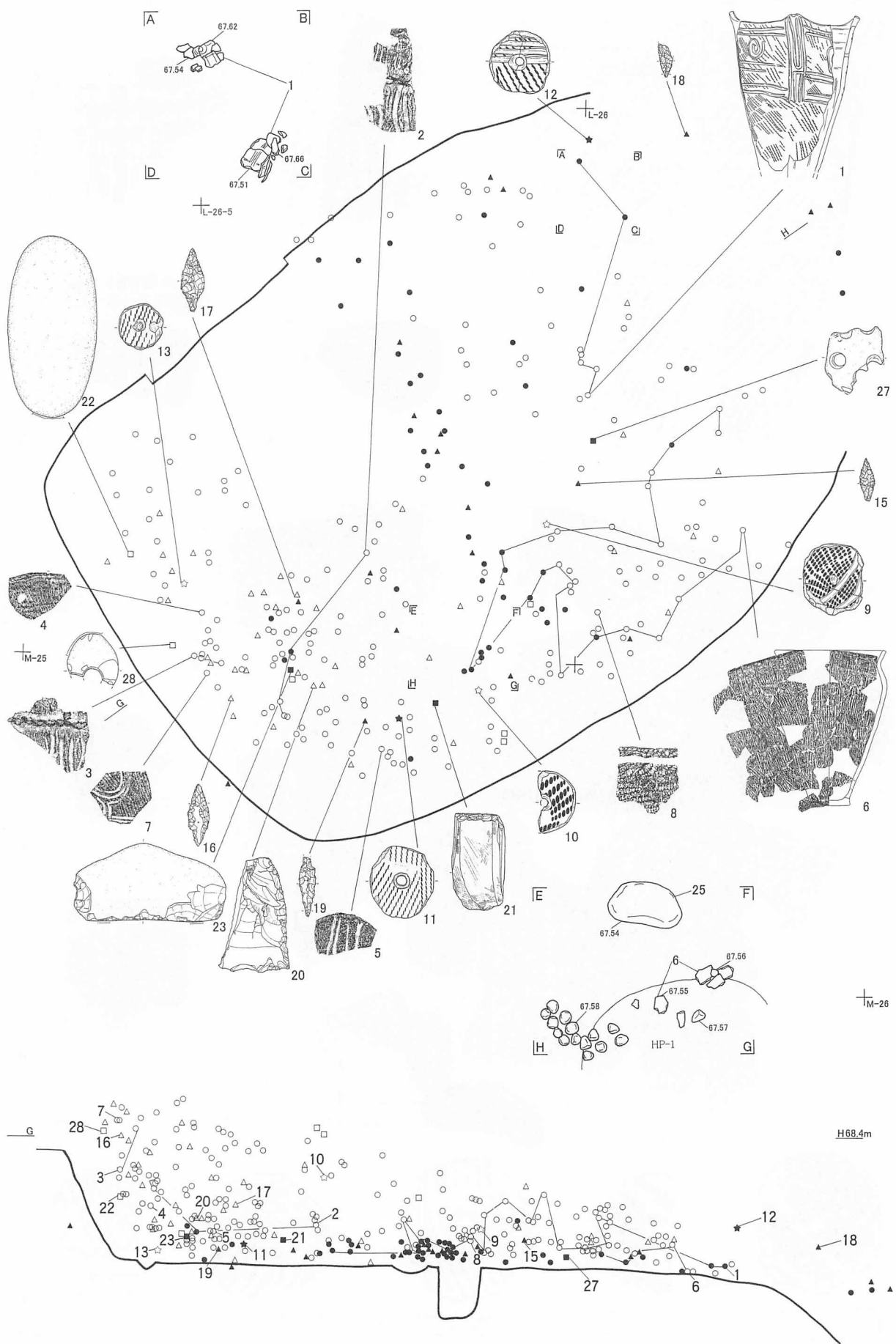
HP-12

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) IV 炭化物含む

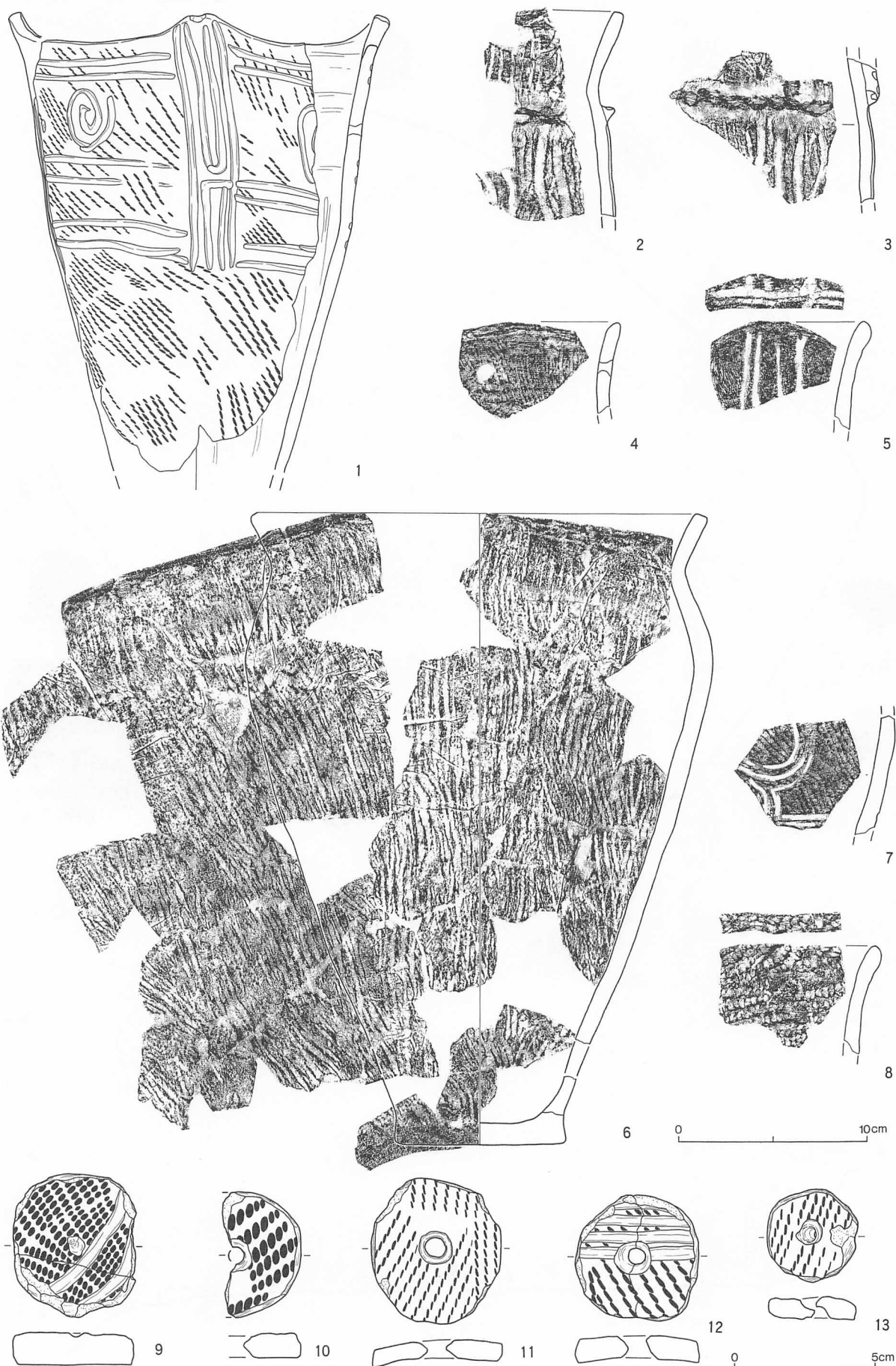
HP-13

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 被熱、炭化物含む
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) Mの崩落
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 硬い、焼土粒多量、炭化物少量含む

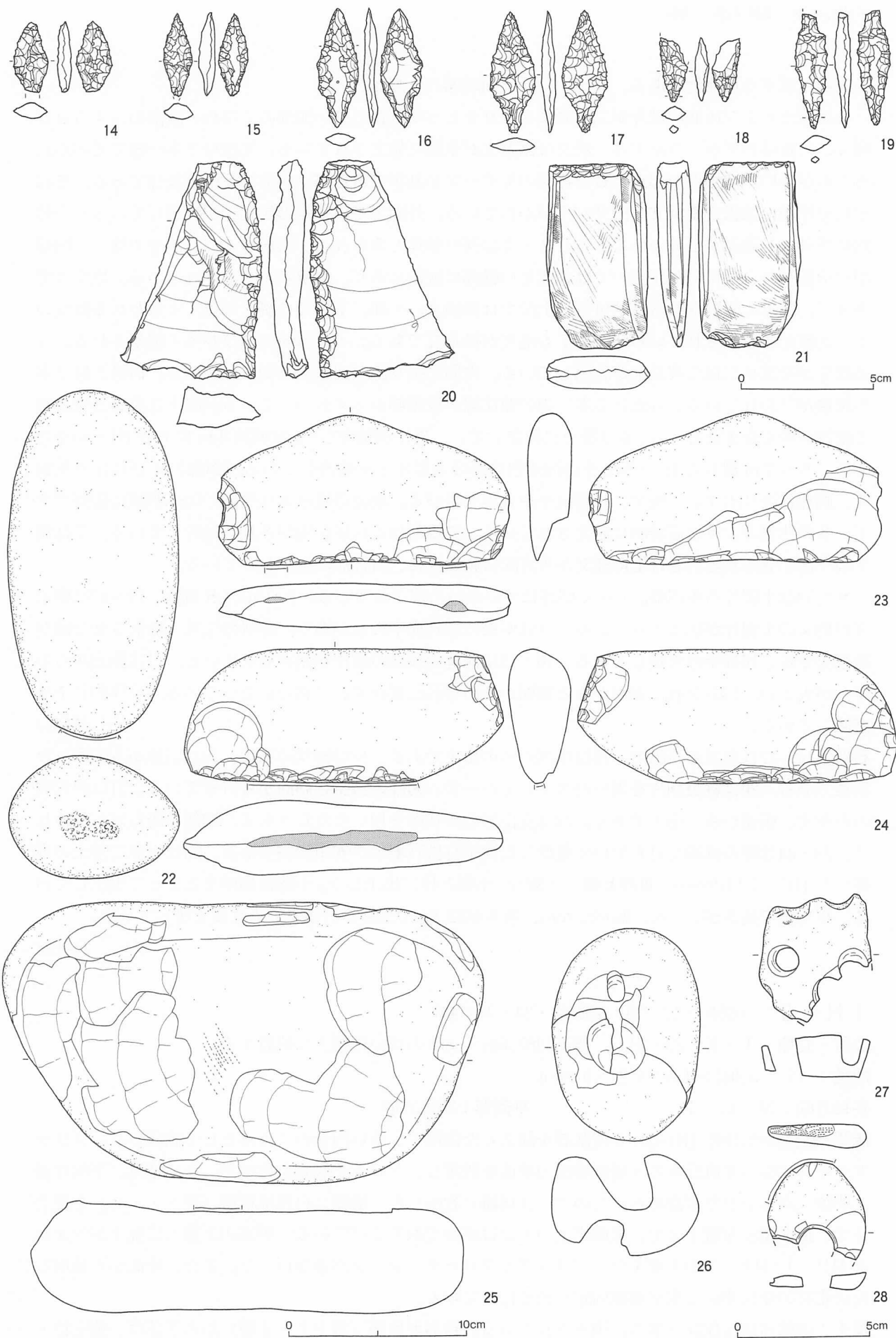
図IV-8 IH-2(2)



图IV-9 IH-2(3)



図IV-10 IH-2出土遺物(1)



图IV-11 IH-2 出土遺物(2)

い段階に属する可能性がある。9～13はほぼ同時期の土製品。

1は覆土および床面の破片が二つのまとまりをもって接合した。頸部のくびれ・胴部のふくらみは弱く、口縁はわずかに外反する。地文は撚糸文が全面に施文されている。文様は2本一組でえがかれるものが多い。波頂部を起点とした棒状のモチーフが基本であるが、内部の区画は多様である。それぞれの枠内に弧線文や渦文・円文がえがかれている。外面上半に多量の炭化物が付着している。全体的に内外とも器面がざらついている。2・3は同一個体とみられる。頸部のくびれがやや強く、胴部がやや膨らむ。貼付帯が頸部のくびれ部と口縁部に縦位にあり、連続刺突が施されている。地文は撚糸文で、明瞭に観察される。貼付帯の上位では櫛描文の一部、下位では渦文に続くと思われる縦位の太い沈線が複数施されている。4～7も地文が撚糸文である。4は器面にひびが多く観察される。5は緩やかな波状口縁の波長部が肥厚している。内側に張り出す突起上が刻まれている。口唇上は2本の沈線がひかれている。外面は2本一組の曲沈線が波頂部からえがかれている。胎土に雲母と見られる鉱物が多く含まれている。6は覆土に散在していた破片が接合した。北側約4mにあるIH-10をこえて、6～7m離れたIH-8とその周辺包含層の土器片とも接合している。頸部のくびれはやや強く、胴部は張り出す。平縁で、口唇はやや丸みを帯びる。地文の撚糸文は原体の節が明瞭に観察できず、多条沈線のように直線的に施文されている。口縁部付近に炭化物が多量に付着している。7は渦文の一部が見られる。8はLR縄文が多方向に施文され、口唇部にもかかっている。

9～13は土器片再生円盤。すべて側縁はていねいに擦られている。9・10はLR縄文、11～13は撚糸文が地文の土器片が加工されている。9は中央に穿孔途中の孔がある。錐状の工具を回転させた跡が観察できる。10は半分欠損している。10・12は深鉢の頸部の破片が用いられている。11は裏面からの穿孔が大きい。13の穿孔は表面からと裏面からの穿孔位置がずれて斜めになっている。全体的にやや磨滅している。
(阿部)

石器 14～17は有茎の石鏃で、15は床面からの出土である。18は棒状の石錐。19は石鏃から転用した石錐である。20は縦長剝片を用いたスクレイパーで、刃部の調整は両面から行っている。21は泥岩製の石斧で、床面からの出土である。22は安山岩の棒状礫を用いたたたき石で、端部に敲打痕が見られる。23・24は礫の両端を打ち欠いて整形した扁平打製石器で、安山岩製である。25は石皿で焼土の堆積したHP-1付近から、Ⅲ群b類の土器片、小礫と伴に出土した。小礫は18個まとめて出土している。平均値で長さが4.7cm、幅が3.2cm、重さが82.6gで大きさ、重さともにまとまっている。

(村田)

I H-3 (図IV-12～18、図版23・24・38～40)

位置・立地：J・K-23・24 標高約67.5m～68mの狭い尾根上に位置する。

規模：(5.2/5.04)×4.52/4.24×0.84m

長軸方向：N-85°-E

平面形：隅丸方形

確認・調査：火山灰(Ko-g)と攪乱層を除去した段階で、浅い円形のくぼみとして確認した。グリッドラインに沿って直行する土層観察用の壁面を設定し、トレンチ調査を行った。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がりが見られたので、住居跡と判断した。遺物は自然堆積層(覆土1・2)を覆土1で、遺構覆土を覆土2で、床面出土のものは床面で取り上げている。炉周辺と覆土に焼土が含まれるHP-1・HP-7の土壌をサンプリングしフローテーション作業を行った。また、床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定分析を行っている。

覆土：遺構周辺は伐採作業時に削平されている。自然堆積層(覆土1・2層)から下部は、焼土粒・

炭化物を多量に含む土が床面まで堆積している。床面に住居の構造材と思われる炭化材の拡がり認められた。焼失住居である。覆土中に被熱し赤色硬化した土や焼土が見られることから、土葺きの屋根であったと考えられる。また、壁際に、焼土粒、炭化物、赤色硬化した土壌が多く見られることから、土留めの板があったと推測できる。

床、壁：ほぼ平坦、斜面の崩落のため、西側が失われている。壁は急に立ち上がる。

付属遺構：中央付近に炉として使用された埋設土器が1基設置されている。口縁部と底部を打ち欠いた土器を、土器の形に合わせて掘り込んだ床面に、地山のローム（VI層）で固定している。南側の壁付近のHP-1と東側の壁付近のHP-7は、覆土に大量の焼土粒・炭化物が見られる。柱穴状のピットは8基検出したが、規則的な配列は認められない。

遺物出土状況：図IV-1・3は、焼失し上屋が崩落した後に投げ込まれたと思われる土器である。ほぼ完形で出土した。床面から石棒が細かく破碎された状態で出土した。これらの破片の出土位置をみると、住居の東側から南側にかけて広範囲に散布されていることが認められた。また、南側でまとまって出土した石棒片の下部から、被熱した蛇紋岩製の玉とイシイルカ（リクゼンイルカ）の焼骨が出土した。焼骨の部位は左右の後頭顆、胸椎体、頭骨片で、1個体の頭部である。

時期：出土遺物から、縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。（村田）

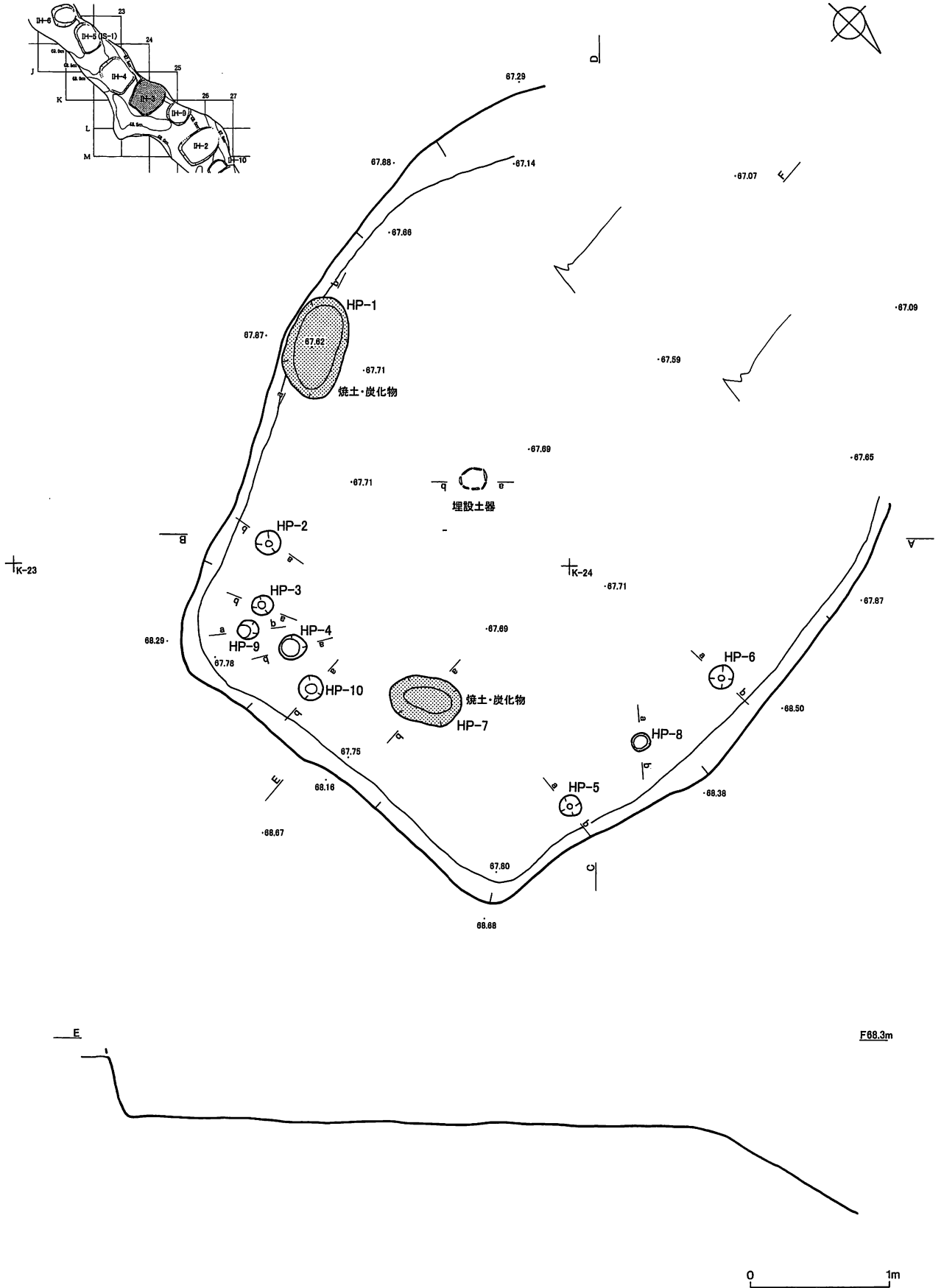
遺物：土器 1～7はⅢ群b類榎林式、8・9はⅣ群a類に属するものとみられる。

1は床面からまとまって出土した、やや小型の深鉢。器形・文様とも榎林式に典型的なものである。ただし口縁は平縁を基調とし突起が3単位の構成で、口唇上には装飾がない。頸部のくびれがやや強く、胴部上位が少々張り出す。底部は平底だか、わずかに上げ底になっている。地文はやや間隔の広い擦糸文が全面に施文されているが、器面がやや磨滅し判然としない部分がある。頸部に2条の平行沈線、胴部に渦文と剣菱文が施されている。2は覆土の下位から出土した、3単位の緩やかな波状口縁をもつ小型の深鉢。底部は平底だか、わずかに上げ底になっている。無文で、器面は剝落が著しい。炭化物が多量に付着しているが、破片により濃淡が明らかに異なり、土器が破損してから被熱したものとみられる。3は住居跡の中央の覆土下位（床面付近）からまとまって出土した深鉢。頸部のくびれはやや強く、胴部はややふくらみ、口縁は外反する。6単位の緩やかな波状口縁であるが、波頂部の間隔は均一でない。地文は基本的にはLR縄文であるが、節の中に複数の繊維痕が明瞭に観察され、多くの繊維を束ねて擦った太い原体を用いたと考えられる。また胴下部には、一部擦糸文を施文している。内面調整はある程度行われているが、成形時の凹凸が若干残っている。外面および口唇には炭化物が多量に付着している。磨滅・剝落は少ないが、細かいひびが多く観察される。

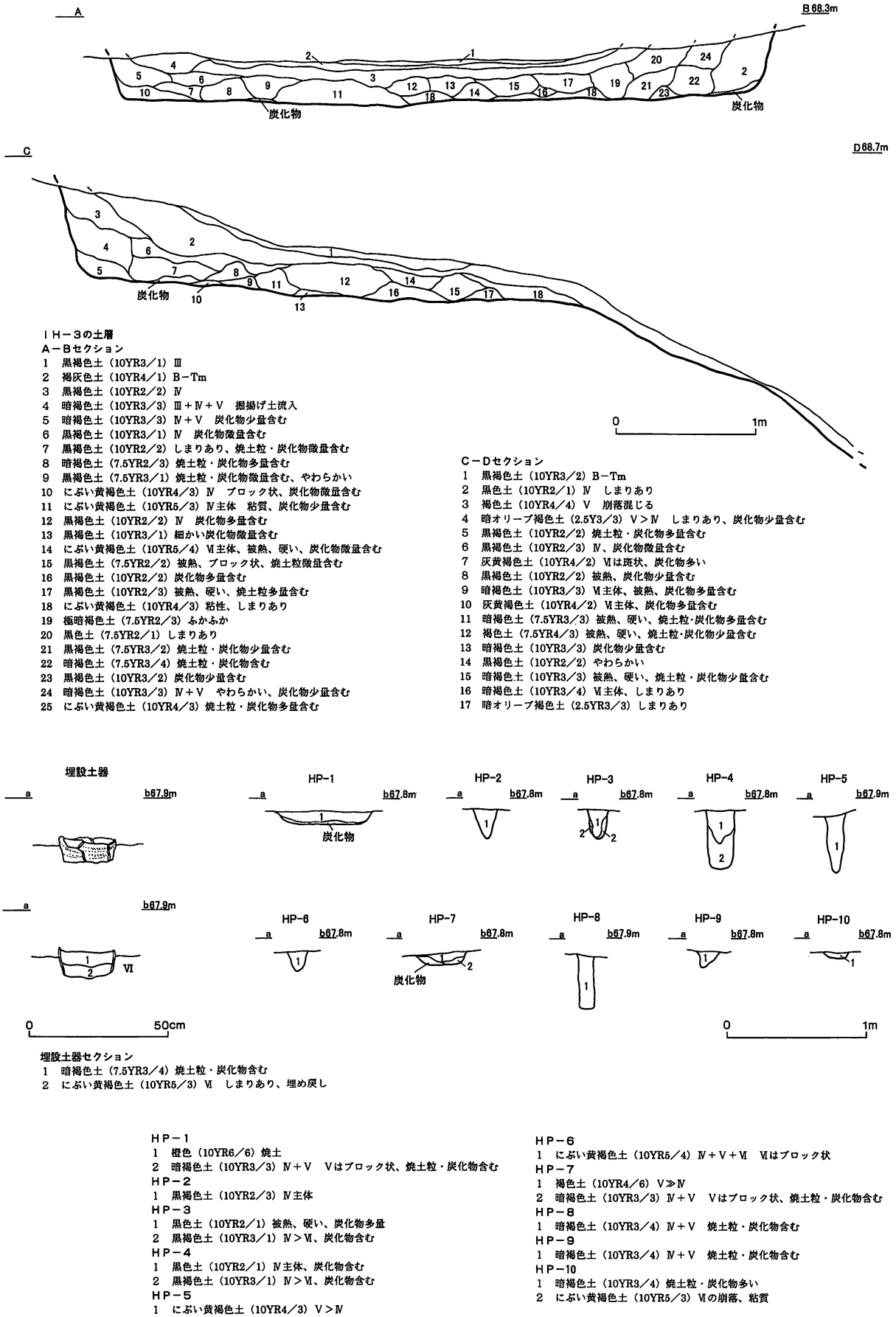
4は同一個体と見られる破片を組み合わせて図化した。隣接するIH-9の覆土上位から出土した破片も接合している。図示した破片は3つのブロック計46点であるが、接合しなかった残片も91点と多い。緩やかな波状口縁の波頂部に単位をあわせた杵状の文様が配され、胴部には渦文とそれらを連繋する曲沈線がえがかれている。全体的に灰褐色を呈し、胎土に砂粒をあまり含んでいないためか、土器破片がやや軽い。5の底部から胴部への立ち上がりが外傾している。6は器壁が比較的薄い。底部がやや張り出し、外面底部付近にはやや幅の広い櫛描文が縦位に施されている。7はHP-8から出土した。地文が擦糸文の小型深鉢で、口縁が外反している。

8は貼付隆帯が施され、その上にLR縄文が横位に施されている。貼付隆帯より上位は無文部となっている。9は覆土の上位に散在していた、同一個体と考えられる深鉢。平縁で折り返し口縁となっており、口唇上にもLR縄文が施されている。貼付隆帯は2本平行に配されており、その間は無文部となっている。胎土に細かい砂粒を多く含み、器面がややざらついている。（阿部）

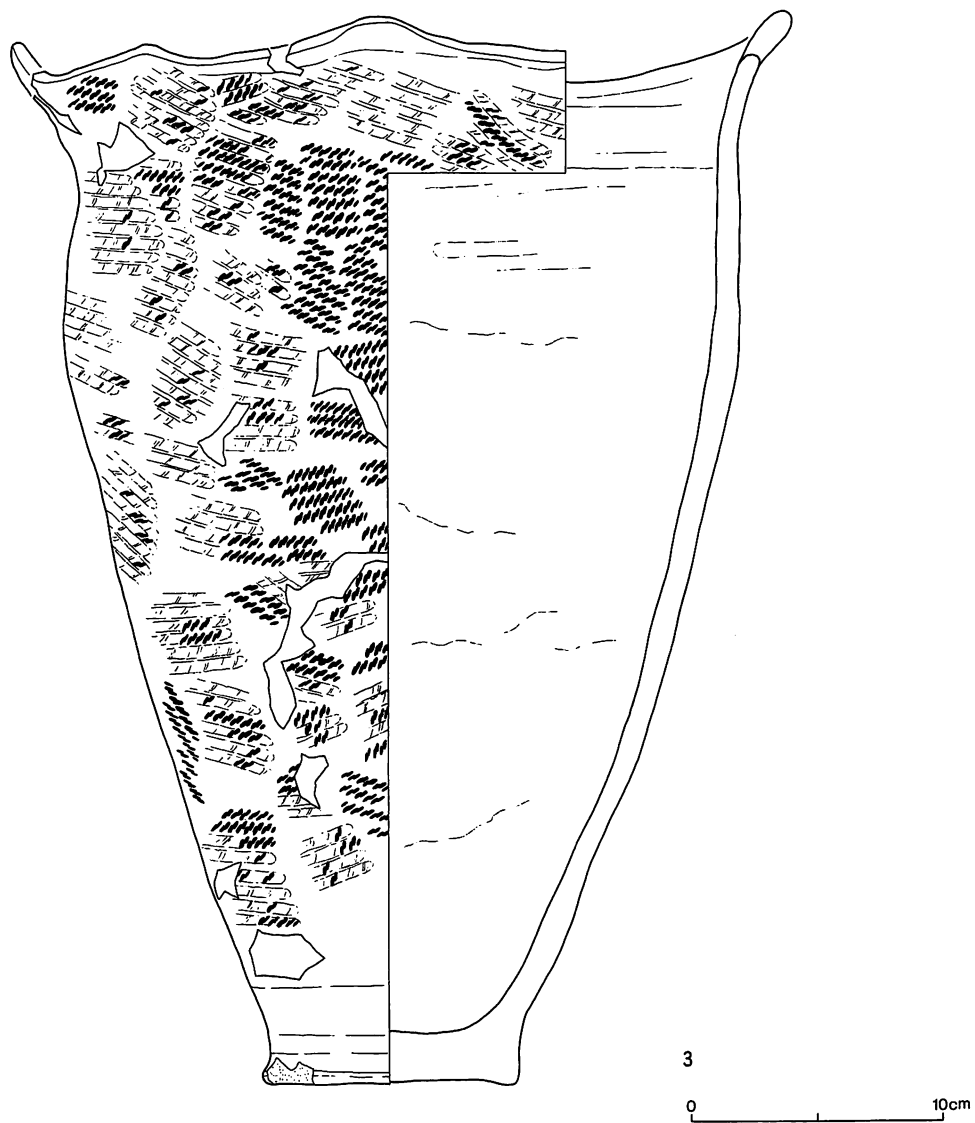
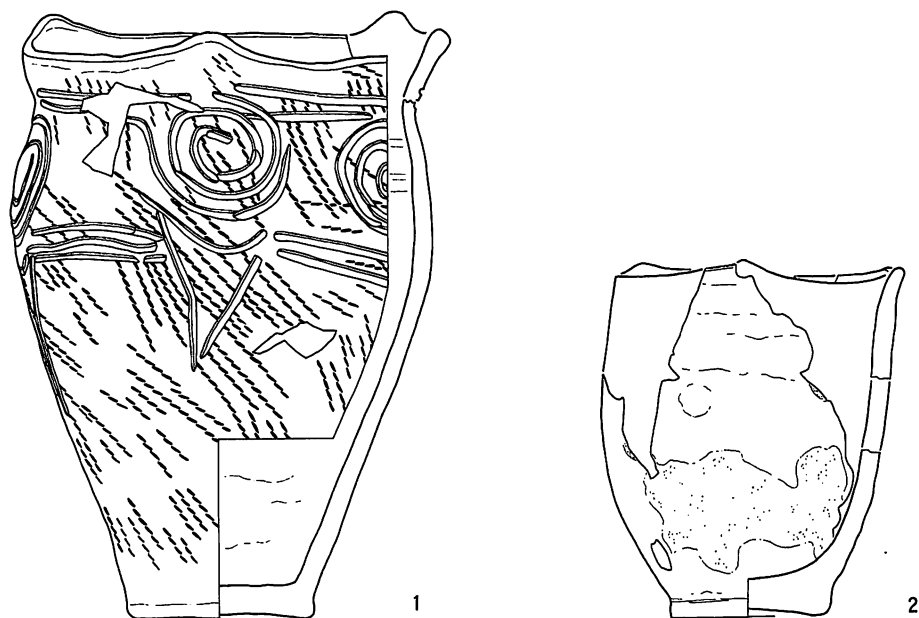
I H-3



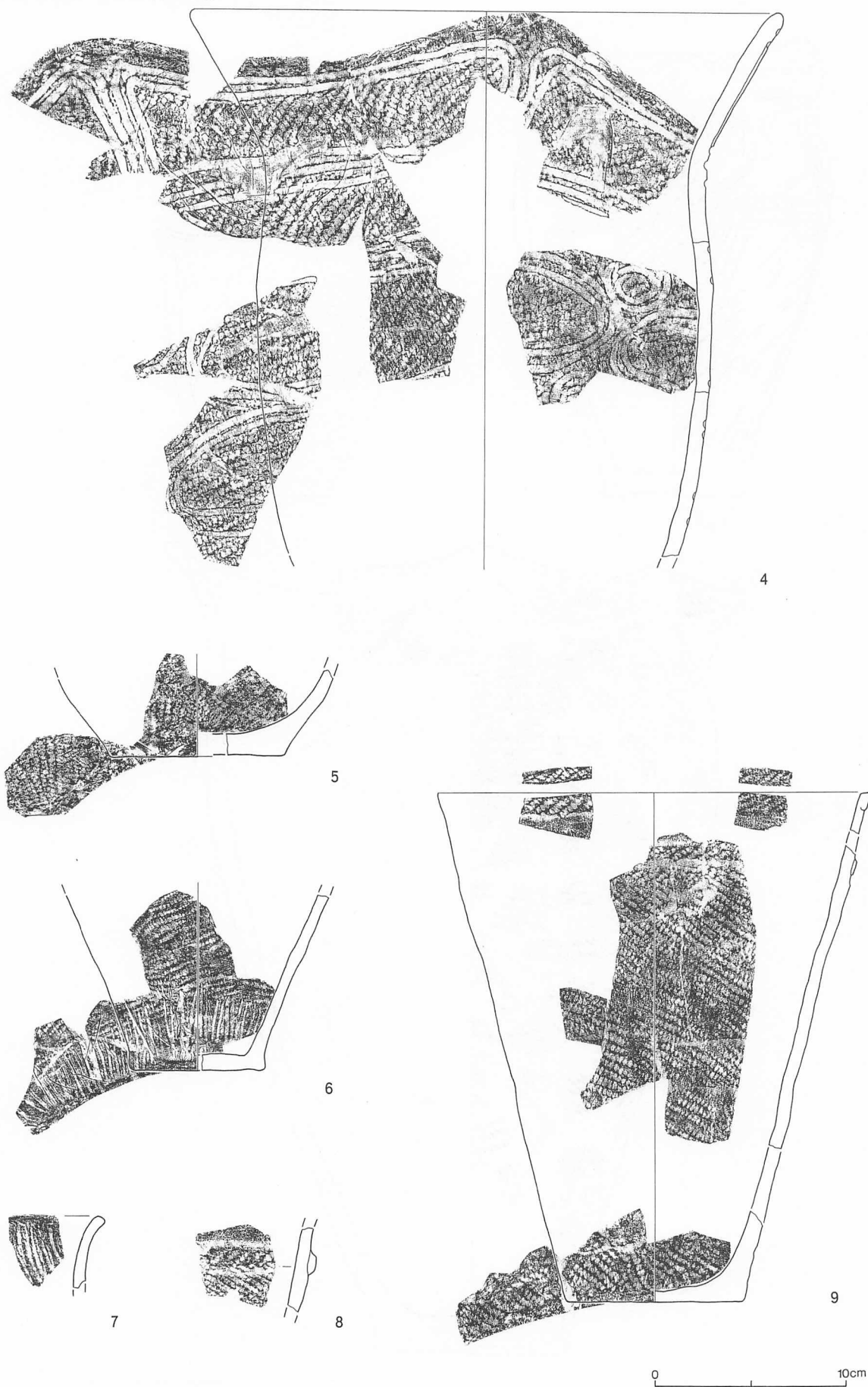
図IV-12 IH-3(1)



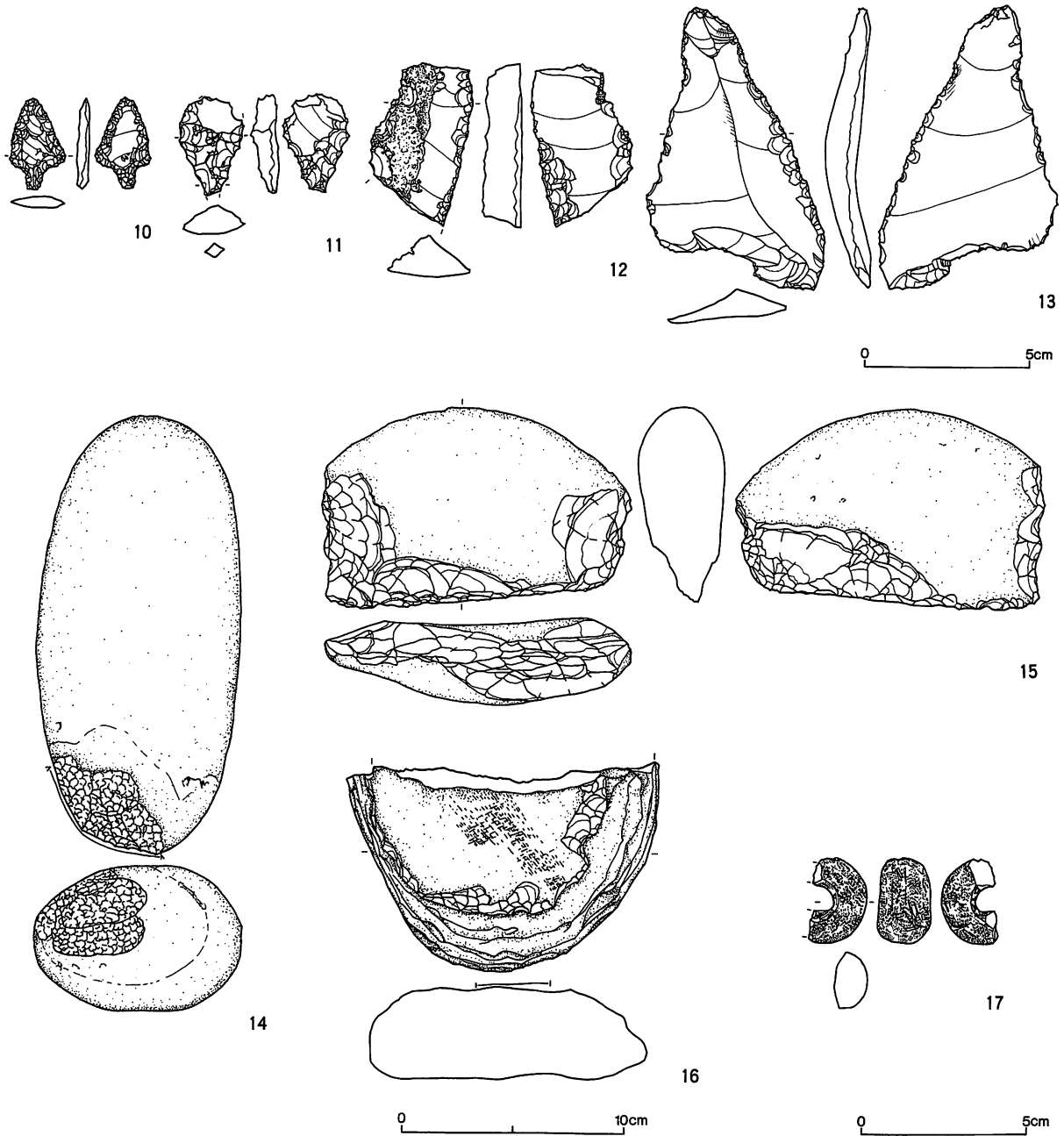
図IV-13 IH-3(2)



図IV-15 IH-3 出土遺物(1)



図IV-16 IH-3出土遺物(2)



図IV-17 IH-3 出土遺物(3)

石器 10は黒曜石製の石鏃。素材の剝離面を多く残し、周辺に細かい調整が加えられている。11は頁岩製の石錐で機能部を欠損している。12・13は頁岩製のスクレイパー。14は棒状礫を用いたたたき石で、敲打痕のある部分に、黒いタール状の付着物が見られる。15は扁平打製石器で、使用した痕跡は見当たらない。16は床面出土の石皿で、片面に擦痕がある。17は蛇紋岩製の玉で被熱している。住居の西側で、18の石棒片やイシイルカの焼頭骨などと伴に出土したものである。18は凝灰岩製の石棒で一部に原石面が残る。長さ49.9cm、幅8.8cm、厚さ8.4cm、重さ3,620gである。床面から碎片の状態出土した。131点のうち121点が接合している。端部の一方に浅い溝状のくぼみがあり、破片によって被熱、非被熱が見られることから、住居廃用の際に碎片の状態で床面に散布された後、住居が焼失したものと考えられる。(村田)



図IV-18 IH-3出土遺物(4)

IH-4 (図IV-19~22、図版25・41・42)

位置・立地：I・J-22・23 標高68~68.5mの細い尾根上

規模：5.00/4.36×(4.3)/(4.0)×0.70m

長軸方向：N-2°W

平面形：隅丸方形

確認・調査：木根などによる攪乱を除去後、暗色土壌の落ち込みを確認した。掘り下げたところ、炭化物や焼土粒が多量に含まれる土層を確認し、やや硬質の平坦面が検出され、竪穴住居跡と認定した。西側は急斜面で崩落しており、東側の崩落部分とともに竪穴住居跡の長軸側の輪郭は不明瞭である。

覆土：上位(土層1)はIV層~III層を主体とする自然堆積と考えられる土壌である。南側の壁際および覆土の中~下位(土層2~10)は、VI層を主体とし炭化物や焼土粒および硬質ロームブロックを多く含む土壌である。南側は壁際にIII~V層の土壌の流入が確認できる。

床・壁：床は平坦でやや堅くしまっている。VI層の緻密なシルト質粘土で、竪穴中央から南東寄りに炭化物と焼土粒が濃密に検出される範囲がある。壁は明瞭に確認でき、やや傾斜して立ち上がる。

付属遺構：竪穴住居跡の中央南寄りに埋設土器が残存していた。土器内部は下部にVI層の土壌を埋め込み、上部には焼土・炭化物が約10cmの厚みをもって堆積している。埋甕炉として使用されていたと推測される。そのほか柱穴6基と、炭化物を多量含む浅い土壇1基を検出した。

遺物出土状況：覆土下位からややまとまって出土した遺物が多い。竪穴住居跡中央部の覆土から土器1個体がまとまって出土している。床面から大型の礫が複数出土している。土器652点、土製品2点、石器各種14点、石製品4点、フレイク60点、礫306点、計1,038点が出土した。土器は大多数がIII群b類で、ほかにIV群a類1点がある。石製品の中にはIH-3で出土した石棒の破片が含まれている。

時期：住居跡の構造や出土土器などから、縄文時代中期後半である。

遺物：土器 1~14はIII群b類榎林式に属する。15・16はほぼ同時期の土製品である。

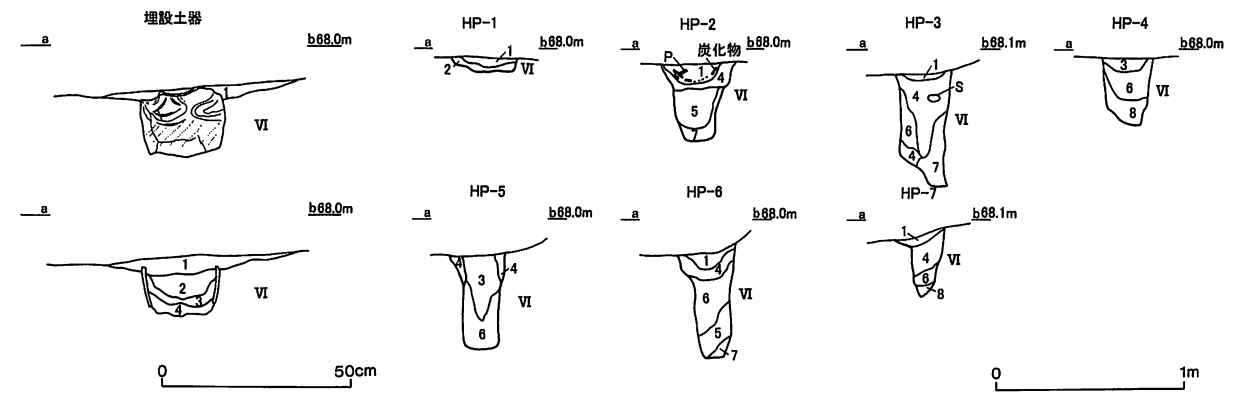
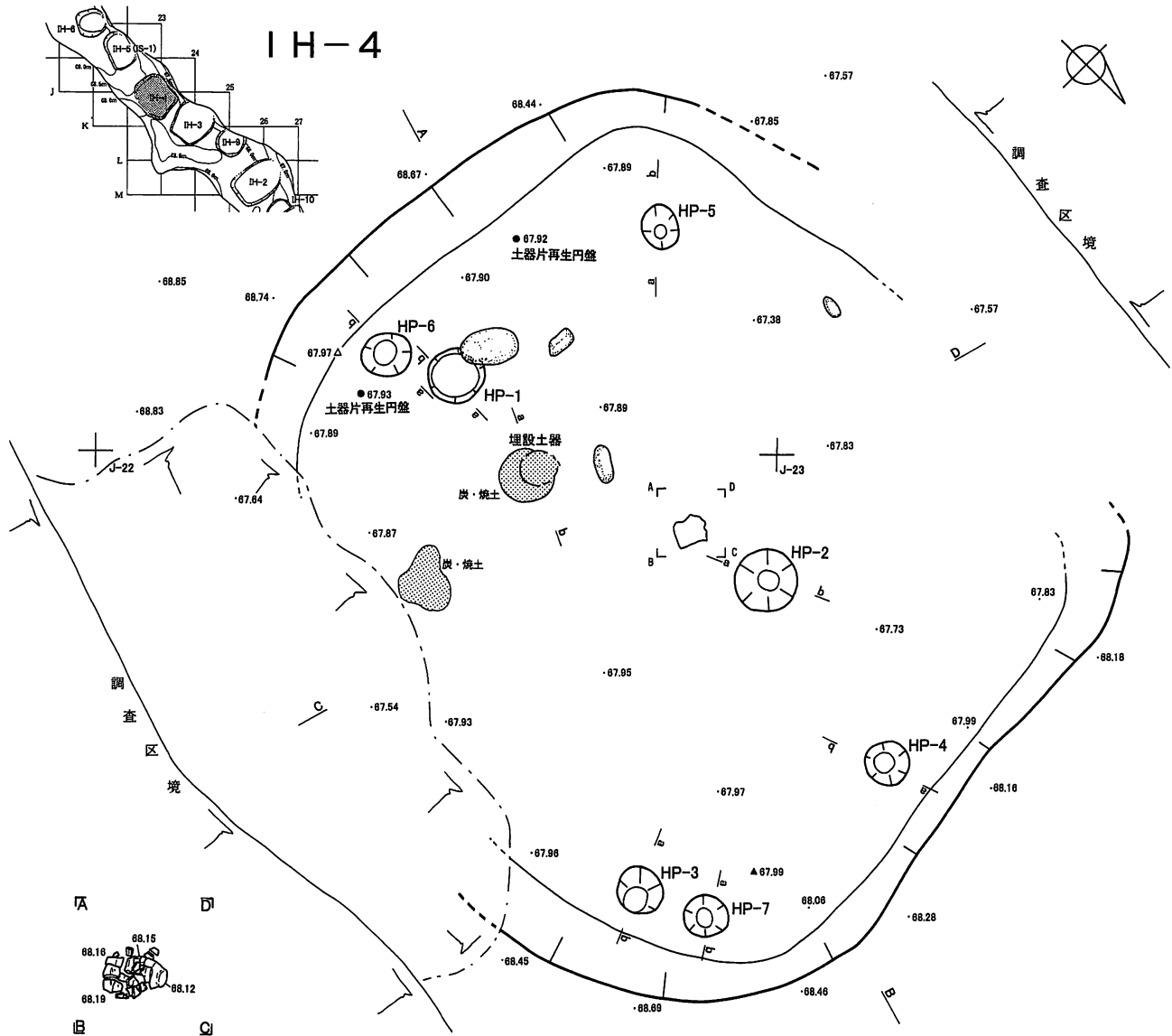
1は埋設土器。口縁および底部は欠落している。器面がやや磨滅している。外面上位は炭化物が付着しており、下位はやや磨滅している。内面は櫛歯状工具によるケズリ痕とその後のナデ調整が全面的に残存している。上端の断面はよく擦られていて、丸みを帯びている。2は住居跡の中央部出土の小型深鉢(図IV-19)。口唇上は連続刺突がやや弱く施されている。地文はない。器面は磨滅していて、全体的にざらついている。3は覆土の下位からややまとまって出土した深鉢。全面に撚糸文が施されている。上部は炭化物が多量に付着し、器面の剝落が著しく、被熱しているものと思われる。

4~7は撚糸文、8・11~13はLR縄文、10はRL縄文、9は櫛描文がそれぞれ地文である。4は頸部のくびれが緩やかな深鉢。炭化物が多量に付着している。5は口縁~胴部と底部の同一個体と思われる破片を推定で組み合わせた。全体的に赤褐色を呈し、器面はやや磨滅している。6・7は同一個体と思われる。波状口縁の波頂部に刺突が施されている。10は波状口縁の波頂部に円形刺突を施し、口唇上に沈線を引いている。12・13は頸部に貼付隆帯があり、12には連続刺突、13には沈線が施されている。いずれも大安在B式につながる要素をもっている。14はHP-2から出土した。

15・16は土器片再生円盤。いずれも撚糸文がみられる。側面はよく擦られている。(阿部)

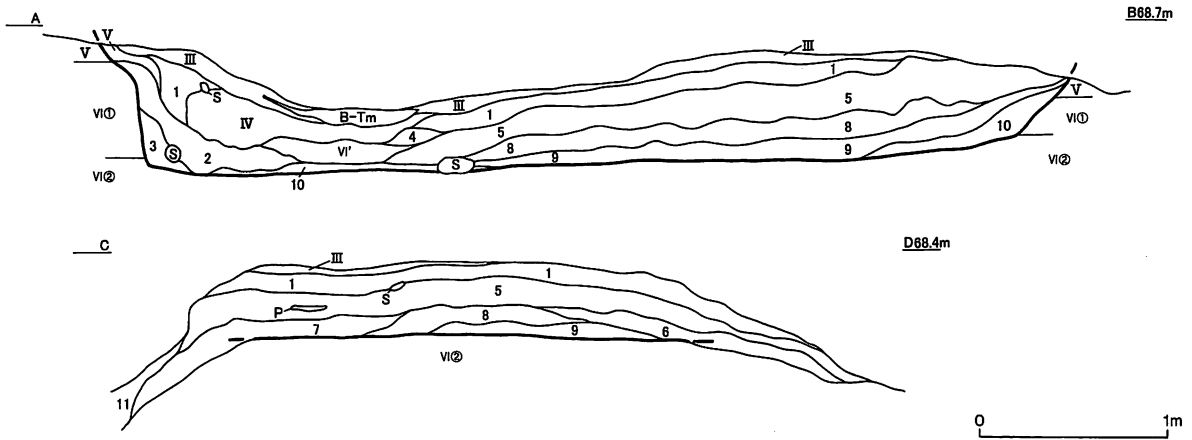
石器 17はポイント・ナイフ。18は尖頭状のつまみ付きナイフ。19・20は頁岩製の篋状石器。21は2側縁に刃部を持つスクレイパーで、一方は片面調整、もう一方は両面調整で刃部を作り出している。22は緑色泥岩製の石斧片にノッチ状の調整を加えたもの。23は片岩製の石斧。打ち欠き調整の後、全面研磨している。24は安山岩製の扁平打製石器。25は浅くくぼんだ砥面を持つ砥石。26は軽石製の石製品で両側から穿孔されている。27は円礫に円形のくぼみを持つ石製品である。非常にもろい砂岩製で、水洗・乾燥後に石材強化剤「OH100」を使って形態保持に努めた。(村田)

I H-4



- | | |
|--|--|
| <p>I H 4 - 埋設土器内の土層</p> <p>1 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘性中、しまり中。炭化物多量含む。</p> <p>2 褐色 (7.5YR 4/4~10YR 4/4) 粘性弱、しまりやや強。炭化物10%以下、焼土粒多量含む。色調、堅密度とも不均質。</p> <p>3 黒色 (7.5YR 1.7/1) 【炭化物】 しまりやや弱。炭化物50%以上、焼土粒少量含む。</p> <p>4 黒褐色 (7.5YR 3/2) 粘性やや強、しまり弱。炭化物10~20%含む。焼土粒やや多く含む。不均質。</p> | <p>I H 4 - HPの土層</p> <p>1 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘性中、しまりやや強。炭化物10~20%、焼土粒10%以下含む。ロームブロック少量含む。</p> <p>2 黒色 (10YR 1.7/1) 粘性やや弱、しまり中。炭化物50%程度。</p> <p>3 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性中、しまりやや強。炭化物10~20%、焼土粒10%以下含む。不均質。</p> <p>4 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘性やや強、しまりやや強。炭化物10%以下、ロームブロック多量含む。不均質。</p> <p>5 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘性やや強、しまり弱。炭化物やや多量含む。不均質。</p> <p>6 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性中、しまりやや弱。炭化物10%程度含む。不均質。</p> <p>7 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや強、しまり弱。炭化物10%程度含む。不均質。</p> <p>8 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘性強、しまりやや強。炭化物少量、ロームブロック少量含む。堅密度不均質。</p> |
|--|--|

図IV-19 IH-4(1)



I H-4の土層

III 黒褐色 (10YR 2/2~2/3) 粘性中、しまりやや強。B-Tm (灰黄褐色 10YR 6/2 シルト質) 多量含む。

IV 黒色 (10YR 1.7/1) 粘性やや強、しまり弱。

V 褐色 (10YR 4/6) [K o-g] しまり弱。

1 黒褐色~暗褐色 (10YR 2/3~3/3) [IV層相当] 粘性やや弱、しまりやや強。炭化物少量含む。

2 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや弱、しまり強。炭化物少量含む。均質的。

3 暗褐色~褐色 (10YR 3/4~4/6) 粘性やや強、しまりやや弱。炭化物少量、ブロック状の粘土塊やや多量含む。不均質。

4 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3~4/6) 粘性中、しまり強。炭化物10~20%含む。ブロック状の硬質粘土塊多量含む。不均質。

5 2と同様だが、炭化物は2より多く含む。

6 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性強、しまり弱。炭化物わずかに含む。

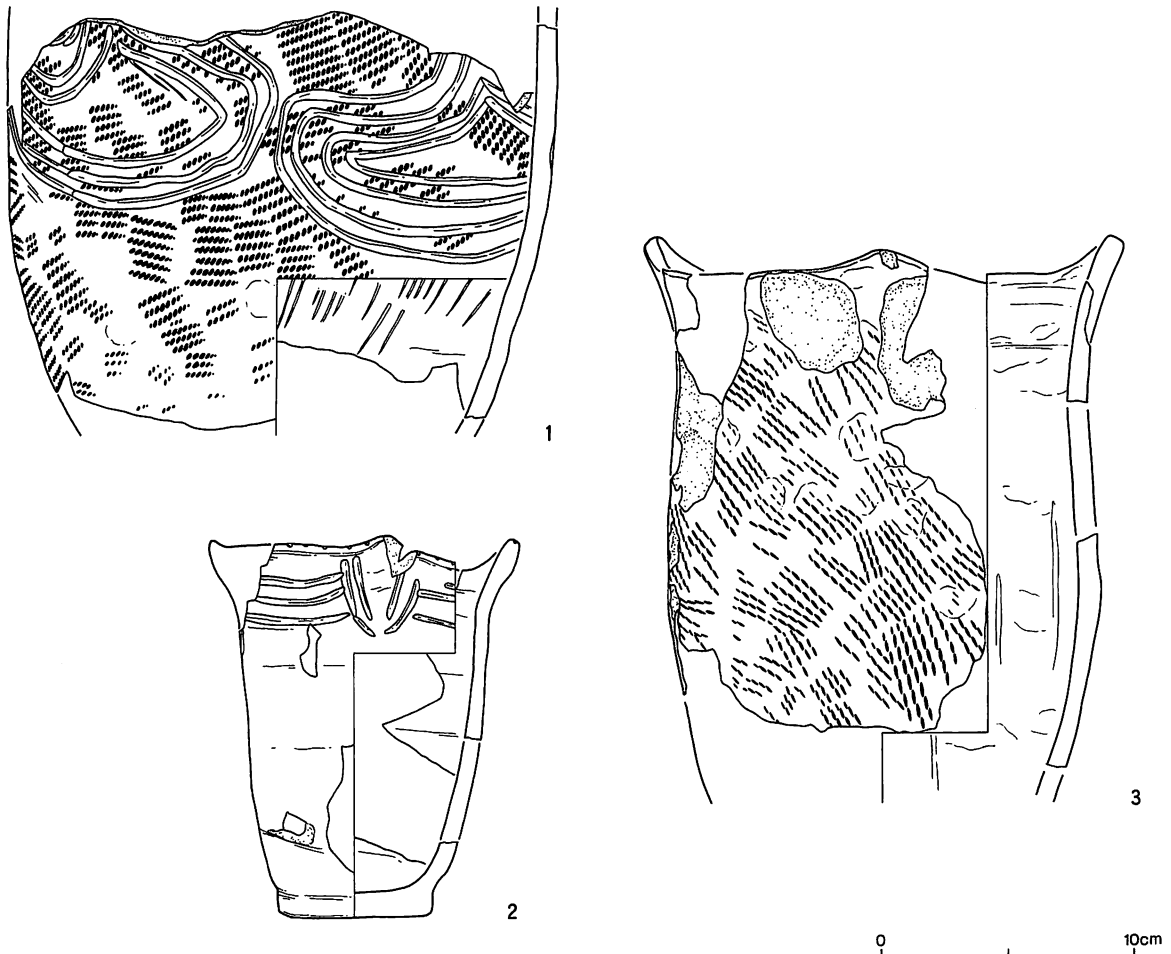
7 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) [8+9] しまりやや弱。

8 4と同様。

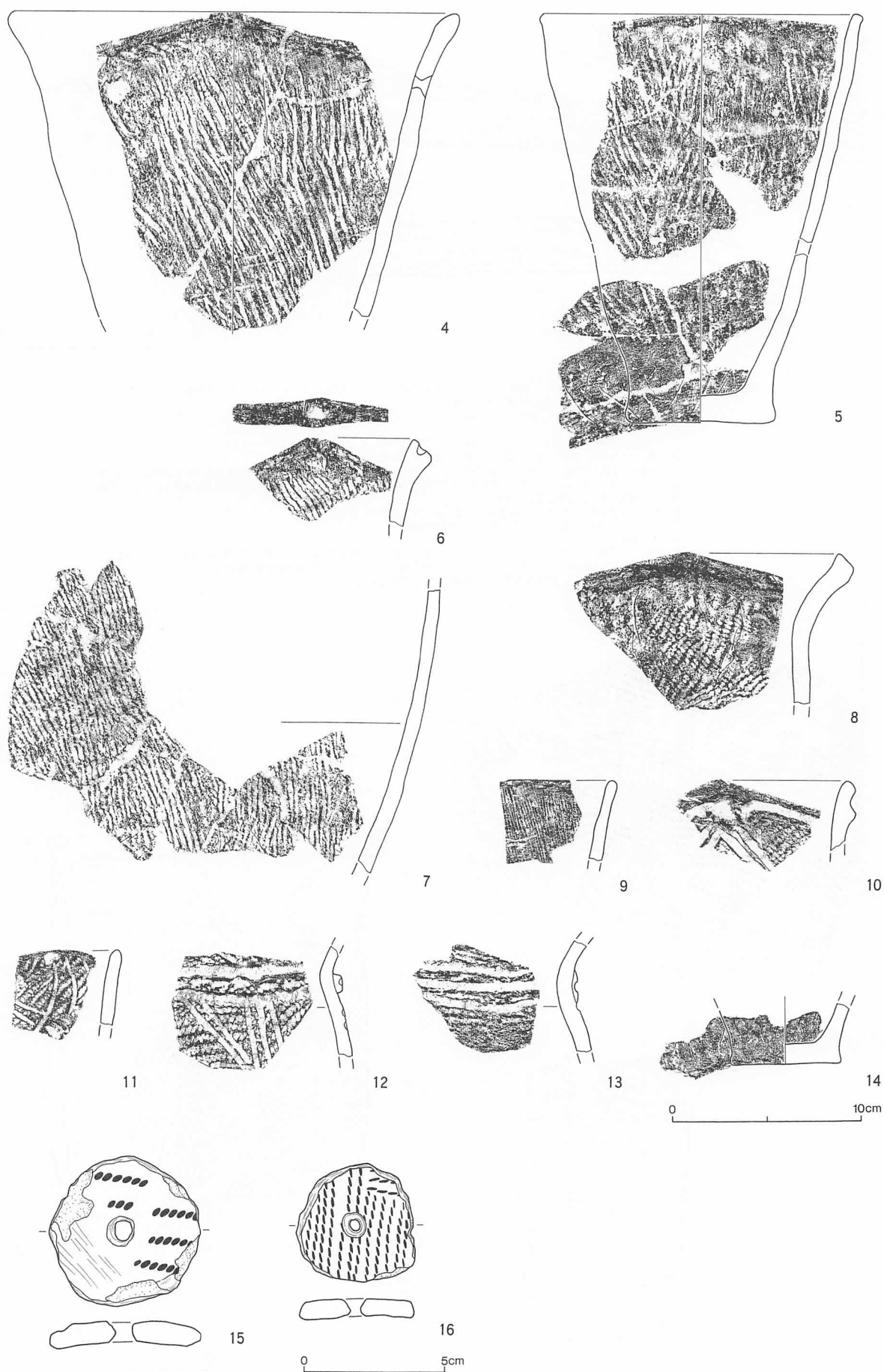
9 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや強、しまりやや弱。炭化物20~50%含む。焼土粒わずかに含む。やや不均質。

10 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性中、しまり強。炭化物5%以下、ブロック状の粘土塊少量含む。

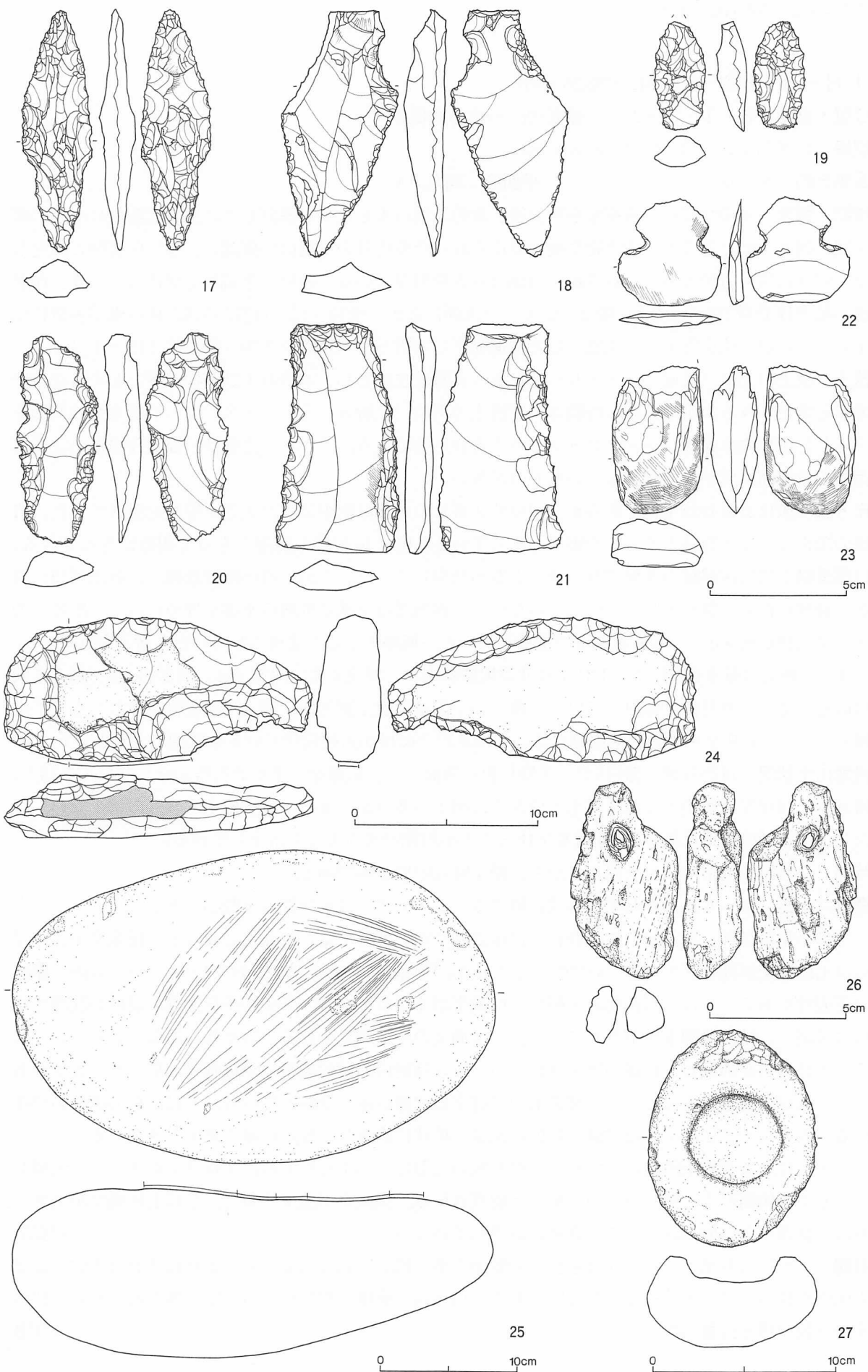
11 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性やや強、しまり非常に弱。根多く含む。



図IV-20 IH-4(2)・IH-4出土遺物(1)



图IV-21 IH-4 出土遺物(2)



图IV-22 IH-4 出土遺物(3)

I H-5 (図IV-23・24、図版26・43)

位置・立地：H・I-21・22 標高69mの細い尾根上

規模：4.36/3.82×(2.8)/(2.3)×0.56m

長軸方向：N-12°E

平面形：隅丸方形

確認・調査：木根などによる攪乱を除去後、暗色土壌のまとまりを確認した。土層観察用に十字の帯を残し掘り下げたところ、炭化物や焼土のみられるやや硬質の平坦面を確認し、竪穴住居跡と認定した。形状は隅丸方形と考えられるが、南側は丸みを帯びている。西側は急斜面で崩落しており、住居跡の輪郭は不明である。なお、覆土上位および床面付近から径10~15cm程度の楕円体の礫が多量に出土しているが、住居廃絶後の遺物として別遺構として扱った(IV章-2(3) 礫集中「IS-1」)。

覆土：覆土の上位(土層1・2・6)はIV層~III層を主体とし、木根および腐植土層などを含む自然堆積と考えられる土壌である。壁際および覆土の下位(土層3~5・7・8)は、VI層またはV層を主体とし炭化物や硬質ロームブロックを多く含む土壌である。これらの土層は、竪穴住居跡の北側と西側の急斜面に向かって傾斜しているものが多い。

床・壁：床はおおむね平坦であるが、中央部北寄りの一部は樹根により大きく攪乱を受けていた。VI層の緻密なシルト質粘土で、やや堅くしまっている。壁は50°程度の斜度をもって明瞭に立ち上がる。

付属遺構：竪穴住居跡の北東寄りに埋設土器が残存していた。この土器の器壁は脆く、取上げ時に細かく砕けたため、復元・図示は行っていない。土器内部は下部にVI層の土壌を埋め込み、上部には焼土・炭化物が約8cmの厚みをもって堆積している。埋甕炉として使用されていたと考えられる。

また、柱穴3基を確認した。HP1は北東壁際にあり、埋設土器に隣接する。深さ60cmを超える大型のもので、やや外側に傾斜している。覆土の上位は埋設土器同様、焼土・炭化物が厚みをもって堆積している。HP2・3はやや内側に傾いている。このほかの柱穴状ピットは確認できなかった。

遺物出土状況：III群b類土器615点、土器片再生円盤2点、石鏃など定形的石器10点、フレイク13点、礫186点、計826点が出土した。覆土下位からの出土が多いが、まとまって出土するものは少ない。ただし、南東壁際付近に径5cm程度を主体とする小円礫がまとまって出土している。

時期：住居跡の構造や出土土器などから、縄文時代中期後半である。

遺物：土器 1~6はIII群b類榎林式に属する。7・8はほぼ同時期の土製品である。

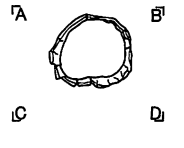
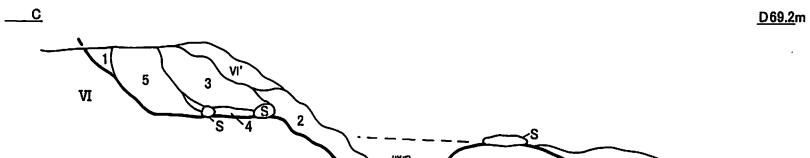
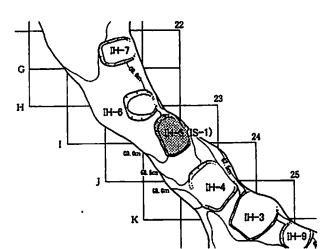
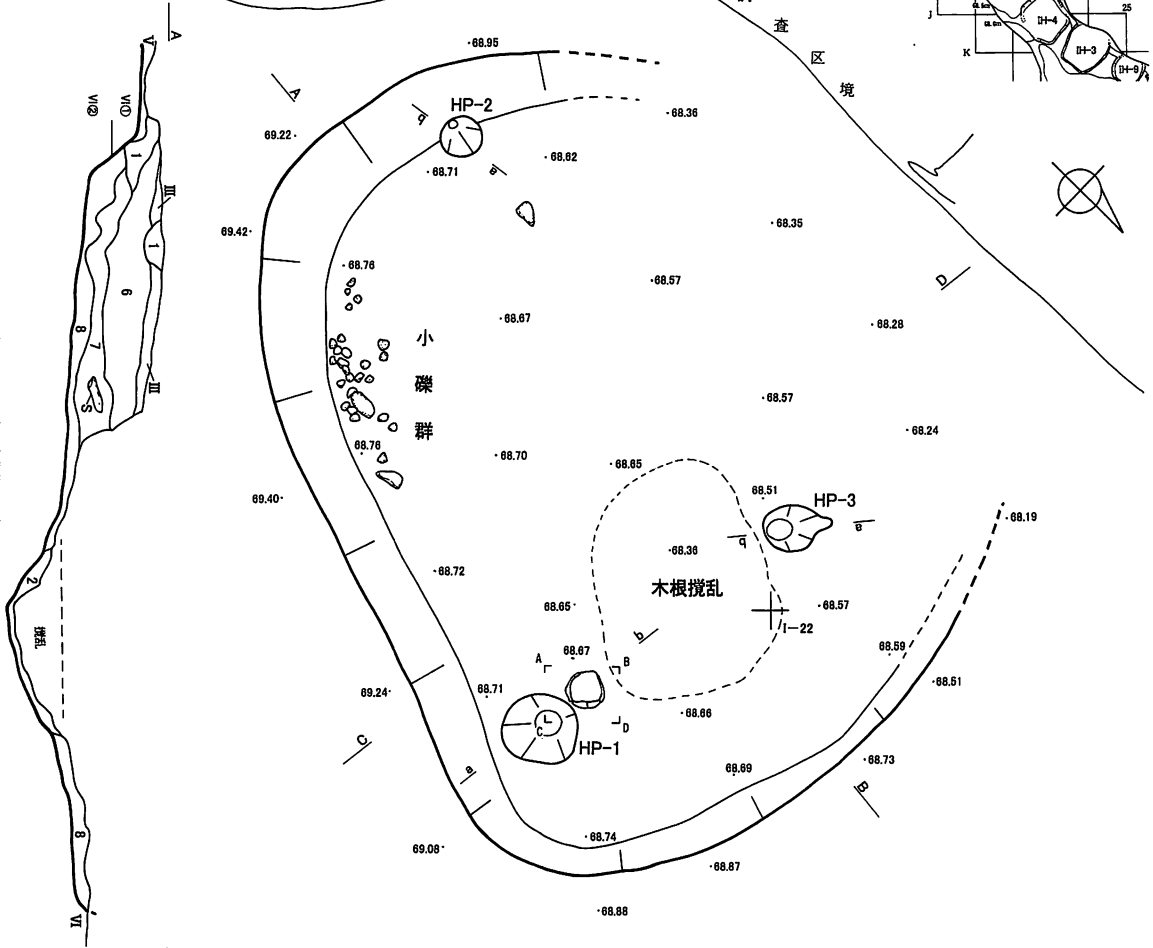
1は小型の深鉢。頸部がややくびれ、口縁は緩やかに外反する。外面上半には主に撚糸文が、下半にはLR縄文が施されている。やや磨滅している。内面はていねいに磨かれている。2・3は同一個体の可能性がある。2は口唇が丸みを帯び、口縁下がくびれている。2条の平行沈線と縦位の沈線で枠状に区画し、蛇行沈線を垂下させている。3は渦文の一部が見られる。いずれも器面がざらついている。4は口唇が外傾し、沈線が施文されている。5は縦位の貼付隆帯に連続刺突が施され、大安在B式につながる要素をもっている。波頂部の口唇上に沈線が短くひかかれている。6は小型の深鉢の頸部付近とみられる。2条の平行沈線と縦位の沈線で枠状に区画し、蛇行沈線を垂下させている。

7・8は土器片再生円盤。いずれもIII群b類の土器片を加工したもの。7は3分の2ほどが欠損しているが、側面がよく擦られている様子が観察される。撚糸文が地文である。8はLR縄文が地文で、やはり側面がよく擦られている。貫通孔が穿れていない。(阿部)

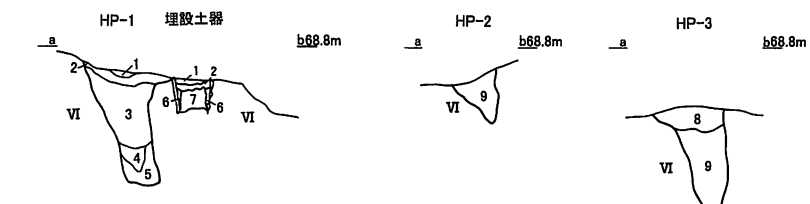
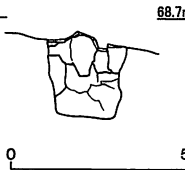
石器 9~11は有茎の石鏃。9は素材の剝離面を多く残し、周辺に細かい加工が施されたもの。12は尖頭部を持つスクレイパーで、泥岩製である。13・14は側縁に片面加工の刃部が施されたもの。15は安山岩製の扁平打製石器。(村田)

I H-5

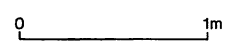
- I H-5の土層
 6 黒褐色 (10YR 2/3) [N'+V] 褐色粘土 (K o-g) 10~20%含む。しまり中。炭化物少量含む。
 7 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性中、しまり中。黒色土およびK o-g多量混入。不均質。
 8 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘性やや強、しまり強。シルト質。炭化物10%程度含む。



- I H-5の土層
 N' 黒褐色 (10YR 2/3) 粘性中、しまりやや弱。K o-g少量含む。
 1 黄褐色 (10YR 5/6) [K o-g] しまりやや弱。均質的。粒子やや細かい。
 2 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性中、しまり非常に弱。木根多量混入。
 3 暗褐色 (10YR 3/4) 粘性中、しまりやや強。炭化物多量。下部に硬質粘土壤を多量含む。
 4 黒色 (2.5Y 2/1) 粘性中、しまり強。炭化物少量含む。
 5 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性やや強、しまりやや強。炭化物少量含む。



- I H5-HPの土層
 1 褐色~暗褐色 (10YR 4/4~3/3) 粘性弱、しまりやや弱。砂質。炭化物10~20%、焼土粒多量含む。K o-g含む。
 2 黒褐色~黒色 (10YR 3/1~1.7/1) 粘性やや弱、しまりやや弱。炭化物50%程度。
 3 オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘性やや強、しまりやや弱。炭化物10%程度、ロームブロック多量含む。不均質。
 4 褐色 (10YR 4/4) 粘性やや強、しまり中。K o-gやや多く含む。ロームブロック少量。
 5 褐色 (10YR 4/4) 粘性やや強、しまり弱。K o-gやや多く含む。炭化物少量含む。
 6 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性強、しまり弱。炭化物わずかに含む。
 7 黄褐色 (2.5Y 5/4) 粘性強、しまり強。炭化物少量含む。黒色土混入。やや不均質。
 8 黒褐色 (10YR 2/2) 粘性強、しまり弱。木根多く含む。
 9 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性中、しまりやや強。炭化物10%以下含む。ロームブロックやや多く含む。不均質。



図IV-23 IH-5

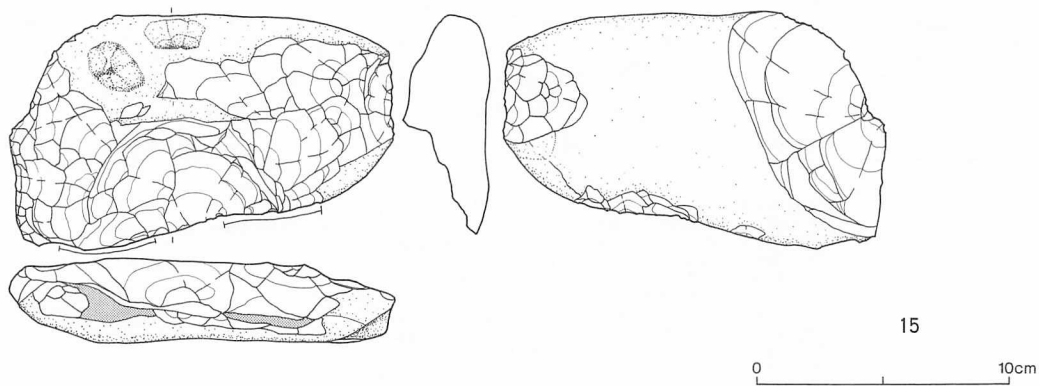
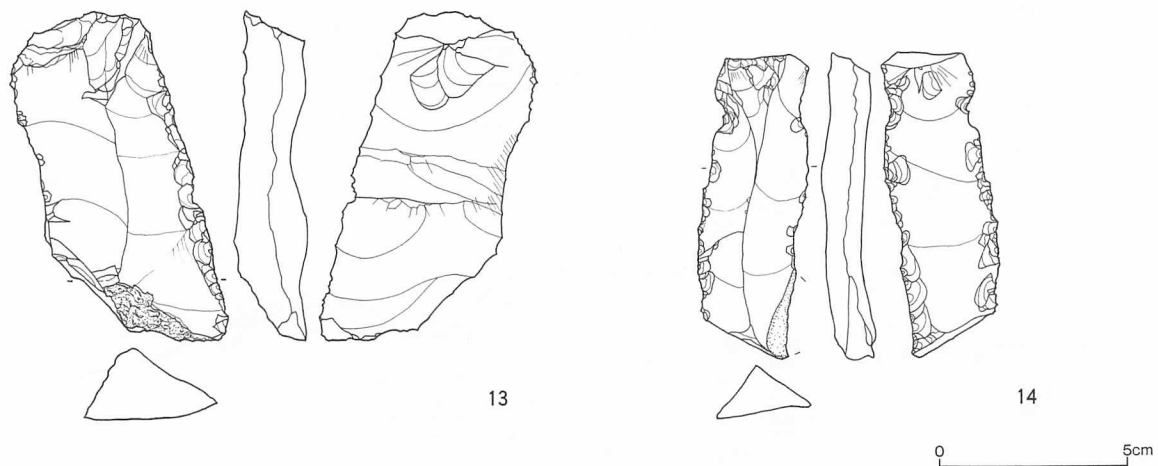
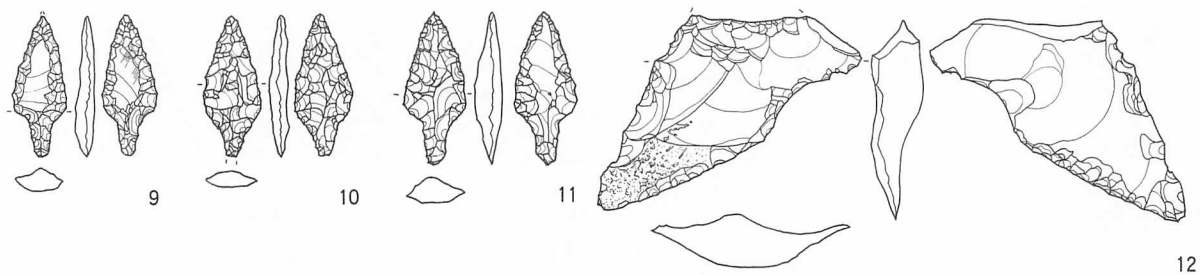
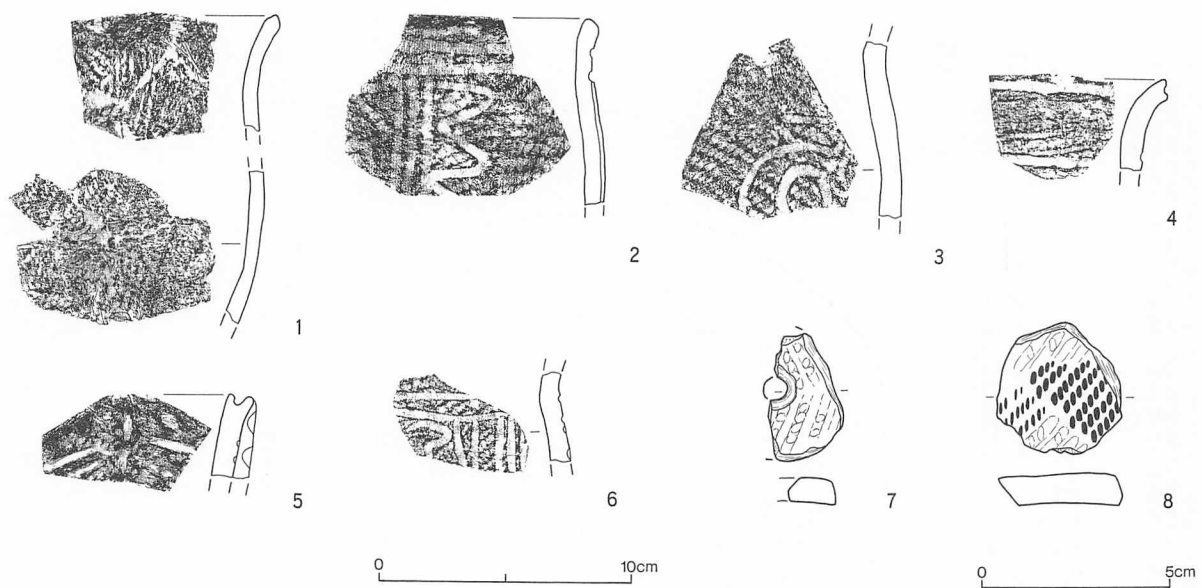


图 IV-24 IH-5 出土遺物

IH-6 (図IV-25~29、図版27・28・43・44)

位置・立地：G・H-20・21 標高約69mの細い尾根上に位置する。

規模：3.19/3.08×3.28/2.48×1.0m

長軸方向：N-55°-W

平面形：隅丸方形

確認・調査：火山灰(Ko-d)と攪乱層を除去した段階で、浅い円形のくぼみとして確認した。グリッドラインに沿って直行する土層観察用の壁面を設定し、トレンチ調査を行った。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がり認められ、また、埋設土器が出土したことから住居跡と判断した。遺物は自然堆積層(覆土1・2)を覆土1で、遺構覆土を覆土2で床面出土のものは床面で取り上げている。炉周辺の土壌をサンプリングしフローテーション作業を行った。また、床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定分析を行っている。

覆土：遺構周辺は伐採作業時に削平されている。焼土粒・炭化物がブロック状に大量に混じる。床面には住居の構造材と思われる炭化材の拡がり認められた。焼失住居である。覆土中に被熱し赤色硬化した土や焼土が見られることから、土葺きの屋根であった可能性が高い。

床、壁：床はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。斜面崩落により北西側の一部が失われている。

付属遺構：中央のやや北よりの床面に、炉として使用した埋設土器が1カ所設置されている。口縁部と底部を打ち欠いた土器を、土器の形に合わせて掘り込んだ床面に、地山のローム(VI層)で固定している。柱穴状のピットは4基検出したが規則的な配列は認められない。

遺物出土状況：竪穴廃棄後に投げ込まれたと思われる土器が、2個体出土した。図IV-27-1は口縁部を含む上半部が床面から、底部を含む下半部が遺構覆土と自然堆積層の間から出土した。上半部が床面に置かれ、竪穴が焼失し上屋が崩落した後に下半部が投げ込まれたものと推測できる。

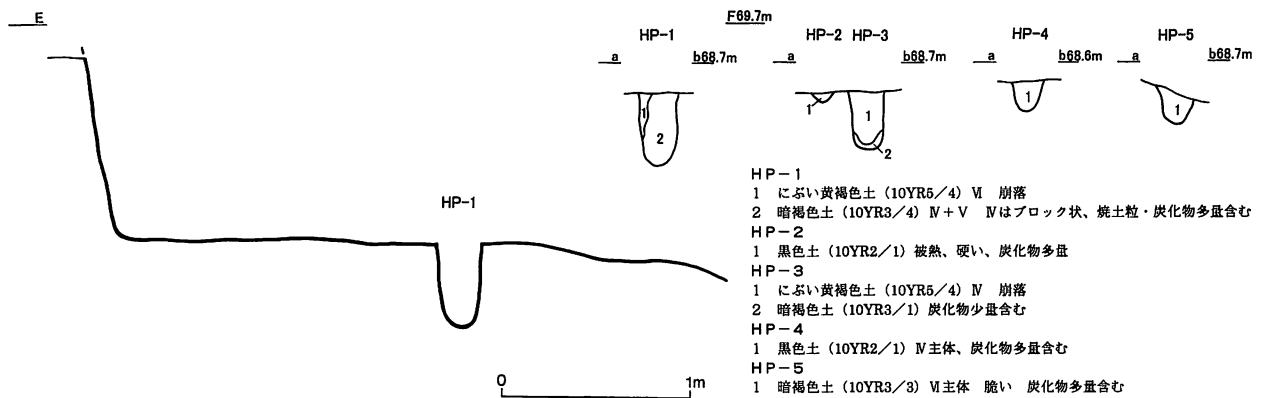
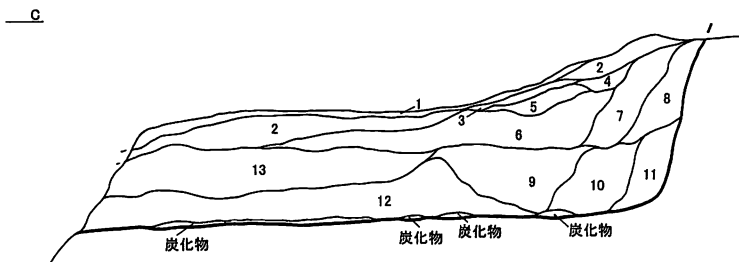
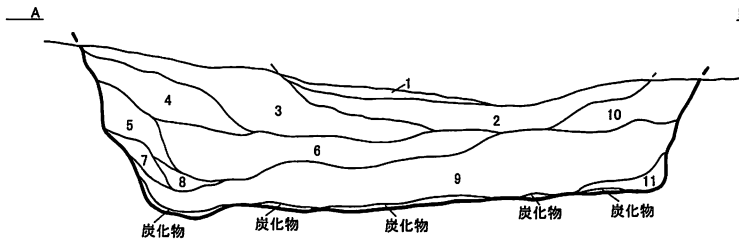
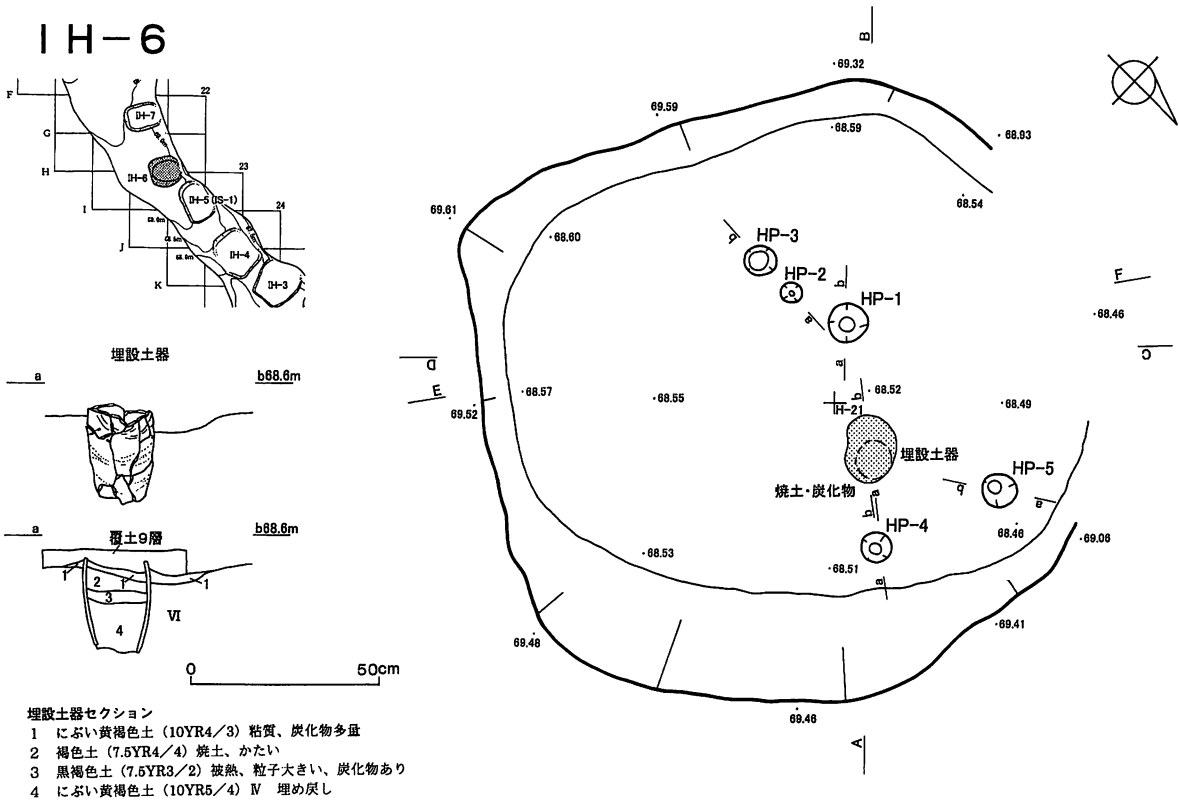
時期：出土遺物から、縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。(村田)

遺物：土器 すべてⅢ群b類榎林式に属する。

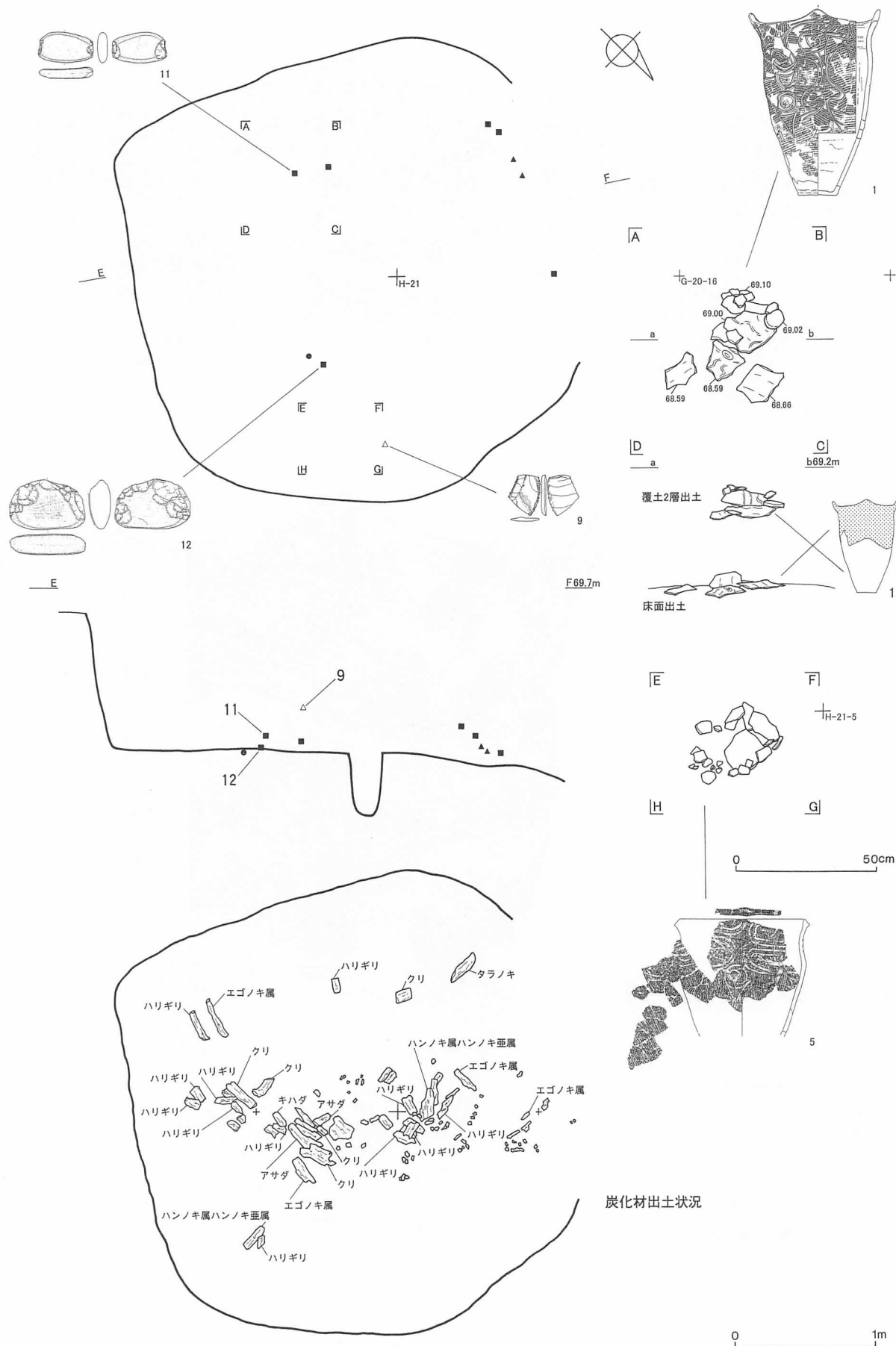
1は器高約40cmの深鉢。器体の上半は覆土の下位から、下半は覆土の中位からそれぞれまともに出土したものが接合した。上半には多量の炭化物が付着している。地文のLR縄文は外面全面に施され、おおむね明瞭である。文様は沈線文のみである。渦文・剣菱文をえがくなど榎林式に典型的な文様要素をもちながら、不規則な配列なので、ここには展開図も示した。頸部の2条の平行沈線は連続しておらず、円文・弧線文・蛇行沈線など多様な文様が見られる。2は埋設土器。深鉢の胴部が用いられており、口縁および底部は欠落している。胴部がやや張り出しているが、おおむね直立している。頸部に平行沈線があり、連続して弧線文が配列されている。さらにその下にやや乱れた弧線文や山形文が施されている。地文の撚糸文はやや細かく、一部方向をたがえた圧痕が見られる。外面上位は炭化物が付着している。全体的に赤褐色を呈し、磨滅が著しくざらついている。上端の断面は磨滅して丸みを帯びている。3は深鉢の底部付近の破片で、撚糸文の地文に加えて下部に多条の沈線を縦位に施している。4も地文が撚糸文。やや磨滅している。5は覆土の上位からややまともに出土した深鉢。胴部の張り出しや頸部のくびれがやや強い。胴部の文様は渦文・剣菱文がえがかれ、榎林式の典型的な文様要素であるが、頸部に施される2条の平行沈線が上下に分かれ曲沈線となっている。地文は、個々の櫛歯がやや幅広の工具による条痕文が施されている。(阿部)

石器 6・7は石鏃。6は床面出土のもの。8は石錐。機能部を欠損している。9は湾曲した刃部を持つスクレイパー。10は扁平打製石器。両端を打ち欠いて整形している。11・12は扁平打製石器原材。11は端部にタール状の付着物がある。(村田)

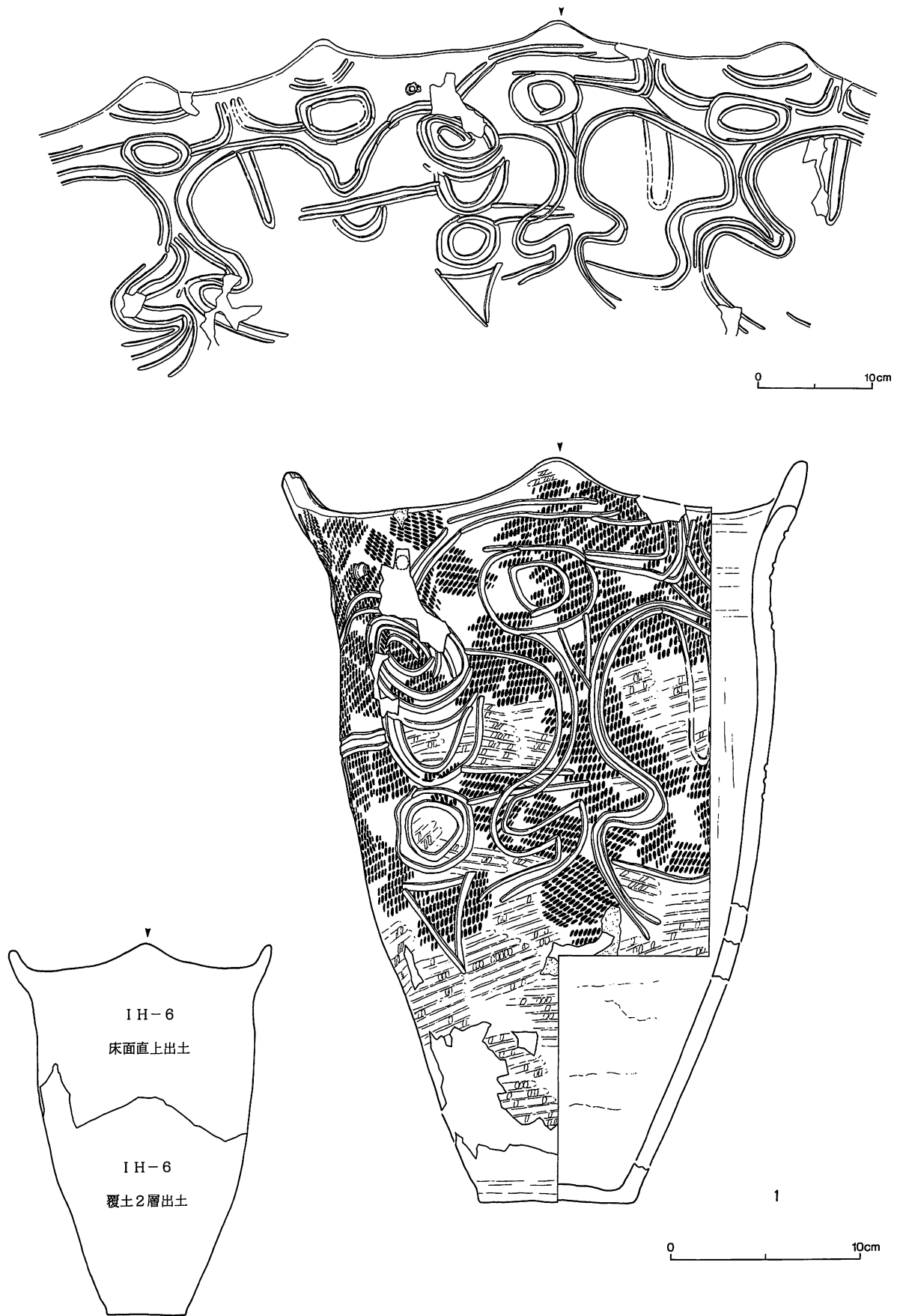
I H-6



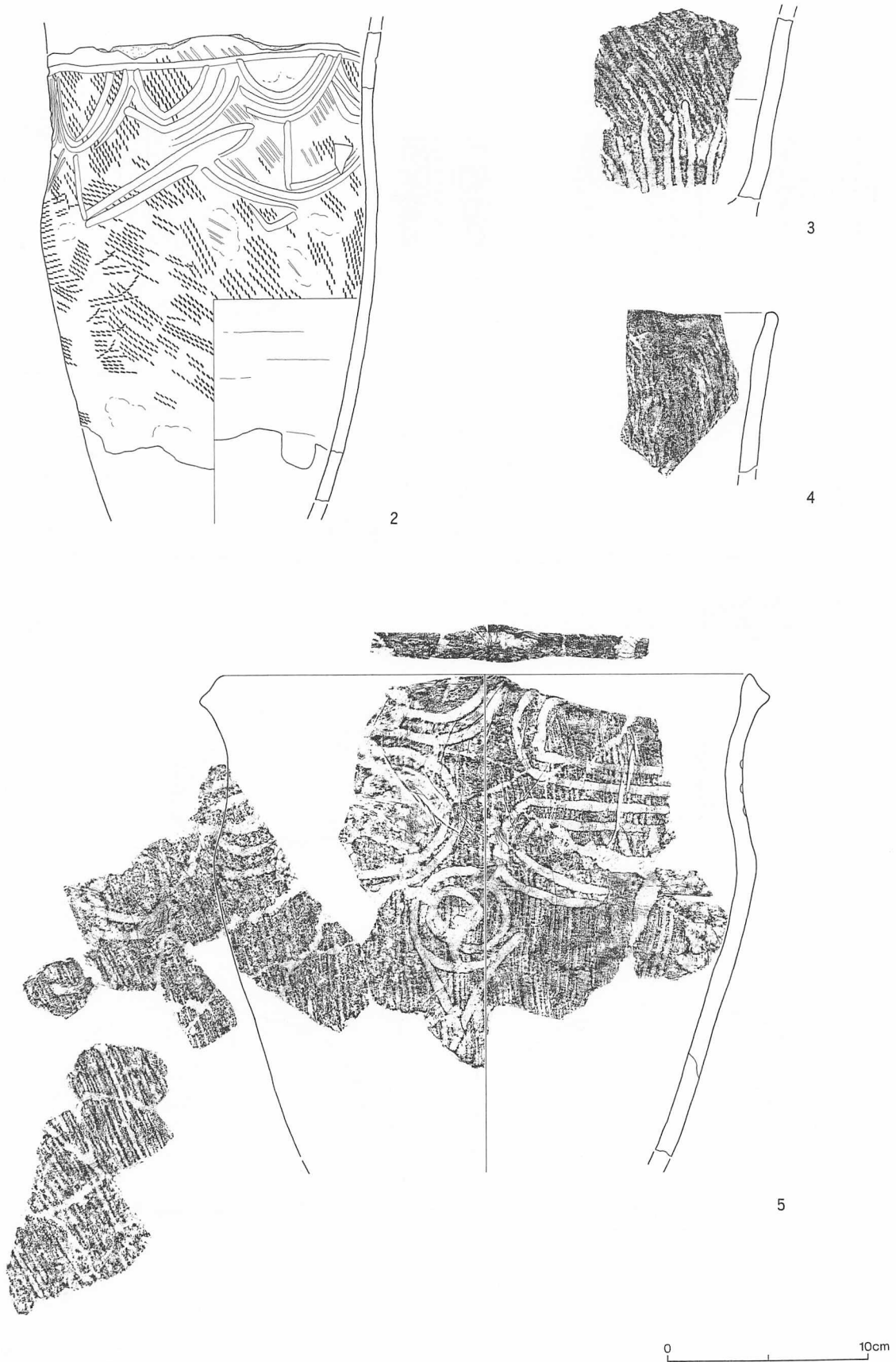
図IV-25 IH-6(1)



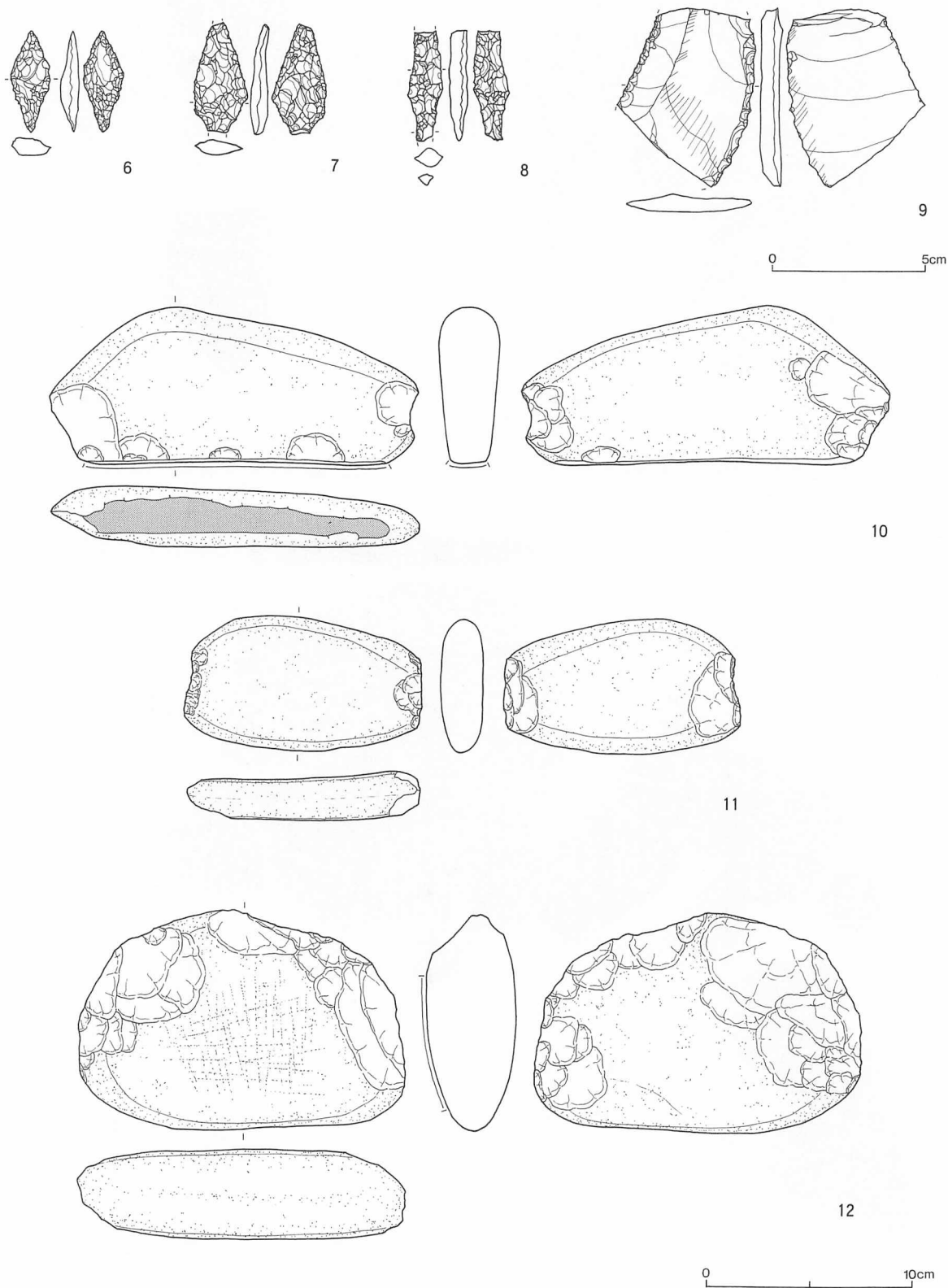
図IV-26 IH-6(2)



图IV-27 IH-6 出土遺物(1)



図IV-28 IH-6 出土遺物(2)



図IV-29 IH-6 出土遺物(3)

IH-7 (図IV-30・31、図版29・45)

位置・立地：F-19・20 標高約69m~69.5mの尾根上に位置する。

規模：3.68/3.36×2.88/2.88×0.6m

長軸方向：N-58°-W

平面形：隅丸形

確認・調査：火山灰(Ko-d)と攪乱層を除去した段階で、浅い円形のくぼみとして確認した。直交する土層観察用の壁面を設定し、トレンチ調査を行った。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がりが認められたため、住居跡と判断した。

覆土：遺構周辺は伐採作業時に削平されている。大半がIV層を主体とする自然堆積層であるが、壁際の覆土には炭化物・焼土粒が含まれる。

床、壁：床はほぼ平坦、西側が失われている。壁は急に立ち上がる。

付属遺構：炉、柱穴などは確認できなかった。

遺物出土状況：覆土中にIII群b土器が散見される程度である。

時期：出土遺物から、縄文時代中期後半III群b類土器の時期である。(村田)

遺物：土器 すべてIII群b類榎林式に属する。

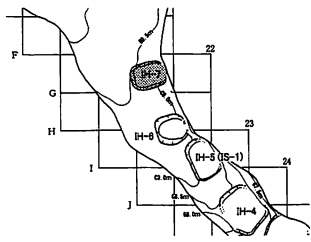
1は主に覆土の上位からややまとまって出土した深鉢。底部が比較的小さく、胴部があまり張り出さず、口縁部が緩やかに外反している。緩やかな波状口縁だが、やや平縁化している。全面にLR縄文が施文されている。補修孔が2組ある。一部に撚糸文が見られる。

2は胴部に最大径をもつ深鉢。口縁はえぐり取られたように窪んでおり、口唇が磨かれている。口縁直下は強く括れ、無文部を設けている。胴部は、杵状の区画に蛇行沈線および円文をえがいている。

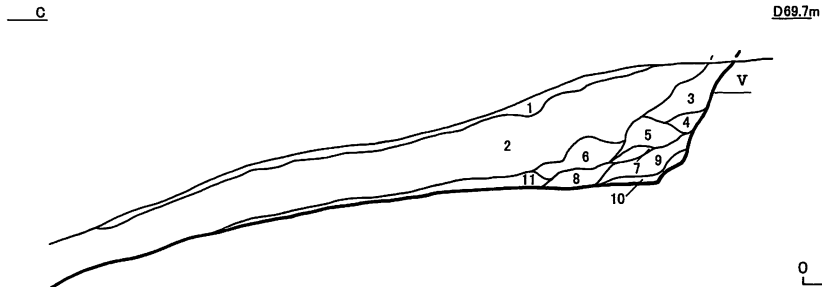
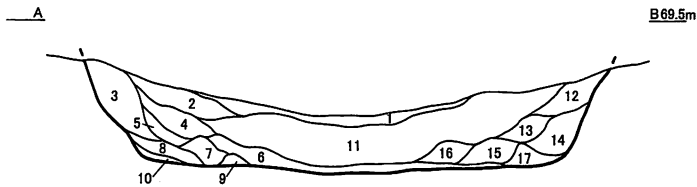
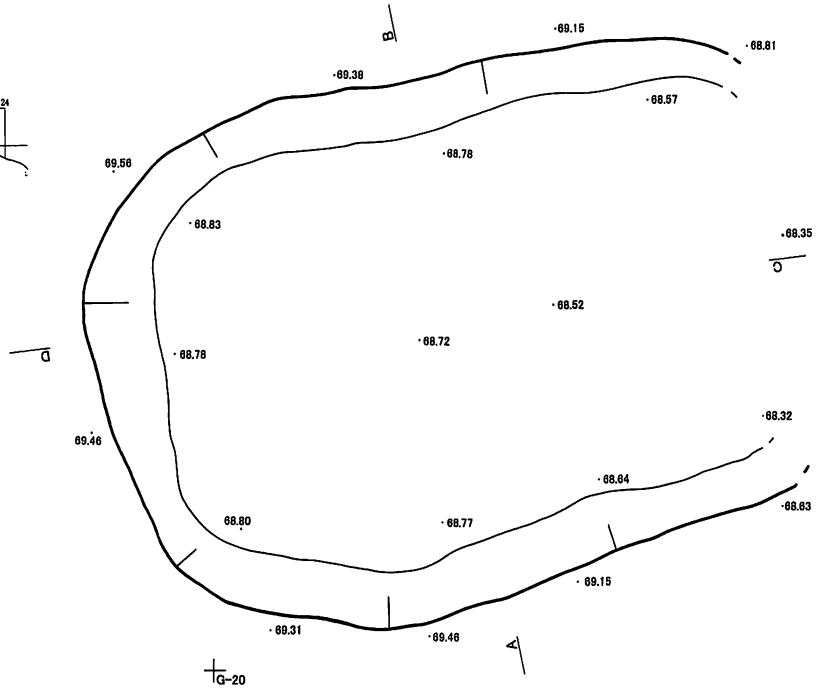
3は頸部に2条の沈線をえがき、口縁には「く」の字状の沈線を連続して配している。口唇上にも沈線を施している。また5の口唇上にも沈線、7の口唇上には連続刺突が施されている。4の櫛描文はやや間隔が広く、多重沈線のように観察される。6は撚糸文が交差している。7・8は同一個体と思われる。胎土に細かい砂粒を多く含んでいる。無文地に細沈線で弧線文などがえがかれている。底部は小さく、やや張り出している。(阿部)

石器 9は浅いくぼみを持つ砥石。10は板状礫を分割し、周辺を加工した石皿。(村田)

I H-7



±F-20



I H-7の土層

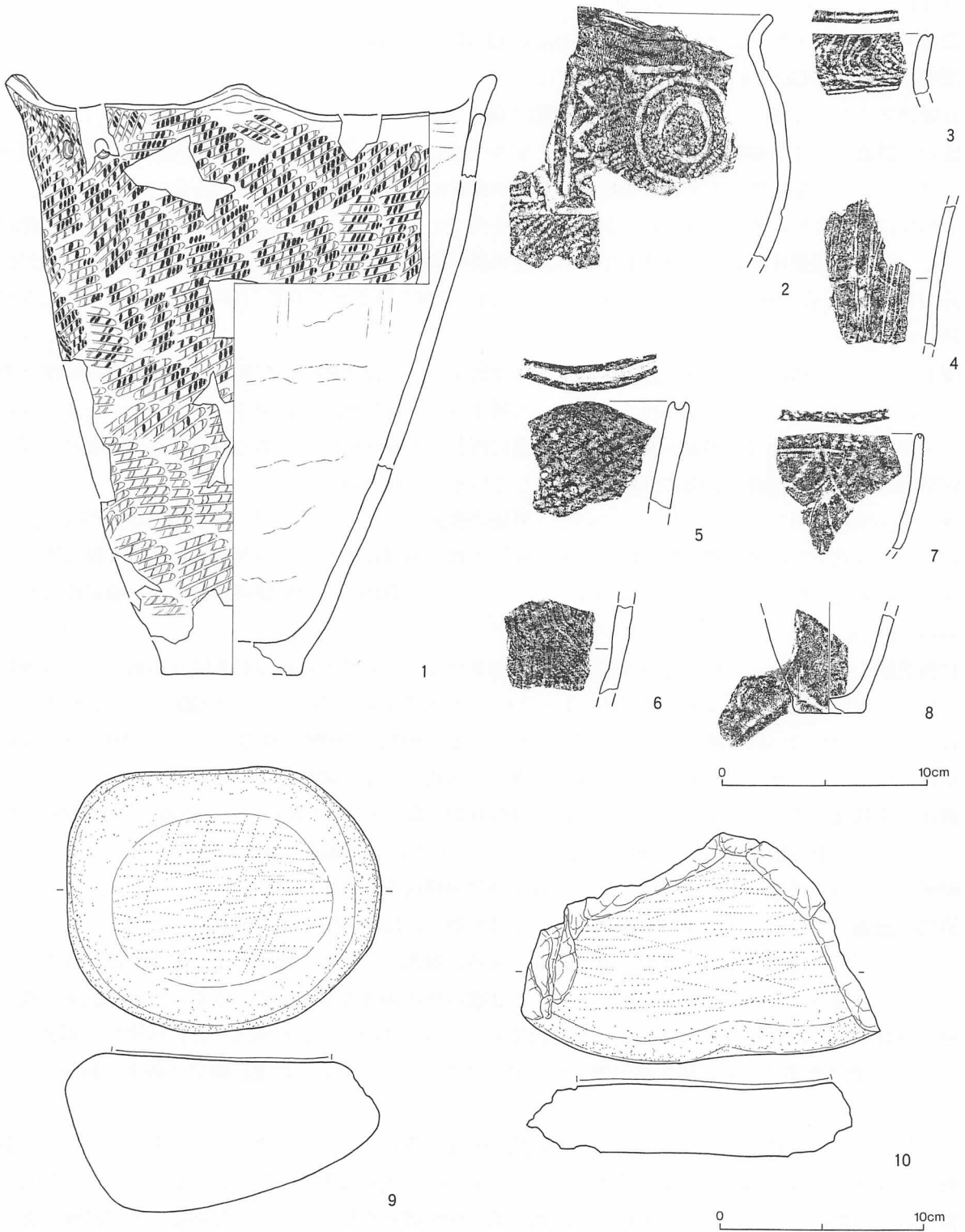
A-Bセクション

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) N+B-Tm
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) N>V
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V>>N 崩落
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V>N
- 5 褐色土 (10YR4/4) V 崩落
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) N+M、Mはブロック状、粘質、炭化物少量含む
- 7 褐色土 (10YR4/4) V 焼土粒・炭化物少量含む
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) M 崩落
- 9 暗褐色土 (10YR3/3) N+V 被熱、硬い、焼土粒・炭化物少量含む
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) N+V しまりあり、炭化物少量含む
- 11 黒色土 (10YR1.7/1) N
- 12 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V>N Vはブロック状 崩落
- 13 暗褐色土 (10YR3/3) N+V やわらかい
- 14 褐色土 (10YR4/4) V+M しまりあり
- 15 暗褐色土 (10YR3/4) N+V 炭化物少量含む
- 16 黒褐色土 (10YR2/2) N 被熱、焼土粒・炭化物少量含む
- 17 褐色土 (10YR4/4) V>>N 崩落

C-Dセクション

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) N+B-Tm
- 2 黒色土 (10YR1.7/1) N
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) N>V
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) N>M Mの一部ブロック状 炭化物少量含む
- 5 黒褐色土 (7.5YR3/2) N+V 焼土粒・炭化物少量含む
- 6 黒褐色土 (10YR2/2) N+V 炭化物少量含む
- 7 黒色土 (10YR2/1) N 硬い、被熱、焼土粒・炭化物微量含む
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 非常に硬い、被熱、焼土粒多量含む
- 9 褐色土 (10YR4/4) V>M+M 硬い、焼土粒・炭化物少量含む
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) N+V 硬い、被熱、砂質、焼土粒・炭化物少量含む

図IV-30 IH-7



図IV-31 IH-7出土遺物

I H - 8 (図IV-32・33、図版30・45)

位置・立地：M・N-26・27 標高約68mの細い尾根の先端部

規模：(4.0)/(3.8)×(2.5)/(2.2)×0.51

長軸方向：N-15°E

平面形：隅丸方形

確認・調査：包含層調査中、暗色土壌のまとまりを確認した。土層観察用に十字のベルトを残し掘り下げたところ、炭化物を多く含む土層およびやや硬質の平坦面を確認し、竪穴住居跡と認定した。

形状は隅丸方形と考えられるが、北側は丸みを帯びていて、「かまぼこ」のような形になる可能性がある。北側と西側は急斜面で崩落しており、住居跡の輪郭は失われていた。南東に重複する竪穴住居跡IH-10がある。IH-8はIH-10を約1/4ほど切って掘り込まれており、IH-10よりIH-8の方が新しい。

覆土：大きく3層に分けられる。覆土の上位(土層1~3)は木根および腐植土層など自然堆積と考えられる土である。壁際および覆土の下位(土層4~7)は炭化物や硬質ロームブロックを多く含む土である。床面付近(土層8・9)は若干暗色に汚れたVI層相当の土である。これらの土層は、竪穴住居跡の北側と西側の急斜面に向かって傾斜しているものが多い。

床・壁：床は平坦でやや堅くしまっている。VI層の緻密なシルト質粘土で、若干暗色部分がある。竪穴中央から北寄りに炭化物と焼土粒が濃密に検出される範囲があり、その西寄りに埋設土器と考えられる土器破片が残存していた。壁は明瞭に立ち上がり、北東側ではやや傾斜があるが、南東側はやや垂直に近い。

付属遺構：中央から北寄りに埋設土器として利用されていたと考えられる胴部破片が直立して残存していた。また、柱穴状ピット4基(HP1~3・5)と土壌2基(HP4・6)を確認した。HP1~3は円柱状のやや深い掘り込みがあり柱穴と判断できる。南東側の壁際に隣接している。HP4・6は住居跡の内部としては比較的大型の円柱状の土壌で、南側に2基が隣接している。

遺物出土状況：覆土下位からの出土が多い。III群b類土器228点、土製品19点(土器片再生円盤3点、ミニチュア土製品破片16点)、定形的石器3点、フレイク7点、礫98点が出土している。

時期：住居跡の構造や出土土器などから、縄文時代中期後半である。

遺物：土器 1~6はIII群b類榎林式。7~10は土器とほぼ同時期と考えられる土製品。

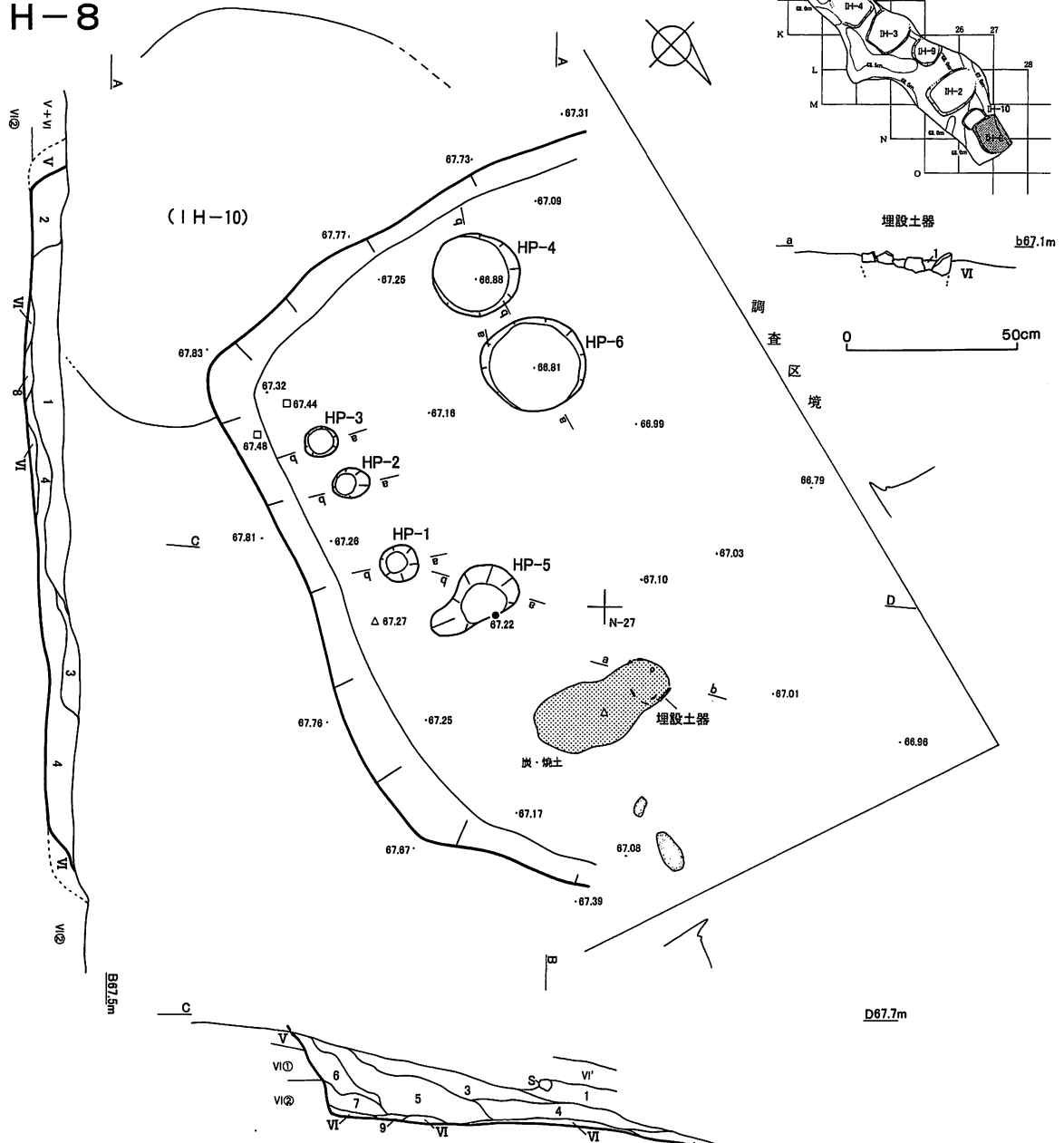
1はわずかに残存していた埋設土器である。深鉢の胴部の一部で、地文のRL縄文のみが観察される。胎土に雲母などの鉱物が多く見られる。2は細い櫛描条痕文が地文で、頸部に2条の沈線が浅く施文されている。3・4・6は撚糸文が施されている。4はHP-4から出土した。赤褐色~褐色を呈し、磨滅・剥落がみられる。炭化物が撚糸の押捺痕に残存している。5はRL縄文に渦文と剣菱文の一部が見られる。

7は、「ろうと」形を呈するミニチュア土製品。上端は径1.4cm、下端は径5.3cm開口している。器壁3~4mmで非常に薄い。外面は調整がややていねいで、内面はあまり行われていない。8~10は土器片再生円盤。すべてIII群b類榎林式の深鉢土器の胴部破片を加工したものである。8は磨滅が激しい。LR縄文が地文で、貫通孔が大きく穿たれている。9はやや不整形であるが、側面はよく擦られた跡がある。穿孔途中の孔がある。10は撚糸文に2条の平行沈線が見られ、深鉢の頸部に当たる部分が加工されている。側面はあまり擦られていない。(阿部)

石器 11・12はポイント・ナイフ。11は両面に原石面が見られる。12は尖頭部を欠損している。素材の剝離面を多く残し、周辺に細かい加工が施されている。(村田)

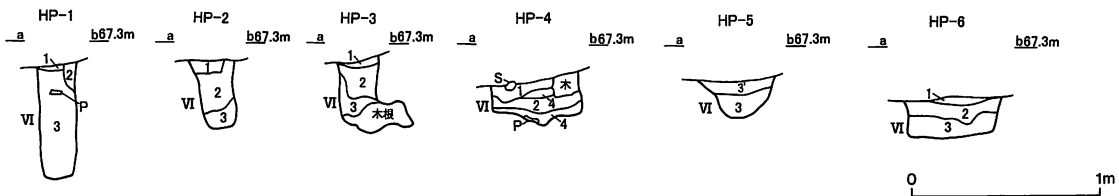
IV B地区の調査とその遺物

I H-8



I H-8の土層

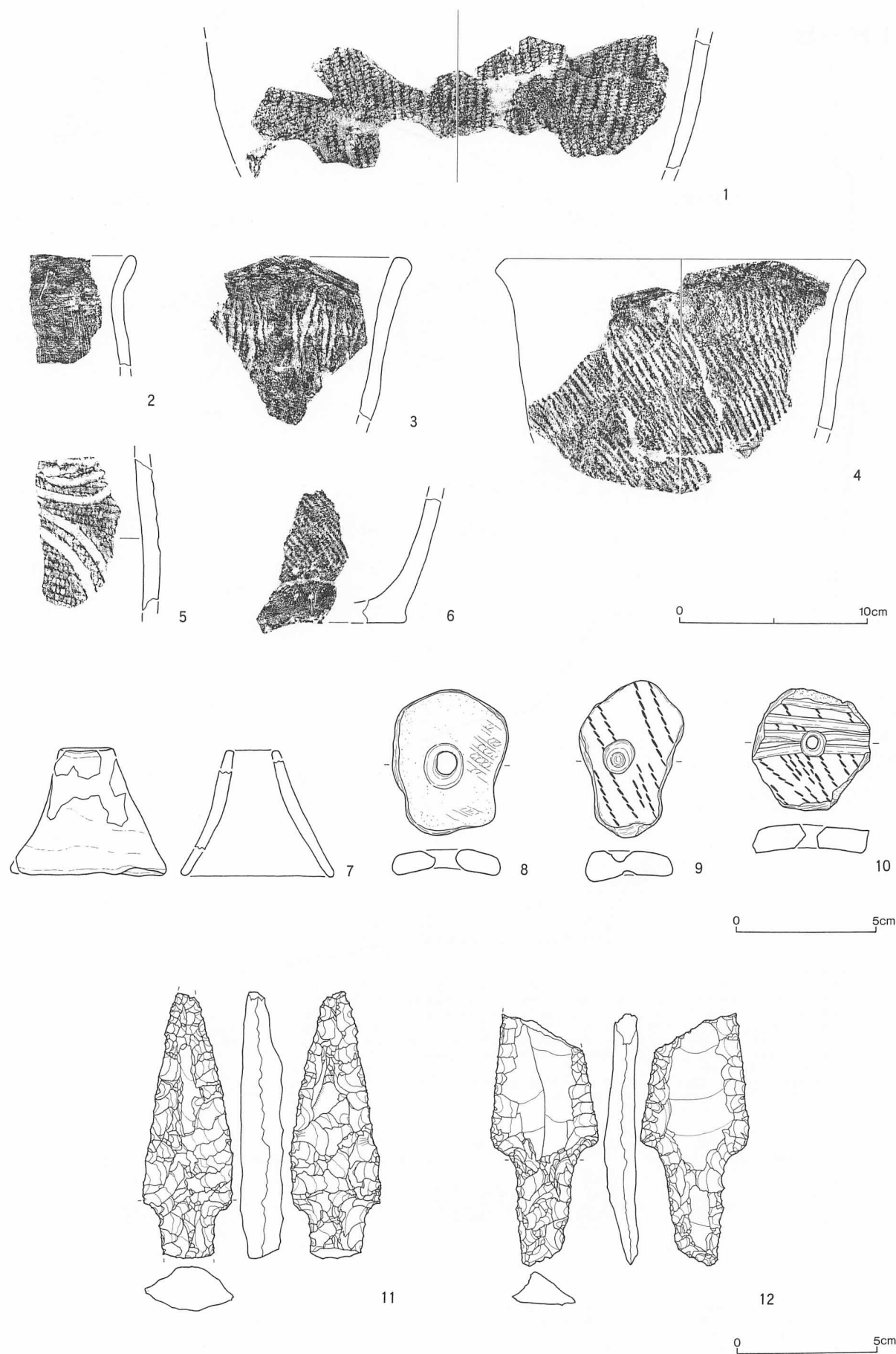
- 1 黒色 (10YR 2/1) 粘性やや強、しまり弱。下端境界やや明瞭。腐食土層、木根多量混入。やや不均質。粒子やや大きい。
- 2 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性やや強、しまりやや弱。下端境界やや明瞭。腐食土層、木根多量混入。粒子やや小さい。
- 3 暗褐色 (10YR 3/6) 粘性やや強、しまり中。やや不均質。境界やや不明瞭。炭化物少量、ロームブロック少量含む。
- 4 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや弱、しまりやや強。境界やや明瞭。やや均質的。炭化物10~20%含む。硬質ロームブロック少量。
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性やや弱、しまり強。下端境界やや明瞭。やや不均質。炭化物10~20%含む。硬質ロームブロックやや多量。
- 6 黄褐色 (10YR 5/6) K o-g 主体。粘性弱、しまりやや弱。炭化物わずかに含む。硬質ロームブロック少量。
- 7 5と同様だが、しまりやや弱。
- 8 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘性弱、しまりやや強。境界やや明瞭。蜂の巣状の裂け目に鉄分含む。硬質ロームブロック多量。
- 9 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや強、しまり中。炭化物含む。



I H-8-HPの土層

- 1 暗褐色 (10YR 3/3) 粘性やや強、しまり中。炭化物10~20%、焼土粒少量含む。不均質。
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘性やや強、しまりやや強。炭化物少量含む。ロームブロック多量。堅密度・色調ともやや不均質。
- 3 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘性やや強、しまり弱。炭化物10%程度含む。ロームブロック少量。やや均質的。
- 4 黒色 (2.5Y 2/1) 粘性中、しまりやや弱。炭化物20~50%含む。

図IV-32 IH-8



図IV-33 IH-8出土遺物

IH-9 (図IV-34~38、図版31・46・47)

位置・立地：K-24・25 標高68m~68.5mの狭い尾根上に位置する。

規模：(2.8)/(2.68)×3.08/2.16×0.8m

長軸方向：N-75°-E

平面形：隅丸方形

確認・調査：火山灰(Ko-d)と攪乱層を除去した段階で、浅い円形のくぼみとして確認した。直交する土層観察用の壁面を設定し、トレンチ調査を行った。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がり認められ、また、埋設土器が出土したことから住居跡と判断した。遺物はIV層を主体とする覆土1層を覆土1層で、焼土粒・炭化物を含む覆土2層~6層を覆土2層で、床面出土のものは床面で取り上げている。炉周辺と覆土に焼土が含まれるHP-1の土壌をサンプリングしフローテーション作業を行った。また、床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定分析を行っている。

覆土：遺構周辺は伐採作業時に削平されている。自然堆積層(覆土1層)以下は、焼土粒・炭化物を多く含む土が床面まで堆積している。焼失住居である。覆土中に被熱し赤色硬化した土や焼土が見られることから、土葺きの屋根であった可能性が高い。

床、壁：床はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。斜面の崩落により西側が失われている。

付属遺構：中央付近に、炉として使用した埋設土器が1カ所設置されている。口縁部と底部を打ち欠いた土器を、土器の形に合わせて掘り込んだ床面に、地山のローム(VI層)で固定している。柱穴状のピットは2基検出したが規則的な配列は認められない。北東壁際のHP-1の覆土に大量の焼土粒・炭化物が見られる。

遺物出土状況：床面からは4面使用した軽石製の砥石や石皿が出土している。炭化物を含む被熱し硬化した覆土の上面には、土器や台石などが投げ込まれた状況であった。

時期：出土遺物から縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。(村田)

遺物：土器 1~12はⅢ群b類榎林式に属する土器。13~15は土器片再生円盤。なお、4は隣接するIH-2の覆土から出土した破片と接合した。

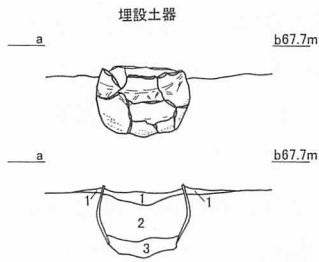
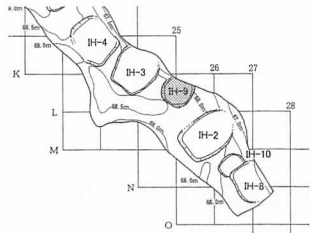
1は埋設土器。深鉢の胴部が用いられており、口縁および底部は欠落している。2条の平行沈線が胴中央部にあり、おそらく頸部にもあったものと思われる。胴上位は渦文と剣菱文が横に配列され、胴下位は山形文が配列されている。外面上位は炭化物がやや多量に付着しており、下位は磨滅が激しい。上端の断面は磨滅して丸みを帯びている。2は覆土の下位から出土し、個体の約40%ほどが接合した深鉢。緩やかな波状口縁が平縁化した口縁形態である。頸部のくびれは緩やかで、胴部の張り出しはほとんどない。全面に幅10~12mmほどの櫛描条痕文が施されている。おおむね上から下へ施文されているが、一部斜方向のものがあり、重複箇所が多数見受けられる。

3~12は地文ごとに図示した。3~7は撚糸文、8・9は櫛描条痕文、11・12はLR縄文がそれぞれ施されている。4の撚糸文は縦位と斜位に、6は斜方向に交差して施文されている。7はやや小型の深鉢の胴部と思われる。頸部に2条の平行沈線があり、胴部の渦文に相当する沈線が楕円状になっており、それらを連繋する複数の沈線が施されている。内面は赤褐色を呈し調整がていねいである。9は櫛描の地文に渦文と剣菱文がみられ、IH-1出土の復元土器(図IV-5-1)と同様の個体になるものと思われる。10は底部付近に地文が確認できず不明である。11は胎土に砂粒を多く含んでいる。12は渦文の一部と見られる沈線が施されている。

13~15は、いずれもⅢ群b類榎林式の深鉢の胴部破片を加工した土器片再生円盤。地文はすべて撚糸文で、14は渦文の一部が見られる。13は側面がよく擦られている。15は半分が残存していた。

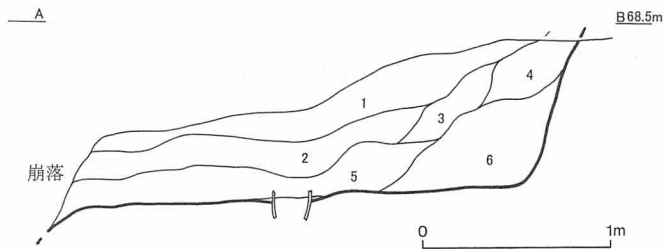
(阿部)

I H-9



埋設土器

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒・炭化物含む
- 2 黒色土 (10YR2/1) 炭化物多量、やわらかい
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) M 埋め戻し



I H-9の土層

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) IV>III
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 被熱、硬い、炭化物少量含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) IV+V 焼土粒・炭化物少量含む
- 4 褐色土 (10YR4/4) V 炭化物微量含む
- 5 暗オリーブ褐色土 (2.5YR3/3) IV+V+M 焼土粒・炭化物多量含む

HP-1

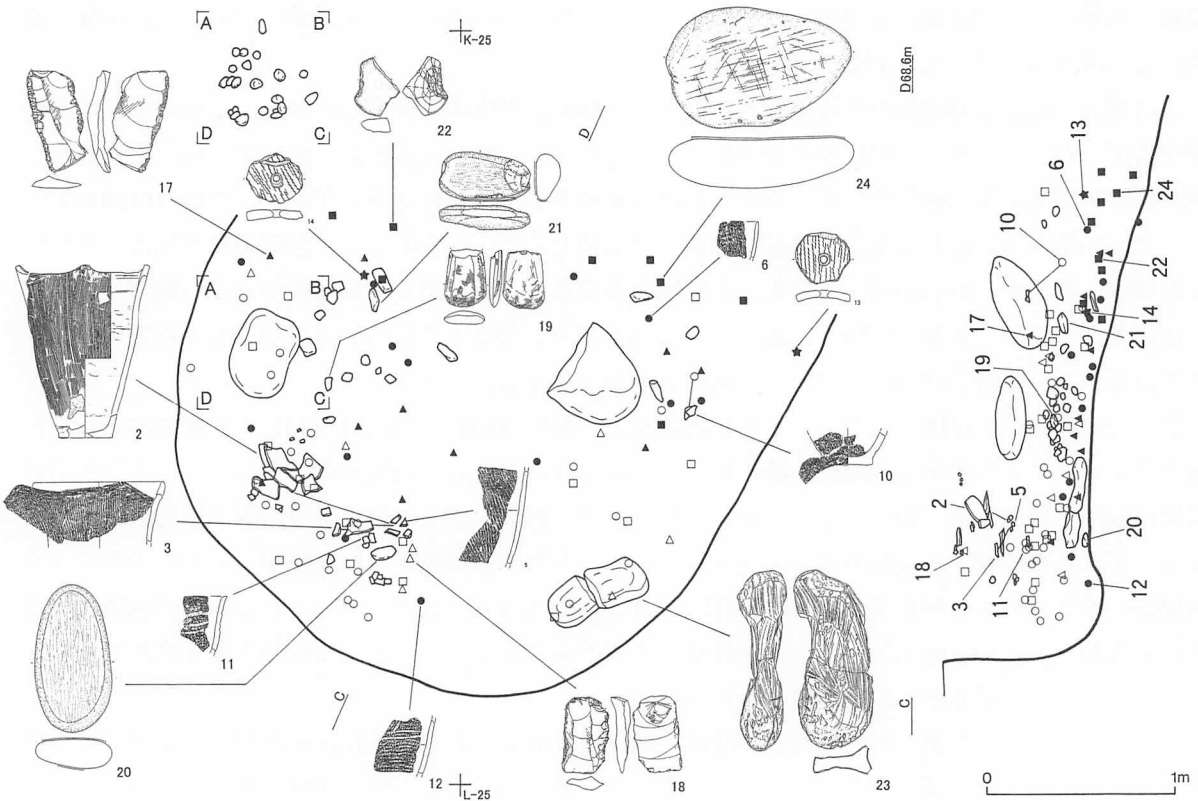
- 1 褐色土 (10YR4/4) M 被熱、焼土粒・炭化物含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) IV+V+M Mはブロック状、焼土粒・炭化物含む

HP-2

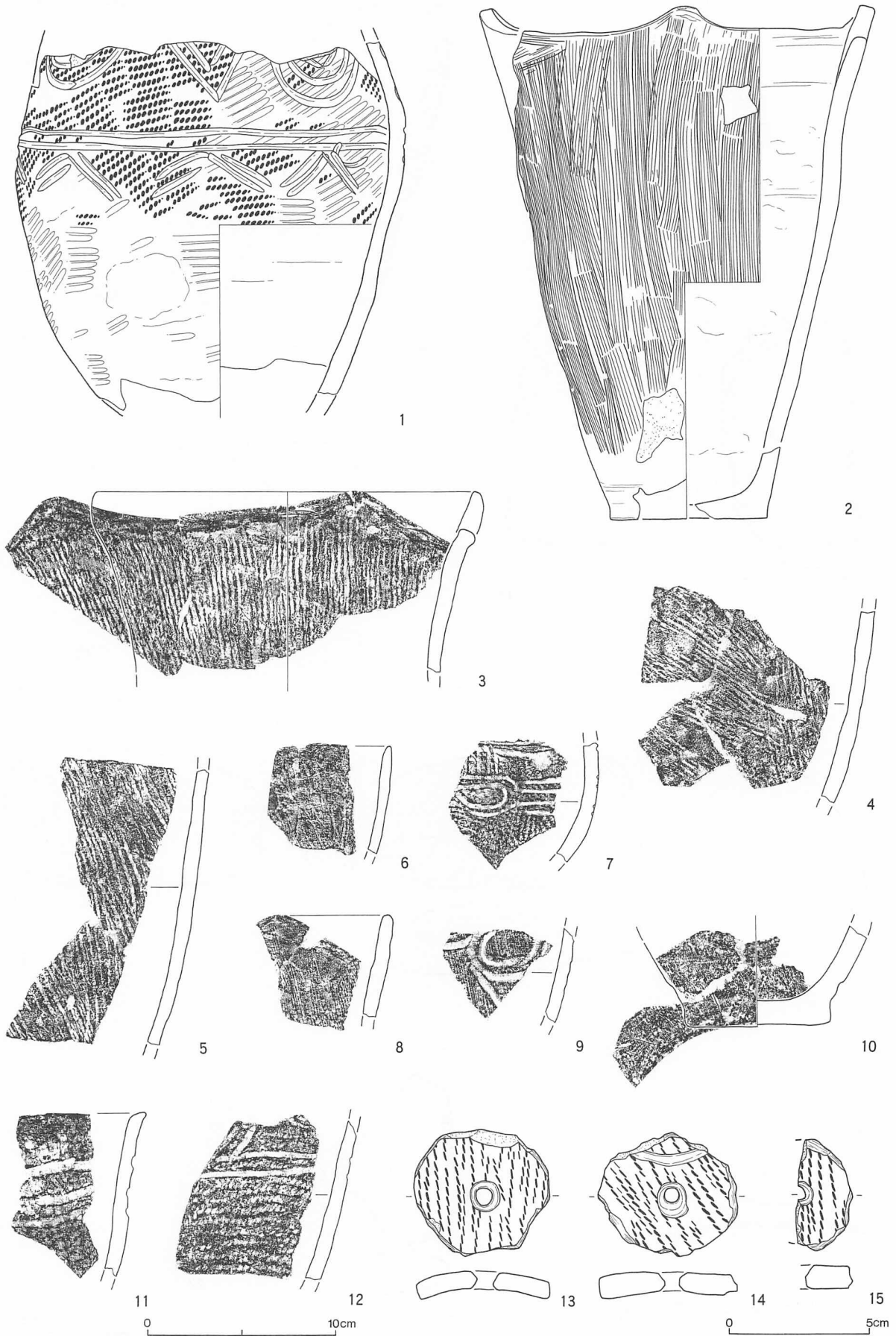
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 焼土粒・炭化物多量含む、Mがブロック状に混じる

HP-3

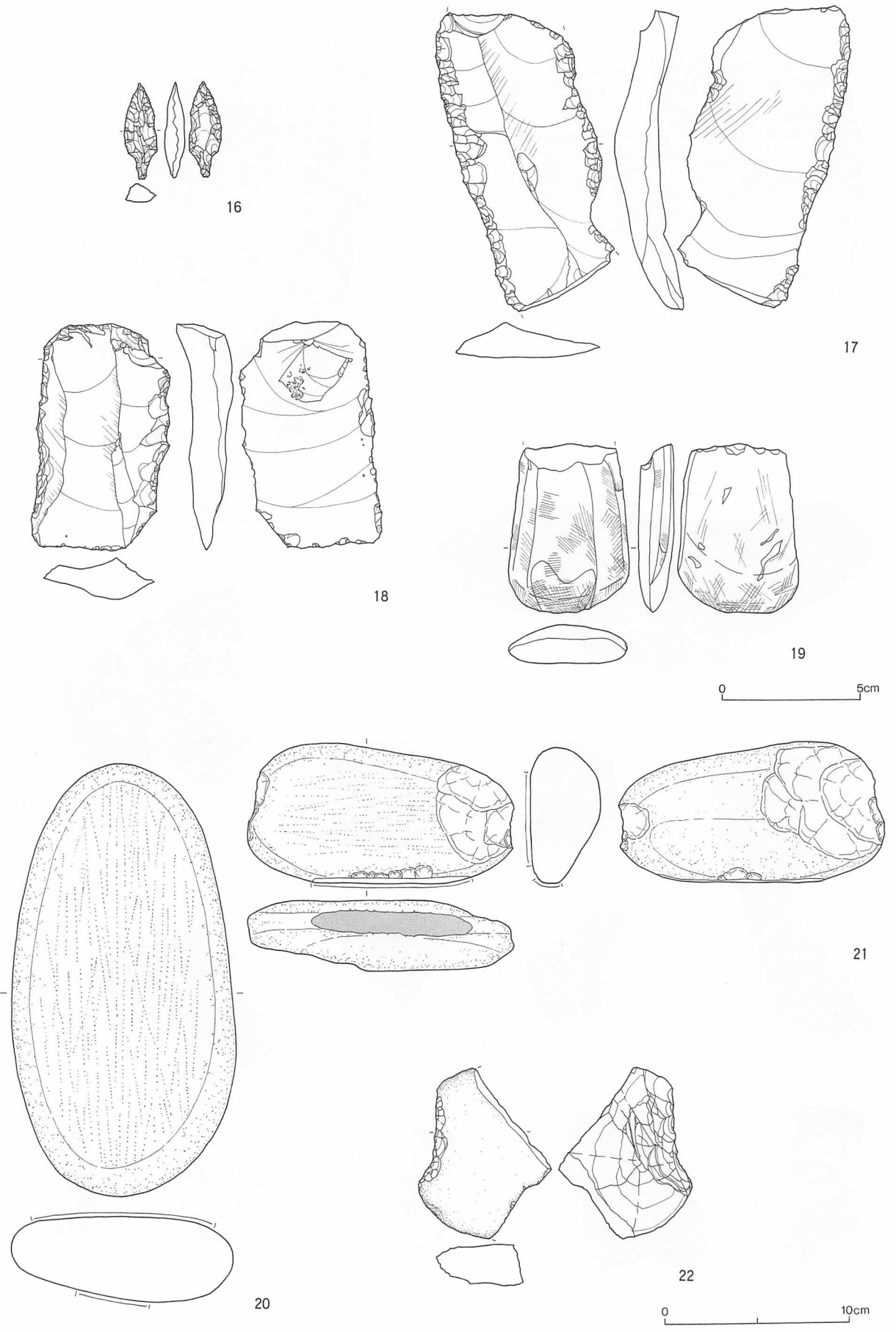
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒・炭化物微量含む、Mがブロック状に混じる



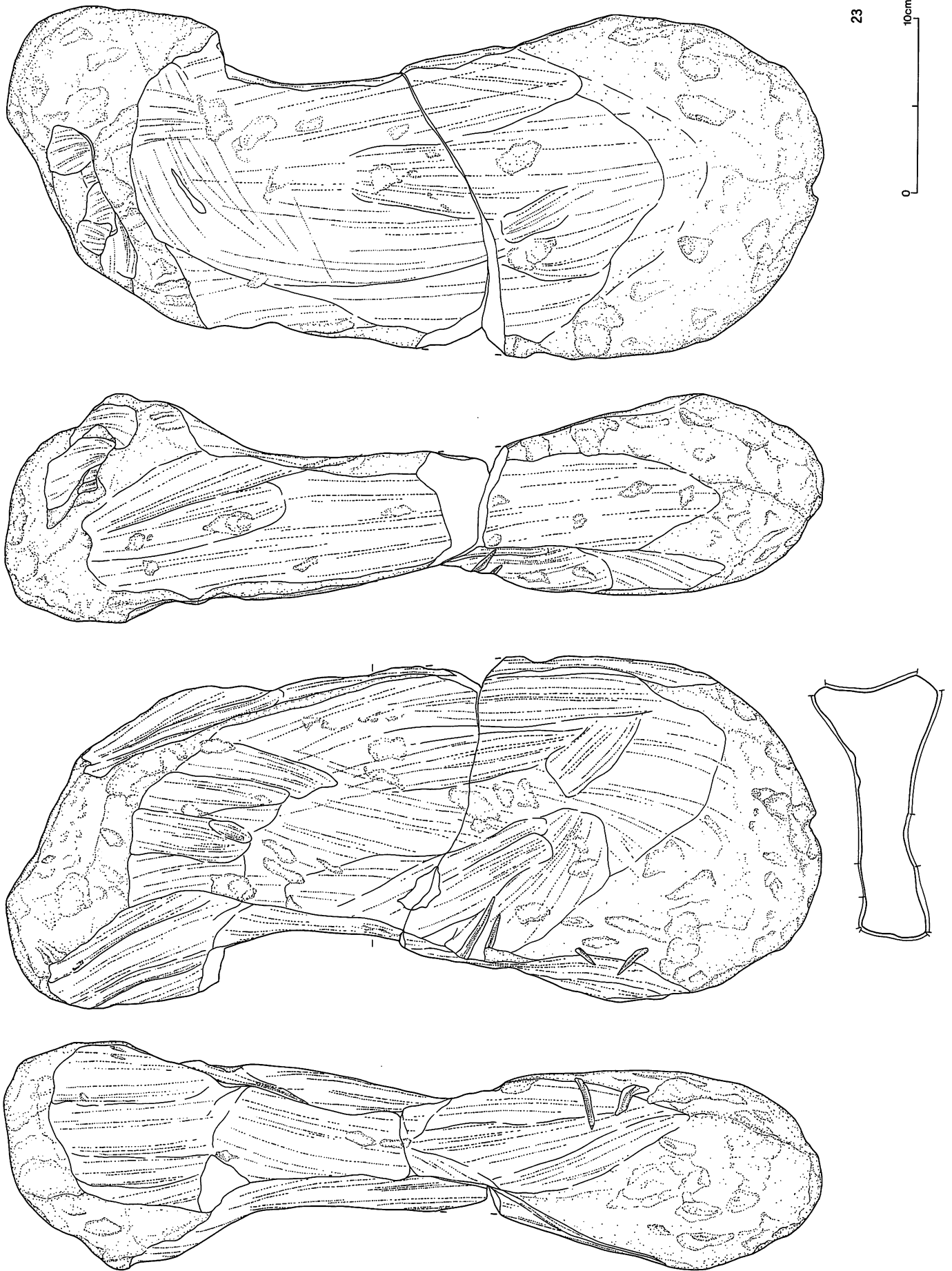
図IV-34 IH-9



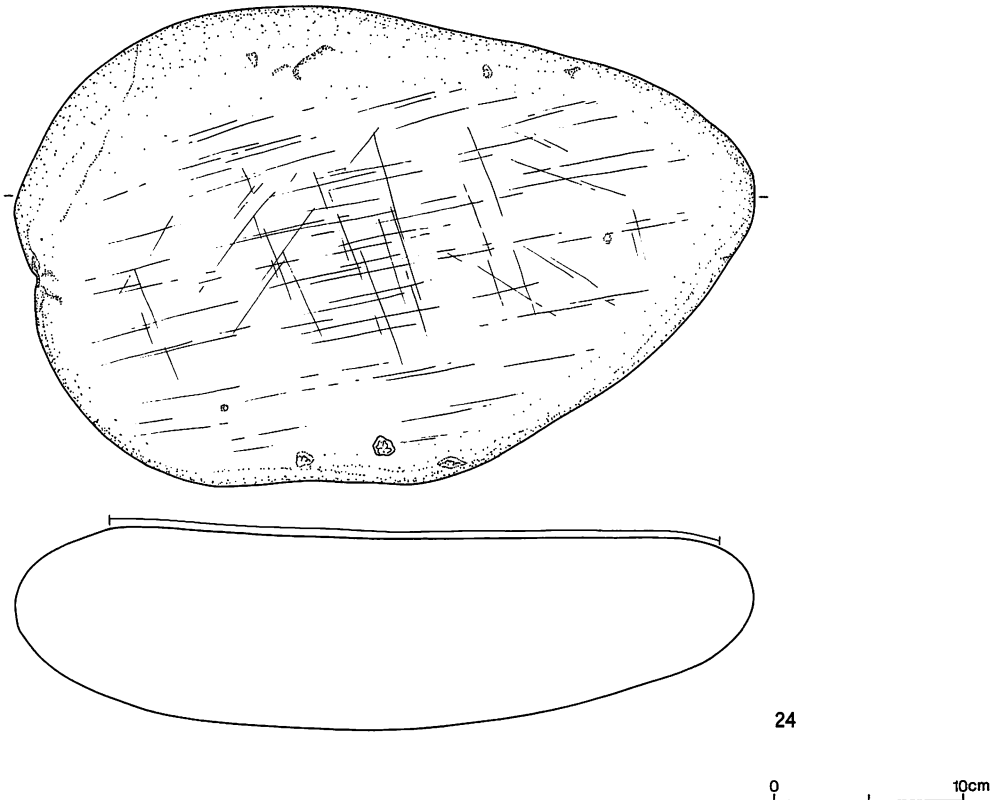
図IV-35 IH-9 出土遺物(1)



図IV-36 IH-9 出土遺物(2)



図IV-37 IH-9出土遺物(3)



図Ⅳ-38 IH-9出土遺物(4)

石器 16は石鏃で、素材の剥片の形状を残している。17は2側縁に刃部を持つスクレイパーで一方は片面加工、もう一方は両面加工のものである。18は片面加工のスクレイパー。19は緑色泥岩製の石斧。全面が研磨されている。20は両面に擦痕のあるすり石。21は両端のみに調整のある扁平打製石器。22は扁平打製石器原材料で床面出土のもの。23は床面出土の軽石製の砥石。4面使用され、断面が方形を呈する。24は床面出土の石皿。(村田)

I H-10 (図Ⅳ-39・40、図版32・48)

位置・立地：M-25 標高約68mの狭い尾根上に位置する。

規模：2.64/2.28×1.64/1.4×0.28m

長軸方向：N-87°-W

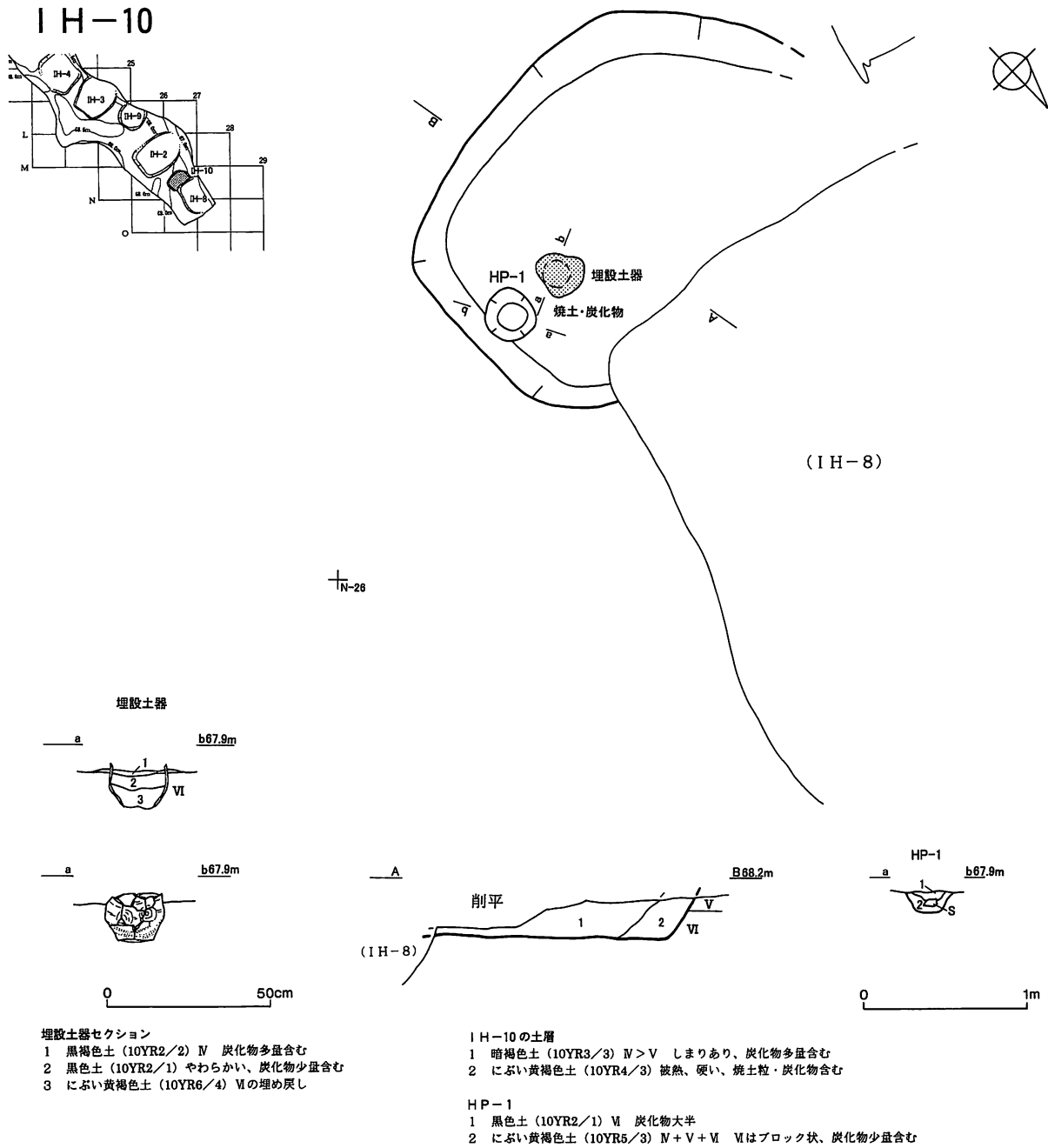
平面形：隅丸方形

確認・調査：IH-8の調査中、IH-8の壁面で黒色土の落ち込みとして確認した。南北に土層観察用の壁面を設定し掘り下げたところ、埋設土器が出土したため住居跡と判断した。IH-8より古い竪穴住居跡である。

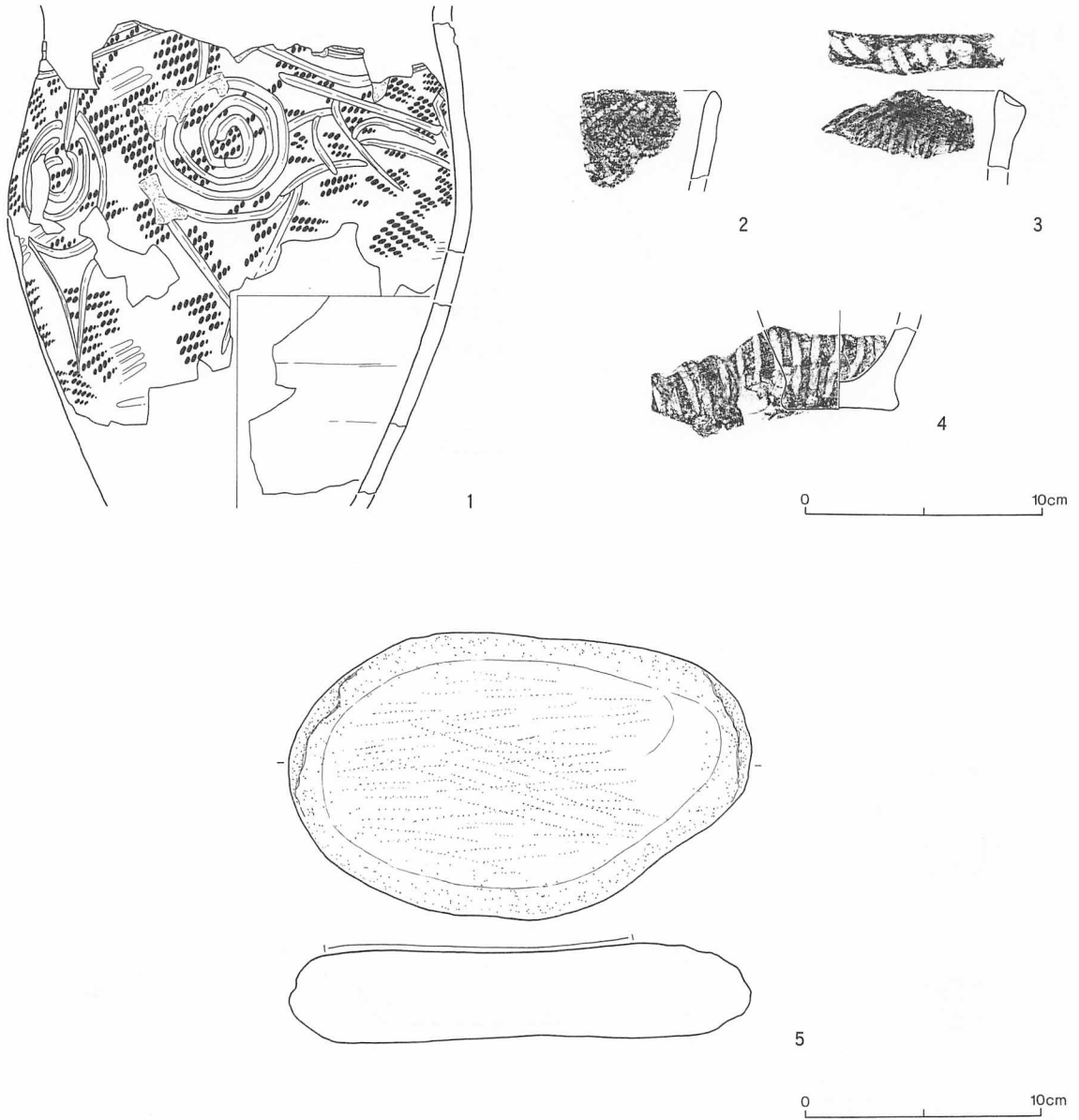
覆土：遺構上部は伐採作業時に削平されている。焼土粒・炭化物を多く含む土壌が主体である。

床、壁：床はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。斜面の崩落とIH-8の構築のため、西側の一部が失われている。

付属遺構：東よりの床面に炉として使用した埋設土器が1カ所設置されている。口縁部と底部を打ち欠いた土器を、土器の形に合わせて掘り込んだ床面に、地山のローム(VI層)で固定している。東側の壁際に小ピット1基を検出した。



図IV-39 IH-10



图IV-40 IH-10出土遺物

遺物出土状況：覆土中にⅢ群b類土器の破片が散見される程度である。

時期：出土遺物から縄文時代中期後半Ⅲ群b類土器の時期である。(村田)

遺物：土器 1～4はⅢ群b類榎林式に属する。

1は埋設土器。Ⅲ群b類榎林式の深鉢の胴部。同一個体とみられる口縁部及び底部が周辺から出土していないことから、口縁および底部をあらかじめ欠落させて用いられていたと考えられる。胴部の文様は榎林式に典型的なもので、頸部付近に2条の平行沈線、その下に渦文と剣菱文を繰り返し配している。外面はやや剝落がみられ器体はやや脆くなっており、二次焼成を受けたものと思われる。

2は口唇がやや尖り気味である。口縁下に施文されている平行沈線の一部がみられる。3は波状口縁の波頂部。やや肥厚し外傾した口唇上に斜方向に連続刺突が施されている。4はやや外に張り出した底部。底径は比較的小さい。地文の撚糸文がわずかに見られ、縦位の多条沈線が底面際まで施されている。(阿部)

石器 5は床面出土のすり石。(村田)

I H-11 (図IV-41、図版32・48)

位置・立地：R-28 標高67mの細い尾根の最先端独立部

規模：(3.3)/-×(2.3)/-×-m

長軸方向：N-58°W 平面形：隅丸方形

確認・調査：木根による攪乱や工事による掘削跡などの土壌を除去した後、VI層上面付近で埋設されている土器が出土した。周辺は大部分が攪乱を受けており、掘り込みは明瞭には確認できなかった。そのため他の堅穴住居跡の調査が進展するのを待って遺構の判断をすることとした。結果、床面の状況やわずかに残る覆土が他の堅穴住居跡と類似することから、堅穴住居跡と認定した。

覆土：わずかに残存していた。埋設土器の北西側にややまとまって分布する。上面にB-Tmが薄く堆積し、IV層に相当する黒色土が残存している。床面付近は炭化物を多く含んでいる。埋設土器の東側には薄い黒色土がわずかに分布する。

床・壁：床は平坦でやや堅くしまっている。VI層の緻密なシルト質粘土で、極めて細かい亀甲状の裂け目に暗色の土壌が入り込んでいる。壁の立ち上がりは北側で10cmほど確認できた。

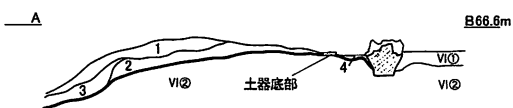
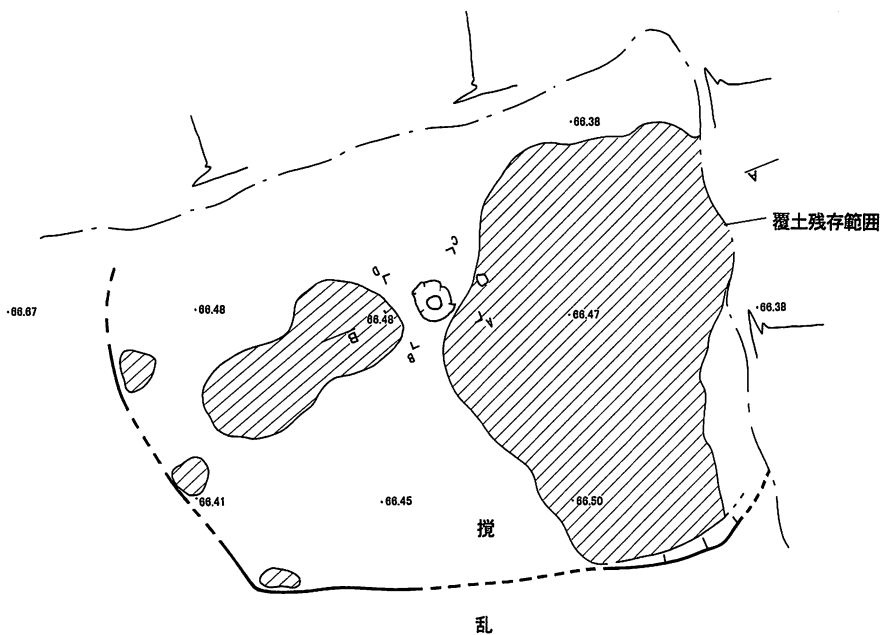
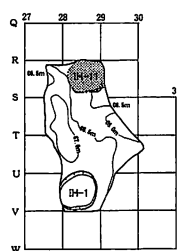
付属遺構：埋設土器1個体(胴～底部)が堅穴住居跡の中央付近で出土している。柱穴などは確認できなかった。

遺物出土状況：埋設土器の西側約25cmの位置から土器の底面のみが1点出土している。その他の遺物は遺物包含層の扱いで取り上げてある。IH-1に相当する発掘区(R-28区)からは、Ⅲ群b類の土器63点、フレイク3点、礫37点が出土している。

時期：埋設土器および周辺出土土器から、縄文時代中期後半とみられる。

遺物：土器 1は埋設土器。周辺包含層(攪乱)出土の土器が5点ほど接合している。Ⅲ群b類榎林式のやや大型の深鉢の胴部下半から底部である。底面は厚さ18mm、直径は10cmを超える大型のもので、平坦である。胴部はLR縄文が密に施文され、斜行沈線が一部見られる。これは渦文の下にえがかれる剣菱文の一部と思われる。また外面は色調が明るく、剝落・磨滅が多い。炉として使用され二次焼成を受けたものと思われる。(阿部)

I H-11



I A I B I



I C I D I

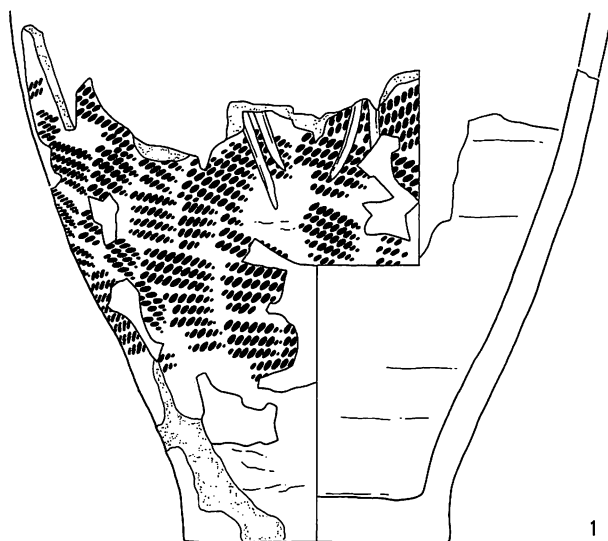


I H-11 の土層

- 1 黒色 (10YR 1.7/1) [IV層相当] 粘性やや強、しまりやや強。上面にB-Tm含む。
- 2 黒褐色～暗褐色 (10YR 2/3～3/4) 粘性やや強、しまり弱。炭化物少量含む。木根やや多量。やや不均質。
- 3 黒褐色 (10YR 2/3) [木根攪乱] 粘性中、しまりやや強。不均質。境界不明瞭。
- 4 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘性やや強、しまりやや強。黒色土少量混じる。

VI① オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) [VI層] 粘性中、しまり強。シルト質粘土。密で均質的。

VI② にぶい黄褐色～灰黄色 (2.5Y 6/4～6/2) [VI層砂質ローム] 粘性やや弱、しまり強。非常に密で均質的。シルト質。



図IV-41 IH-11と出土遺物

(2) 土壌

IP-9 (図IV-44、図版33・49)

位置・立地：A-14・15 標高約71mの平坦面に位置する。

規模：1.48/1.2×1.36/1.04×0.6m

長軸方向：N-56°-W

平面形：楕円形

確認・調査：V層上面で円形の落ち込みとして確認した。土層観察用の壁面を設定し、掘り下げたところ明瞭な壁を確認したため、土壌と判断した。性格は不明。

覆土：すべて自然堆積層である。

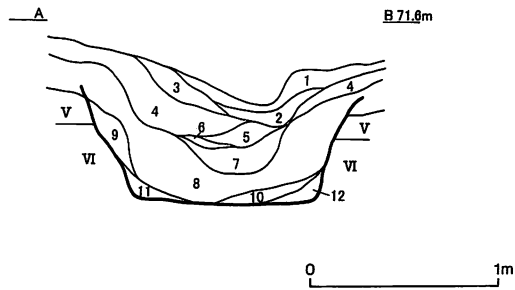
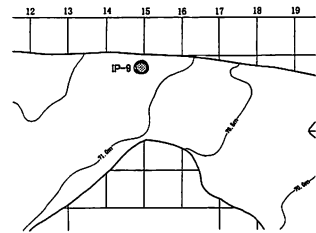
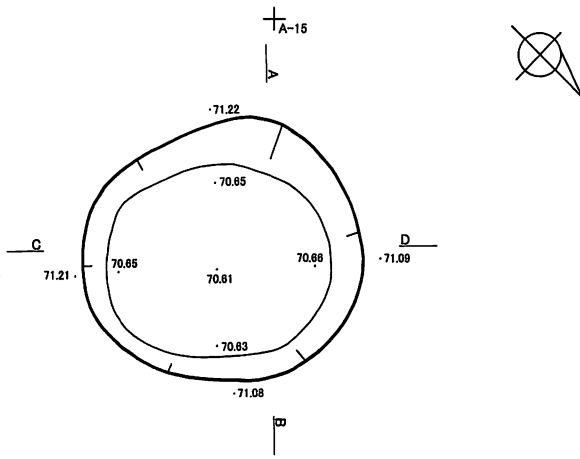
墳底、壁：墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：遺構周辺の出土遺物から、縄文時代中期後半のものと考えられる。

(村田)

IP-9



- IP-9の土層
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) III 粘質
 - 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) B-Tm
 - 3 黒褐色土 (10YR2/3) III 粘質
 - 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) III しまりあり
 - 5 黒褐色土 (10YR2/3) III>V 粘質
 - 6 灰黄褐色土 (10YR5/2) VI>III>IV かたい
 - 7 黒褐色土 (10YR2/2) III+IV しまりあり
 - 8 黒色土 (10YR2/1) IV かたい
 - 9 褐色土 (10YR4/4) V 崩落、もろい
 - 10 黒褐色土 (10YR2/3) IV+V
 - 11 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IV+V>VI
 - 12 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IV+V>VI VIはブロック状

図IV-42 IP-9

(3) 礫集中

IS-1 (図IV-44、図版33・49)

位置・立地：H・I-21・22 細い尾根上の竪穴住居跡 IH-5 の内部及び周辺

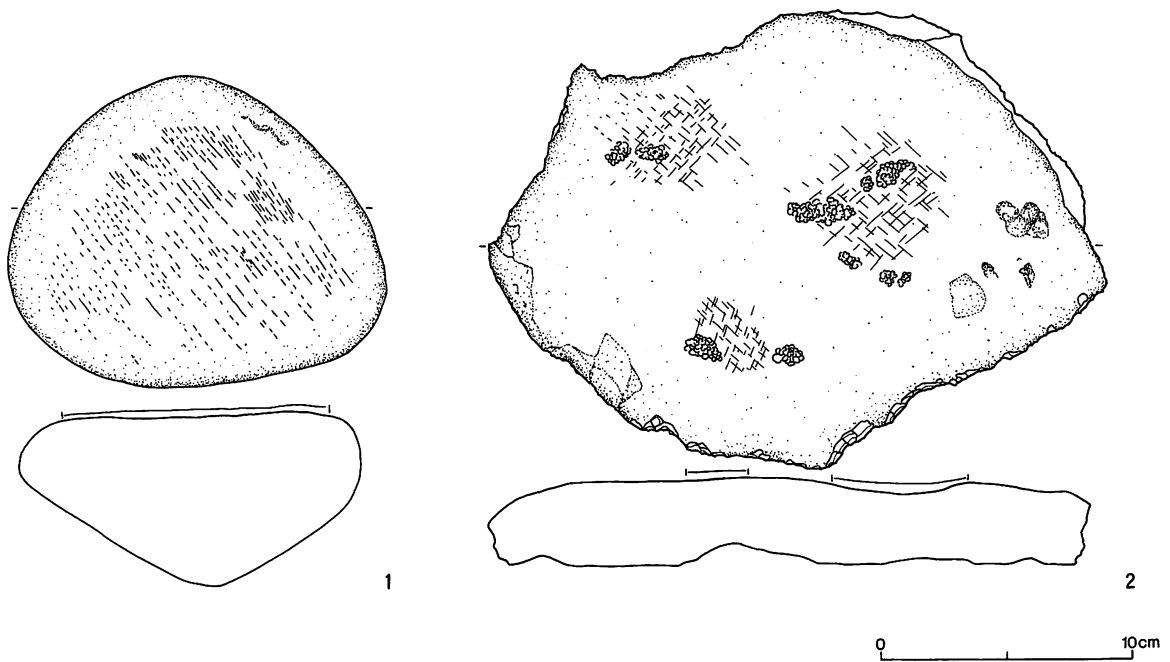
規模：7.0×3.5m

確認・調査：竪穴住居跡 IH-5 を検出したところ、その覆土上面～中位および住居跡の北側から形状・大きさのある程度整った礫がまとまって出土した。

遺物出土状況：礫が121点出土した。大きく3つのまとまりがあり、IH-5 の南寄りの覆土上位～中位と、IH-5 の中央付近の覆土下位、そして IH-5 の北側の屋外にあたる箇所である。いずれも西側の崖面に向かって下るような分布になっている。IH-5 の内側から出土した礫は、径10～15cm の安山岩が主体で、楕円体または扁平な形状のものが多い。すり石が2点含まれていた。IH-5 の外側から出土した礫は、径5～10cm の安山岩が主体で、球体に近いものが多い。

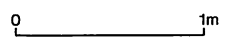
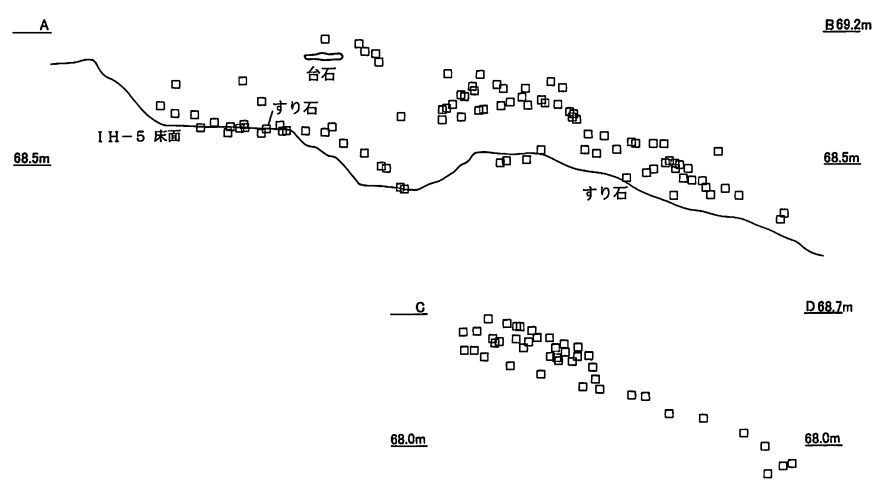
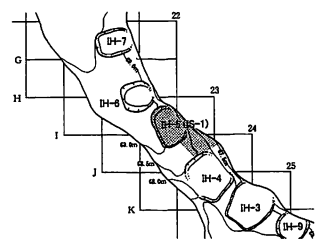
時期：IH-5 床面および覆土の出土土器から、縄文時代中期後半榎林式期と考えられる。また、IH-5 の覆土の下位からも出土することから、IH-5 の廃絶後あまり期間をおかずに礫集中が形成されたものと考えられる。 (阿部)

掲載遺物：石器 1 は亜円礫の平坦面を使用したすり石。2 は板状礫を利用した石皿である。(村田)



図IV-43 IS-1 礫石器

IS-1



図IV-44 IS-1

3. 包含層出土の遺物

(1) 土器・土製品 (図Ⅳ-45・46、図版50)

分布状況 (図Ⅳ-45)

包含層からは、土器・土製品合わせて1,189点が出土した。住居跡出土の遺物量と比較すると、包含層の遺物量は全体的に少ない。層位別では、Ⅲ層から154点、Ⅳ層から847点、攪乱その他188点が出土している。土器片再生円盤が1点出土したほかは、すべてⅢ群b類に属する土器片である。またその大部分が榎林式に属する。連続刺突が施された貼付帯をもつ大安在B式や、ノグップⅡ式に属する可能性がある破片がわずかに出土している。

平面の分布を見ると、調査区北部の尾根上に濃密である。出土点数が多い発掘区(F-20区で123点・M-26区で98点など)は、各竪穴住居跡の周辺にあたる発掘区である。特にIH-4~7にあたるF~Iラインと、IH-8・10にあたるM~Oライン、そしてIH-11のある尾根先端独立部に多い。これらには、調査の初期段階で認定するのに慎重であった竪穴住居跡の覆土の一部が包含層の遺物として取上げられたものを含んでいる。一方、初期段階で竪穴住居跡として認定したIH-2のあるK-23区付近のように、包含層としてはわずかな点数しか出土していない発掘区も多く、尾根上に分布する包含層の土器の大部分は竪穴住居跡に関連したものと推測される。

これに対して、調査区南部の山側からは1発掘区につき数点だけ出土しているが、一部の発掘区(D-26区など)では、大型の風倒木痕からややまとまって土器片が出土している。9ラインより南東の沢側の平坦地からは1点も出土していない。

遺物 (図Ⅳ-46)

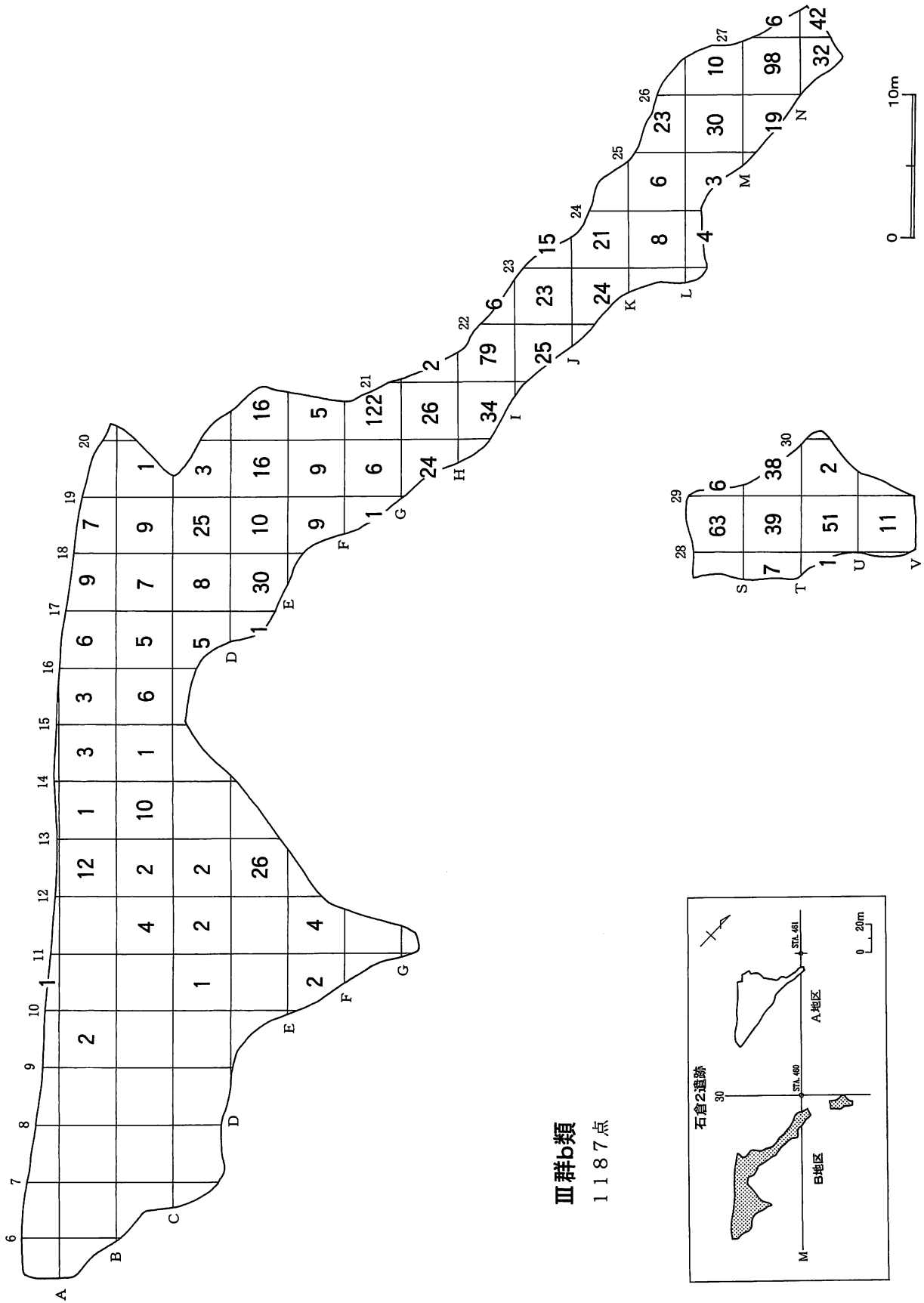
土器(1~23)はすべてⅢ群b類に属する。1~19は榎林式で、20~23は榎林式の新しい段階から大安在B式に属するものと思われる。土製品(24)はD-20区から出土した1点を図示した。

1~19はおおむね地文別に掲載した。1~7・13は燃糸文、8は燃糸文に類似する多条沈線、9・10は櫛描文、14~18はLR縄文、19はRL縄文がそれぞれ地文である。1は波状口縁の波頂部で、口唇上に円形刺突と沈線が施されており、大木8b式にもみられる口唇形態である。3は燃糸文の節が明瞭でなく、引きずったような痕跡も見られ、多条沈線のように観察される。5は文様や胎土から同一個体とみられる口縁部と底部を組み合わせて図化した。6・7・15は沈線により蛇行沈線や曲沈線など縄文後期前葉に類似する文様がえがかれている。11は口唇上にやや曲がった沈線が施されている。12には底部付近にまで横走沈線が施文されている。13は口縁部に2条の縄文圧痕があり、中期後葉~後期初頭にみられるが、地文や胎土から判断して榎林式に属するものと思われる。14・16は深鉢の胴部にえがかれた渦文とそれに連繋する曲沈線の一部がみられる。17は口唇上にLR縄文が強く押捺されている。18・19は口縁部がややすぼまり、胴部中央付近に最大径をもつ小型の深鉢の一部と考えられる。19の底部は張り出さず、平坦である。

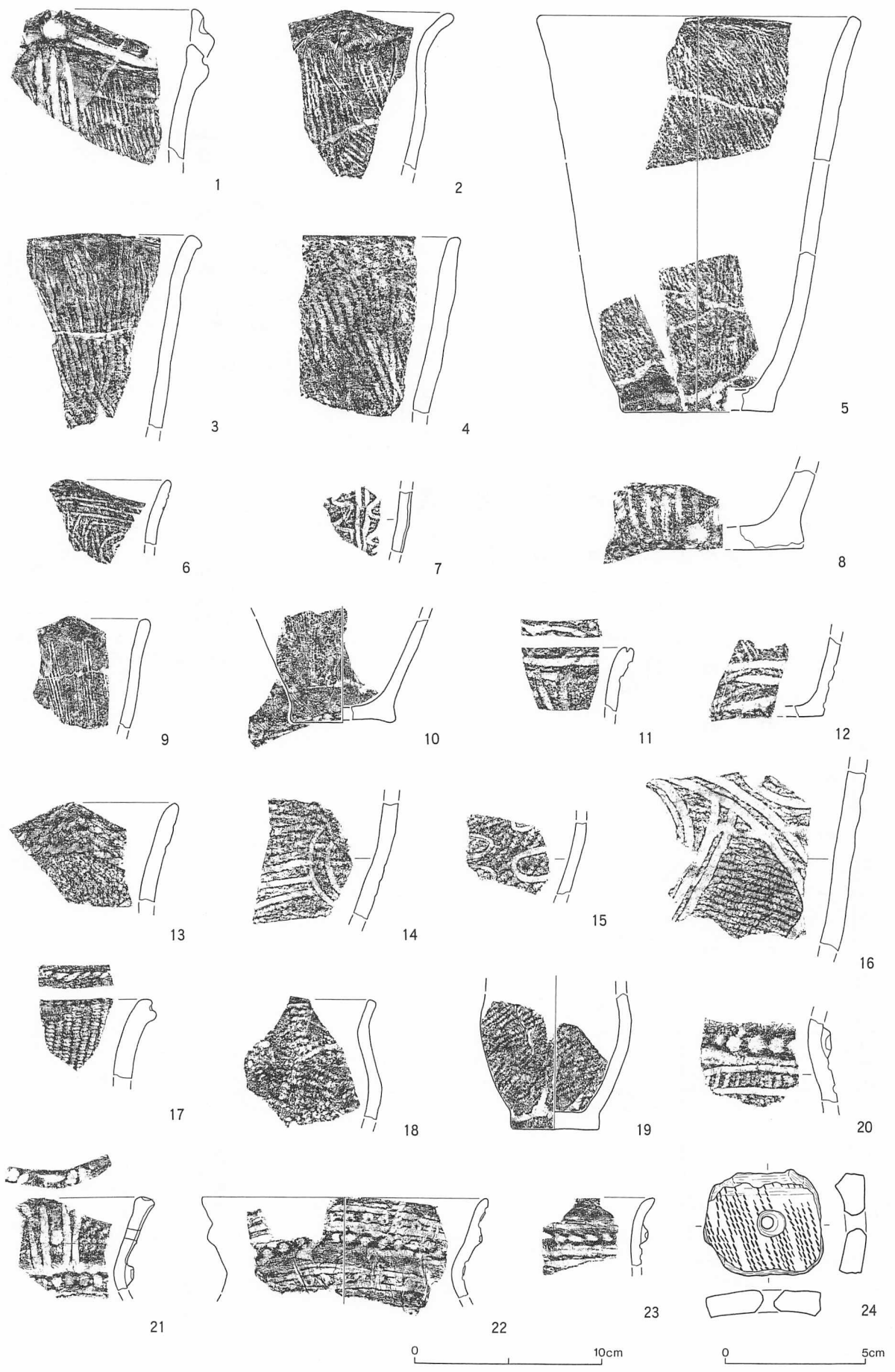
20~23は頸部のくびれ部などに貼付隆帯があり、連続刺突が施されている。20は貼付帯がやや薄い。21は口縁波頂部下に貫通孔を施し、その左右に2条ずつ縦位の沈線を描いている。22・23は明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含まず、焼成良好である。22はくびれ部ではなく口縁部下に貼付帯があり、植物の茎を利用したと見られる円形の刺突列が施されている。

24は土器片再生円盤。燃糸文を地文とする深鉢のくびれ部の破片を円形に加工している。特に左側面に断面加工の跡である擦痕がよく観察できる。

(阿部)



図IV-45 B地区包含層出土土器分布図



図IV-46 B地区包含層出土の土器

(2) 石器等

出土状況 (図IV-49・50、図版51・52)

包含層からは1,385点の石器等が出土した。層位別ではⅢ層から96点、主な遺物包含層であるⅣ層からは1,129点、出土している。B地区は伐採作業時の削平、攪乱と竪穴住居跡の掘り揚げ土などで厳密に分層できなかつたため、Ⅲ層からⅤ層の遺物包含層出土の遺物は、遺構外出土の遺物として整理を行った。内訳は大半が礫(701点)とフレイク(615点)である。他に剥片石器34点、磨製石器1点、礫石器27点出土している。分布は竪穴住居跡が多数確認された尾根部分が密である。南側の台地平坦面ではフレイクの出土が多い地区が1カ所見られる。時期は、出土した土器の大半が縄文時代中期後半の榎林式のもので、石器も同時期のものと考えられる。

石鏃 (図IV-49-1~10)

13点出土した。すべて有茎のものである。1~6は返しが明瞭なもの。7~10は不明瞭なもの。石材はすべて頁岩である。

石錐 (図IV-49-11)

図示した1点出土した。剥片の一部に機能部を作り出したもので、片面加工である。

ポイント・ナイフ (図IV-49-12)

図示した1点出土した。返しが明瞭で両面にわたり入念な細部調整が施されている。また、基部につまみが作り出されている。頁岩製。

スクレイパー (図IV-49-13~17)

19点出土した。13は2側縁に刃部を持つもの。14・15は一側縁に刃部を持つもの。16は湾曲した刃部を持つもの。17は横長剥片素材のものである。いずれも頁岩製。

石斧 (図IV-49-18)

図示した1点出土した。打ち欠き調整後に全面研磨されている。泥岩製。

扁平打製石器 (図IV-50-19~22)

6点出土した。19は縁辺部を打ち欠き調整しているもの。20~22は扁平な礫の両端のみに打ち欠き調整が施されるものである。

たたき石 (図IV-50-23)

1点出土した。端部と縁辺部に敲打痕が見られる。

砥石 (図IV-50-24)

棒状礫の平坦面を使用したもの。擦りの方向が礫の長軸からいくぶん傾いている。

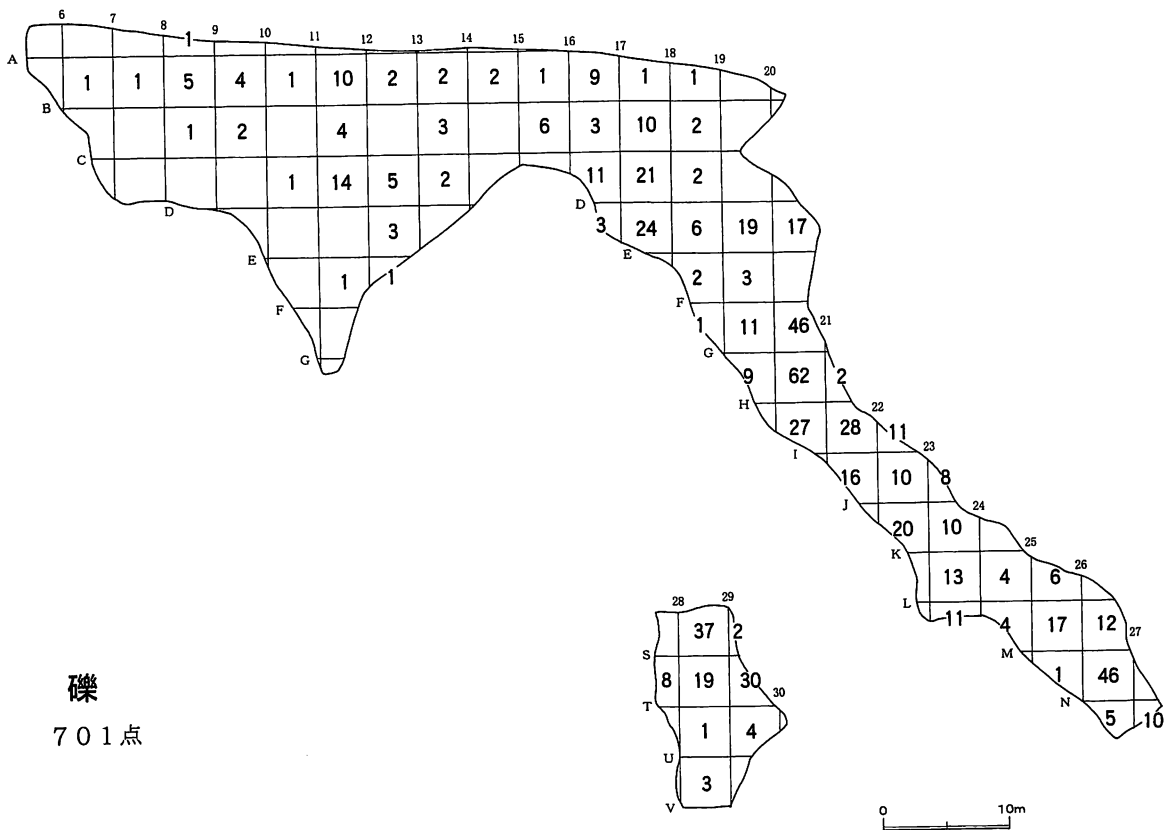
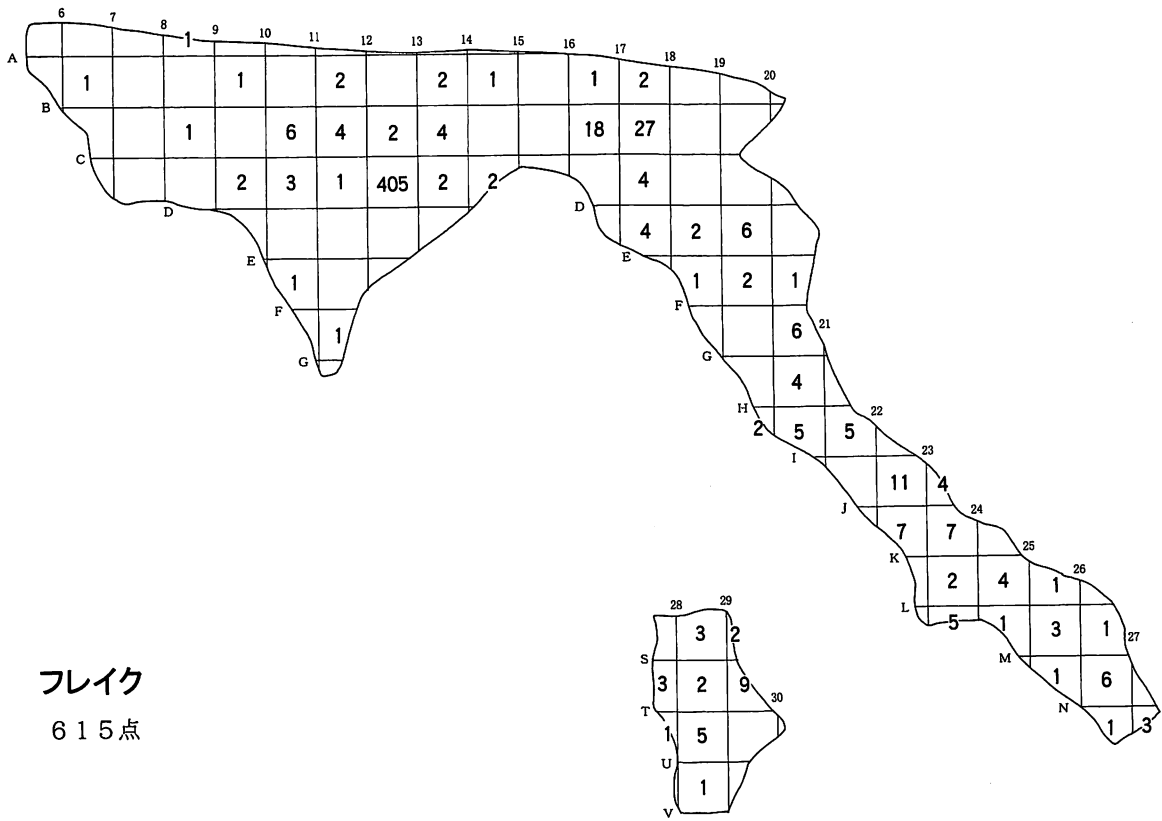
有孔自然礫 (図IV-50-25~28)

凝灰岩で、孔を持つ自然礫である。紐擦れなどの擦痕は観察されない。竪穴住居跡から出土する例があるため図示した。

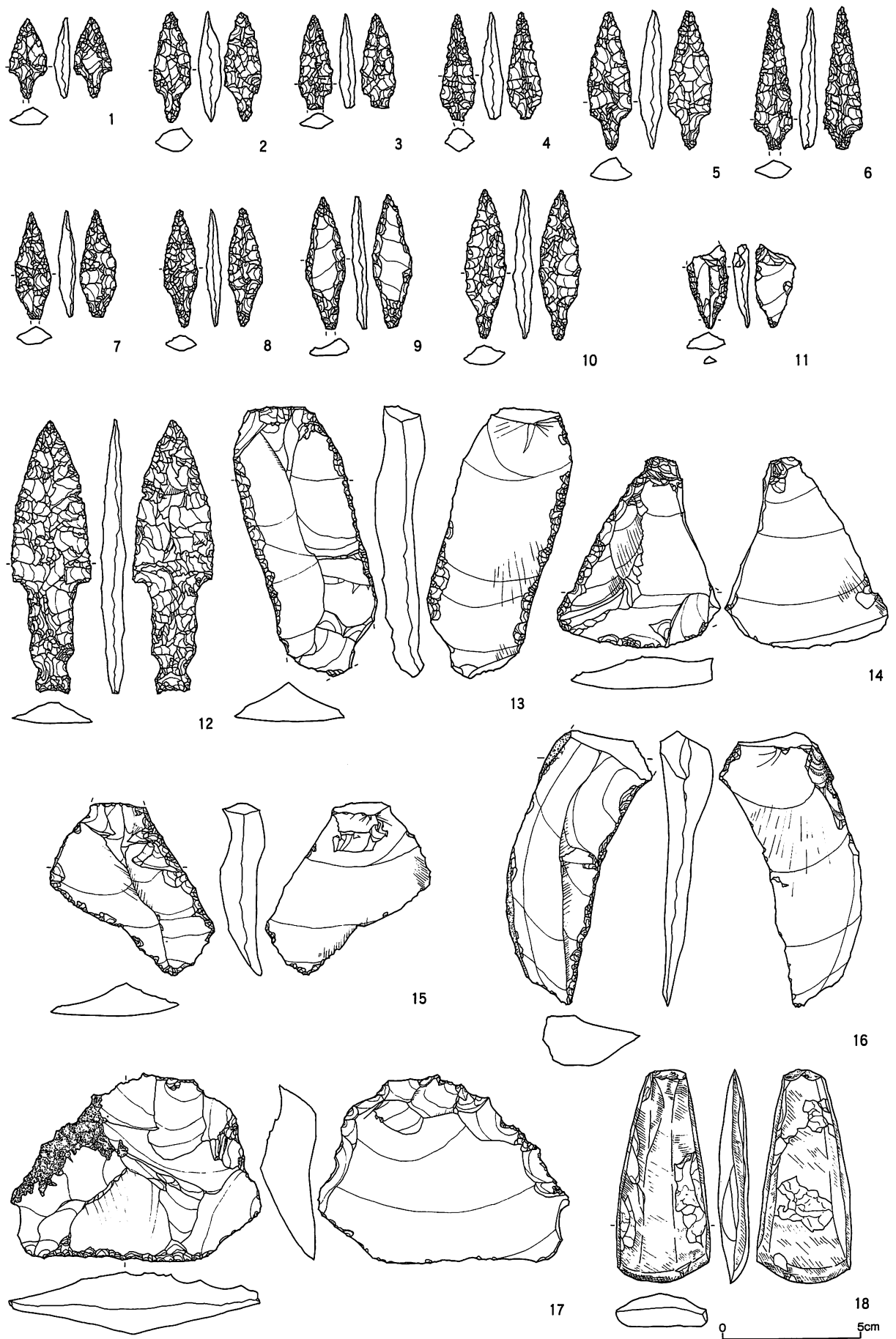
石製品 (図III-30-15)

軽石製である。全面研磨で整形されている。中央の穿孔は両面から行われている。

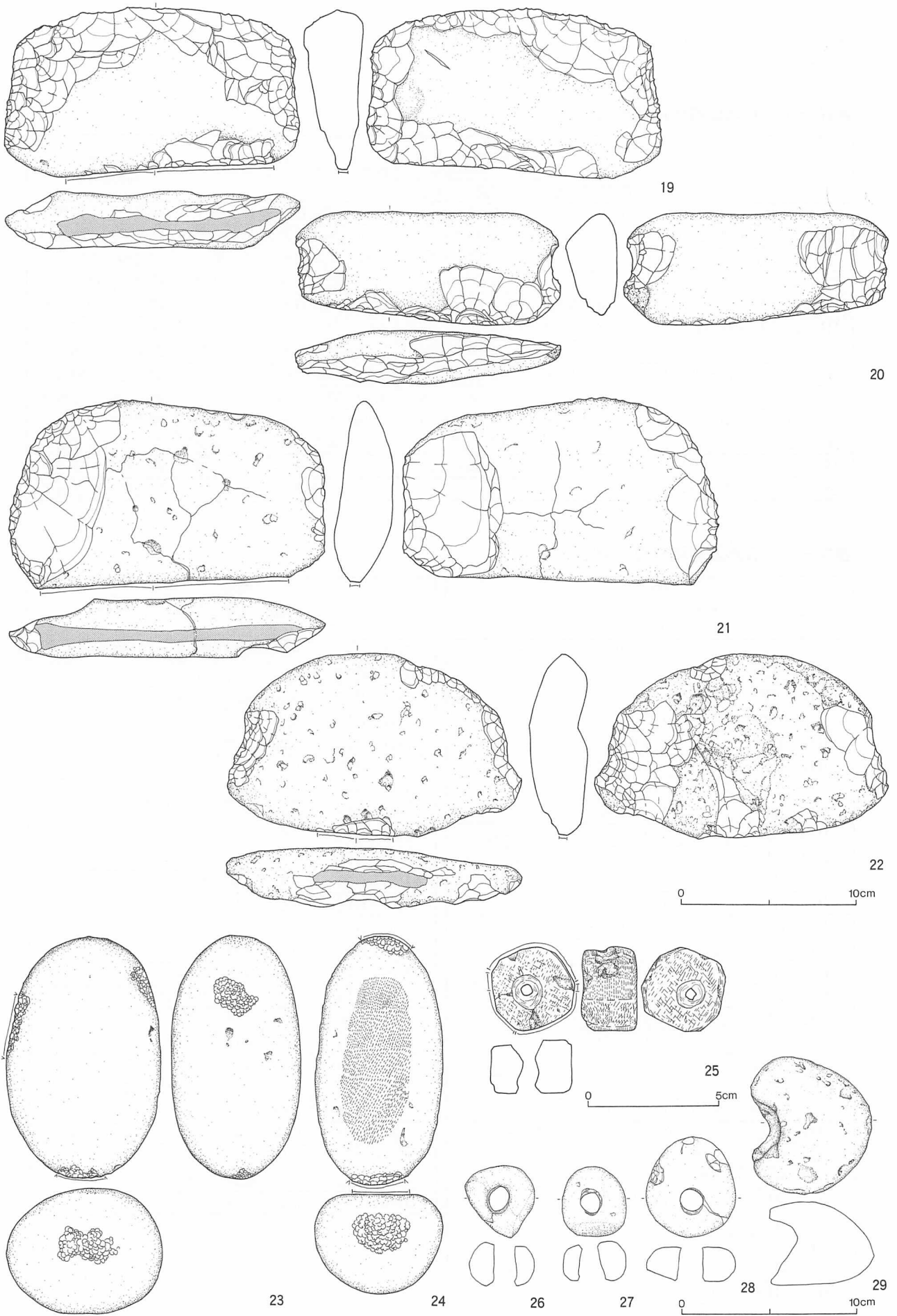
(村田)



図IV-48 B地区包含層出土石器分布図(2)



図IV-49 B地区包含層出土の石器(1)



図IV-50 B地区包含層出土の石器(2)

表Ⅳ-1 B地区遺構規模一覧

遺構名	発掘区	規模			形状	長軸方位	備考 (時期など)
		長軸(m)	短軸(m)	深さ (m)			
		確認面/底面	確認面/底面				
IH-1	T・U-27・28	4.46/3.93	3.82/3.40	0.96	楕円形	N-86°E	縄文時代中期後半
IH-2	L・M-25・26	(5.4)/(4.92)	4.16/3.72	1.04	隅丸方形	N-82°W	縄文時代中期後半
IH-3	J・K-23・24	(5.2)/(5.04)	4.52/4.24	0.84	隅丸方形	N-85°E	縄文時代中期後半
IH-4	I・J-23・24	5.00/4.36	(4.3)/(4.0)	0.7	隅丸方形	N-2°W	縄文時代中期後半
IH-5	H・I-21・22	4.36/3.82	(2.8)/(2.3)	0.56	隅丸方形	N-12°E	縄文時代中期後半
IH-6	G・H-21・22	3.19/3.08	3.28/2.48	1.0	隅丸方形	N-55°W	縄文時代中期後半
IH-7	F-19・20	3.68/3.36	2.88/2.28	0.60	隅丸方形	N-58°W	縄文時代中期後半
IH-8	M・N-26・27	(4.0)/(3.8)	(2.5)/(2.2)	0.51	隅丸方形	N-15°E	縄文時代中期後半
IH-9	K-24・25	(2.8)/(2.68)	3.08/2.16	0.80	隅丸方形	N-75°E	縄文時代中期後半
IH-10	M-25	2.64/2.28	1.64/1.40	0.28	隅丸方形	N-87°W	縄文時代中期後半
IH-11	R-28	(3.3)/	(2.3)/		隅丸方形	N-58°W	縄文時代中期後半
IP-9	A-14・15	1.48/1.20	1.36/1.04	0.60	円形	N-56°W	縄文時代中期後半
IS-1	H・I-21・22	7.0	3.5		不整形		縄文時代中期後半

表Ⅳ-2 B地区遺構規模一覧(2)

遺構名	規模			備考	遺構名	規模			備考
	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)			長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	
IH1-HP1	0.69	0.58	0.11	焼土・炭	IH4-HP1	0.35	0.32	0.08	焼土・炭
IH1-HP2	0.24	0.22	0.34		IH4-HP2	0.37	0.37	0.41	炭
IH1-HP3	0.20	0.18	0.32		IH4-HP3	0.28	0.26	0.60	
IH1-HP4	0.18	0.17	0.38		IH4-HP4	0.27	0.26	0.36	
IH1-HP5	0.42	0.41	0.22		IH4-HP5	0.26	0.22	0.51	
IH1-HP6	0.21	0.11	0.36		IH4-HP6	0.30	0.26	0.60	
IH1-HP7	0.17	0.16	0.30		IH4-HP7	0.26	0.25	0.36	
IH1-HP8	0.22	0.16	0.34		IH5-HP1	0.42	0.37	0.66	焼土・炭
IH2-HP1	0.74	0.63	0.15	焼土・炭	IH5-HP2	0.22	0.22	0.30	
IH2-HP2	0.26	0.25	0.08	埋設土器抜取?	IH5-HP3	0.38	0.24	0.55	
IH2-HP3	0.32	0.30	0.38	埋設土器抜取?	IH6-HP1	0.22	0.20	0.39	
IH2-HP4	0.29	0.29	0.06		IH6-HP2	0.12	0.12	0.05	
IH2-HP5	0.12	0.10	0.15		IH6-HP3	0.18	0.16	0.31	
IH2-HP6	0.12	0.12	0.37		IH6-HP4	0.16	0.16	0.16	
IH2-HP7	0.10	0.10	0.08		IH6-HP5	0.19	0.18	0.20	
IH2-HP8	0.14	0.13	0.40		IH8-HP1	0.23	0.22	0.63	
IH2-HP9	0.16	0.15	0.05		IH8-HP2	0.22	0.18	0.37	
IH2-HP10	0.14	0.14	0.34		IH8-HP3	0.21	0.17	0.42	
IH2-HP11	0.25	0.24	0.36		IH8-HP4	0.51	0.50	0.28	
IH2-HP12	0.13	0.12	0.23		IH8-HP5	0.55	0.30	0.20	風倒木入る
IH2-HP13	0.16	0.16	0.19		IH8-HP6	0.62	0.57	0.22	
IH3-HP1	0.74	0.43	0.10	焼土・炭	IH9-HP1	0.60	0.48	0.16	焼土・炭
IH3-HP2	0.18	0.18	0.22		IH9-HP2	0.18	0.17	0.05	
IH3-HP3	0.16	0.14	0.22		IH9-HP3	0.20	0.20	0.43	
IH3-HP4	0.20	0.17	0.42		IH10-HP1	0.30	0.30	0.13	
IH3-HP5	0.16	0.16	0.43						
IH3-HP6	0.18	0.16	0.14						
IH3-HP7	0.52	0.34	0.09	焼土・炭					
IH3-HP8	0.14	0.12	0.40						
IH3-HP9	0.15	0.14	0.12						
IH3-HP10	0.18	0.18	0.04						

表IV-3 B地区出土遺物集計表

遺物名	地区名	B地区													IS 1	遺構 合計	包含層	合計
	遺構種別	IH-																
	遺構番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11						
土器	III b	529	517	638	651	615	606	241	228	444	165	182		4816	1187	6003		
	IV a	9		31	1									41		41		
土製品	ミニチュア							1	16					17		17		
	土器片再生円盤	2	7		2	2			3	3				19	1	20		
	粘土塊														4	4		
土器等合計		540	524	669	654	617	606	242	247	447	165	182		4893	1192	6085		
石器	石鏃	2	5	1		3	2			1				14	13	27		
	石槍								2					2		2		
	石錐		2											2	1	3		
	つまみ付きナイフ				1									1		1		
	ポイントナイフ				1									1	1	2		
	スクレイパー	3	6	6	4	4	1		1	4				29	19	48		
	石斧	1	1		1	1				1				5	1	6		
	ヘラ状石器				2									2		2		
	扁平打製石器		5	1	2	1	2			1				12	6	17		
	たたき石		1	1										2	1	3		
	くぼみ石														1	1		
	すり石						1			2	1		2	6	2	8		
	石錘	2		1			1							4		5		
	砥石		1		1				1	2				5	5	10		
	台石	1								2				3	4	7		
	石皿		1	1					1	1			1	5	8	13		
	Rフレイク		1	7	2	1				1				12	2	14		
フレイク	43	77	70	60	13	26	5	7	35	1			337	615	952			
石製品	石製品				2									2	1	3		
	石棒			133	2									135		135		
礫	有孔自然礫	3	5											8	4	12		
	礫	102	258	98	306	186	133	80	98	127	1		182	1571	701	2272		
石器等合計		157	363	319	384	209	166	87	108	177	3		185	2158	1385	3543		
遺物合計		697	887	988	1038	826	772	329	355	624	168	182	185	7051	2577	9628		

表Ⅳ-4 B地区出土掲載土器一覽(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 番号	点数	分類	器種	部位	文様等；地文等/特徴	整理番号 ほか
図Ⅳ-5	1	図版35	IH-1	覆土3	68	1	Ⅲ b	深鉢	口～底	口唇上沈線・平行沈線・渦文・曲沈線； 櫛描文/緩やかな4単位波状口縁・平底 接合破片点数220・残片75点、 口径31.3cm・底径11.0cm・器高43.9cm	B-1
				覆土4	104	9					
				覆土4	323	1					
				覆土4	337	209					
図Ⅳ-5	2	図版35	IH-1	覆土3	56	5	Ⅲ b	深鉢	口～胴	平行沈線・渦文；捺糸文/緩やかな波状 口縁・口縁外反 接合破片点数9点、残片15点	B-52
				覆土4	111	1					
				覆土4	173	1					
				覆土3	250	1					
				覆土4	309	1					
図Ⅳ-5	3	図版35	IH-1	覆土4	337	2	Ⅲ b	深鉢	口	口唇上LR縄文・外面捺糸文	B-101
図Ⅳ-5	4	図版35	IH-1	覆土4	166	1	Ⅲ b	深鉢	底	捺糸文/平底・張り出しややあり・底径 (5.8) cm	B-51
				(S-28)	I	13					
図Ⅳ-5	5	図版35	IH-1	覆土3	18	1	Ⅲ b	深鉢	胴	捺糸文 接合破片点数4点、残片16点、図Ⅳ-5- 1と同一個体？	B-53
				覆土3	117	2					
				覆土5	230	1					
図Ⅳ-6	6	図版35	IH-1	覆土4	168	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	口唇上沈線；LR縄文	B-103
図Ⅳ-6	7	図版35	IH-1	覆土4	264	3	Ⅲ b	深鉢	胴	多条沈線・曲沈線	B-105
図Ⅳ-6	8	図版35	IH-1	覆土3	83	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	口唇上沈線・平行沈線・渦文/緩やかな 波状口縁	B-54
				覆土4	137	3					
図Ⅳ-6	9	図版35	IH-1	覆土3	12	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	沈線・刺突(口縁下・口唇上)・補修孔	B-102
図Ⅳ-6	10	図版35	IH-1	覆土4	134	1	Ⅲ b	鉢	口縁	曲沈線	B-104
図Ⅳ-6	11	図版35	IH-1	覆土3	3	1	Ⅳ a	深鉢	口縁	貼付帯；無文	B-106
				覆土3	291	8					
図Ⅳ-10	1	図版36	IH-2	覆土2	53	3	Ⅲ b	深鉢	口～底	平行沈線・縦走沈線(窓枠上の文様)・渦 文・弧線文；捺糸文/緩やかな4単位波 状口縁・口縁～胴部上半に多量の炭化物 付着・補修孔有り 接合破片点数29点、残片なし、 復元率約60% 口径20.1cm・残存器高24.0cm	B-14
				覆土1	86	1					
				覆土1	186	1					
				覆土1	187	1					
				床面	496	10					
				床面	497	8					
図Ⅳ-10	2	図版36	IH-2	覆土1	257	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	貼付帯(横位・縦位)・連続刺突・渦文・ 細沈線による斜行沈線；捺糸文/緩やか な波状口縁・口縁外反	B-56
				覆土2	321	1					
				覆土2	391	1					
				床面	472	3					
図Ⅳ-10	3	図版36	IH-2	覆土1	167	1	Ⅲ b	深鉢	胴		B-56
				覆土1	210	1					
図Ⅳ-10	4	図版36	IH-2	覆土2	388	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	捺糸文/補修孔	B-108
図Ⅳ-10	5	図版36	IH-2	壁	433	2	Ⅲ b	深鉢	口縁	沈線(外面・口唇上)；捺糸文	B-109
図Ⅳ-10	6	図版36	IH-2	覆土1	8	1	Ⅲ b	深鉢	口～底	捺糸文/ 平縁・平底、口縁下のくびれやや強い、 口縁～胴部上位に多量の炭化物付着 外面明褐色、内面黒褐色、胎土に径1mm 程度の小礫やや多量含む 接合破片点数47点+8点+3点、残片9 点、 口径24.3cm・底径9.1cm・器高 (33.6) cm	B-55
				覆土1	11	2					
				覆土1	18	1					
				覆土2	46	1					
				覆土2	47	1					
				覆土2	48	1					
				床面	49	1					
				覆土2	70	1					
				覆土2	72	1					
				床面	75	1					
				覆土1	114	1					
				覆土1	115	4					
				覆土1	123	3					
				覆土2	150	2					
				覆土2	174	4					
				覆土2	183	1					
				床面	351	1					
				床面	356	1					
				床面	357	1					
				床面	359	1					
				覆土2	420	3					
				床面	490	2					
				床面	493	5					
				覆土2	513	3					
				覆土1	10	2					
				覆土2	11	10					
覆土2	25	1									
(L-26)	Ⅳ	6	1								

表IV-5 B地区出土掲載土器一覽(2)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／(発掘区)	層位	遺物番号	点数	分類	器種	部位	文様等；地文等／特徴	整理番号ほか
			(M-26)	IV	8	1					
図IV-10	7	図版36	IH-2	覆土1	209	1	III b	深鉢	胴	渦線；捺糸文	B-110
図IV-10	8	図版36	IH-2	覆土	43	3	III b	深鉢	口縁	LR 縄文	B-107
図IV-15	1	図版38	IH-3	床面	226	64	III b	深鉢	口～底	平行沈線・渦文・剣菱文；捺糸文／平縁＋3単位突起・口縁下くびれ強い、平底 残片なし、復元率約95% 口径16.1cm・底径7.4cm・器高23.8cm	B-3
図IV-15	2	図版38	IH-3	覆土	30	1	III b	深鉢	口縁	無文／ 緩やかな3単位波状口縁・口縁わずかに外反、平底（わずかに底が上がる）、 胴部に炭化物（覆土出土破片） 接合破片点数18点・残片なし、 復元率約75%、 口径11.2cm・底径6.2cm・器高14.0cm	B-8
			IH-3	覆土	43	9					
			IH-3	覆土	147	1					
			IH-3	覆土	148	1					
			IH-3	覆土	149	2					
			IH-3	覆土	150	1					
			IH-3	覆土	151	1					
			IH-3	覆土	197	1					
			(K-23)	I	5	1					
図IV-15	3	図版38	IH-3	覆土	270	117	III b	深鉢	口縁	LR 縄文／ 緩やかな6単位波状口縁・口縁外反・平底 口縁～胴部上半に炭化物付着、 口径29.5cm・底径10.0cm・器高42.1cm	B-9
			IH-3	覆土	289	1					
図IV-16	4	図版38	IH-3	覆土1	14	2	III b	深鉢	口～胴	平行沈線・縦走沈線（窓枠上の文様）・渦文・曲沈線；LR 縄文／緩やかな波状口縁 胎土に砂粒をあまり含まない 接合破片点数28点＋9点＋9点、残片91点	B-57
			IH-3	覆土1	33	4					
			IH-3	覆土2	57	1					
			IH-3	覆土2	61	1					
			IH-3	覆土2	97	12					
			IH-3	覆土2	98	4					
			IH-3	覆土2	100	1					
			IH-3	覆土2	109	2					
			IH-3	覆土2	115	2					
			IH-3	覆土1	199	5					
			IH-3	覆土1	207	1					
			IH-3	覆土2	263	6					
			IH-3	覆土2	264	3					
			IH-9	覆土1	152	2					
図IV-16	5	図版39	IH-3	覆土	200	1	III b	深鉢	底	LR 縄文／平底	B-58
			IH-3	覆土	238	4					
図IV-16	6	図版39	IH-3	覆土	54	3	III b	深鉢	底	櫛描文・LR 縄文／平底 接合破片点数7点、残片108点	B-59
			IH-3	覆土	55	4					
図IV-16	7	図版39	IH3-HP8	覆土	2	1	III b	深鉢	口縁	捺糸文	B-112
図IV-16	8	図版39	IH-3	覆土2	125	3	IV a	深鉢	胴	貼付帯；LR 縄文	B-111
図IV-16	9	図版39	IH-3	覆土1	133	3	IV a	深鉢	口・胴・底	貼付帯；RL 縄文（口唇上含む）／折り返し口縁・平縁・平底 接合破片点数14点＋4点＋1点＋1点、 残片8点	B-60
			IH-3	覆土1	134	8					
			IH-3	覆土1	135	4					
			IH-3	覆土1	137	2					
			IH-3	覆土1	139	1					
			IH-3	覆土1	208	1					
			IH-4	覆土1	11	1					
図IV-20	1	図版41	IH-4	床面	73	29	III b	深鉢	胴	3～4本一組の曲沈線；LR 縄文／ 上端断面磨滅 外面上部および内面下部に炭化物付着 胴最大径21.6cm、残存器高16.5cm	B-6 埋設土器
図IV-20	2	図版41	IH-4	覆土1	1	24	III b	深鉢	口～底	平行沈線・口縁波頂部にV字状の沈線；無文／4単位の緩やかな波状口縁 復元率約75%、接合破片点数24点、残片3点、口径11.7cm・底径6.0cm・器高15.2cm	B-4
図IV-20	3	図版41	IH-4	覆土2	15	34	III b	深鉢	口～胴	捺糸文／ 4単位の緩やかな波状口縁 復元率約60%、接合破片点数34点、残片14点、口径19.0cm・器高(22.4)cm	B-12
図IV-21	4	図版41	IH-4	覆土2	13	3	III b	深鉢	口～胴	捺糸文／緩やかな波状口縁、補修孔有り、炭化物多量付着	B-63
			IH-4	覆土2	14	1					
図IV-21	5	図版41	IH-4	覆土1	10	1	III b	深鉢	口～底	捺糸文／ 平縁・丸みを帯びた口唇、平底・やや張り出しあり、全面的に明褐色～赤褐色 接合破片点数9点＋6点、残片9点、 口径17.1cm・底径8.0cm、器高(21.8)cm	B-61
			IH-4	覆土2	13	5					
			IH-4	覆土2	14	3					
			IH-4	覆土2	21	2					
			IH-4	覆土2	61	1					
			IH-3	覆土2	99	3					

表Ⅳ-6 B地区出土掲載土器一覽(3)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構／(発掘区)	層位	遺物番号	点数	分類	器種	部位	文様等；地文等／特徴	整理番号ほか
図Ⅳ-21	6	図版42	IH-4	覆土1	41	2	Ⅲb	深鉢	口縁	捺糸文／ 緩やかな波状口縁・波頂部刺突、全面的に明褐色～赤褐色 接合破片点数2点+13点、残片70点、	B-62
図Ⅳ-21	7	図版42	IH-4	覆土1	8	3	Ⅲb	深鉢	胴		B-62
			IH-4	覆土2	13	1					
			IH-4	覆土2	14	7					
			IH-4	覆土2	61	1					
			(J-22)	Ⅳ	8	1					
図Ⅳ-21	8	図版42	IH-4	覆土1	11	1	Ⅲb	深鉢	口縁	LR 縄文	B-113
図Ⅳ-21	9	図版42	IH-4	覆土1	20	1	Ⅲb	深鉢	口縁	沈線；櫛描文	B-116
図Ⅳ-21	10	図版42	IH-4	覆土1	22	1	Ⅲb	深鉢	口縁	沈線；刺突；RL 縄文	B-115
図Ⅳ-21	11	図版42	IH-4	覆土1	12	1	Ⅲb	深鉢	口縁	沈線；LR 縄文	B-114
図Ⅳ-21	12	図版42	IH-4	覆土1	11	1	Ⅲb	深鉢	胴	貼付帯・連続刺突・沈線；LR 縄文	B-118
図Ⅳ-21	13	図版42	IH-4	覆土1	41	1	Ⅲb	深鉢	胴	貼付帯・沈線；LR 縄文	B-117
図Ⅳ-21	14	図版42	IH4-HP2	覆土1	1	1	Ⅲb	深鉢	底	無文	B-119
図Ⅳ-24	1	図版43	IH-5	覆土2	36	6	Ⅲb	深鉢	口・胴	LR 縄文・捺糸文／内面みがき調整 接合破片点数7点、残片3点	B-64
			IH-5	覆土	37	1					
図Ⅳ-24	2	図版43	IH-5	覆土1	31	1	Ⅲb	深鉢	口縁	蛇行沈線・沈線；LR 縄文	B-120
図Ⅳ-24	3	図版43	IH-5	覆土1	32	1	Ⅲb	深鉢	胴	渦文；LR 縄文	B-121
図Ⅳ-24	4	図版43	IH-5	覆土1	32	1	Ⅲb	深鉢	口縁	沈線；捺糸文	B-123
図Ⅳ-24	5	図版43	IH-5	覆土1	32	1	Ⅲb	深鉢	口縁	貼付帯・刺突・沈線；	B-122
図Ⅳ-24	6	図版43	IH-5	覆土1	32	1	Ⅲb	深鉢	胴	蛇行沈線・沈線；LR 縄文	B-124
図Ⅳ-27	1	図版43	IH-6	覆土	5	101	Ⅲb	深鉢	口～底	2本一組の曲沈線・円文・弧線文；LR 縄文／ゆるやかな4単位の波状口縁・平底、外面上半(覆土下位出土片)に多量の炭化物付着、口径27.7cm・底径8.0cm、器高39.7cm	B-10
			IH-6	覆土1	20	59					
図Ⅳ-28	2	図版43	IH-6	覆土2	30	1	Ⅲb	深鉢	胴	平行沈線・弧線文；多方向の捺糸文／上端断面磨滅、胎土に小礫多く含む 外面上半に炭化物や多量付着 胴最大径16.8cm、残存器高23.3cm	B-2 埋設土器
			IH-6	覆土1	33	1					
			IH-6		65	20					
			IH-6	床面	74	6					
図Ⅳ-28	3	図版44	IH-6	覆土1	27	1	Ⅲb	深鉢	胴	多条沈線；捺糸文	B-126
図Ⅳ-28	4	図版44	IH-6	覆土1	31	1	Ⅲb	深鉢	口縁	捺糸文	B-125
図Ⅳ-28	5	図版44	IH-6	覆土1	4	31	Ⅲb	深鉢	口～胴	平行沈線・渦文・剣菱文・曲沈線；櫛描文／緩やかな波状口縁 接合破片点数33点+6点、残片221点	B-65
			IH-6	覆土1	26	8					
図Ⅳ-31	1	図版45	IH-7	覆土1	1	7	Ⅲb	深鉢	口～底	口唇波頂部に沈線；LR 縄文／ 緩やかな4単位の波状口縁、平底、補修孔有り、口縁～胴部上半に炭化物多量付着、接合破片点数39点、残片10点、口径24.0cm・底径6.7cm、器高29.2cm	B-15
			IH-7	覆土2	2	1					
			IH-7	覆土1	4	1					
			IH-7	覆土1	12	28					
			(F-20)	Ⅳ		2					
図Ⅳ-31	2	図版45	IH-7	覆土1	1	2	Ⅲb	深鉢	口～胴	平行沈線・縦走沈線・円文・蛇行沈線； RL 縄文／波状口縁	B-66
			IH-7	覆土2	7	1					
図Ⅳ-31	3	図版45	IH-7	覆土1	4	1	Ⅲb	深鉢	口縁	口唇上沈線・平行沈線・曲沈線；	B-128
図Ⅳ-31	4	図版45	IH-7	覆土1	4	3	Ⅲb	深鉢	胴	櫛描文	B-130
図Ⅳ-31	5	図版45	IH-7	覆土2	7	1	Ⅲb	深鉢	口縁	口唇上沈線；LR 縄文	B-127
図Ⅳ-31	6	図版45	IH-7	覆土2	7	1	Ⅲb	深鉢	胴	捺糸文	B-131
図Ⅳ-31	7	図版45	IH-7	床面	9	5	Ⅲb	小型深鉢	口縁	平行沈線・弧線文・口唇上刺突；無文	B-129
図Ⅳ-31	8	図版45	IH-7	床面	9	1	Ⅲb	小型深鉢	底	無文／底部弱い張り出し	B-132
			IH-7	床面	11	1					
図Ⅳ-33	1	図版45	IH-8	床面	8	16	Ⅲb	深鉢	胴	RL 縄文	B-67 埋設土器
図Ⅳ-33	2	図版45	IH-8	覆土2	11	1	Ⅲb	深鉢	口縁	平行沈線；櫛描文	B-134
図Ⅳ-33	3	図版45	IH-8	覆土1	10	2	Ⅲb	深鉢	口縁	捺糸文	B-133
図Ⅳ-33	4	図版45	IH8-HP4	覆土	2	6	Ⅲb	深鉢	口～胴	捺糸文	B-68
図Ⅳ-33	5	図版45	IH-8	覆土1	10	1	Ⅲb	深鉢	胴	曲沈線；LR 縄文	B-135
図Ⅳ-33	6	図版45	IH-8	床面	8	2	Ⅲb	深鉢	底	捺糸文	B-136
図Ⅳ-35	1	図版46	IH-9	床面	270	11	Ⅲb	深鉢	胴	平行沈線・弧線文・山形文；LR 縄文／ 上端口唇磨滅、外面上半に炭化物付着 胴最大径20.6cm、残存器高19.4cm	B-7 埋設土器
			IH-9	床面	289	1					
図Ⅳ-35	2	図版46	IH-9	覆土2	1	27	Ⅲb	深鉢	口～底	櫛描文(口唇上含む)／ 平縁+4単位の突起・平底 口径21.0cm・底径8.4cm、器高27.1cm	B-11
			IH-9	覆土1	4	2					
			IH-9	覆土1	134	2					
図Ⅳ-35	3	図版46	IH-9	覆土2	2	1	Ⅲb	深鉢	口～胴	捺糸文／ゆるやかな波状口縁・丸みを帯びた口唇	B-69
			IH-9	覆土2	3	1					
			IH-9	覆土2	4	4					
図Ⅳ-35	4	図版46	IH-9	覆土2	136	1	Ⅲb	深鉢	胴	捺糸文／内面凹凸あり	B-71
			IH-9	覆土2	150	1					
			IH-2	覆土1	387	1					

表IV-7 B地区出土掲載土器一覽(4)

挿図番号	掲載 番号	写真 図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 番号	点数	分類	器種	部位	文様等；地文等/特徴	整理番号 ほか
図IV-35	5	図版46	IH-9	覆土2	4	1	III b	深鉢	底	捺糸文/内面凹凸あり	B-137
			IH-9	覆土2	135	1					
			IH-9	覆土2	150	1					
図IV-35	6	図版46	IH-9	床面	79	3	III b	深鉢	口縁	捺糸文/ 接合破片点数5点、残片28点	B-70
			IH-9	覆土2	136	2					
図IV-35	7	図版46	IH-9	覆土1	137	1	III b	深鉢	胴	平行沈線・曲沈線；捺糸文	B-141
図IV-35	8	図版46	IH-9	覆土2	135	1	III b	深鉢	口縁	櫛描文	B-139
			IH-9	覆土2	150	1					
図IV-35	9	図版46	IH-9	覆土2	150	2	III b	深鉢	胴	渦文・剣菱文；櫛描文	B-140
図IV-35	10	図版46	IH-9	覆土2	7	2	III b	深鉢	底	無文/平底	B-143
			IH-9	覆土2	10	1					
図IV-35	11	図版46	IH-9	覆土2	22	4	III b	深鉢	口縁	平行沈線；LR 縄文	B-138
図IV-35	12	図版46	IH-9	床面	72	1	III b	深鉢	胴	平行沈線/渦文；LR 縄文	B-142
図IV-40	1	図版48	IH-10	床面	3	62	III b	深鉢	胴	横走沈線・渦文・剣菱文；LR 縄文/ 外面磨滅部分有り、胎土に小礫多く含 む、上半に炭化物付着、胴最大径19.6cm	B-13 埋設土器
図IV-40	2	図版48	IH-10	覆土1	2	1	III b	深鉢	口縁	沈線；LR 縄文	B-145
図IV-40	3	図版48	IH-10	覆土1	2	1	III b	深鉢	口縁	口唇上刺突・沈線；捺糸文	B-144
図IV-40	4	図版48	IH-10	床面	4	3	III b	深鉢	底	多条沈線/平底	B-72
図IV-41	1	図版48	IH-11	床面	1	72	III b	深鉢	底	剣菱文；LR 縄文/平底、外面剥落多い 底径10.2cm、残存器高20.4cm	B-5 埋設土器
			(R-28)	I	2	2					
			(S-28)	I	14	3					
図IV-46	1	図版50	(N-27)	I	1	1	III b	深鉢	口縁	沈線・刺突；捺糸文/緩やかな波状口縁	B-146
			(N-27)	IV	4	4					
図IV-46	2	図版50	(N-27)	IV	4	2	III b	深鉢	口縁	細沈線；捺糸文	B-147
図IV-46	3	図版50	(S-29)	I	3	2	III b	深鉢	口縁	捺糸文	B-148
図IV-46	4	図版50	(K-25)	IV	3	1	III b	深鉢	口縁	捺糸文	B-149
図IV-46	5	図版50	(S-28)	IV	1	1	III b	深鉢	口・底	捺糸文/平縁・丸みを帯びた口唇 接合破片点数7点、残片3点	B-73
			(T-28)	I	3	8					
図IV-46	6	図版50	(F-20)	IV	1	1	III b	深鉢	口縁	平行沈線・渦文・曲沈線；捺糸文	B-158
図IV-46	7	図版50	(L-24)	III	1	1	III b	深鉢	胴	蛇行沈線・沈線；捺糸文	B-163
図IV-46	8	図版50	(F-20)	IV	1	1	III b	深鉢	底	多条沈線・捺糸文	B-165
図IV-46	9	図版50	(H-21)	IV	13	2	III b	深鉢	口縁	櫛描文	B-150
図IV-46	10	図版50	(M-26)	III	1	2	III b	深鉢	底	櫛描文	B-166
図IV-46	11	図版50	(D-17)	IV	6	1	III b	深鉢	口縁	平行沈線・曲沈線	B-159
図IV-46	12	図版50	(D-19)	III	2	1	III b	深鉢	底	沈線	B-164
図IV-46	13	図版50	(E-18)	IV	1	1	III b	深鉢	口縁	縄文圧痕・捺糸文	B-153
図IV-46	14	図版50	(M-27)	IV	4	3	III b	深鉢	胴	沈線・渦文；LR 縄文	B-162
図IV-46	15	図版50	(C-19)	III	1	1	III b	深鉢	胴	曲沈線；LR 縄文	B-160
図IV-46	16	図版50	(N-27)	IV	4	3	III b	深鉢	胴	渦文・剣菱文；LR 縄文	B-161
図IV-46	17	図版50	(L-25)	IV	14	1	III b	深鉢	口縁	口唇上縄文圧痕・LR 縄文	B-152
図IV-46	18	図版50	(D-19)	III	2	1	III b	深鉢	口縁	LR 縄文	B-151
図IV-46	19	図版50	(S-27)	IV	7	4	III b	小型深鉢	胴~底	RL 縄文	B-74
図IV-46	20	図版50	(I-21)	III	2	1	III b	深鉢	胴	沈線・貼付帯・連続刺突；捺糸文	B-156
図IV-46	21	図版50	(S-28)	I	13	1	III b	深鉢	口縁	沈線・貼付帯・連続刺突・貫通孔	B-157
図IV-46	22	図版50	(M-26)	IV	8	5	III b	深鉢	口縁	沈線・貼付帯・連続刺突	B-154
図IV-46	23	図版50	(T-29)	I	1	2	III b	深鉢	口縁	沈線・貼付帯・連続刺突	B-155

表Ⅳ-8 B地区出土掲載土製品一覧

挿図番号	掲載 番号	写真 図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 No.	点数	分類	大きさ (cm)			重さ (g)	備考
								長径	短径	厚さ		
図Ⅳ-5	12	図版48	IH-1	覆土4	164	1	土器片再生円盤	4.3	4.3	0.8	13.8	円-1
			IH-1	覆土4	202	1						
図Ⅳ-10	9	図版48	IH-2	覆土1	14	2	土器片再生円盤	5.1	4.4	1.1	22.7	円-2
図Ⅳ-10	10	図版48	IH-2	覆土1	236	1	土器片再生円盤	4.5	(2.3)	0.9	10.0	円-4
図Ⅳ-10	11	図版48	IH-2	床面	486	1	土器片再生円盤	5.2	4.6	1.0	20.6	円-5
図Ⅳ-10	12	図版48	IH-2	床面	502	1	土器片再生円盤	4.5	4.4	0.8	20.5	円-6
図Ⅳ-10	13	図版48	IH-2	覆土2	141	1	土器片再生円盤	3.3	3.2	0.8	8.7	円-3
図Ⅳ-21	15	図版48	IH-4	覆土2	2	1	土器片再生円盤	5.4	5.4	0.8	18.8	円-7
図Ⅳ-21	16	図版48	IH-4	覆土2	3	1	土器片再生円盤	4.2	4.2	0.8	12.9	円-8
図Ⅳ-24	7	図版48	IH-5	覆土1	33	1	土器片再生円盤	3.3	(2.0)	0.7	4.5	円-9
図Ⅳ-24	8	図版48	IH-5	覆土2	42	1	土器片再生円盤	3.5	3.3	0.9	9.5	円-10
図Ⅳ-33	7	図版48	IH-8	覆土2	23	16	ミニチュア土製品 (ろうと形)	1.9 (口径)	5.4 (底径)	4.5 (器高)	23.2	B-16
			IH-8	覆土2	25	1						
図Ⅳ-33	8	図版48	IH-8	覆土2	9	1	土器片再生円盤	5.2	4.6	0.9	15.5	円-12
図Ⅳ-33	9	図版48	IH-8	覆土2	9	1	土器片再生円盤	5.6	3.7	1.1	18.0	円-13
図Ⅳ-33	10	図版48	IH-8	覆土2	5	1	土器片再生円盤	4.3	4.2	1.0	17.7	円-11
図Ⅳ-35	13	図版48	IH-9	床面	65	1	土器片再生円盤	4.8	4.6	1.0	14.9	円-14
図Ⅳ-35	14	図版48	IH-9	床面	98	1	土器片再生円盤	4.9	4.5	1.0	18.0	円-15
図Ⅳ-35	15	図版48	IH-9	覆土2	135	1	土器片再生円盤	4.0	(2.0)	0.9	6.7	円-16
図Ⅳ-46	24	図版48	(D-20)	Ⅳ	3	1	土器片再生円盤	4.2	3.8	1.0	15.8	円-17

表IV-9 B地区遺構出土掲載石器一覧(1)

図番号	掲載番号	器種名	遺構名	遺物番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
図IV-6	13	石鏃	IH-1	41	1	3.6	1.2	0.7	2.2	頁岩	図版35	
図IV-6	14	石鏃	IH-1	326	4	4	1.6	0.6	2.9	頁岩	図版35	
図IV-6	15	石鏃	IH-1	256	3	3.6	1.5	0.9	3.8	頁岩	図版35	
図IV-6	16	スクレイパー	IH-1	148	4	6	5	1.4	35.8	頁岩	図版35	
図IV-6	17	扁平打製石器	IH-1	224	4	8.9	14.3	3.9	810	安山岩	図版35	
図IV-6	18	有孔自然礫	IH-1	254	3	6.5	5.5	1.8	40	凝灰岩	図版35	
図IV-11	14	石鏃	IH-2	519	2	2.6	1.3	0.5	1.7	頁岩	図版37	
図IV-11	15	石鏃	IH-2	366	床	3.1	1.1	0.6	1.5	頁岩	図版37	
図IV-11	16	石鏃	IH-2	215	1	4.5	1.6	0.5	3.1	粘板岩	図版37	
図IV-11	17	石鏃	IH-2	59	2	4.6	1.2	0.5	3	頁岩	図版37	
図IV-11	18	石鏃	IH-2	503	床	2.4	1	0.5	1.1	頁岩	図版37	
図IV-11	19	石鏃	IH-2	484	床	4.4	1.2	0.6	2.9	頁岩	図版37	
図IV-11	20	スクレイパー	IH-2	339	2	8.2	5.4	1.4	56	頁岩	図版37	
図IV-11	21	石斧	IH-2	498	床	6.9	3.8	1.3	68	蛇紋岩	図版37	
図IV-11	22	たたき石	IH-2	284	1	19.4	9.6	7	1960	安山岩	図版37	
図IV-11	23	扁平打製石器	IH-2	474	床	8.5	16.3	2.5	416	安山岩	図版37	
図IV-11	24	扁平打製石器	IH-2	536	覆土	7.5	17.9	3.6	724	安山岩	図版37	
図IV-11	25	石皿	IH-2	495	床	15.9	27	6.3	4310	安山岩	図版37	
図IV-11	26	有孔自然礫	IH-2		1	8	5.6	3.9	136.2	凝灰岩	図版37	205、206、303接合
図IV-11	27	有孔自然礫	IH-2	367	床	4.8	4.2	1.6	22	凝灰岩	図版37	
図IV-11	28	有孔自然礫	IH-2	334	1	3.7	3.7	0.7	5.2	凝灰岩	図版37	
図IV-17	10	石鏃	IH-3	302	床	2.8	1.6	0.4	1.3	黒曜石	図版39	
図IV-17	11	石鏃	IH-3	4	1	3	1.9	0.8	3.6	粘板岩	図版39	
図IV-17	12	スクレイパー	IH-3	236	2	4.9	2.9	1.1	208	頁岩	図版39	
図IV-17	13	スクレイパー	IH-3	320	床	8.5	5.4	1.4	26.2	頁岩	図版39	
図IV-17	14	たたき石	IH-3	146	2	19.7	9.2	6.7	1770	安山岩	図版39	
図IV-17	15	扁平打製石器	IH-3	46	1	8.5	13.9	3.9	504	凝灰岩	図版39	
図IV-17	16	石皿	IH-3	291	床	9	14.2	4.2	694	安山岩	図版39	
図IV-17	17	玉	IH-3	331	床	2.6	1.7	1.7	9.2	蛇紋岩	図版39	被熱
図IV-18	18	石棒	IH-3		床	49.9	8.8	8.4	3620	凝灰岩	図版40	121点接合、被熱
図IV-22	17	ポイントナイフ	IH-4	56	2	8.8	2.5	1.3	21.2	頁岩	図版42	
図IV-22	18	つまみ付きナイフ	IH-4	47	2	9	4.3	1.7	41.2	頁岩	図版42	
図IV-22	19	篋状石器	IH-4	78	1	4	1.8	1.1	7.8	頁岩	図版42	
図IV-22	20	篋状石器	IH-4	103	2	7.6	3	1.3	28	頁岩	図版42	
図IV-22	21	スクレイパー	IH-4	66	1	8.4	4.6	1.1	50.1	頁岩	図版42	
図IV-22	22	スクレイパー	IH-4	45	2	4	3.7	0.5	7.9	緑色泥岩	図版42	
図IV-22	23	石斧	IH-4	9	2	5.4	3.4	1.7	44.7	片岩	図版42	
図IV-22	24	扁平打製石器	IH-4	98	2	7.9	16.8	3.5	450	安山岩	図版42	
図IV-22	25	砥石	IH-4	4	2	22.9	35.4	12.5	10200	安山岩	図版42	
図IV-22	26	石製品	IH-4	81	1	7.1	4	2.1	10.1	軽石	図版42	
図IV-22	27	石製品	IH-4	27	1	11.9	9.3	5	622	砂岩	図版42	
図IV-24	9	石鏃	IH-5	46	2	3.7	1.5	0.6	2.3	頁岩	図版43	
図IV-25	10	石鏃	IH-5	61	1	3.7	1.5	0.5	2	頁岩	図版43	
図IV-26	11	石鏃	IH-5	65	1	4.1	1.6	0.8	3	頁岩	図版43	
図IV-27	12	スクレイパー	IH-5	64	1	7.4	4.8	1.4	27.7	頁岩	図版43	
図IV-28	13	スクレイパー	IH-5	64	1	8.7	5.7	1.9	73.1	頁岩	図版43	
図IV-29	14	スクレイパー	IH-5	64	1	8.1	3.9	1.3	29.7	頁岩	図版43	
図IV-30	15	扁平打製石器	IH-5	51	1	9.5	15.2	3.5	550	安山岩	図版43	
図IV-29	6	石鏃	IH-6		床	3.3	1.3	0.6	2	頁岩	図版44	
図IV-29	7	石鏃	IH-6	7	2	3.7	1.8	0.6	3.3	片岩	図版44	
図IV-29	8	石鏃	IH-6	58	1	3.6	1.2	0.6	0.9	頁岩	図版44	
図IV-29	9	スクレイパー	IH-6	14	壁	6.9	4.5	0.7	19.3	頁岩	図版44	
図IV-29	10	扁平打製石器	IH-6	70	1	7.4	17.8	3	610	安山岩	図版44	
図IV-29	11	扁平打製石器原材	IH-6	18	床	7.5	11.3	2.2	250.4	安山岩	図版44	
図IV-29	12	扁平打製石器原材	IH-6	15	床	10.8	15.8	4.4	1020	安山岩	図版44	
図IV-31	9	砥石	IH-7	27	1	12.8	15.4	7.6	2190	安山岩	図版45	
図IV-31	10	石皿	IH-7	26	1	10.9	17.2	3.3	948	安山岩	図版45	
図IV-33	11	石槍	IH-8	29	2	9.5	3.2	1.5	42	頁岩	図版45	
図IV-33	12	石槍	IH-8	3	2	9	4.9	1.2	35.3	頁岩	図版45	
図IV-36	16	石鏃	IH-9	138	1	3.5	1.3	0.7	1.9	頁岩	図版47	
図IV-36	18	スクレイパー	IH-9	49	2	8.3	5.1	2	48	頁岩	図版47	
図IV-36	17	スクレイパー	IH-9	103	床	11.8	6.3	1.4	72	頁岩	図版47	
図IV-36	19	石斧	IH-9	30	2	6.2	4.4	1.3	62	片岩	図版47	
図IV-36	21	すり石	IH-9	36	2	7.5	14.1	3.7	526	安山岩	図版47	

表Ⅳ-10 B地区遺構出土掲載石器一覧(2)

図番号	掲載番号	器種名	遺構名	遺物番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
図Ⅳ-36	20	すり石	IH-9	106	床	23.1	12.2	5.1	2190	砂岩	図版47	
図Ⅳ-36	22	扁平打製石器原材	IH-9	101	床	9.2	7.7	2.2	138	安山岩	図版47	
図Ⅳ-37	23	砥石	IH-9		床	46.8	19.8	13	4420	軽石	図版47	104・105接合
図Ⅳ-38	24	石皿	IH-9	88	床	25.4	39.1	10.3	16200	安山岩	図版47	
図Ⅳ-40	5	すり石	IH-10	5	床	12	19.4	4	1360	安山岩	図版48	
図Ⅳ-43	1	すり石	IS-1	136		12.2	14.8	6.9	1750	安山岩	図版49	
図Ⅳ-43	2	台石	IS-1	62		18	24.4	3.5	1845	安山岩	図版49	

表Ⅳ-11 B地区包含層出土掲載石器一覧

図番号	掲載番号	器種名	調査区	遺物番号	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
図Ⅳ-49	1	石鏃	F-19	2	Ⅳ	2.9	1.4	0.6	1.6	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	2	石鏃	M-26	13	Ⅳ	4	1.8	0.8	3.4	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	3	石鏃	D-12	2	Ⅲ	3.4	1.2	0.6	2	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	4	石鏃	M-26	16	Ⅳ	3.8	1.8	0.8	3	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	5	石鏃	H-20	8	Ⅳ	4.9	1.5	0.8	5	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	6	石鏃	J-22	6	攪乱	5.1	1.5	0.6	2.9	メノウ	図版51	
図Ⅳ-49	7	石鏃	G-20	9	Ⅳ	3.9	1.3	0.6	2.4	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	8	石鏃	G-20	8	Ⅳ	4.3	1.2	0.5	2.4	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	9	石鏃	H-20	3	Ⅲ	4.9	1.4	0.5	3.7	片岩	図版51	
図Ⅳ-49	10	石鏃	K-23	12	Ⅳ	5.4	1.5	0.7	4.5	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	11	石錐	M-26	5	Ⅳ	3	1.5	0.6	2.1	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	12	ポイントナイフ	A-12	1	Ⅲ	10	3	0.8	17.7	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	13	スクレイパー	S-28	12	Ⅰ	9.8	4.7	1.7	58.1	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	14	スクレイパー	T-28	4	Ⅰ	6.8	5.9	1.2	39.4	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	15	スクレイパー	H-21	14	Ⅳ	6.1	6	1.5	30	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	16	スクレイパー	S-27	8	Ⅳ	9.9	5.2	1.9	47.9	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	17	スクレイパー	D-17	8	Ⅳ	6.9	9.1	2	206	頁岩	図版51	
図Ⅳ-49	18	石斧	M-26	6	Ⅳ	7.8	3.4	1.1	43.5	泥岩	図版51	
図Ⅳ-50	19	扁平打製石器	R-29	4	Ⅳ	9.6	17.3	3.4	800	安山岩	図版52	
図Ⅳ-50	20	扁平打製石器	J-23	2	Ⅲ	6.9	15	3	416	安山岩	図版52	
図Ⅳ-50	21	扁平打製石器	S-28	8	Ⅰ	10.7	18	3.4	920	安山岩	図版52	
図Ⅳ-50	22	扁平打製石器	S-28	16	Ⅰ	10.4	16.7	3.3	640	安山岩	図版52	
図Ⅳ-50	23	たたき石	A-10	2	Ⅳ	14.6	8.8	7.4	1365	安山岩	図版52	
図Ⅳ-50	24	砥石	J-22	13	Ⅰ	14.4	7.3	5.7	986	砂岩	図版52	
図Ⅳ-50	25	石製品	C-17	3	Ⅳ	3.2	3.2	2.1	10.4	軽石	図版52	
図Ⅳ-50	26	有孔自然礫	G-20	14	Ⅳ	4.2	4	2.5	35.3	凝灰岩	図版52	
図Ⅳ-50	27	有孔自然礫	D-19	13	Ⅳ	4	3.6	2.2	18.7	凝灰岩	図版52	
図Ⅳ-50	28	有孔自然礫	G-19	2	Ⅳ	5.7	5.1	2	31.7	凝灰岩	図版52	
図Ⅳ-50	29	有孔自然礫	B-11	4	Ⅳ	6.9	7.8	4.8	199.4	軽石	図版52	

V 自然科学的分析手法による分析・鑑定

1. 放射性炭素年代測定

(財)北海道埋蔵文化財センターより(株)地球科学研究所へ、下記の試料の年代測定を委託した。結果は次ページ以降に掲載した。

表 1 放射性炭素年代測定分析試料一覧

試料番号	測定方法	種類	重量(g)	遺構-層位名 (採取地点)	採取日	予想年代 (yB. P.)	備考
IK 2-1	AMS	炭化材	0.18	IH 1-HP 4 覆土	2003.7.	4,300	
IK 2-2	AMS	炭化材	3.64	IH-2 炉直上	2003.8.	4,300	
IK 2-3	AMS	炭化材	1.36	IH-3 床面	2003.8.	4,300	
IK 2-4	AMS	炭化材	2.33	IH-4 覆土 2 層	2003.8.	4,300	
IK 2-5	AMS	炭化材	0.60	IH-5 覆土 2 層	2003.8.	4,300	
IK 2-6	AMS	炭化材	3.83	IH-6 床面	2003.8.	4,300	
IK 2-7	AMS	炭化材	1.09	IH-7 床面	2003.7.	4,300	
IK 2-8	AMS	炭化材	1.33	IH-9 床面	2003.8.	4,300	
IK 2-9	AMS	炭化材	0.98	IH-10 床面	2003.8.6	4,300	
IK 2-10	AMS	炭化材	3.11	IF-1 上面	2003.5.15	2,500	

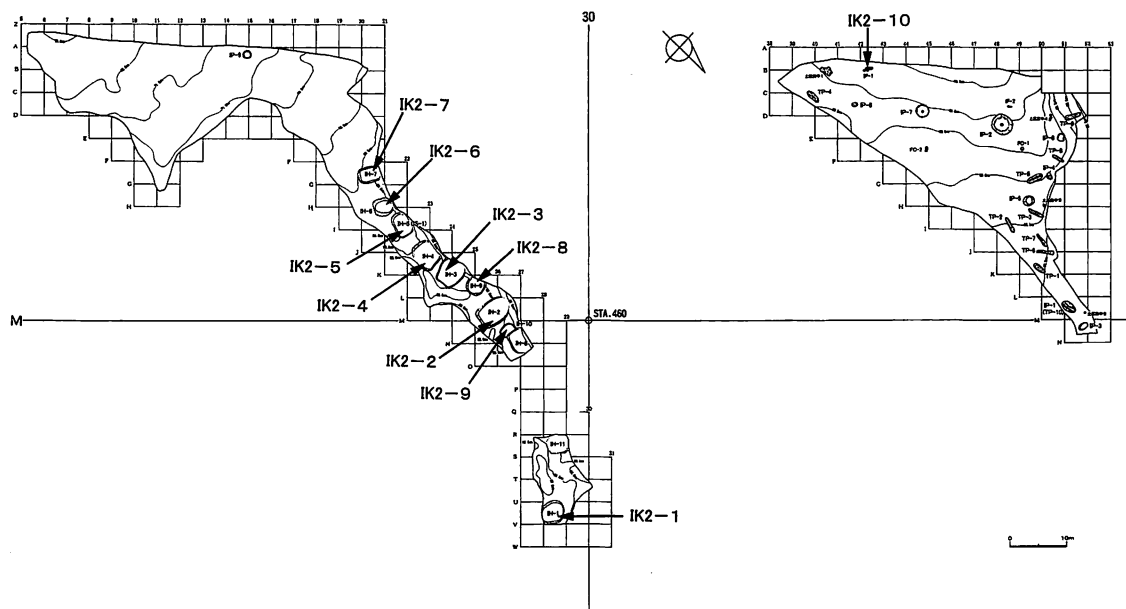


図 V-1 年代測定試料採取地点

件名: **放射性炭素年代測定**

(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正14C年代 (yBP) : (同位体分別未補正) 14C 年代 “measured radiocarbon age”
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前(BP)かを計算した年代。

14C年代 (yBP) : (同位体分別補正) 14C 年代 “conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C/12C の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。
試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Polach, H.A.(1977) Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(13\text{C}/12\text{C})[\text{試料}] - (13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]}{(13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C[標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース(“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

C14年代測定結果

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	δ 13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186176	4400 \pm 40	-25.4	4390 \pm 40
試料名 (23863) IK2-1			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 186177	4170 \pm 40	-24.6	4180 \pm 40
試料名 (23864) IK2-2			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 186178	4140 \pm 40	-25.8	4130 \pm 40
試料名 (23865) IK2-3			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 186179	4240 \pm 40	-26.6	4210 \pm 40
試料名 (23866) IK2-4			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 186180	4090 \pm 40	-26.6	4060 \pm 40
試料名 (23867) IK2-5			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 186181	4130 \pm 40	-25.6	4120 \pm 40
試料名 (23868) IK2-6			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186182	4180 \pm 40	-26.4	4160 \pm 40
試料名 (23869) IK2-7			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 186183	4350 \pm 40	-26.7	4320 \pm 40
試料名 (23870) IK2-8			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 186184	2200 \pm 40	-26.0	2180 \pm 40
試料名 (23871) IK2-9			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 186185	1470 \pm 40	-26.2	1450 \pm 40
試料名 (23872) IK2-10			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			

2. 石倉 2 遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

石倉 2 遺跡は、石倉川右岸の高位段丘上に位置する。この段丘は小支谷によって南北 2 つに分かれており、北側が A 地区、南側が B 地区となる。A 地区では、土壌、Tピット、焼土、土器集中、フレイク集中等が検出された。B 地区では、竪穴住居跡、土壌、礫集中が検出された。竪穴住居跡は、大半が焼失住居と考えられており、住居構築材に由来すると考えられる炭化材や焼土粒等が検出されている。これらの住居跡から出土した土器は、ほぼ全てが縄文時代中期後半（榎林式）のものである。

今回の分析調査では、各住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行い、住居構築材の木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、竪穴住居跡から出土した炭化材 35 点（試料番号 1-35）である。このうち、29 点は IH-6 からの出土であり、その他の 7 点は IH-2・3・4・9・10 の試料が各 1、2 点となっている。炭化材は、多くが床面から出土しているが、炉直上、覆土、トレンチから出土した試料も 3 点ある。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 1 に記した。

2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。試料番号 5 は、環孔材の道管配列を有する広葉樹であり、道管配列の特徴はニレ属やヤマグワ等に似る。しかし、保存状態が悪いこと、節に近いこと、成長幅が狭いため通常の標本との比較が困難なこと等から種類の同定には至らなかった。その他の試料は、広葉樹 8 種類（ハンノキ属ハンノキ亜属・アサダ・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・キハダ・タラノキ・ハリギリ・エゴノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-30 細胞高のものと集合放射組織とがある。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-4 個が複合して散在し、ネ臨海に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1-4列、孔圏外で急激〜やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向に紋様状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

試料は晩材部が広く年輪を挟んでわずかに孔圏部が1列残る。環孔材で、孔圏外への移行は緩やかで、孔圏外小道管は多くが複合して接線方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-6細胞幅、5-60細胞高。

・ハリギリ (*Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は接線方向にやや疎な1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性〜同性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

表1. 樹種同定結果

番号	遺構名	採取層位	樹種	備考
1	IH-2	炉直上	キハダ	
2	IH-2	床面	ハリギリ	
3	IH-3	床面	キハダ	
4	IH-4	覆土2	クリ	
5	IH-9	床面	広葉樹(環孔材)	
6	IH-10	床面	クリ	
7	IH-6	床面	エゴノキ属	取上げ No.1
8	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.2
9	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.3
10	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.4
11	IH-6	床面	クリ	取上げ No.5
12	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.7
13	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.8
14	IH-6	床面	クリ	取上げ No.10
15	IH-6	床面	キハダ	取上げ No.11
16	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.12
17	IH-6	床面	アサダ	取上げ No.13
18	IH-6	床面	クリ	取上げ No.14
19	IH-6	床面	アサダ	取上げ No.15
20	IH-6	床面	エゴノキ属	取上げ No.16
21	IH-6	床面	ハンノキ属ハンノキ亜属	取上げ No.17
22	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.18
23	IH-6	床面	クリ	取上げ No.19
24	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.20
25	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.21
26	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.22
27	IH-6	床面	ハンノキ属ハンノキ亜属	取上げ No.23
28	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.24
29	IH-6	床面	エゴノキ属	取上げ No.25
30	IH-6	床面	エゴノキ属	取上げ No.26
31	IH-6	床面	タラノキ	取上げ No.27
32	IH-6	床面	クリ	取上げ No.28
33	IH-6	床面	ハリギリ	取上げ No.29
34	IH-6	床面	クリ	
35	IH-6	東西トレンチ東側	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

4. 考察

縄文時代中期後半の竪穴住居跡から出土した炭化材35点は、不明1点を除く34点が広葉樹8種類に同定された。35点中29点はIH-6から出土している。IH-6における出土状況をみると、住居中央部

の床面を中心に北西から南東にかけて、ベルト状に炭化材が集中している。いずれも細かく割れているため、複数点確認された樹種では、同一個体を複数回同定した可能性もあるが、詳細は不明である。

IH-6では、ハリギリを中心とした種類構成が認められる。ハリギリは、重さ硬さは広葉樹材の中では中位であり、切削その他の加工は容易であるが、耐朽性はあまり高くない(平井、1979)。ハリギリ以外の樹種では、キハダやタラノキもそれほど重硬な木材ではない。一方、アサダ、ハンノキ亜属、コナラ節、クリ、エゴノキ属は、比較的重硬な材質を有する種類である。IH-6では、重硬な材質の木材とそれよりはやや軽い木材の2種類が利用されていることが指摘できる。これらの樹種は、現在の北海道南部の落葉広葉樹林に生育する種類である。そのため、本遺跡周辺にこれらの樹木が生育しており、それらの木材を利用したことが推定される。

北海道内では、これまでも縄文時代中期頃の住居構築材について樹種同定が行われている(三野、2000)。それらの結果をみると、コナラ節、ニレ属、トネリコ属等の重硬な木材が多くを占めていることが多い。コナラ節、ニレ属、トネリコ属は、北海道の落葉広葉樹林を代表する種類でもあり、手近で入手でき、重硬で住居構築材としても適材であることから多く利用されたことが推定される。今回の結果は、これらの事例とは種類構成の傾向が異なる。このような違いが生じる原因としては、住居の構造、規模、用途等の違いが考えられる。しかし、火災時の状況や部位によって、住居構築材の遺存状況も様々であることが想定できることから、現時点では種類構成の違いの要因について断定はできない。今後さらに資料蓄積を行い、地域・時期による種類構成の比較や花粉分析・種実同定などから推定される古植生との比較検討が必要である。

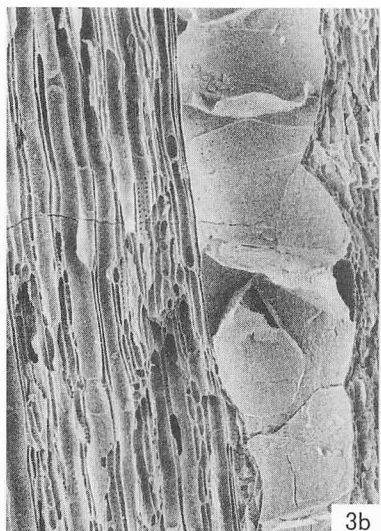
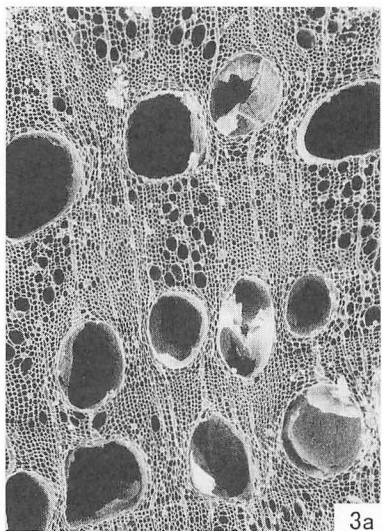
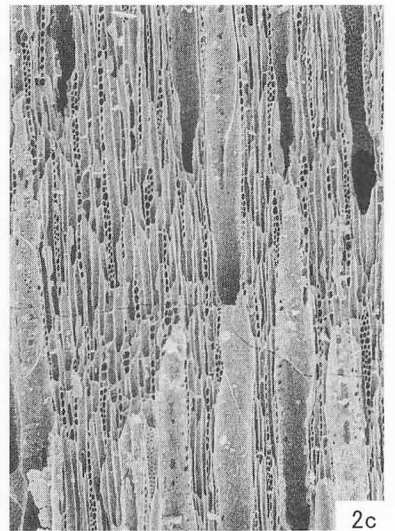
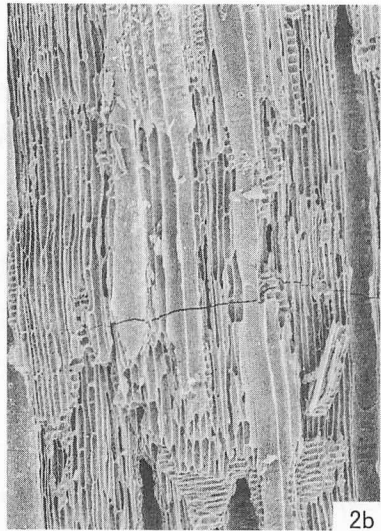
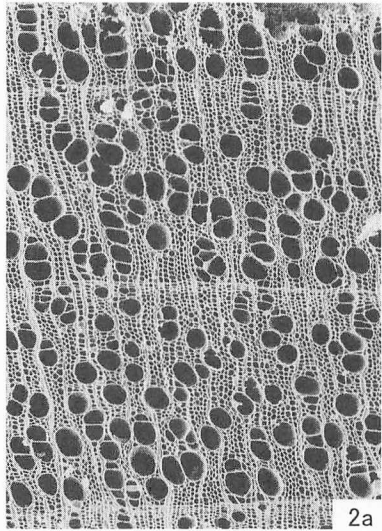
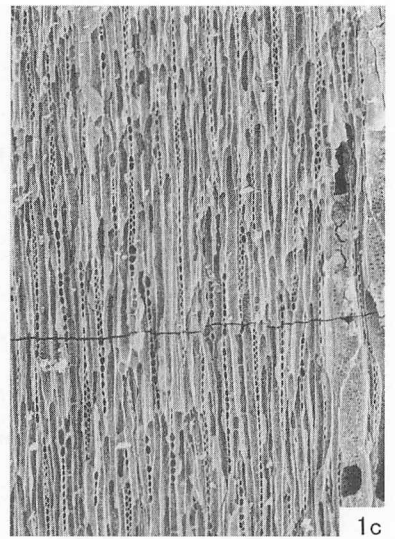
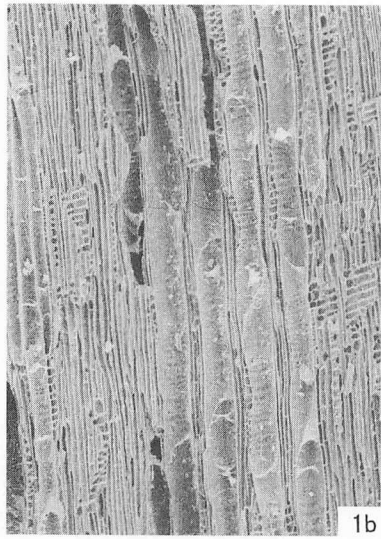
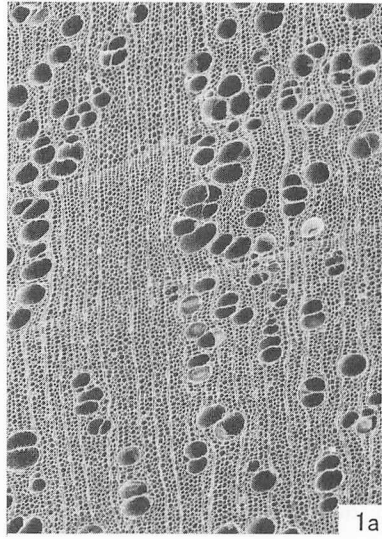
IH-2・3・4・9・10については、試料数が少ないため種類構成について検討することは難しいが、IH-6を除く各住居から出土した炭化材の樹種は、いずれもIH-6で確認されている。そのため、IH-6と同様に本遺跡周辺の樹木を利用していたことが推定される。

本遺跡では、IH-4・6・10で少数ではあるがクリが確認されている。クリは、これまでの調査例でも北海道南部を中心に報告例がある。三野(2000)によれば、クリは縄文時代前期から住居構築材としての利用が見られ、縄文時代中期に最盛期を迎え、その後は燃料材としてのほかはほとんど利用されなくなるとされる。北海道のクリについては、植物食糧として重要な種類であるにも関わらず、縄文時代早期から前期中葉にクリ利用の痕跡が全く見られないこと等から、土器文化圏を共有する青森県内から持ち込まれ、栽培等により分布を広げた可能性が指摘されている(山田・柴内、1997)。このことから、本遺跡周辺でもクリ栽培が行われていた可能性がある。栽培していた樹木を住居構築材として利用することは、矛盾するように見える。しかし、現在栽培されているクリでは、9年生~10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する(志村、1984)。このことから、収量の落ちたクリを用材として利用した可能性がある。クリ栽培についても、花粉分析や炭化種実同定などによる周辺の古植生に関する情報も含めて検討する必要がある。

引用文献

- 平井信二, 1979, 木の事典 第1巻, かなえ書房。
 三野紀雄, 2000, 先史時代における木材の利用(3)—石狩低地帯における木材利用の地域的・時代的な差異について—, 北海道開拓記念館研究紀要, 28, 1-25。
 山田悟郎・柴内佐知子, 1997, 北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類—クリについて—, 北海道開拓記念館研究紀要, 25, 17-30。

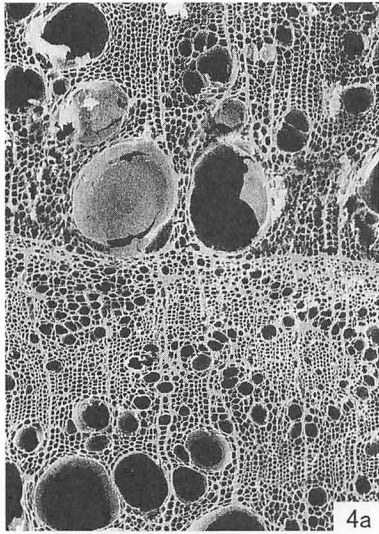
図版1 炭化材(1)



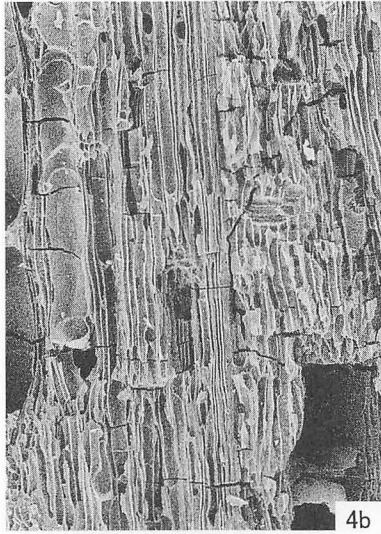
1. ハンノキ属ハンノキ亜属(試料番号21)
 2. アサダ(試料番号19)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号35)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

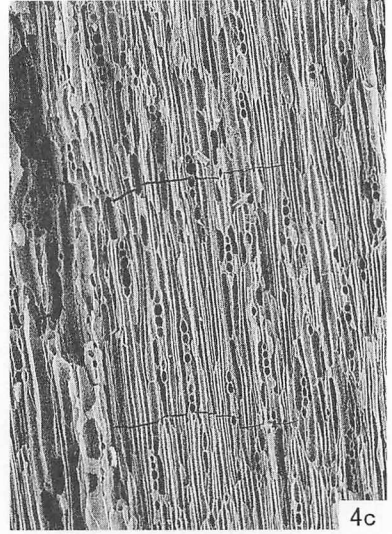
図版2 炭化材(2)



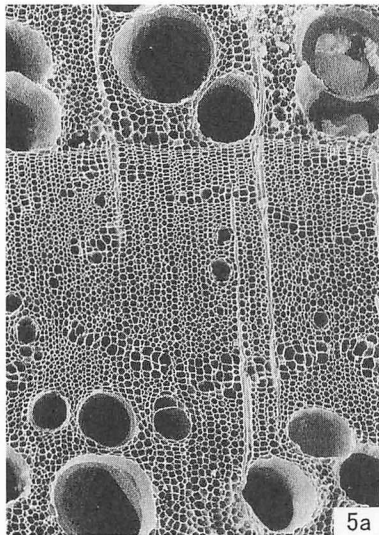
4a



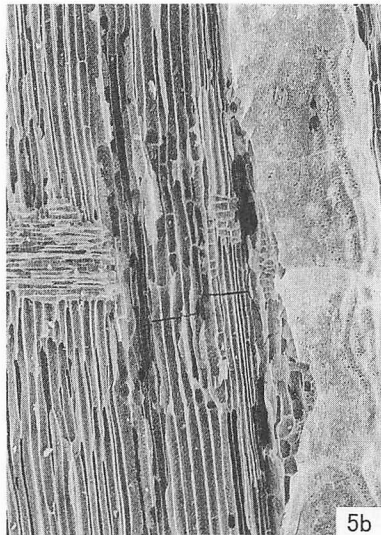
4b



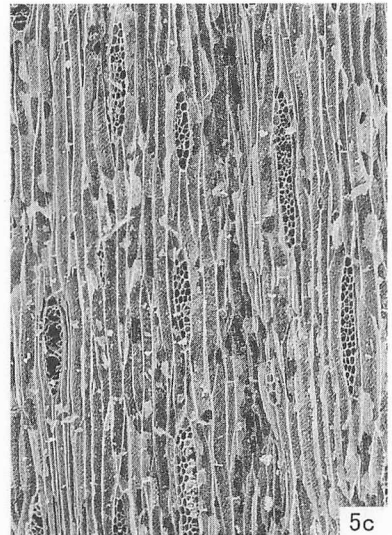
4c



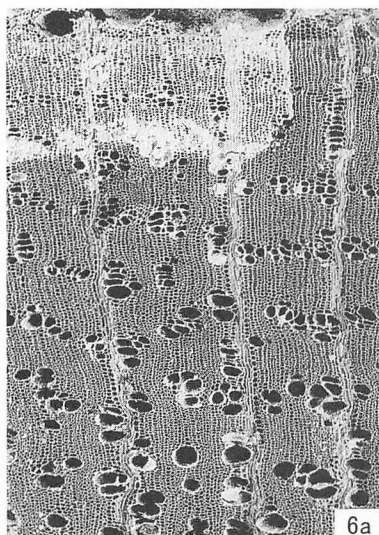
5a



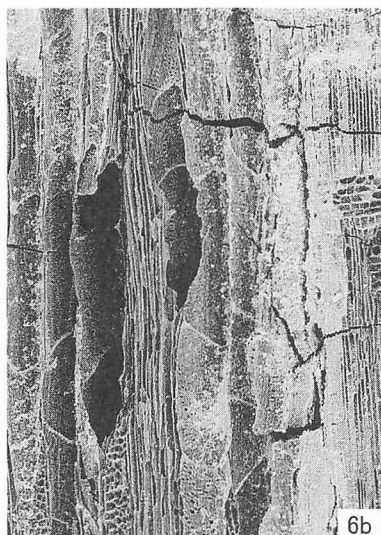
5b



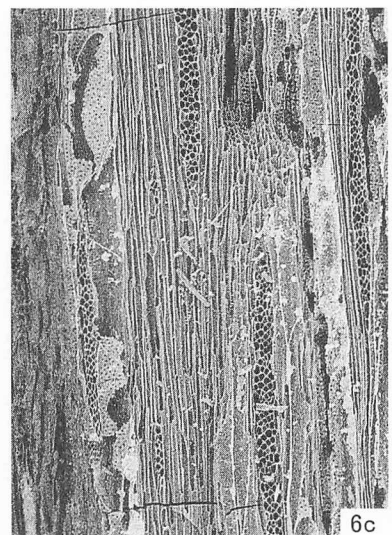
5c



6a



6b

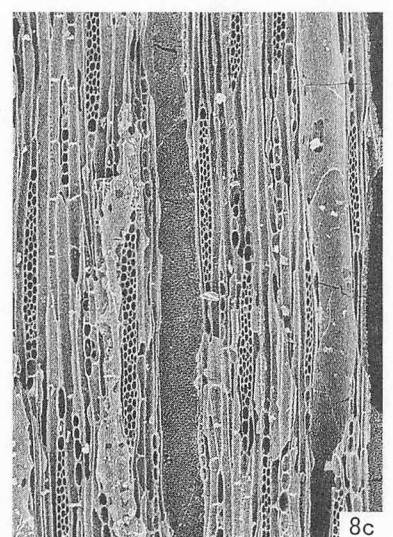
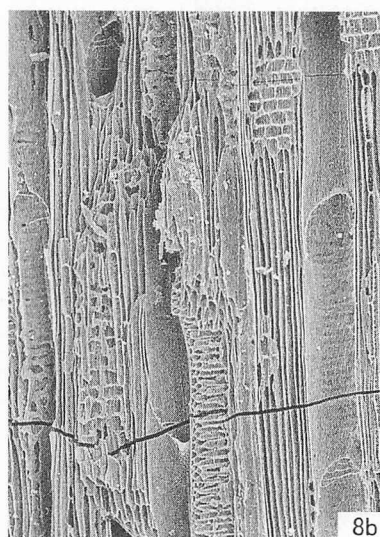
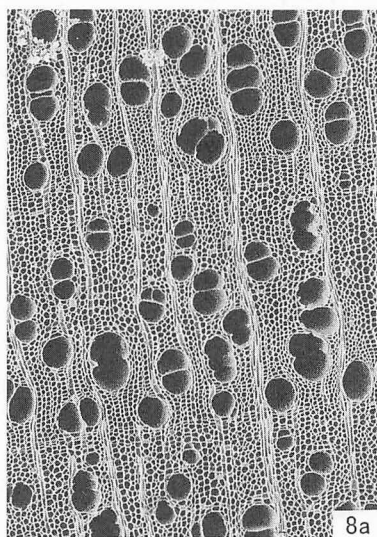
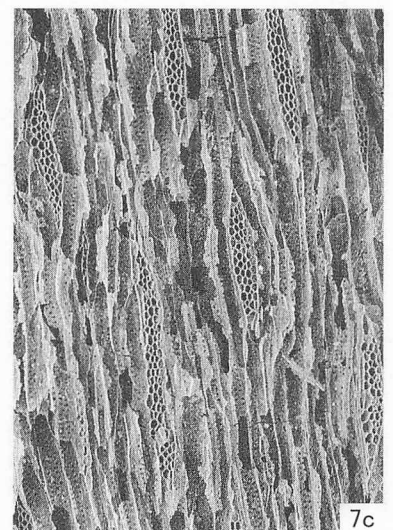
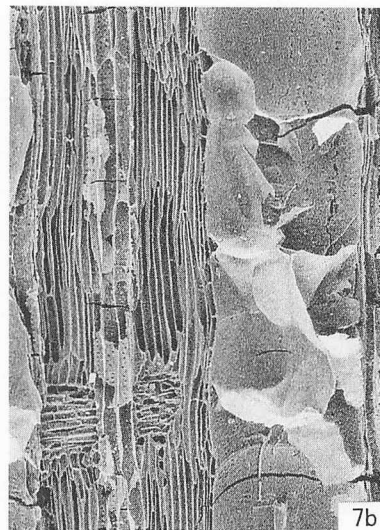
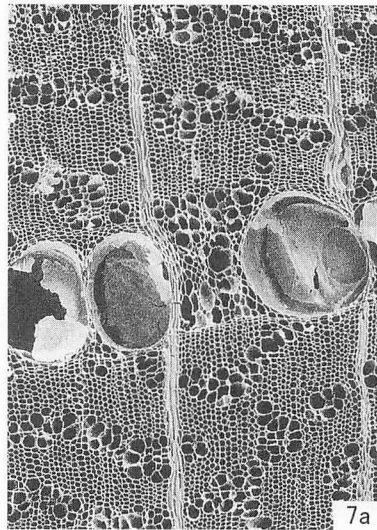


6c

4. クリ(試料番号11)
 5. キハダ(試料番号3)
 6. タラノキ(試料番号31)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m:a
 200 μ m:b,c

図版3 炭化材(3)



7. ハリギリ(試料番号12)
8. エゴノキ属(試料番号7)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

3. フローテーションによる微細遺物の採取と分析

試料

遺構の覆土・床面（壙底面）や出土土器内部の土壌28サンプル、合計約350kg・約360ℓを採取した。採取位置は、焼土（「石2-1～4」）、フラスコ状ピットの壙底付近の土壌（「石2-5～7」）、竪穴住居跡の床面付近の土壌または柱穴・小土壌の覆土（「石2-10・11・15～17・19・20・22～24・27」）、埋設土器内部の土壌（石2-18・21・25・26・28）、一括土器の内部の土壌（「石2-8・12・13」）、竪穴住居跡 IH-3 から出土した石棒および骨片付近の土壌（「石2-14」）である。

作業と経過

現地にて土壌の乾燥を行った後、重量・堆積を計測し、フローテーションマシンを用いて残渣・浮遊物を回収した。発掘調査終了後、室内にて、土器・フレイクなどの微細な人工遺物や炭化物・骨片などの微細な自然遺物の分別回収を肉眼および顕微鏡下で行った。

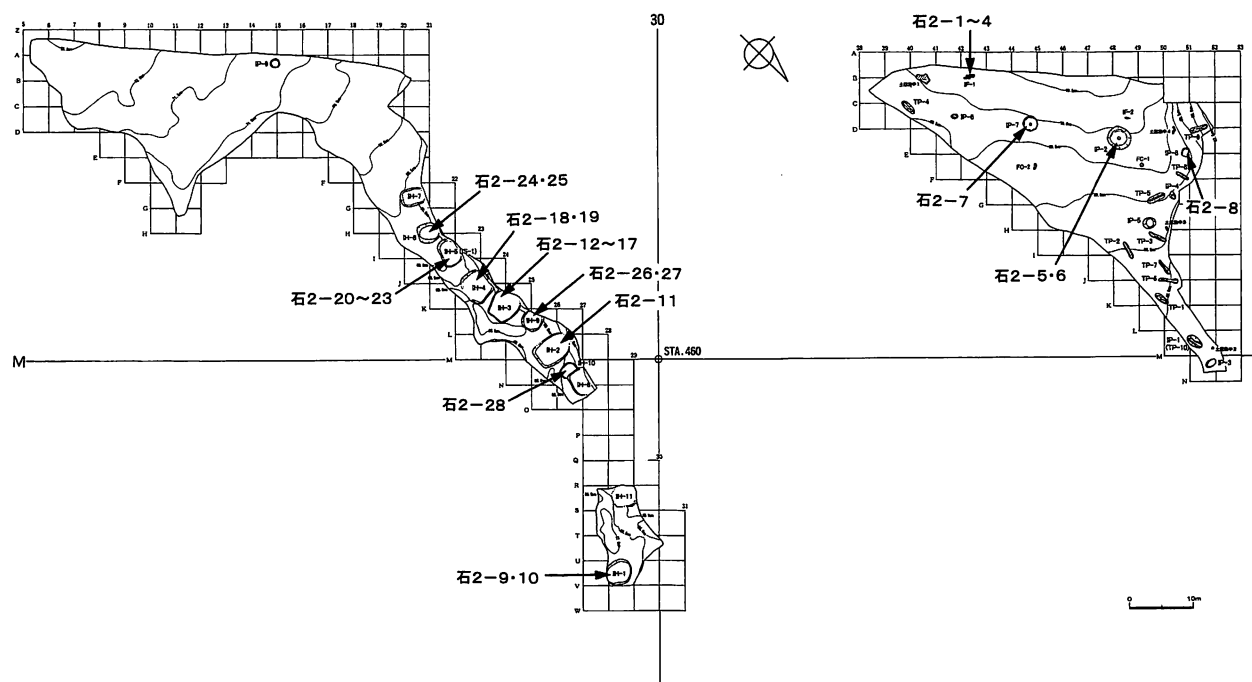
結果

土器の小片、フレイクチップ、礫片、骨片、炭化物が回収できた。土器は一括土器付近や埋設土器内から多く検出された。フレイクは石棒付近の土壌から多く検出され、石棒の大型破片と接合するものもあった。礫片は1gにも満たないものがほとんどであった。骨片はIH-3の試料（「石2-14～16」）から検出された。現地でまとめて出土した範囲にある。炭化物は全サンプルから回収された。現地で確認したとおり、竪穴住居跡の柱穴の覆土や埋設土器の内部の土壌から多く検出されている。そのうち炭化種子の可能性のあるものは16サンプルから検出された。特に焼土上面（「石2-2」）・フラスコ状ピット壙底（「石2-7」）・竪穴住居跡の小土壌の覆土（「石2-11」ほか）に多い。

動物遺存体・植物遺存体の同定について

動物遺存体の同定は、東京国立博物館客員研究員 金子浩昌氏に依頼した。「石2-14～16」の試料は「イシイルカ（リクゼンイルカ）」と同定された。

炭化種子の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。結果はV章-4に掲載した。（阿部）



図V-2 フローテーション試料採取位置

表1 フローテーション結果一覧

試料番号	遺構	層位	採取範囲	乾燥重量 (g)	体積 (l)	残渣重量 (g)	浮遊物 (g)	土器 (g)	フレイク (g)	礫 (g)	骨片 (g)	炭化物 (g)	種実遺体同定対象粒子(粒)	動物遺存体	主な植物遺存体	備考		
石2-1	IF-1	黒	南半	400	0.4	26.9	2.0	8.6				0.93	4					
石2-2	IF-1	B.Tm・炭	南半	600	0.9	0.6	2.5					1.18	24		不明種実			
石2-3	IF-1	焼土F	南半	2500	4.5	5.6	4.5					1.66	6					
石2-4	IF-1	焼土f	南半	1000	2.4	14.2	1.4	0.7				0.11						
石2-5	IP-2	最下層		2600	3.4	118.5	0.6					0.26	21		プラスチックピット			
石2-6	IP-2	覆土	壙底ピット	3900	5.1	169.2	2.5	0.1				0.81	16		不明堅果類	プラスチックピット		
石2-7	IP-7	最下層		89400	33.7	708.0	13.0					0.97	90		オニグルミ・イネ科	プラスチックピット		
石2-8	IP-8		土器内土壌	200	0.4	3.2	0.3	0.2				0.09	8		アカザ科			
石2-9	IH-1	覆土	No.337土器下	5800	7.3	189.4	12.3	92.3				6.63	8		不明堅果類			
石2-10	IH1-HP1	覆土		8100	11.7	49.1	31.9	1.0				16.11	14		オニグルミ	焼土・炭化物多量含む土壌		
石2-11	IH2-HP3	覆土		9700	14.7	59.0	193.0	7.4	1.4			140.39	26		イネ科	埋設土器抜き取り痕?		
石2-12	IH-3		No.266土器内	1000	1.5	14.3	8.6	2.3				7.49	8		タデ属			
石2-13	IH-3		No.318土器内	600	0.4	11.6	0.7	8.4	0.0			0.45						
石2-14	IH-3		石棒片下	32300	38.2	99.0	73.2		10.7	0.6	5.08	15.00						
石2-15	IH3-HP1	覆土	南半	6700	8.8	12.2	17.9	1.3		0.8	0.38	5.77	3				焼土・炭化物多量含む土壌	
石2-16	IH3-HP1	覆土	北半	5000	7.0	23.2	24.2			0.0	2.47	6.11					焼土・炭化物多量含む土壌	
石2-17	IH3-HP7	覆土		3200	3.4	5.0	10.2	0.5		0.1		3.99	3		ミズキ?		焼土・炭化物多量含む土壌	
石2-18	IH-4		埋設土器内	2000	3.2	10.7	116.2	3.7		0.4		92.98						焼土・炭化物多量含む土壌
石2-19	IH4-HP1	覆土		300	0.1	0.2	0.8					0.40						焼土・炭化物多量含む土壌
石2-20	IH-5	炭・焼土	床	5200	6.4	11.1	19.8	1.9				7.02	1					
石2-21	IH-5		埋設土器内	2800	3.1	31.1	2.2	12.1				0.58						
石2-22	IH5-HP1	焼土		1800	2.5	5.9	6.8	0.4		0.0		3.72						焼土・炭化物多量含む土壌
石2-23	IH5-HP1	炭		1400	2.0	1.1	4.2			0.0		2.11						焼土・炭化物多量含む土壌
石2-24	IH-6		床	144000	183.8	179.1	3540.0	40.3	8.4			3040.00	23		ブドウ属・イネ科	構造物の材?		
石2-25	IH-6		埋設土器内	3200	4.3	11.4	19.1	6.1		0.2		8.26						
石2-26	IH-9		埋設土器内	5200	7.0	65.5	9.3	26.3	6.1			4.77	7		クリ			焼土・炭化物多量含む土壌
石2-27	IH9-HP1	覆土		3300	3.6	4.7	5.2	0.1	0.8			1.85						焼土・炭化物多量含む土壌
石2-28	IH-10		埋設土器内	1100	1.4	8.3	10.0	2.3				4.72						
合計				343300	361.2	1838.1	4132.4	216.0	27.4	4.8	7.93	3374.36	262					

4. 石倉2遺跡から出土した種実遺体について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

石倉2遺跡は北海道茅部郡森町に所在する。山地から海岸に迫る2つの急峻な尾根状の高位段丘上に位置し、縄文時代中期後半の土坑、竪穴住居跡、焼土などの遺構や土器、石器などの遺物が検出されている。

今回の分析調査では、各遺構から採取された種実の同定を行い、当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、A地区の焼土、土坑や、B地区の竪穴住居跡から採取された種実遺体16点約270粒(石2-1、2、3、5-12、15、17、20、24、26)が、試料番号別の袋に入っている。試料の詳細は結果と併せて記す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出した。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川、1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか、2000)等と比較して種類を同定し、個数を求めた。微細片を含み数字以上の個数が推定される種類は、「数字+」と表示した。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れ保存する。

3. 結果

種実遺体同定の結果、木本5種類(落葉広葉樹のオニグルミ、クリ、ブドウ属、ミズキ?、タラノキ)、草本3種類(単子葉植物のイネ科、双子葉植物のタデ属、アカザ科)の種実と、種類不明の堅果類(オニグルミまたはクリの破片と思われる)、果実や種実が同定された(表1)。種実の遺存状態は悪く、タデ属、アカザ科を除く全試料が炭化している。種実の他に、木の芽や5mm角以下の炭化材や、種類・部位不明の炭化物(菌核(sclerotia)を含む)などが検出された。以下に、同定された種実の形態的特徴を、木本、草本、不明果実、不明種実の順に記す。

〈木本〉

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色を呈す。完形ならば広卵形で頂部がやや尖る。径20-30mm程度。破片の大きさ2-4mm程度。1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。核の構造が特徴的であるため、細片でも同定可能である。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色を呈す。完形ならば三角状広卵形、一側面は扁平で反対面はわずかに丸みがある。破片の大きさ10mm程度。子葉は硬く緻密で、表面には内果皮(渋皮)の圧痕の縦筋が走る。また、2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って半分に割れている個体が見ら

ば倒広卵体。内部には長さ0.6mm、幅0.4mm程度の倒卵形で偏平の種子が入る2個の室がみられる。

〈不明種実A〉

同類と思われる不明種実を不明種実Aとした。倒卵形でやや偏平な二面体、炭化しており黒色を呈す。長さ3-4mm、幅1.5-2mm程度。表面は粗面。

4. 考察

石倉2遺跡の各遺構からは、落葉広葉樹のオニグルミ、クリ、ブドウ属、ミズキ?、タラノキと、草本のイネ科、タデ属、アカザ科が検出された。オニグルミ、ミズキ?は、沢沿いなど適湿の地を好んで生育する高木である。二次林要素のクリや、低木のタラノキ、つる性木本のブドウ属などは、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する樹木で、現在の遺跡周辺の森林にも普通にみられる種類である(宮脇、1987)。これらの樹木は、当時の遺跡周辺に存在した森林の縁辺部に生育していたものに由来すると思われる。

堅果類のオニグルミ、クリは、生食・長期間の保存が可能で収量が多いことから、当時の本遺跡周辺の森林から持ち込まれ、植物質食糧として利用されていたことが推定される。ブドウ属は果実が多汁で生食が可能である。イネ科の一部には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられるが(青葉、1991)、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。これらの有用植物が、各遺構から検出された状況を考慮すると、本遺跡近辺から持ち込まれ、利用されていたことが推定される。また、炭化していることから、火熱を受けたものと思われる。

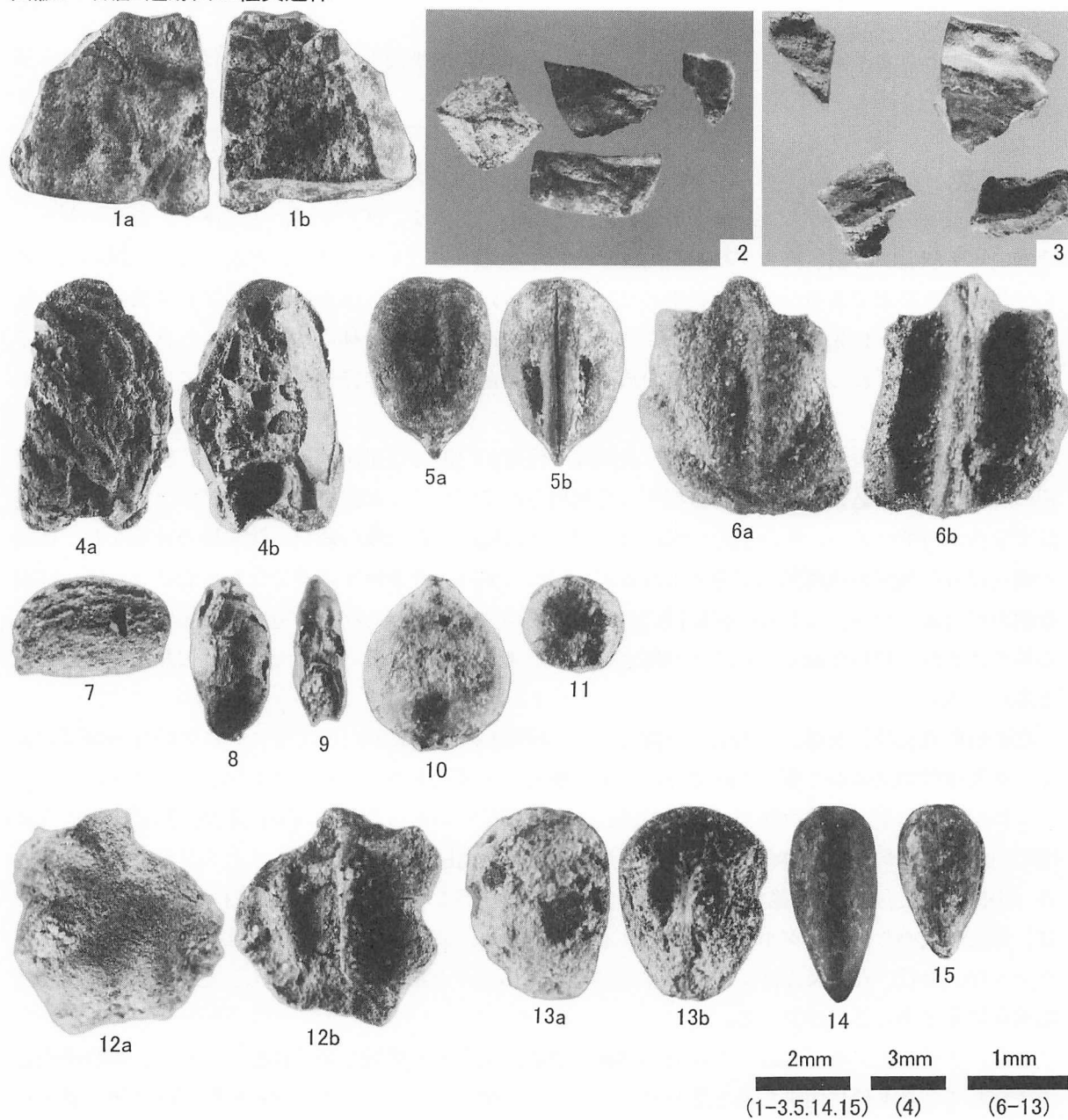
北海道の縄文時代遺跡から出土した種実では、早期から晩期にわたってオニグルミの報告事例が多く、クリは前期以降から報告されている。その他に、ミズナラやコナラ、カシワ、トチノキ、ハシバミ、ヒシ、キハダ、ブドウ属、マタタビ属、ミズキ属などが報告されている。本遺跡周辺では、八雲町の前期のコタン温泉遺跡、後期の浜松2遺跡、浜松5遺跡から、オニグルミとクリが報告されている(山田・柴内、1997; 埋蔵文化財研究会、2001)。当社がこれまで実施した道内の遺跡の種実分析では、縄文時代からはオニグルミが検出されることが多く、道南ではクリが得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表資料)。今回、本遺跡から検出された種実の種類構成も、上述の既存報告と調和的な結果であることが言える。

なお、タデ属、アカザ科は、人里近い林縁や草地に生育する種類を多く含むことから、本遺跡周辺に生育していたものに由来すると思われる。ただし、炭化していないことから住居が廃絶後に混入した後代のものである可能性が高い。この点について、吉崎(1992)は、低湿地遺跡以外から出土する炭化していない種実は、後代からの混入の可能性があると、炭化種実と同様に扱わないように警告している。

引用文献

- 青葉 高, 1991, 野菜の日本史. 八坂書房, 317p.
 埋蔵文化財研究会, 2001, 埋蔵文化財データベース. 第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会—適応, 開発から共生へ—発表要旨集.
 宮脇 昭編, 1987, 日本植生史 北海道. 至文堂, 563p.
 山田悟郎・柴内佐知子, 1997, 北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類—クリについて—. 北海道開拓記念館研究紀要, 28, 17-30.
 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 考古学ジャーナル, 355, 2-14.

図版1 石倉2遺跡出土種実遺体



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. オニグルミ 核(石2-10) | 2. オニグルミ 核(石2-10) |
| 3. オニグルミ 核(石2-7) | 4. クリ 子葉(石2-26) |
| 5. ブドウ属 種子(石2-24) | 6. ミズキ? 核(石2-17) |
| 7. タラノキ 核(石2-7) | 8. イネ科 胚乳(石2-11) |
| 9. イネ科 胚乳(石2-11) | 10. タデ属 果実(石2-12) |
| 11. アカザ科 種子(石2-8) | 12. 不明果実(石2-7) |
| 13. 不明果実(石2-17) | 14. 不明種実A(石2-24) |
| 15. 不明種実A(石2-24) | |

VI まとめ

1. 遺構について

遺跡は、標高約70mの内浦湾（噴火湾）に臨む海岸段丘上に位置する。調査区は、段丘から海へのびる2つの細い尾根からなり、周囲は小河川や沢によって開析され急崖となっている。八雲町側の石倉川沿いの尾根を「A地区」、森町側の尾根を「B地区」と呼称して調査を行った。

検出した遺構は、A地区・B地区合わせて、竪穴住居跡11軒、土壙9基、Tピット10基、焼土2カ所、土器集中4カ所、フレイク集中2カ所、礫集中1カ所で、すべて縄文時代のものである。

A地区

遺構は、土壙8基、Tピット10基、焼土2カ所、土器集中4カ所、フレイク集中2カ所を検出した。

土壙のうち、IP-2・5・7はフラスコ状ピットで、最も大きいIP-2は壙底面の直径約2.5m、確認面からの深さが約1.9mで、壙底中央に円形の小ピットを持つものである。フラスコ状ピットについては別項で土層堆積状況の観点から、比較検討の結果を述べる（VI-1-(2)）。

IP-3は埋め戻しの覆土が見られ、土壙墓の可能性もある。壙口部には人頭大の台石があり、覆土の中位からは径5cm以下の小礫26点がまとまって出土した。

TピットはTP-4を除き、調査区西側の石倉川沿いの段丘縁辺部から検出された。いずれも細長い溝状のタイプで、壙底面に杭穴はない。森町で初めての検出例である。細長い溝状タイプのTピットは函館市をはじめ、道南では多く検出されることが知られるが、噴火湾沿岸地域は調査例が少ない。北隣の八雲町では山崎4遺跡で7基、山崎5遺跡で1基、野田生5遺跡で1基、落部1遺跡で7基の計16基が報告されている。また、森町内では平成15年度の調査で、石倉川を挟んで対岸にあたる石倉3遺跡で1基、森市街地に近い上台1遺跡で5基、上台2遺跡で3基が調査されている。上台1遺跡と上台2遺跡の例を除き、いずれも海岸段丘上に構築されている。八雲町例ともすべて高速道建設に伴う大規模発掘調査によって見つかったものである。八雲町から森町へかけて見つかったこれらのTピットの構築時期は、縄文時代中期の前後と推定されているが、判然としない場合も多い。A地区では、Ⅲ群b類、Ⅴ群c類の土器が出土しており、出土状況などから石倉2遺跡の10基のTピットは、縄文時代中期後半のものである。

B地区

遺構は、竪穴住居跡11軒、土壙1基、礫集中1カ所を検出した。これらの遺構は遺物の出土状況から判断すると、すべて縄文時代中期後半のものである。

(1) 竪穴住居跡について（図VI-1）

竪穴住居跡は尾根の先端から山側にかけて連なるように検出された。重複しているのは1カ所であった。出土した土器を見るとすべてⅢ群b類榎林式期のものである。

以下、主な特徴を挙げる。斜面の崩落によって大半の住居跡は一部が失われているが、平面形は楕円形あるいは隅丸方形を呈し、規模は長軸3～5m程である。柱穴は数個程度確認できたが、規則的な配列を持つものはない。竪穴中央付近の床面に、炉として使用したと考えられる埋設土器をもつものが、土器の抜き取り痕を含めて11軒中9軒認められた。石組みの炉を持つものはなかった。壁際に底面が盆状を呈し、覆土に焼土や炭化物が多量に含むピットをもつものがある。また、覆土に多量の炭

化物、焼土粒などを含む焼失住居が多い。特に IH-2・3・6 は焼失が激しく、覆土中に被熱し硬化した土が見られることから、土葺きの屋根を持っていたことが推測できる。IH-6 からは構造材と思われる炭化材が多量に出土した。遺物は、覆土の上位から中位にかけて土器がまとまって出土する例が多い。特徴的なものとして土器片再生円盤が 6 軒の住居跡から出土している。また、IH-3 においては、長さ 50cm 弱の円柱状の石棒が、蛇紋岩製の玉と被熱したイシイルカの頭骨を伴って出土した。この石棒については周辺地域の類似例と関連して、VI-2-(2)で述べる。

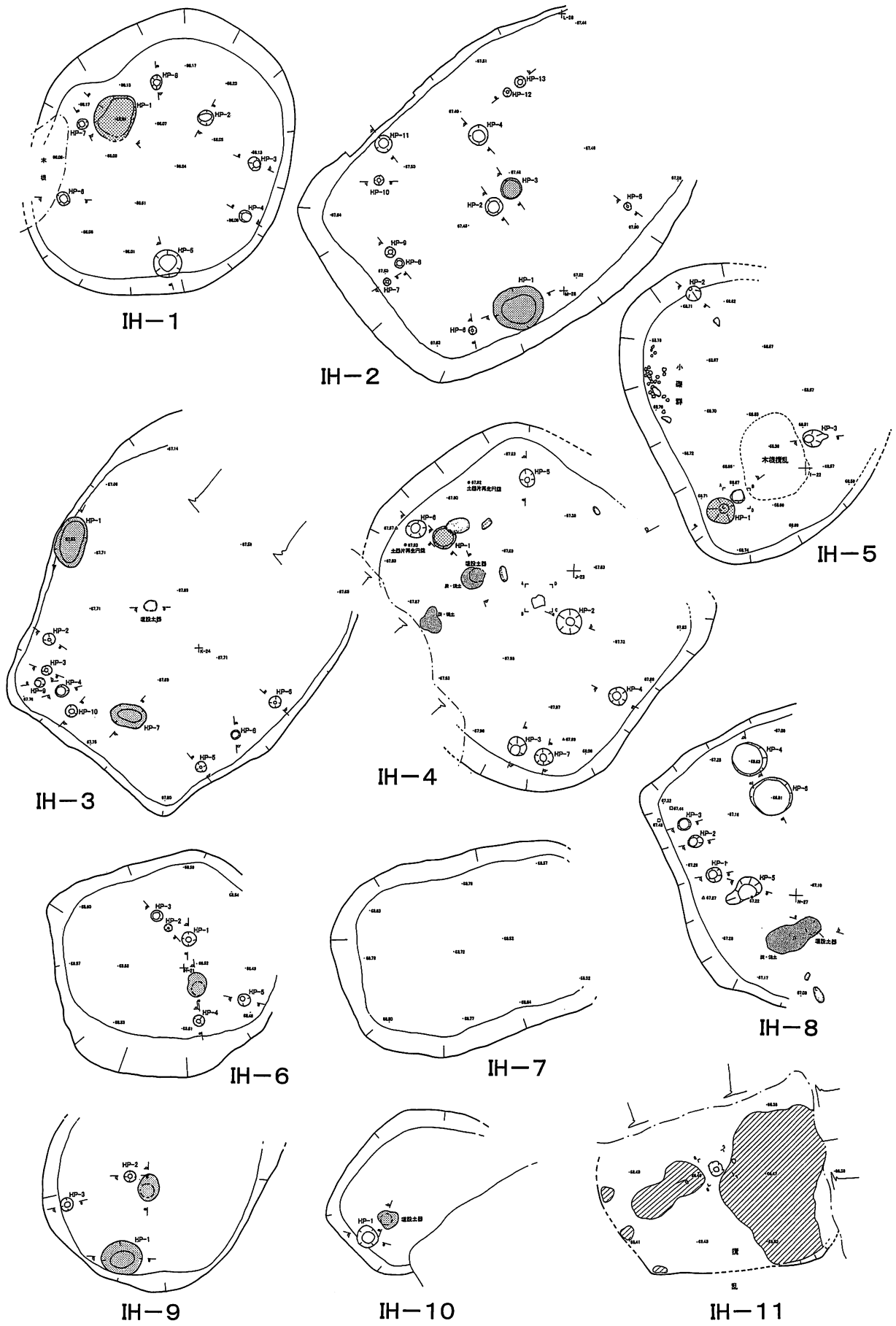
竪穴住居跡の時期は、すべて縄文時代中期後半の榎林式土器の頃に属するが、その中でも、IH-6・9 などの小形の住居から出土する土器は、IH-2・3・4 などの大形の住居から出土するものに比べ、やや古い特徴を示すものが多い。このことから、平面形が円形で小形の住居から、隅丸方形で大形の住居への変遷が推測される。IH-7 は他の住居跡からやや離れ、尾根の基部に位置している。また、炉や柱穴がないことなどから、通常の住居ではない、物置小屋や作業小屋の機能を持った竪穴の可能性はある。

道南地方で榎林式期の竪穴住居跡が調査された主な遺跡は、噴火湾沿いでは南茅部町の大船 C 遺跡、白尻 B 遺跡、安浦 B 遺跡、津軽海峡周辺では函館市の見晴町 B 遺跡、陣川町遺跡、豊原 4 遺跡、七飯町の上藤城 7 遺跡、上磯町の館野 2 遺跡、日本海側では上ノ国町小砂子遺跡などが挙げられる。これらの遺跡で確認された住居跡の特徴は、以下の 5 点で示される。①平面形が隅丸方形を呈する。②炉として使用した埋設土器を持つ。③覆土に焼土や炭化物を含む盆状のピットを持つ例がある。④焼失住居が見られる。⑤石棒、土器片再生円盤、有孔自然礫を出土する例が多い。石倉 2 遺跡で調査された竪穴住居跡も当時期の特徴を示している。ただし、周囲が急崖となる細い尾根の先端部に、集落を形成した例はあまり見られない。このような立地の面については、さらに検討を要する課題である。

(村田 大)

表 VI-1 石倉 2 遺跡竪穴住居跡一覧

遺構名	平面形	埋設土器	焼土ピット	覆土の状況	出土土器	土器片再生円盤	有孔自然礫	備考
IH-1	楕円形		1カ所	炭化物少量	1個体(覆土下位)	1個	1個	覆土下位から台石
IH-2	隅丸方形	抜取り痕あり	1カ所	焼土・炭化物多量	破片・多量	5個	3個	焼土ピット HP-1 付近から土器片、石皿、小礫群
IH-3	隅丸方形	あり	2カ所	焼土・炭化物多量	3個体(覆土上層)			焼土ピット HP-1 付近の床面から石棒片、被熱した玉、イシイルカの焼頭骨片
IH-4	隅丸方形	あり	1カ所	炭化物含む	2個体(覆土下位)	2個		
IH-5	隅丸方形	あり	1カ所	焼土・炭化物多量	小破片・多量	2個		壁際から小礫群
IH-6	隅丸方形	あり		焼土・炭化物多量・炭化材	1個体(覆土上位) 1個体(覆土上位・床面)			床面に多量の炭化材
IH-7	隅丸方形			焼土・炭化物少量	1個体(覆土上位)			
IH-8	隅丸方形	あり		炭化物少量	覆土に散見	3個		IH-10より新しい
IH-9	隅丸方形	あり	1カ所	焼土・炭化物多量	1個体(覆土上位)	3個		覆土上位に台石・石皿、床面から砥石
IH-10	隅丸方形	あり	炭化物1カ所	焼土・炭化物含む	覆土に散見			IH-8より古い
IH-11	隅丸方形	あり(底部使用)	不明	炭化物少量	不明			大部分が削平



図VI-1 石倉2遺跡竪穴住居跡

(2) フラスコ状ピットについて

石倉 2 遺跡では、断面形態がフラスコ状の土壌 2 基と円筒状の土壌 1 基が検出された。従来の調査から、フラスコ状ピットの用途については、食料などの貯蔵施設やそれを転用して墓にしたと考えられるものが数多く報告されている。ここでは周辺遺跡の例と比較検討し、石倉 2 遺跡のフラスコ状ピットの特徴と用途について述べる。

構築の特徴として、形状と深さがある。Ⅵ層の濁川火砕流堆積物の中でも、その上位の粘質ローム・粗い砂質ロームを掘り抜き、緻密な砂質ロームを底面としている。これにより安定した平坦面を造り出している。その底面にさらに小土壌があることが大きな特徴である。そして人の背丈よりも深く、壁面側が広がる空間を生み出している。この地下空間に人が入って、物の出し入れや土壌内で物を移動させたりすることが可能であり、貯蔵穴として機能していたと推測される。底面の小土壌は、柱状の昇降具や口壙部を覆う上屋構造の支柱などを設置した痕跡と推定される。IP-5 に小土壌がないのは、規模が小さく安定した昇降具を必要としなかったのであろう。

貯蔵穴として利用したと考えられる土壌について、坂口隆氏の研究による分類がある（図Ⅵ-2の右下図・坂口2003）。壙底中央部の小土壌のほか、偏った位置にある土壌や溝が巡るものがあり、土壌の容量も含めて時期や地域によって多様性が見られる。このうち、底面中央に小土壌があるフラスコ状ピットは森町近隣市町村の遺跡でも検出されており、例示する。

上ノ国町大岱沢 A 遺跡では深さ 195cm のフラスコ状ピットが検出され、壙底付近から縄文時代中期半ばの完形土器 1 個体と炭化物が出土し、炭化物の上位から骨片等が出土している。報告者は、覆土は上部を除いて人為的な体積状況を示しているとし、ピットの用途については「貯蔵穴として使用していたものを墓壙として再利用したものではなかろうか。死者を葬る前（骨片は焼けていない）に火を伴う儀礼を施し、死者を納め、食物等を入れた土器 1 個体を北側に置き土を埋め、最後に死者が再び甦らぬように破碎した礫によって押えこむように上部に置いたものとみられる」と考察している。

函館市石川 1 遺跡の例では、口径が小さい割に壙底の形が大きく、断面のオーバーハングが強い。壁面の崩落が少ないまま残存したものとみられる。開口部の真下に小土壌があるようすが見てとれ、柱状の昇降具などを設置するとした場合に適した構造になっている。各土層の堆積はおおむね平坦になっており、自然堆積と考えられている。

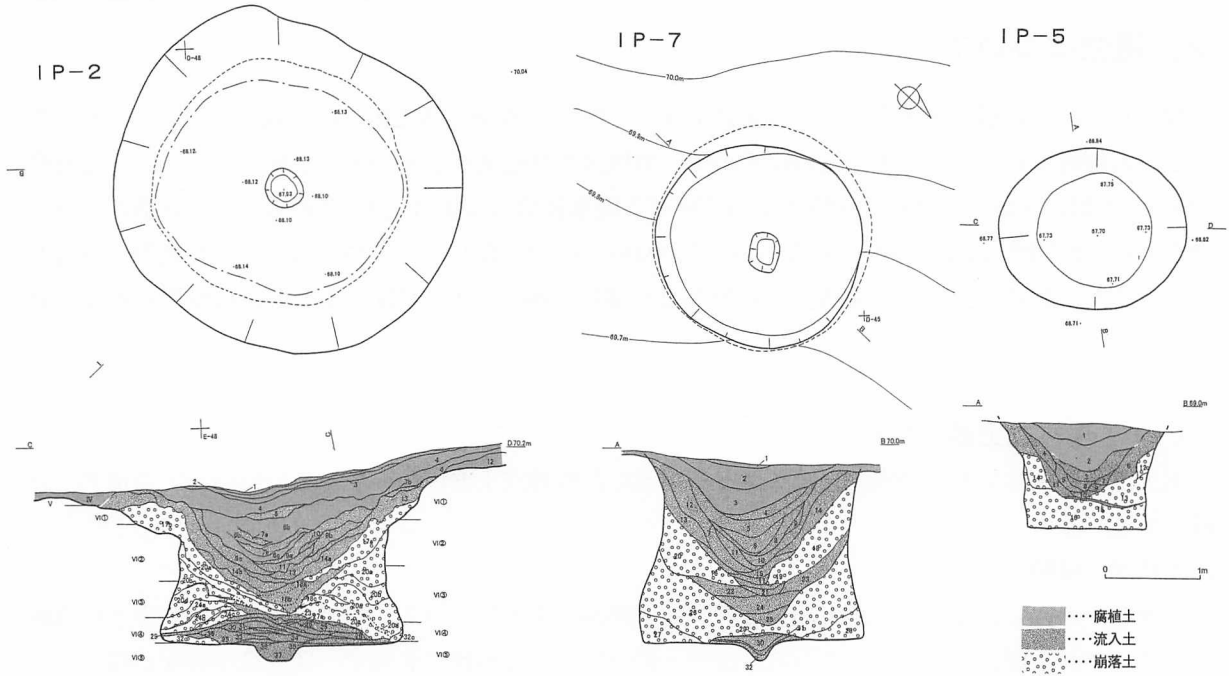
函館市権現台場遺跡の例では、壙底に柱穴状の小土壌があり、雨水などによる流入土とみられる土で覆われている。フラスコ状ピットの壙底には黒色腐植土が堆積し、その上位は壁面の崩落とみられるローム混じりの土壌が厚く、その後流入土、腐植土が体積している。

木古内町新道 4 遺跡の例は縄文後期前葉のものであるが、その構造や土層堆積が石倉 2 遺跡 IP-2 と最も近似している。流入土→崩落土→流入土→腐植土と堆積している様子がみてとれる。

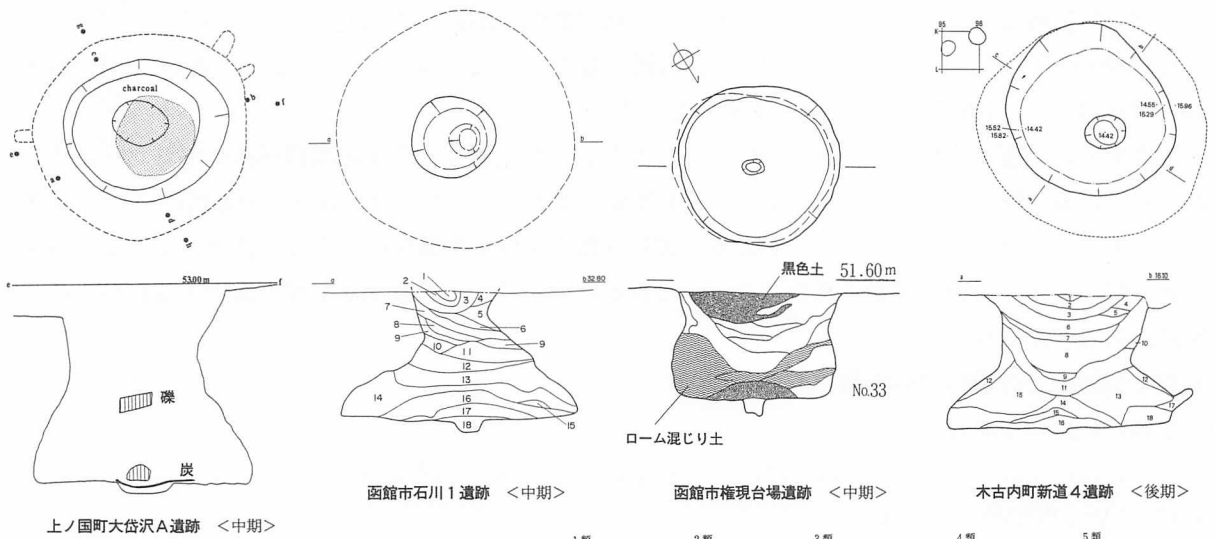
森町御幸町遺跡では、縄文時代中期後半の竪穴住居跡に重複して縄文後期のフラスコ状ピットが多数検出されている。例示したものはフラスコ状ピット同士が重複しているもので、中央に小土壌のあるものが複数ある。堆積層に乱れが多く、埋土で覆われている可能性がある。

ふりかえって石倉 2 遺跡の土層堆積状況を見ると、流入土→壁面の崩落土→流入土→腐植土と堆積している様子がみてとれる（IP-5 は初めに崩落土）。土器などの遺物や堅果・炭化物などの自然遺物が底面になく、空間を保ったまま「空」の状態に廃絶されたと推定できる。その後の堆積層はすべて自然の営力によるものと判断でき、大岱沢 A 遺跡などに見られるような二次的利用の可能性は低く、貯蔵穴としての機能のみを目的とした土壌であった可能性が高い。（阿部）

石倉2遺跡のフラスコ状（円筒状）ピット



中央に小ピットのあるフラスコ状ピットの例



上ノ国町大岱沢A遺跡 <中期>

函館市石川1遺跡 <中期>

函館市権現台場遺跡 <中期>

木古内町新道4遺跡 <後期>

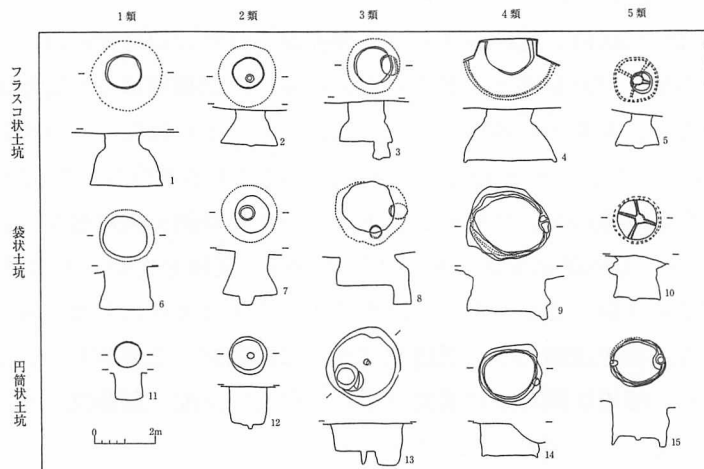
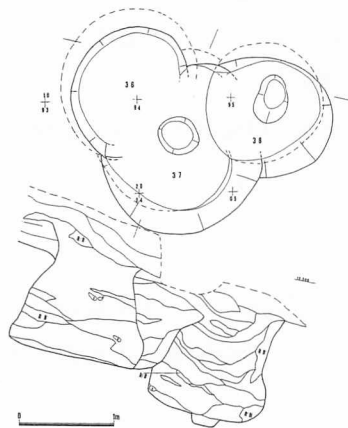


図28 貯蔵穴の分類 (坂口隆 2003)

図VI-2 フラスコ状ピット

2. 遺物について

総数16,543点の遺物が出土した。概要はⅢ章（A地区）・Ⅳ章（B地区）の冒頭に記載したとおりである。A地区では土器集中域のものが大半で、B地区では竪穴住居跡のものが多いことが大きな特徴である。土器の主体は縄文時代中期後半の榎林式と晩期後葉の聖山Ⅱ式で、これらで出土総数の99.3%を占める。定形的石器は105点と少ないが、ていねいに凹面を作りだしている石皿など特徴的な石器がある。また土製品は土器片再生円盤、石製品は小破片で検出された IH-3 出土の石棒片が特記される。

（1） 榎林式土器について

出土土器の主体であり竪穴住居跡に伴って出土した榎林式土器について、その特徴を関連遺跡と比較して述べる。

出土状況の特徴

包含層出土のものは少なく、大部分は竪穴住居跡から出土している。埋設土器は9軒の竪穴住居跡からそれぞれ1個体ずつ出土している。復元・図示できたものは5個体で、残りは小破片が残存していたものと脆いために取上げ時に崩壊したものである。9個体のうち1個体（IH-11）は深鉢の底部で、残りは口縁と底部が欠落した胴部である。上端の断面は磨滅して丸みを帯びているものが多い。また内面を見ると上辺から数cm下に黒色物質が輪をなして付着しているものもある（IH-6・10）。埋甕炉として機能していたことを示すものである。

床面出土の土器は少数である。床面付近として取上げた土器も、覆土の堆積が薄い部分から出土したとみられる（IH-2・3・6）。覆土からまとまって出土するものは、竪穴中央部付近（IH-3・4）と壁際付近（IH-1・2・6）がある。破片は覆土下位や壁際付近から多く出土している。覆土がある程度堆積した後で投棄された土器とみられるものが多く、埋設土器と覆土出土土器に若干の時期差があるとみられる。

石倉 2 遺跡出土の榎林式の特徴

全体的には以下の特徴がある。

〔器種〕深鉢を基本とし、それ以外はほとんどない。器高15cmは程度から40cmを超えるものまであるが、30cm程度のものが多い。

〔器形（深鉢）〕胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁部が緩やかに外反する深鉢が基本であるが、ふくらみやくびれがほとんどないものも多い。口縁部はやや肥厚するものがある。口唇は肥厚するものは少なく、基本的に角形である。底部の張り出しはなく、底面は平坦である。

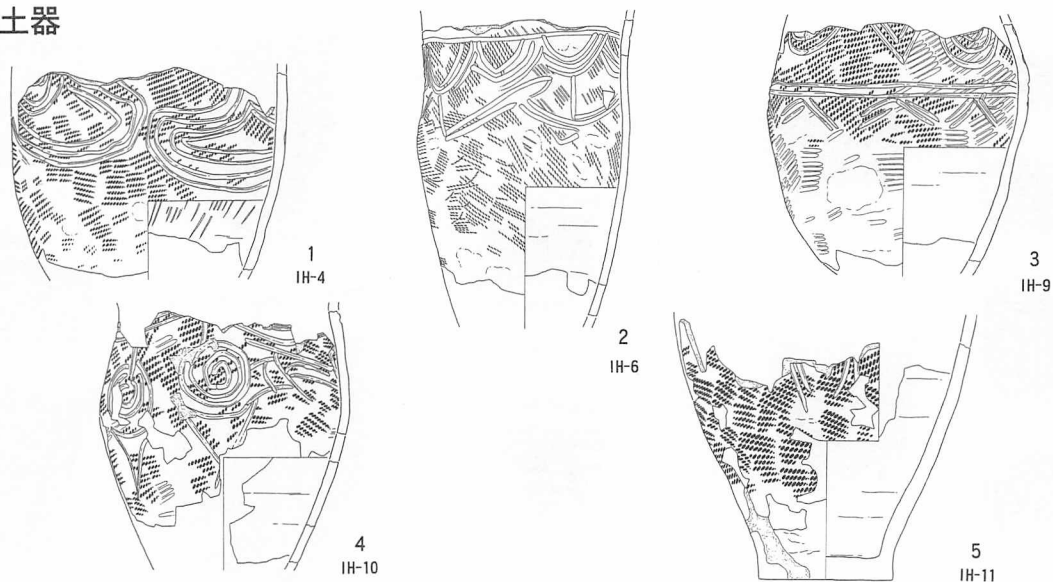
〔地文〕撚糸文・単節縄文・櫛歯状工具による条痕文・無文の順に多い。特に撚糸文の多さが目立つ。少し間隔のあいた撚糸が、上から下へやや斜方向に施文されている。

〔文様〕基本的に二本一組の太目の沈線で文様をえがくものが多い。

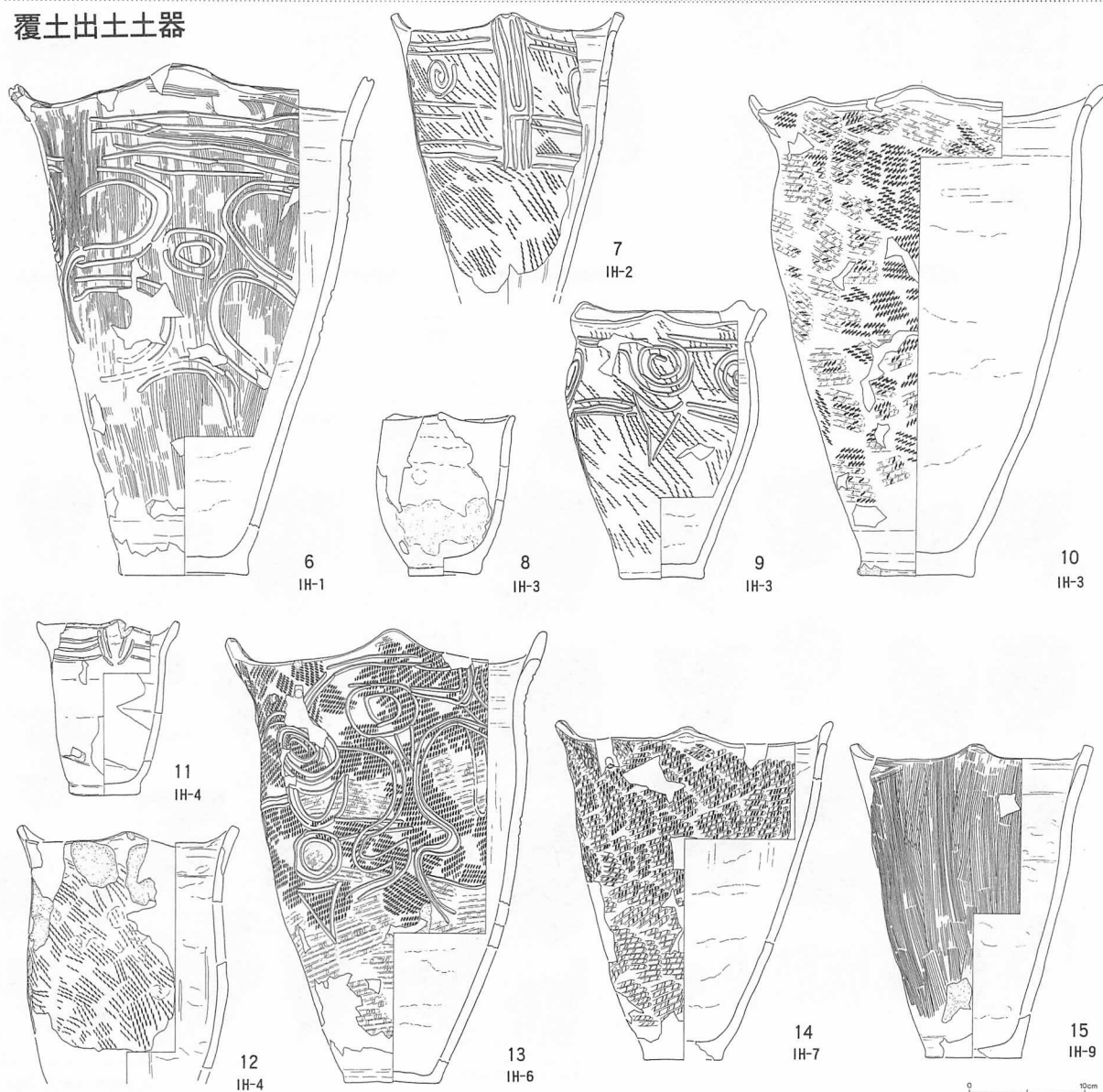
胴部の沈線のえがき方で、以下の4つのまとまりに分類することができる。

- A. 横走沈線の下に弧線文（または鋸歯文）を連続しているもの〔図Ⅵ-3-2・9など〕
- B. 横走沈線の下に渦文（または円文）を配し剣菱文を垂下させ、それらを連繋する沈線があるもの〔図Ⅵ-3-4・5・9など〕
- C. Bの文様が乱れ、曲沈線や蛇行沈線になっているもの〔図Ⅵ-3-6・13など〕
- D. 棒状の区画文があるもの。頸部に貼付隆帯があるものが多い〔図Ⅵ-3-7など〕

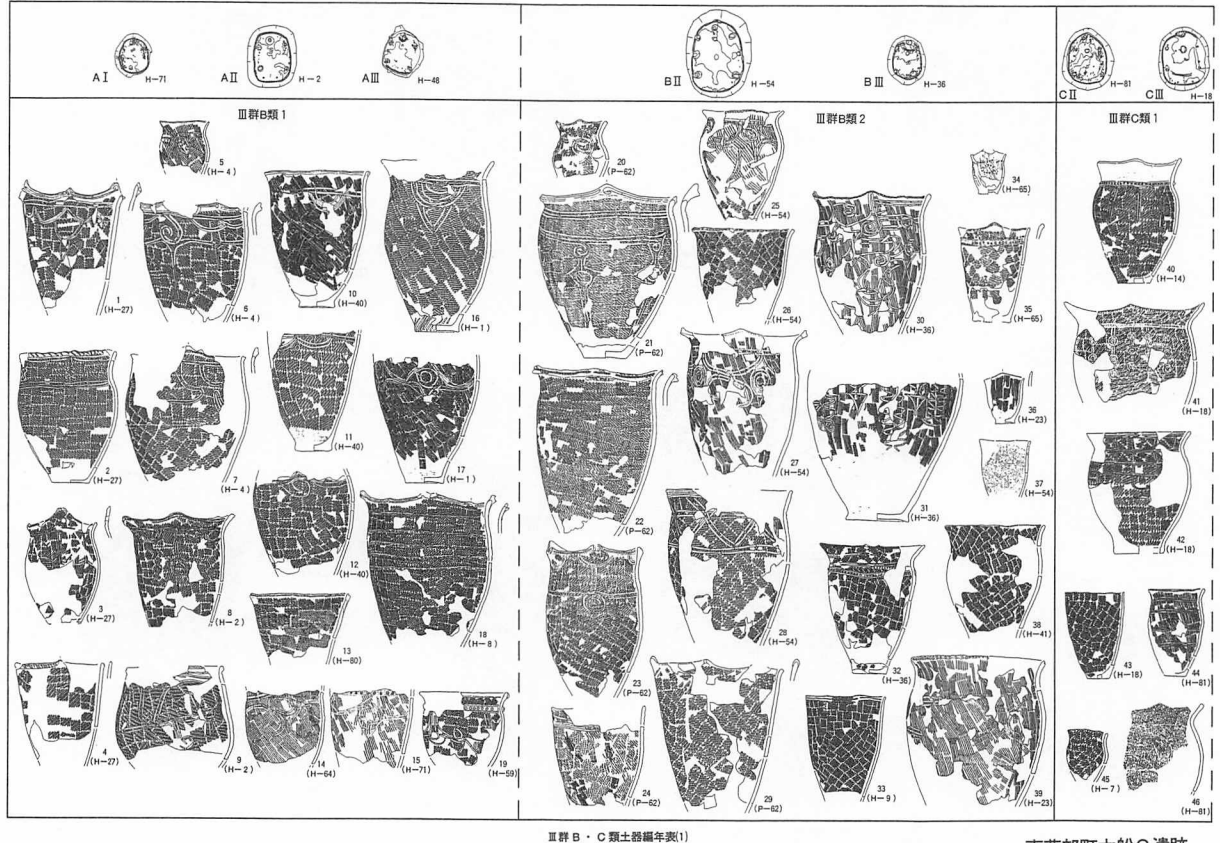
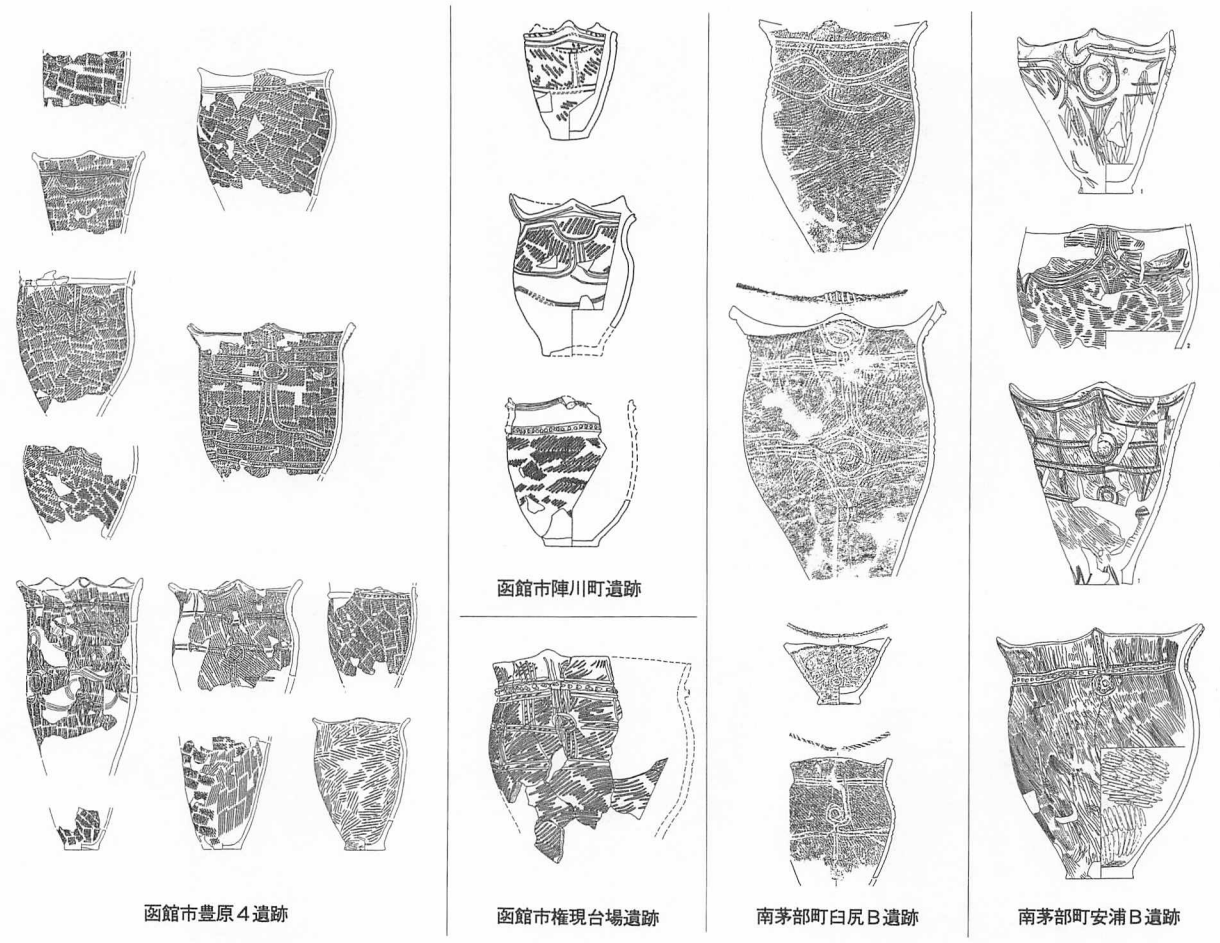
埋設土器



覆土出土土器



図VI-3 石倉2遺跡竪穴住居跡出土土器集成



南茅部町大船 C 遺跡

図 VI - 4 榎林式土器の例

他の遺跡との比較検討

森町により近い遺跡での例を概観してみる。

〔函館市陣川町遺跡〕口唇上に刻み様の縄文圧痕があり胴部に横走沈線と弧線文が見られる見晴町式の名残のある土器や、渦文の兆しが見られる弧線文がえがかれている、榎林式の中でも古い段階に属するものと思われる土器が数点見られる。また頸部に貼付隆帯をもち胴部が膨らむものがある。

〔函館市権現台場遺跡〕貼付隆帯と杵状文がえがかれる、上記Dと共通の要素をもつ土器を示した。

〔函館市豊原4遺跡〕中期後半の竪穴住居跡が34軒検出され、埋設土器をもつものが多い。埋設炉のあり方は多様で、「双子埋設」・「入子埋設」・「入れ替え埋設」がみられる。埋設土器は径30cm前後の大型の深鉢があり、口縁部が残存しているものもある。内面口唇下数cmには、帯状に黒色物質が付着しているものが多い。文様は弧線文を主体にえがくものが見られるが、複数の円文と連繋する沈線を基本とする文様も多く、頸部に貼付隆帯があるものも見られるなど、上記A～D各グループと共通する要素をもつものがある。

〔南茅部町白尻B遺跡〕縄文中期後半の集落跡であり、多量の土器が出土している。文様は弧線文を主体にえがくもの、複数の円文と連繋する沈線を基本とする文様が多い。杵文で区画された文様や頸部に貼付隆帯がある、大安在B式につながる要素をもつものも出土している。

〔南茅部町安浦B遺跡〕渦文と剣菱文を主体とするが配置が乱れているものが多い。また頸部に貼付隆帯があり胴部が膨らむものも多く、全体として榎林式の中でも新段階に属するものと思われる。

〔南茅部町大船C遺跡〕楕円形から舟形を呈する多数の大型住居跡が検出され、それに伴う榎林式～ノダップII式について坪田氏がまとめている(図はその前半部分)。これによると、Ⅲ群B類1は弧線文がえがかれるもの(上記A)、渦文・剣菱文がえがかれるもの(上記B)が主体で、Ⅲ群B類2はそれらがやや乱れた配置になるもの(上記C)が主体、Ⅲ群C類1は杵状文(上記D)が主体となるものが多い。しかしこれらの文様が各類にもみられ、それぞれの文様のまとまりに時間的な画期をおくことは困難な部分があるようである。

編年的位置付けについて

榎林式は、青森県天間林村二ツ森貝塚の調査で1939年に角田文衛氏により設定されたもので、その後鈴木克彦氏による精力的な研究がある(鈴木1976ほか)。口縁部の溝線文・渦巻文の変化や胴部にえがかれる沈線による文様から細分している。この細分にならうと、石倉2遺跡出土土器の上記の4区分について、Aは榎林1式、Bは榎林2式、Cは中の平II式の要素に共通する要素をもっている。一方、上記Dは中の平III式に一部近いものの、他のグループから比べれば異なるものである。

石倉2遺跡出土土器は、全体的には榎林式の中でも新しい段階(榎林2式～中の平II式・鈴木1976)に属するものが多いと思われるが、次に示す点に注意が必要である。

上記Aに属する弧線文を主体とする土器は「榎林1式」近い要素がある。一方、主体をなす上記Bの文様、つまり渦文・剣菱文を基本とする文様については、東北地方北部の榎林式と大きく異なる要素をもち始めるように見受けられる。口縁部があまり肥厚せず角形の口唇が多いことと、それに関係して口唇部に溝線文・渦文があまり施されないこと、二本一組の沈線を多用すること、地文に擦糸文や櫛描文を多用することなどである。また上記B・Cの文様が伴出する例が多く、並存するものが多いと思われる。設定された榎林式を基本としつつも、特に後半は独自性が見られるようになる。この段階における細分は、さらなる検討を加える必要がある。さらに頸部の貼付隆帯や杵状沈線がえがかれるなど、東北北部の変遷とは異なる要素がみられ、大安在B式に続くこととなる。(阿部)

(2) IH-3 出土の石棒について

出土状況 (図VI-12~14、口絵5-4・5、図版23・24)

IH-3は火山灰(Ko-g)と攪乱層を除去した段階で浅いくぼみとして確認できた。遺構の上部は伐採工事の際と思われる削平を受けている。覆土には多量の炭化物、焼土、硬化した土壌が見られ、床面の一部に炭化材の拡がり認められる焼失住居であった。床はVI層の黄褐色ロームに掘り込まれており、石棒の破片は床面直上の黒褐色土からまとまって出土した。接合作業の結果、住居の南側の壁付近に散布されていることがわかった。蛇紋岩の玉とイシイルカの頭骨片は、石棒片のまとまりより下位から出土した。斜面の崩落により、床面が斜めに崩れかけた位置からの出土であるが、出土状況から、元の位置からさほど動いてはいないものと判断できる。

出土遺物 (図VI-15~18、口絵6-2、図版38~40)

石棒は、土壌水洗で出土したものも含め破片131点である。このうち121点が接合した。円柱状を呈し、長さは49.9cm、最大幅は端部にあり8.8cm、重量は3,620gである。石材は凝灰岩で、一部に原石面を残すが、全面研磨による整形が施されている。図で上に表現した端部は浅い溝状にくぼんでいるが、もう一方は平坦である。破片は部位ごとに、被熱し赤色を呈するもの、炭化物が付着し黒色を呈するもの、ほとんど被熱していないものがあることから、破片の状態に住居内に散布され、住居の焼失時に被熱したものと考えられる。接合資料の綿密な観察により推定すると、長さ三分の一程の部分で二分割し、それぞれ板状の破片に割られたものである。

玉は半分欠損している。直径は2.6cm。全面研磨されており、両側から穿孔されている。断面の観察から意図的に割られた可能性が高い。蛇紋岩製である。

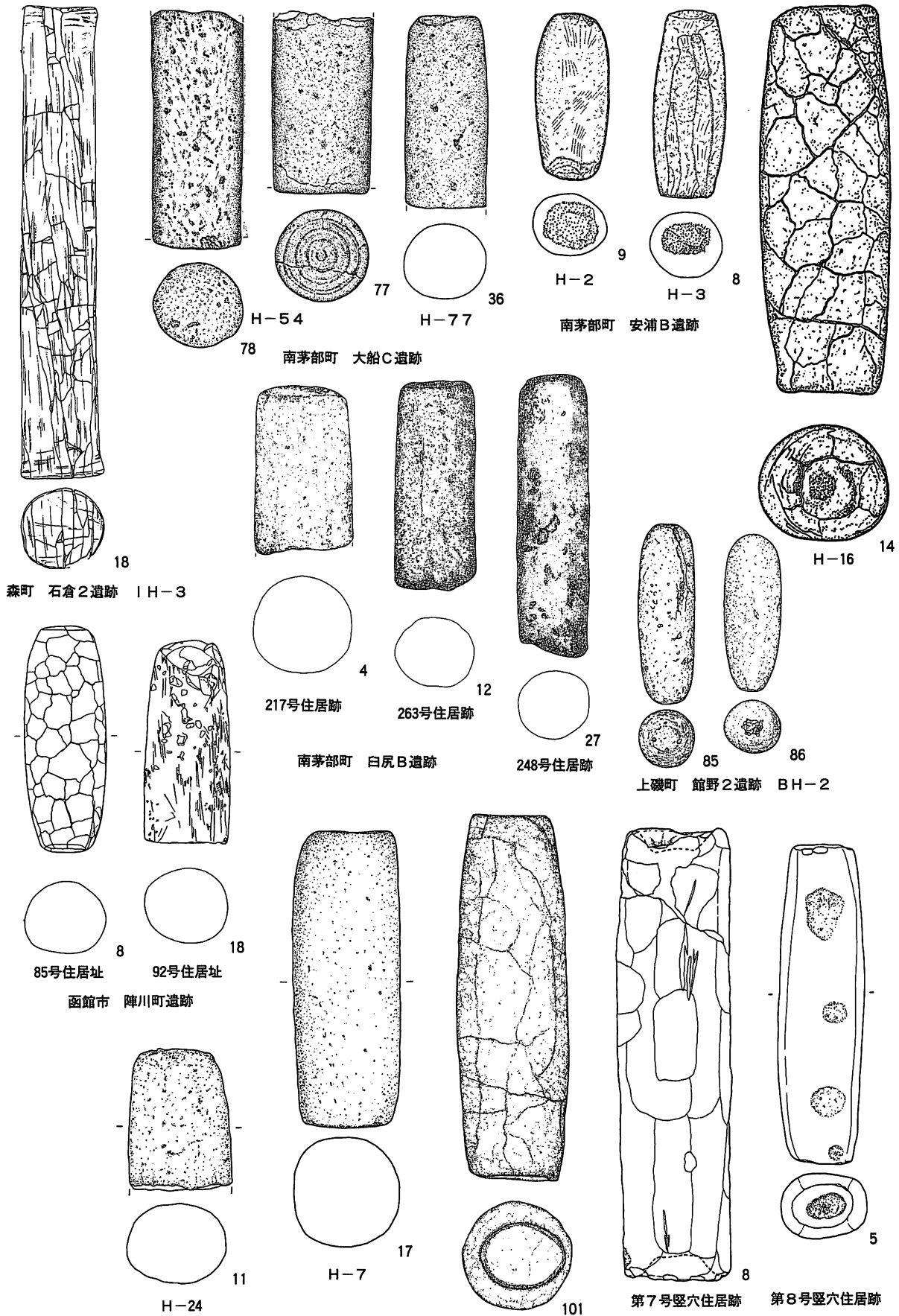
石棒や玉と伴に出土した焼骨片は、ほとんどが細かい破片での出土で、全量45.7gである。種の同定は東京国立博物館客員研究員 金子浩昌氏に依頼した。部位はイシイルカ(リクゼンイルカ)の頭部で、左右の後頭顆、胸椎体、頭骨片で1個体であった。

石棒の出土例 (図VI-5)

図IV-5は、道南地方の榎林式の住居から出土した石棒の主なものを集成した。縮尺は六分の一に統一してある。円柱状のものと中央部が膨らむものがあり、端部がくぼむものが多い。円柱状のものは南茅部町大船C遺跡や白尻B遺跡に多く見られる。明らかに被熱したものは、南茅部町安浦B遺跡H-16や函館市陣川町85号住居址、上磯町館野2遺跡BH-2の例がある。3つに分割されて出土した例は上ノ国町小砂子遺跡第7号竪穴住居跡のものがある。この住居跡からは、覆土の上層からではあるが、トドの右上腕骨が出土している。

縄文時代中期以降に増加する焼失住居は、住居廃用時の儀礼的行為の一つと考えられている。焼失住居から石棒が出土する例は、南茅部町安浦B遺跡のH-2や函館市豊原4遺跡H-27などに見られる。また、焼失住居の記述はないが、覆土に多量の炭化物、焼土粒を含む住居からの出土例を含めると相当数にのぼる。これらの例から、石棒は住居廃用時の儀礼的行為の一要素であると考えられるが、石倉2遺跡IH-3出土例のように、細かく破碎し、床面に散布する例は、管見の限り見られない。石倉2遺跡の出土例は特殊なものか、また、廃用時以前の住居内あるいは集落内での石棒の使われ方など、今後さらに検討してゆきたい。

(村田 大)



函館市 豊原4遺跡

函館市 見晴町B遺跡 4号住居址

上ノ国町 小砂子遺跡

図VI-5 縄文時代中期後半の石棒

(3) 森町石倉 2 遺跡出土のイルカ頭骨片について

1) イルカ頭骨の出土状態

石棒の破片が散らばった面の下部から、半割された丸玉とともに焼骨片が110数点散乱して出土した。そのうち部位が判明できるものが10数点、まったく判明できないものが約100点である。これらの焼骨片は頭骨片がほとんどで、それ以外の部位片は検出されていない。この焼骨片を金子浩昌氏に鑑定をお願いしたところ、イシイルカの左右の後頭顆、胸椎体などで、1個体分のイシイルカの頭部と同定されている。ただ、注意すべきことはイルカの歯が検出されていないことである。

イシイルカの頭骨は出土状態、焼骨片の破砕面などを観察すると、火を受けて割れたものではなく、ある場所で石などで叩き割り、細かく砕いたうえで住居の南側の床面に散布したものと思われる。

2) イルカ頭骨と住居の焼失

イシイルカの骨・丸玉・石棒の出土状態からうかがえることは、三者を一定の場所で打ち砕いたうえで、屋内にイシイルカの頭骨片・丸玉の半割片を撒き、その次に石棒の破砕片を住居の北東側から南側にかけてばら撒いたものと思われる。そのような行為を終えた後に住居に火をつけ、全焼させたあとに住居のほぼ中心に完形土器を置いたものと推論している^{#1}。

この焼失住居について、住居内の居住範囲のある特定の人間が死亡したためか、それともこの土地から離別して他の場所に移るために浄めの儀式を行ったかを確定しうるものは今のところ見当たらない。ただ、ここに住んでいた当時の人々がイルカに対する「思い入れ」をもっていたことがうかがえそうである。したがって、ここでは縄文時代のイルカに焦点をあて、それをめぐる諸問題についてふれることとする。

3) 縄文時代におけるイルカ猟について

イシイルカは小型の歯クジラで、体長2.2m、体重220kgに達し、ネズミイルカと同じ寒冷海域に生息する。本種は外洋性で動きが速く、5～10頭の群をなし、陸岸に近寄る場合は大群を形成しない。性成熟前の若い個体は、船首波に戯れてくるため、突き棒の格好の対象となっている^{#2}。「現在三陸沖では、イシイルカを突棒漁法」^{#3}で捕獲しているが、「縄文時代にはスピードの出る船がなかったため」^{#4}捕獲しえなかったといわれている。しかし石倉 2 遺跡では銚頭・舟形土製品^{#5}などは出土していないが、噴火湾が一望できるところに立地し、動物遺存体としてイシイルカの骨が検出されていることから、縄文中期後半にはすでにイシイルカ猟が出現していた可能性が高い。

北海道におけるイルカ猟は、寒冷海域に生息するイシイルカ、ネズミイルカを主要な捕獲対象として、その捕獲方法は舟と銚によって行われていたものと思われる。その捕獲組織は3人前後であろう。東北地方以西のイルカ猟が、主に追い込み漁によって行われていることと好対照をなしている。イルカ猟の捕獲組織と住居の居住集団の規模は相互に関係し、そして集落を構成する住居の単位を規制したものと思われる。北海道における縄文時代の銚猟は、トド、アザラシ、オットセイだけではなく、イルカも対象としていた可能性があり、縄文時代の生業の組み合わせを考えるうえで、見過ごしてはならない問題である。

4) 縄文時代のイルカ儀礼

縄文時代中期後半で、石倉 2 遺跡のようにイルカの頭骨が破砕されて住居床面から出土した例は、今のところ他では発見例はない。ただ島牧村栄磯岩陰遺跡で、マイルカ科の一種が「Ⅴ層で頭蓋骨片、Ⅶ層で肢骨片と下顎骨片」^{#6}が出土し、さらにバンドウイルカの歯を「Ⅴ層とⅦ層」^{#7}で各1個採集している。歯は「歯根末端の閉鎖しない若い個体のものである。他には、このイルカ類に見合う椎骨、肢骨などはみつけられなかった」^{#8}と報告されている。第Ⅴ・Ⅶ層は縄文中期末葉の時期である。遺跡

の性格は岩陰で、住居跡などは検出されていない。しかし、イルカの頭蓋骨片が検出されていることから推論すると、イルカの頭骨を割っていることも考えられる。今後、縄文中期後半以降におけるイルカの骨の出土状態に注意を払う必要がある。

次に参考例として、縄文時代前期の東釧路貝塚、オホーツク文化期の香深井遺跡のイルカ頭骨出土例についてふれる。東釧路貝塚では、ネズミイルカの頭骨が「放射状に並んで」発見されている^{註9}。頭骨は約7個体で、いずれも穿孔あるいは破砕はされておらず原形をとどめている。歯が残存していたかどうかは不明である。屋外儀礼のひとつのあり方を示している。香深井遺跡では、石積み遺構からゴンドウクジラの頭骨が7例、カマイルカの頭骨が1例検出されている。ゴンドウクジラの頭骨は、6例が穿孔あるいは後頭部の破損が認められ、他の1例はその痕跡はない。カマイルカの頭骨は、「脳頭蓋後半を欠損」^{註10}させている。

このような参考例と石倉2遺跡出土例を対比させるならば、頭蓋が部位を特定しにくいほど打ち砕かれているところにその特異性がある。そのあり方からみても屋外儀礼とは異なる様相をもっている。いずれにしても石倉2遺跡の出土例は、「縄文人とイルカ」という問題を考えるきっかけとなる資料を提供したといえる。

5) イルカの歯の利用について

石倉2遺跡出土のイシイルカの頭骨からは歯は検出されていない。栄磯岩陰遺跡では、歯のみが検出されている。このことは、イルカの歯が何らかの理由で抜き取られている可能性がある。民俗例として、ソロモン諸島のマライタ島ではイルカの歯が装飾財として利用されている。すなわち「祭りや儀式の際には女たちはイルカの歯と貝殻を組み合わせた装飾品を身にまとう。……なかでもログラと呼ばれる頭に巻くバンドは、貝のビーズとイルカの歯が緻密な模様を組み合わされ、とてもみごたなものである」^{註11}と報告されている。これまでサメの歯は問題にされていたが、イルカの歯については注目されていない。イルカの歯の利用^{註12}についても検討を加えていく必要があるのではないだろうか。

(種市幸生)

本稿を執筆するにあたって、東京国立博物館 金子浩昌氏、静岡学園短期大学 中村羊一郎氏、大船渡市教育委員会氷見淳哉氏には諸々御教示いただき、記して謝意を申し上げます。

註1：本報告書75ページ参照のこと

註2：粕谷俊雄・金子浩昌・西本豊弘 1985「動物学」『季刊考古学』11号。p93・94参照

粕谷俊雄 1980「イルカの生活史」『アニマ』9月号。No.90。p18参照

註3・4：宮崎信之 1986「イルカの生態・種同定ならびに利用価値」『石川県能登町真脇遺跡』p371

註5：西本豊弘 1993「海獣狩猟から見た津軽海峡の文化交流」『古代文化』vol.45

戸井貝塚出土の「舟を模した土製品」を、西本氏は「丸木舟に更に側板を補強」していることから、「磯まわりだけではなく海峡中央部まで乗り出していた」と考えている。噴火湾におけるイルカ猟は、西本氏が述べるように「オットセイやアシカなどと同様に銚猟」と思われる。その初現は、縄文前期ということも考えられる。

註6：金子浩昌 1973「骨・角・牙・貝製品」『栄磯岩陰遺跡発掘報告』島牧村教育委員会。p49・50・60

註7・8：同上 p60

註9：釧路市立郷土博物館 1980『東釧路の貝塚 一先史時代の釧路一』解説シリーズ1 p15・16

註10：大井晴男・西本豊弘 1976「X 石積み遺構とその遺物」『香深井遺跡 上』大場利夫・大井晴男編 p400・401

註11：秋道智彌編著1995『イルカとナマコと海人たち』p105

註12：ただ、イシイルカ・ネズミイルカの歯は抜け易いことを考慮にいれるべきであろう。

引用・参考文献

(1) 論文・報文等

- 大島直行 1994「縄文時代の火災住居—北海道を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第1号
大島直行 1999「縄文時代火災住居の意味」『考古学ジャーナル』No.447
鈴木克彦 1976「東北地方北部における大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』8
鈴木克彦 1999「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』第35輯
吉崎昌一ほか 1979『聖山—北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査—』
北海道大学教養部人類学研究室 報告 No.1

(2) 単行本等

- 浅川滋男編 1998『先史日本の住居とその周辺』同成社
坂口 隆 2003『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書⑤
鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
村越 潔 1984『増補 円筒土器文化』雄山閣考古学選書10
森町 1980『森町史』

(3) 発掘調査報告書

- 青森県立郷土館 1992『小川原湖周辺の貝塚—三沢市山中(2)貝塚・天間林村ニツ森貝塚発掘調査報告—』
上ノ国町教育委員会 1972『大安在B遺跡』
上ノ国町教育委員会 1979『小砂子遺跡』
上ノ国町教育委員会 1987『大岱沢A遺跡』
知内町教育委員会 1972『涌元遺跡』
上磯町教育委員会 1981『館野2遺跡』
函館市教育委員会 1979『見晴町B遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会 1981『権現台場遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会 1989『陣川町遺跡』
函館市教育委員会 1990『権現台場遺跡』
函館市教育委員会 2003『豊原4遺跡』
七飯町教育委員会 1979『峠下聖山遺跡』
七飯町教育委員会 1991『上藤代7遺跡』
南茅部町教育委員会 1980『白尻小学校遺跡』
南茅部町教育委員会 1980『白尻小学校遺跡』
南茅部町教育委員会 1988『白尻B遺跡 vol.VIII』
南茅部町教育委員会 1996『大船C遺跡』
南茅部町教育委員会 2000『安浦B遺跡』
南茅部町教育委員会 2002『大船C遺跡 ハマナス野遺跡 vol.XVII』
森町教育委員会 1975『鳥崎遺跡』
森町教育委員会 1985『御幸町遺跡』
八雲町教育委員会 1995『栄浜1遺跡』
北海道第四紀研究会 1974『西股』
北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市石川1遺跡』北埋調報45集
北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市桔梗2遺跡』北埋調報46集
北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内町新道4遺跡』北埋調報52集
北海道埋蔵文化財センター 2002『八雲町落部1遺跡』北埋調報181集
北海道埋蔵文化財センター 2002『森町本内川右岸遺跡』北埋調報182集
北海道埋蔵文化財センター 2002『森町濁川左岸遺跡—B地区—』北埋調報190集
北海道埋蔵文化財センター 2002『森町本茅部1遺跡』北埋調報191集

写真図版





1 調査前状況（北西から）



2 火山灰 (Ko-g) 除去作業（北から）



3 包含層調査状況（北から）



4 調査状況（南西から）



5 A地区完掘（南西から）

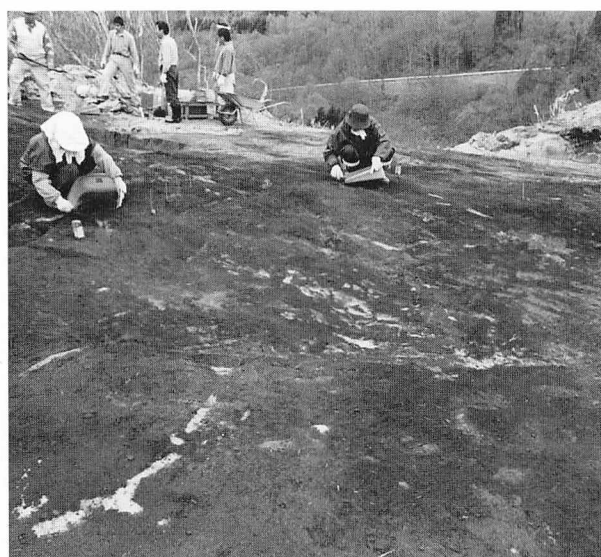
図版 2



1 IP-1 土層断面 (南から)



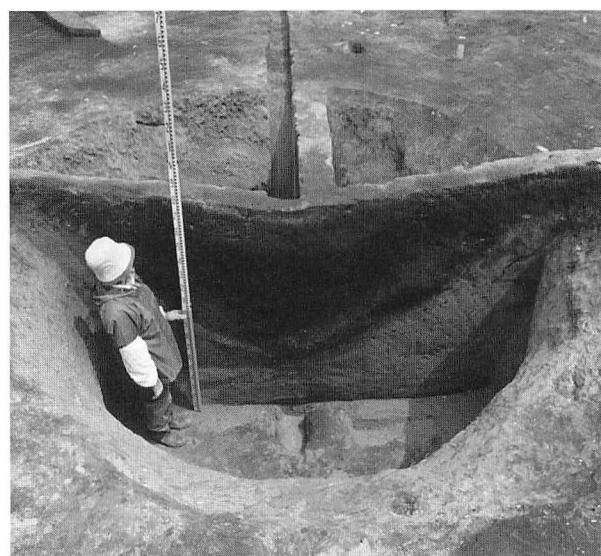
2 IP-1 フレイク出土状況 (東から)



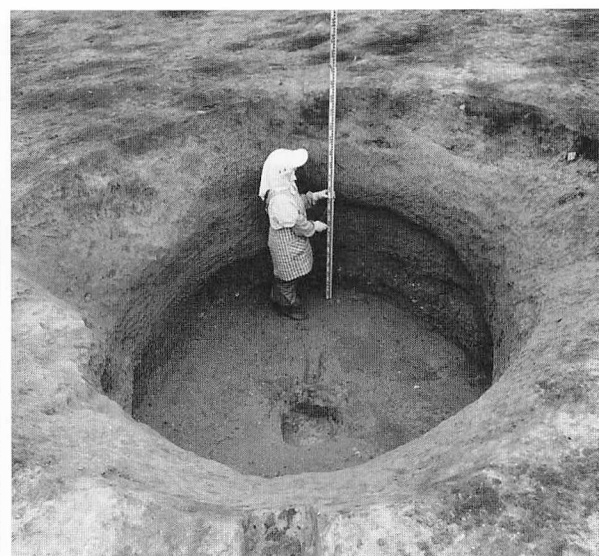
3 IP-2 確認 (東から)



4 IP-2 調査状況 (東から)



5 IP-2 土層断面 (南西から)



6 IP-2 完掘 (南西から)



1 IP-3 完掘 (西から)



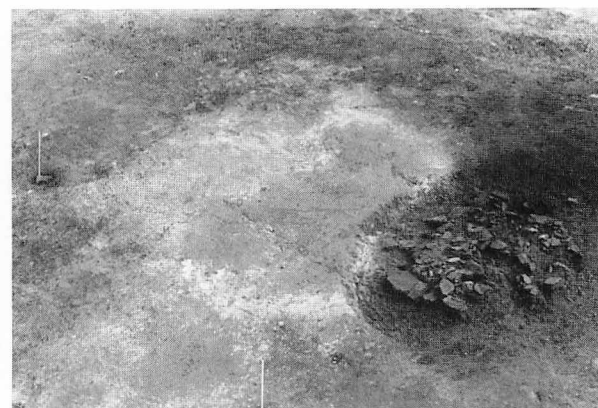
2 IP-3 土層断面 (西から)



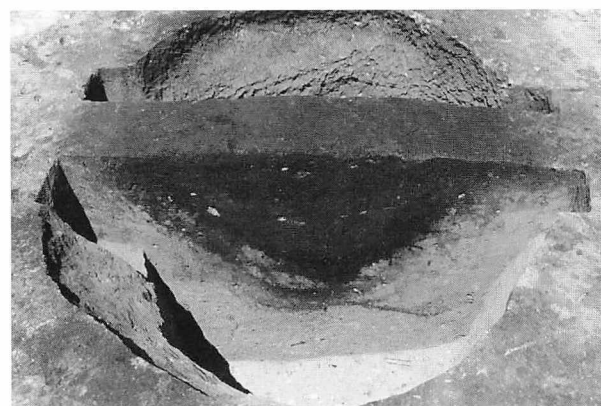
3 IP-4 遺物出土状況 (東から)



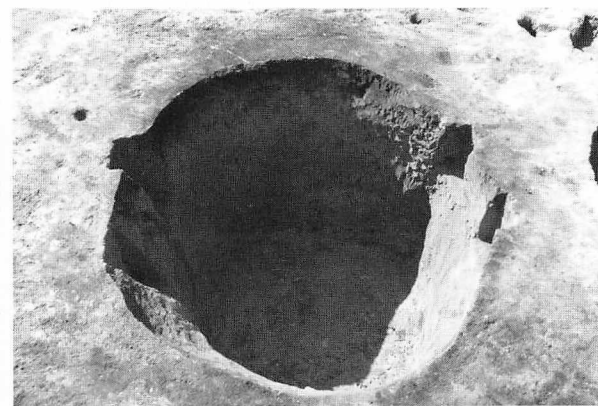
4 IP-4 土層断面 (南から)



5 IP-5 確認 (南東から)

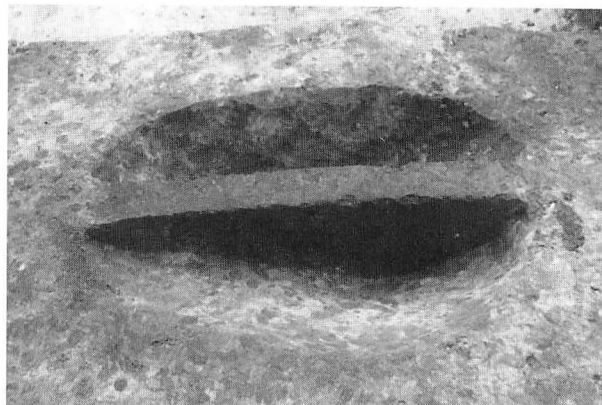


6 IP-5 土層断面 (南東から)

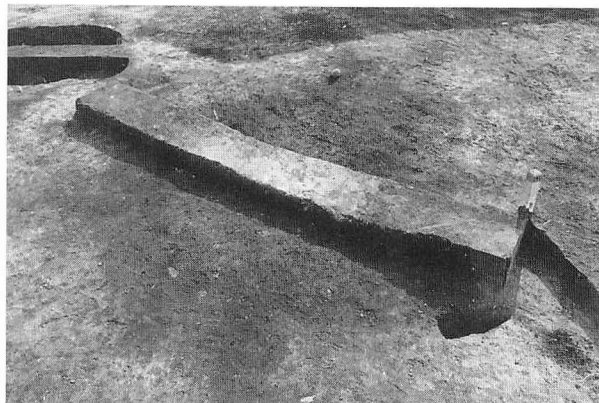


7 IP-5 完掘 (南東から)

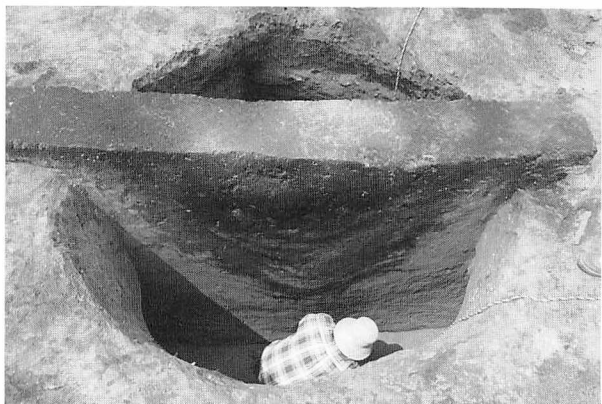
図版 4



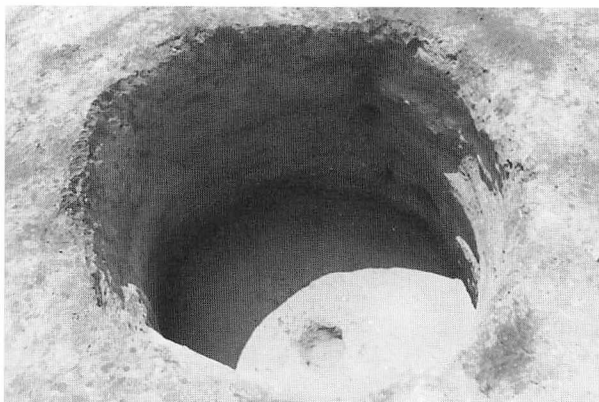
1 IP-6 土層断面 (北東から)



2 IP-7 確認 (東から)



3 IP-7 土層断面 (東から)



4 IP-7 完掘 (北東から)



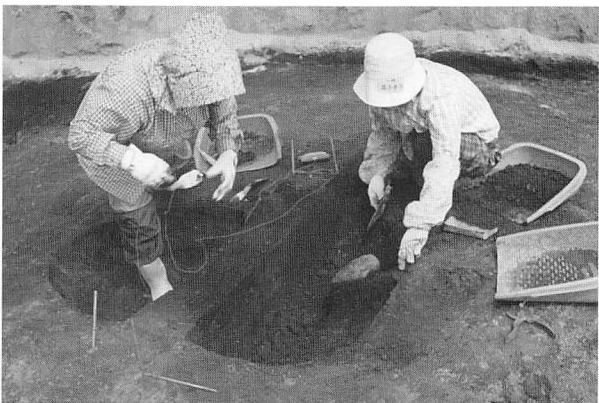
5 IP-8 土器出土状況 (南東から)



6 IP-8 土器出土状況 (南西から)



7 IP-8 土層断面 (南西から)



8 IP-8 調査風景 (東から)



1 TP-1 土層断面 (南から)



2 TP-1 完掘 (南から)



3 TP-2 土層断面 (南から)



4 TP-2 完掘 (南から)



1 TP-3 土層断面 (南東から)



2 TP-3 完掘 (南東から)



3 TP-4 土層断面 (南から)



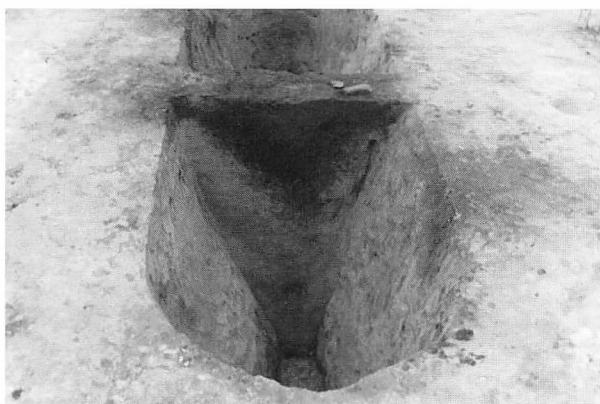
4 TP-4 完掘 (南から)



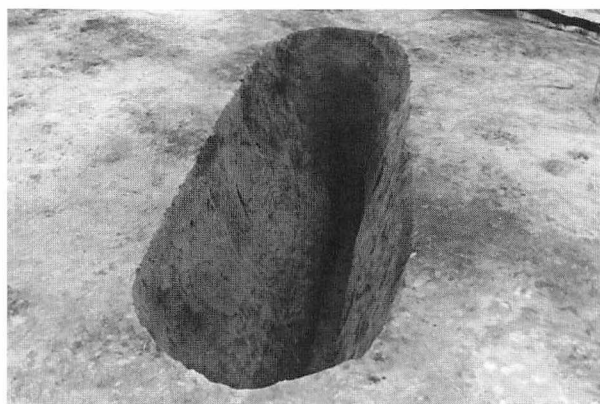
1 TP-5 確認 (南西から)



2 TP-5 確認 (北東から)



3 TP-5 土層断面 (東から)



4 TP-5 完掘 (北東から)



5 TP-6 土層断面 (南東から)



6 TP-6 完掘 (南東から)



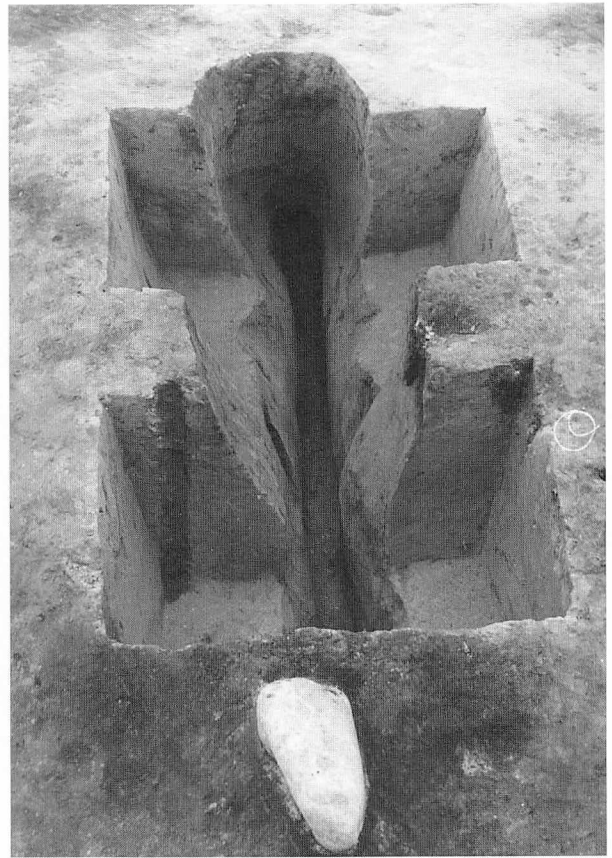
1 TP-7 土層断面 (南から)



2 TP-7 完掘 (南から)



3 TP-8 土層断面 (南から)



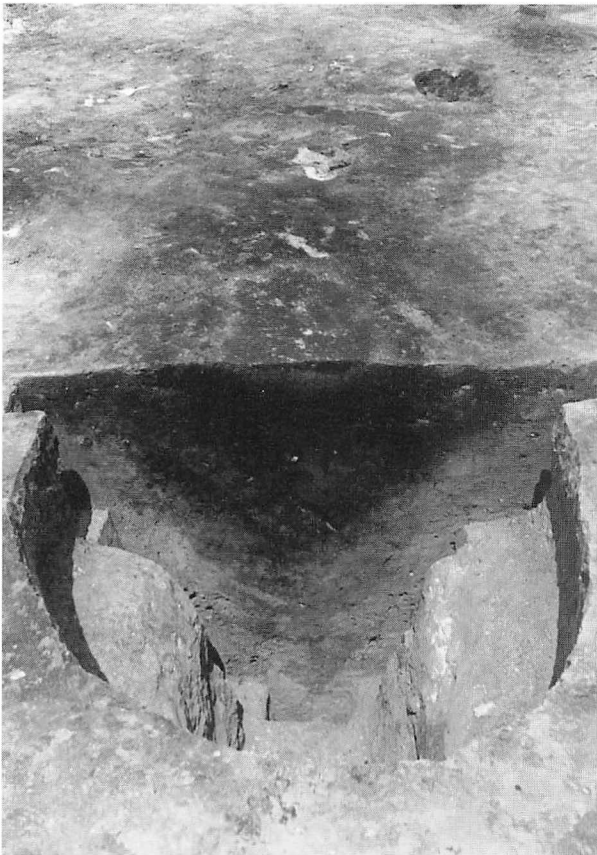
4 TP-8 完掘 (南から)



1 TP-9 土層断面 (南から)



2 TP-9 完掘 (南から)



3 TP-10 土層断面 (南から)



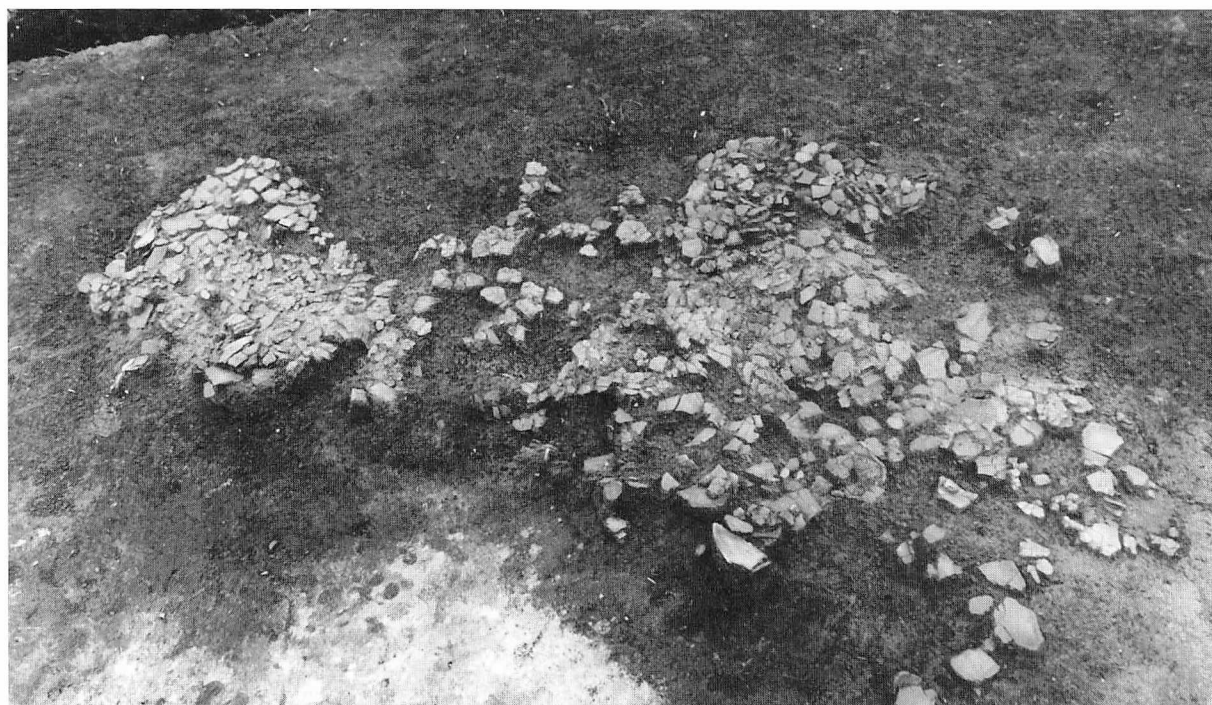
4 TP-10 完掘 (南から)



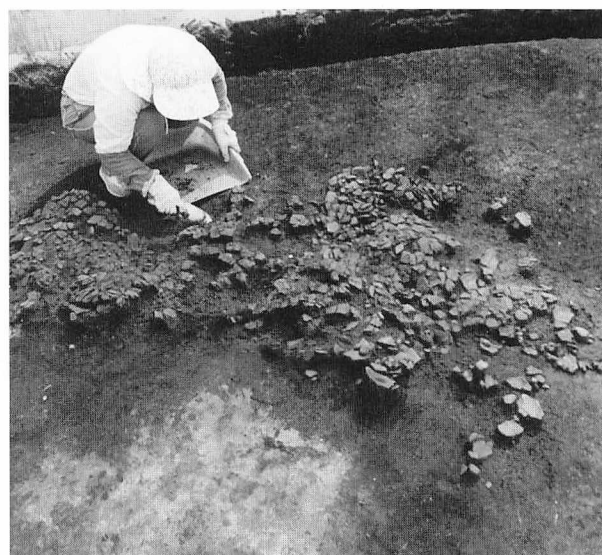
1 IF-1 土層断面 (北から)



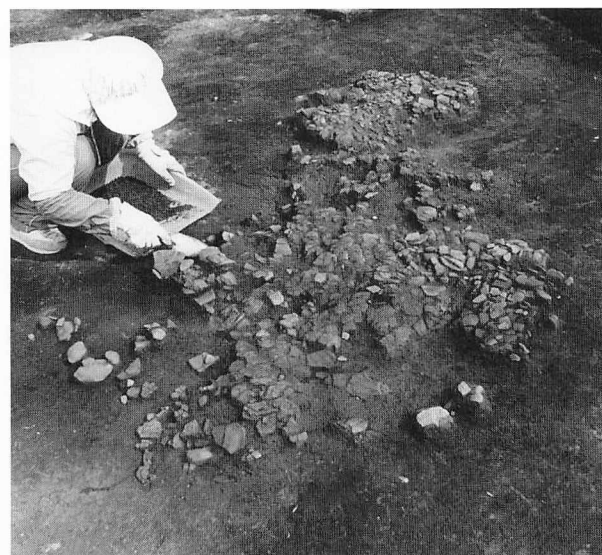
2 IF-2 確認 (北から)



3 土器集中1 確認状況 (東から)



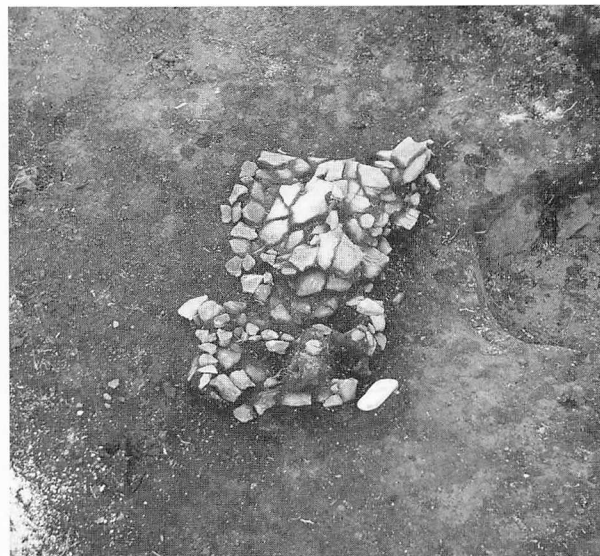
4 土器集中1 調査状況 (東から)



5 土器集中1 調査状況 (北から)



1 土器集中2 (北から)



2 土器集中2 (南から)



3 土器集中3 (南東から)



4 土器集中4 (南東から)

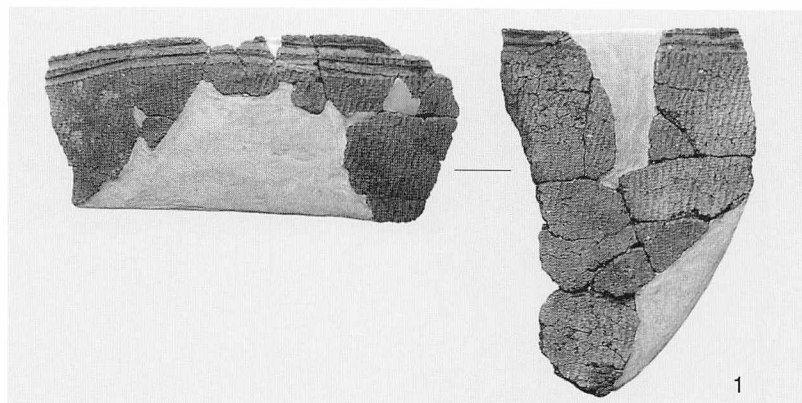


5 F.C. 1 確認 (北から)

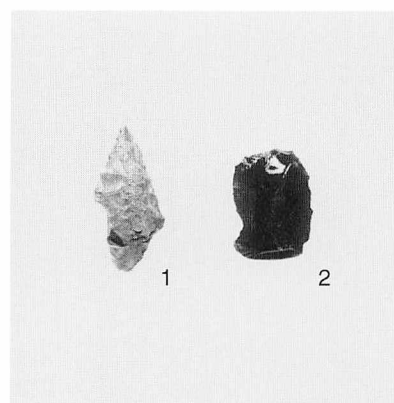


6 F.C. 2 確認 (南から)

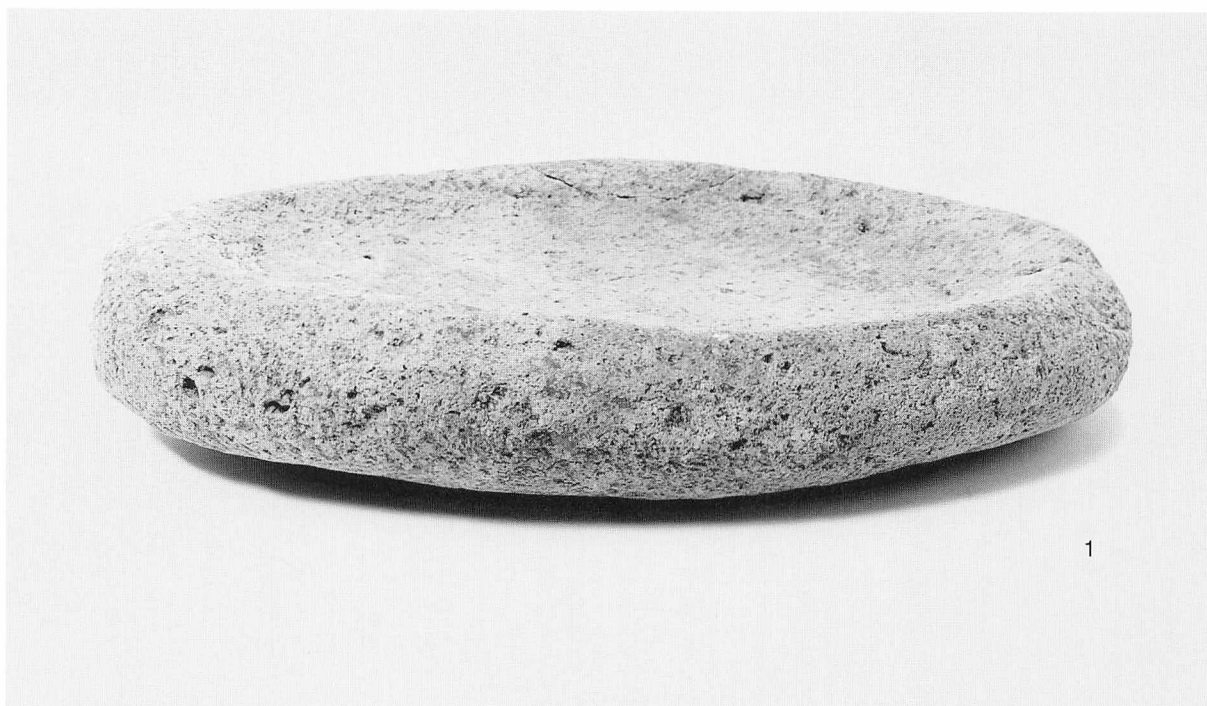
図版12



1 IP-5 出土の土器



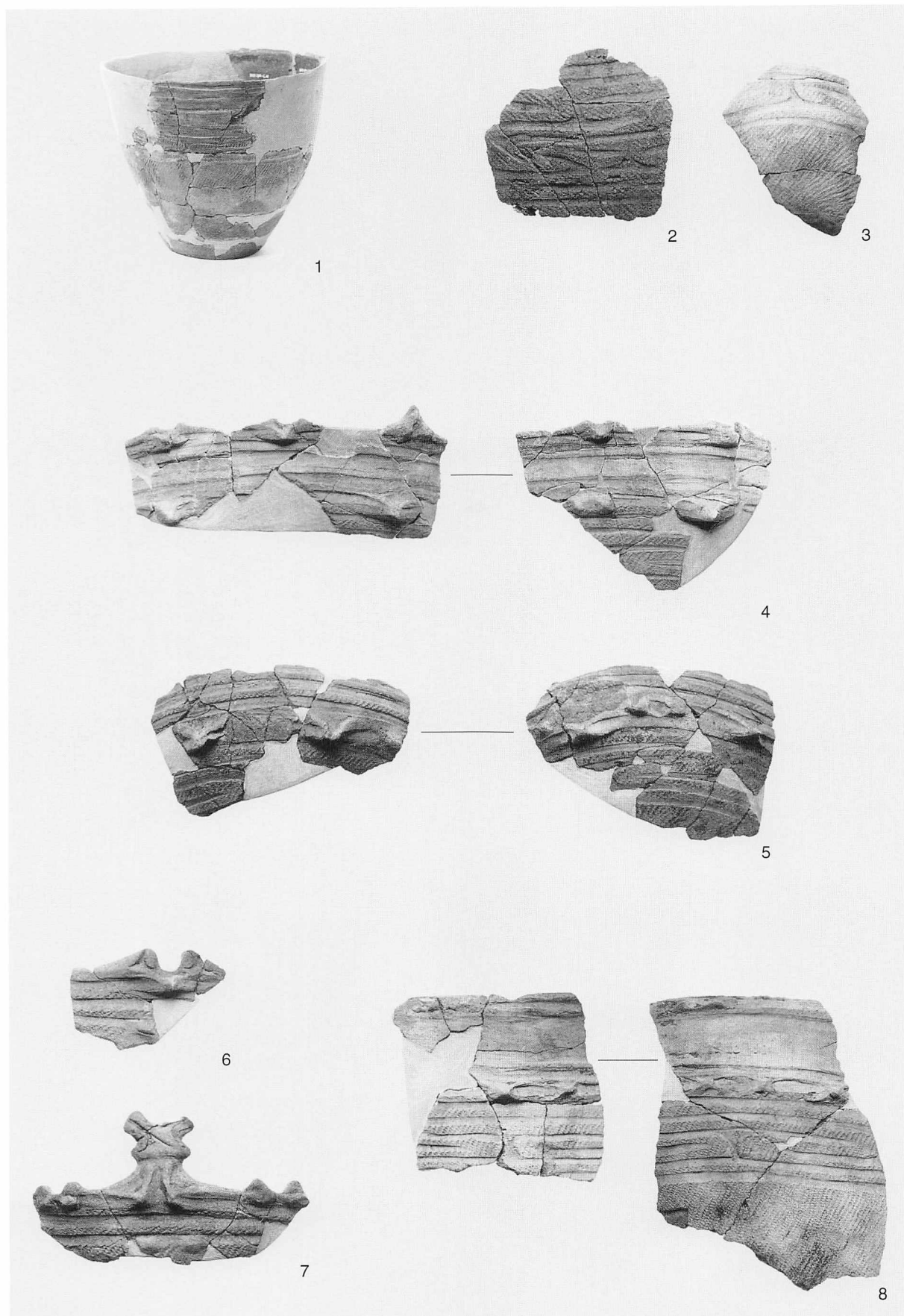
2 IP-1 出土の石器



3 IP-4 出土の石皿



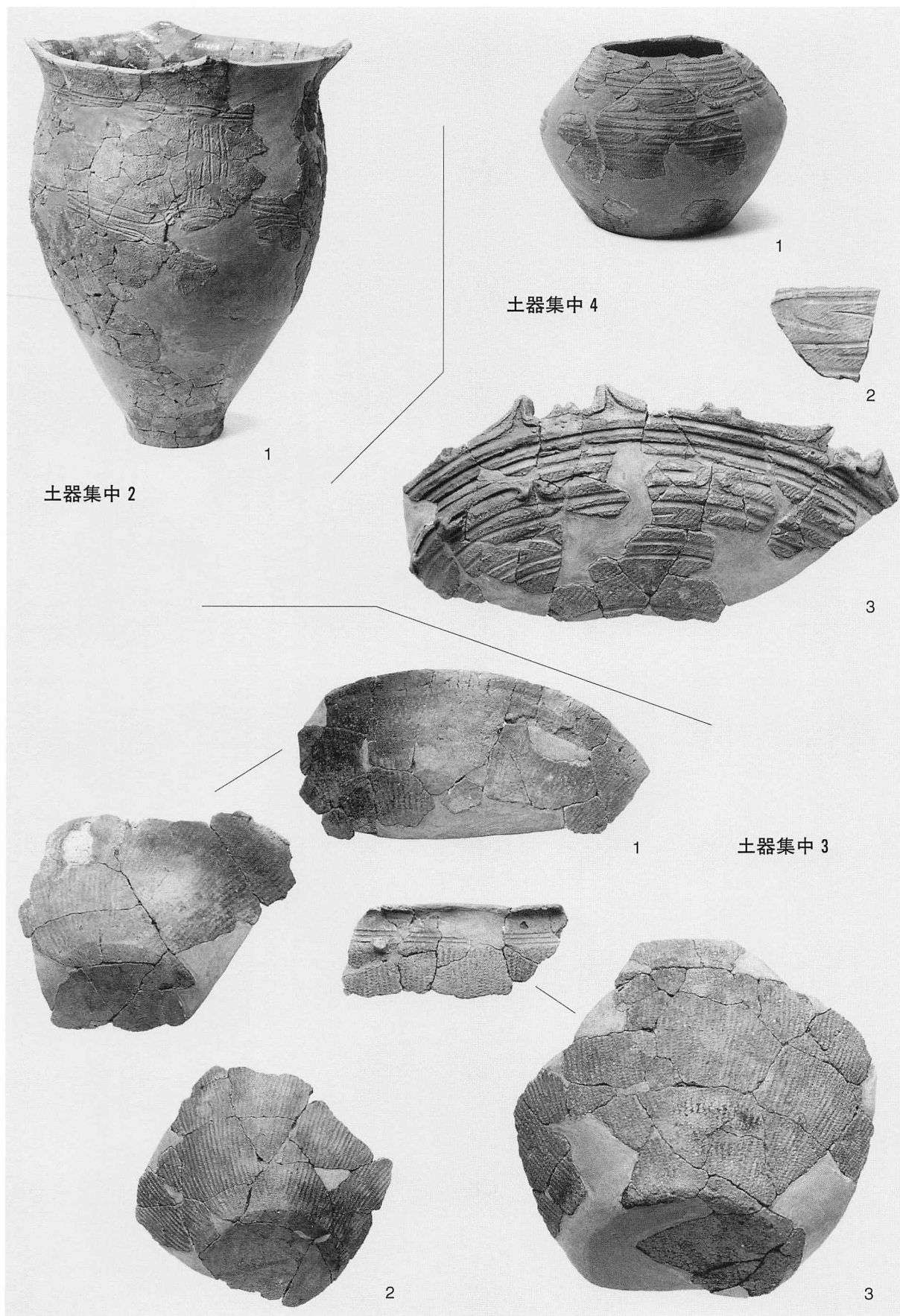
4 IP-8 出土の土器



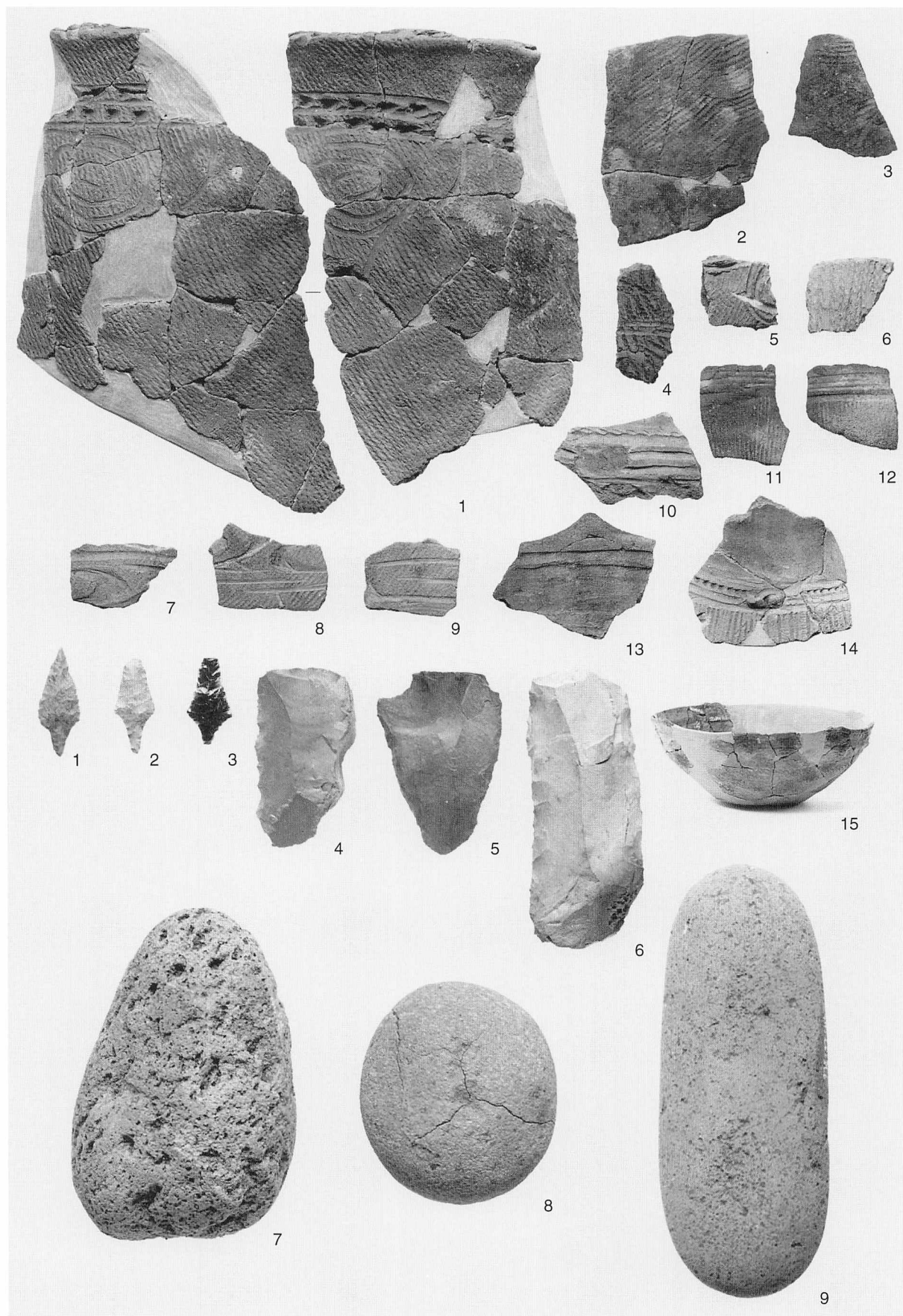
1 土器集中1出土の遺物①



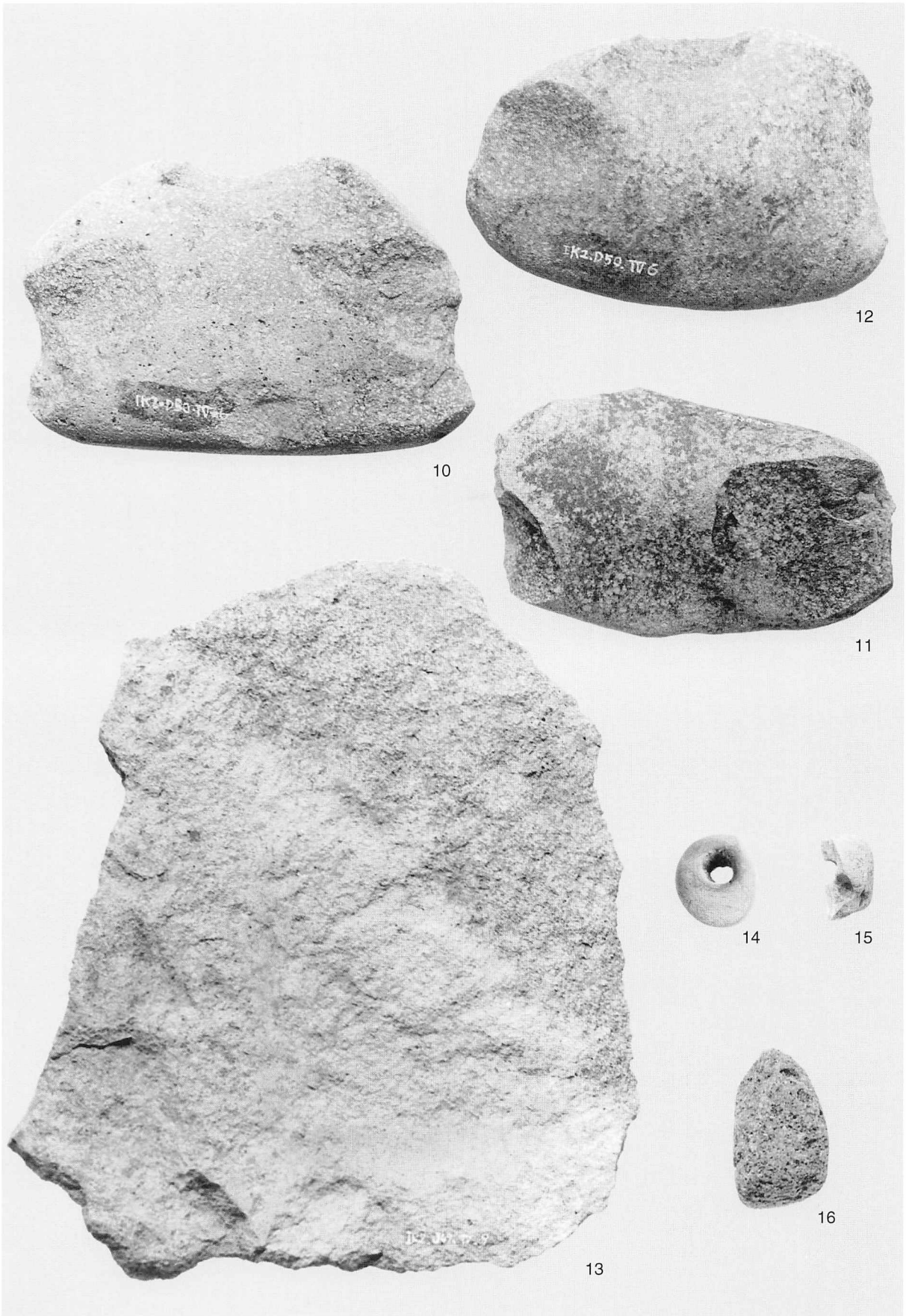
1 土器集中1出土の遺物②



1 土器集中 2 ~ 4 出土の遺物



1 A地区包含層出土の遺物



1 A地区包含層出土の石器



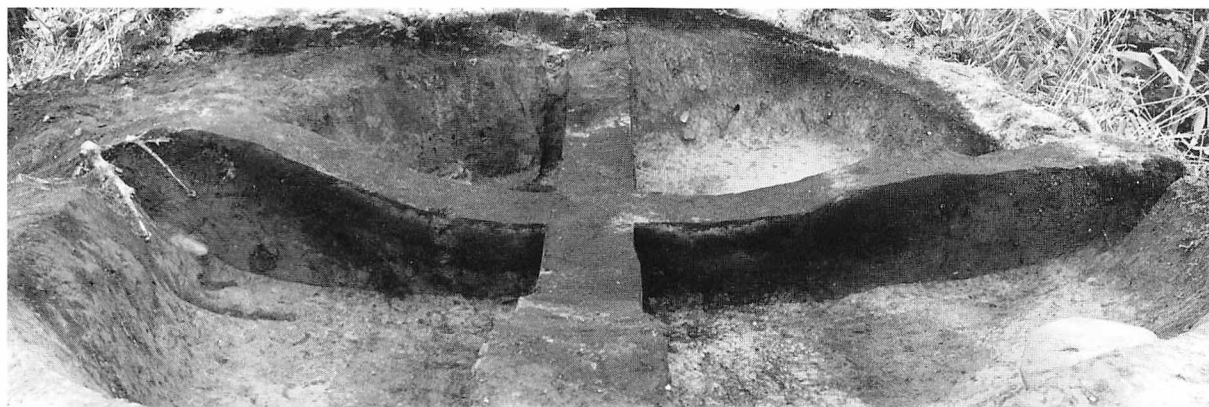
1 B地区調査前状況（北西から）



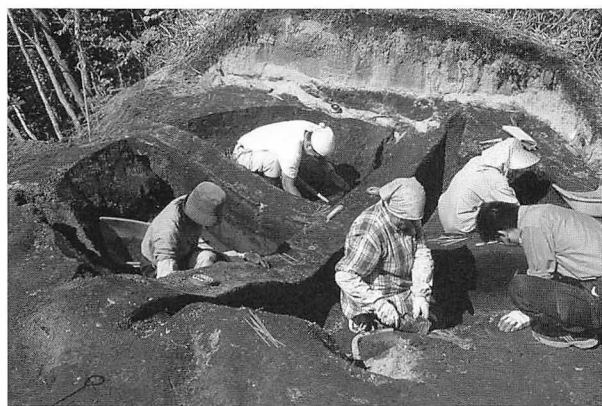
2 B地区調査前状況（北から）



1 IH-1 確認 (南西から)



2 IH-1 土層断面 (南西から)



3 IH-1 調査状況 (南から)



4 IH-1 土層断面 (南から)



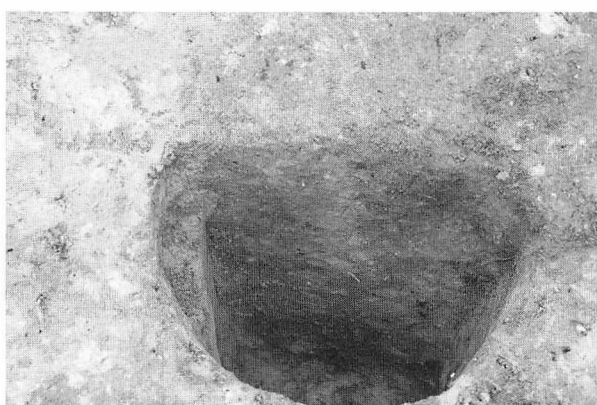
1 IH-1 土層断面 (西から)



2 IH-1 土器出土状況 (北東から)



3 IH-1・HP-1 土層断面 (東から)



4 IH-1・HP-5 土層断面 (西から)



5 IH-1 完掘 (南から)



1 IH-2 確認 (東から)



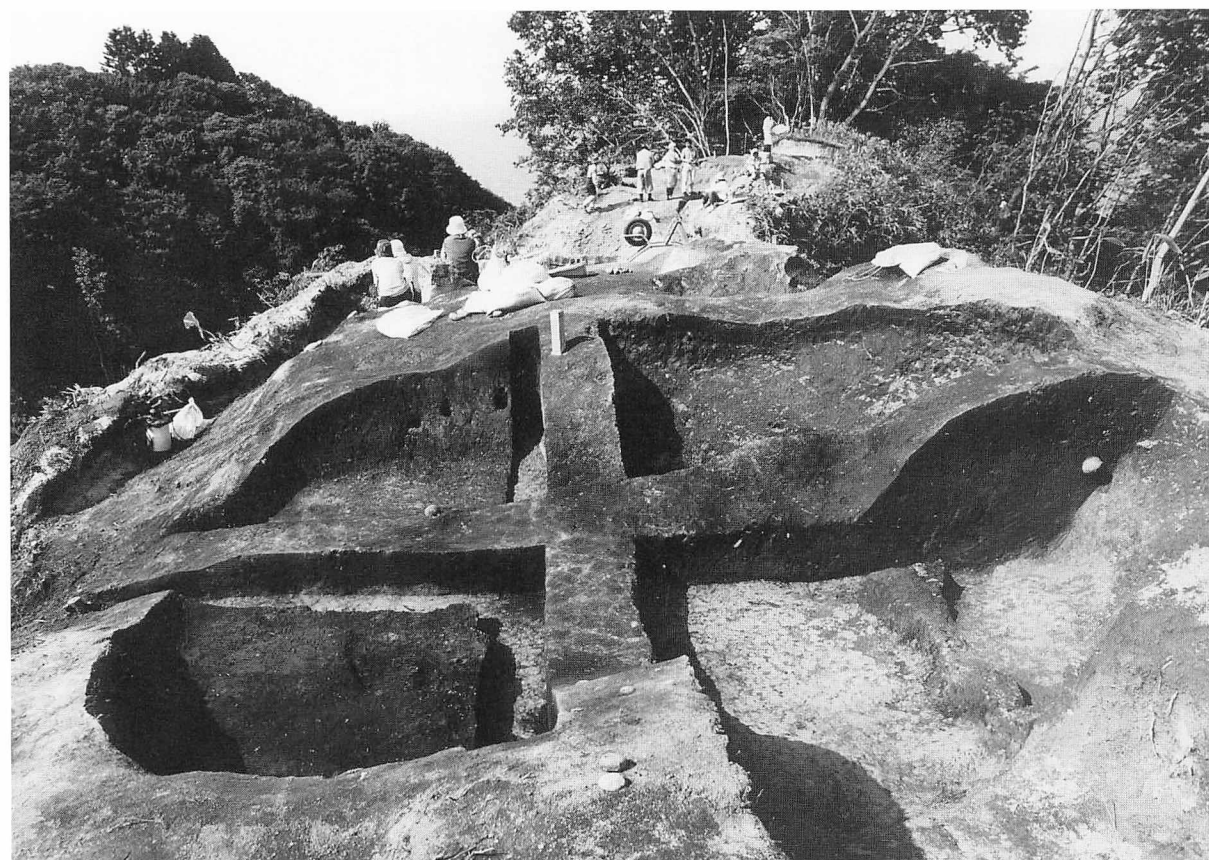
2 IH-2 調査状況 (東から)



3 IH-2 土層断面 (西から)



4 IH-2 調査状況 (南から)



5 IH-2 土層断面 (南西から)



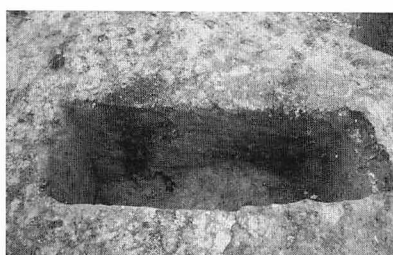
1 IH-2 小礫出土状況 (南西から)



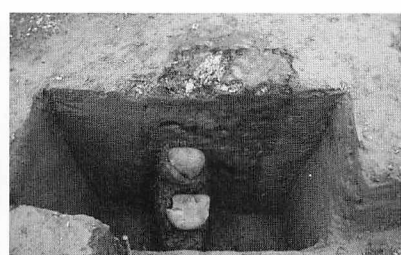
2 IH-2 土器出土状況 (北東から)



3 HP-3 確認 (西から)



4 HP-12・13土層断面 (北から)



5 HP-11土層断面 (西から)



6 IH-2 完掘 (南東から)



1 IH-3 土層断面 (南西から)



2 IH-3 焼土粒・炭化物堆積状況 (北から)

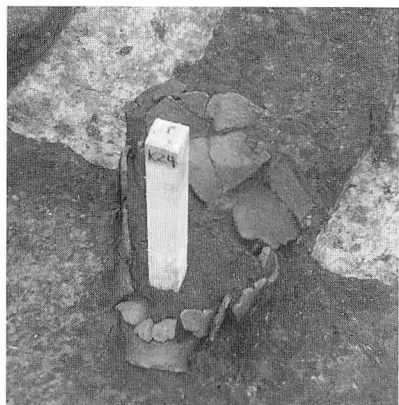


3 IH-3 調査状況 (西から)



4 IH-3 焼土粒・炭化物確認状況 (南東から)

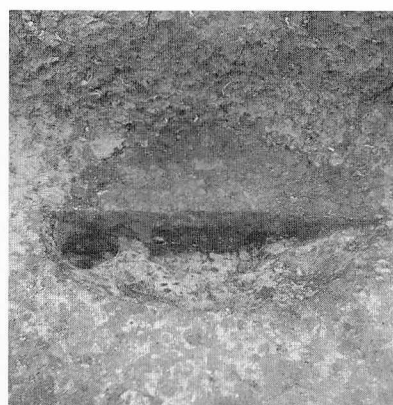
図版24



1 土器出土状況（北から）



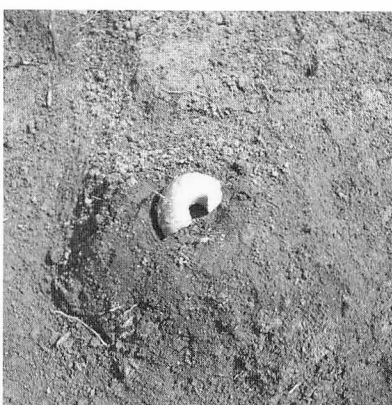
2 土器出土状況（南西から）



3 HP-1 土層断面（北西から）



4 石棒片出土状況（西から）



5 玉出土状況（西から）



6 埋設土器土層断面（西から）



7 IH-3 完掘（南東から）



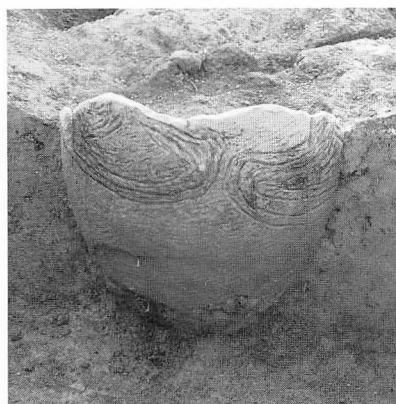
1 IH-4 土層断面 (北から)



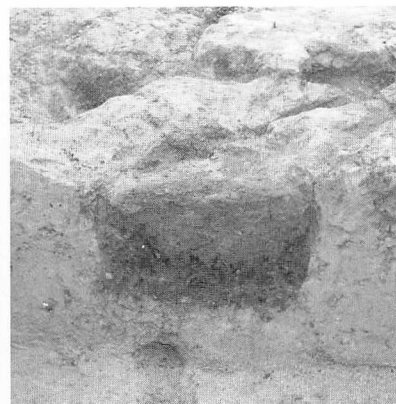
2 IH-4 土層断面 (北から)



3 土器出土状況 (北西から)



4 埋設土器出土状況 (西から)



5 埋設土器土層断面 (西から)



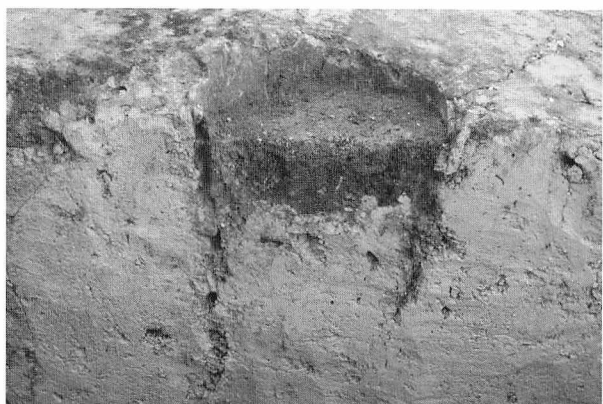
6 IH-4 完掘 (北東から)



1 IH-5土層断面 (南東から)



2 IH-5・HP-1土層断面 (北から)



3 IH-5埋設土器土層断面 (北から)



4 IH-5小礫出土状況 (北西から)



5 IH-5完掘 (北から)



1 IH-6 土層断面 (西から)



2 IH-6 土層断面 (南西から)



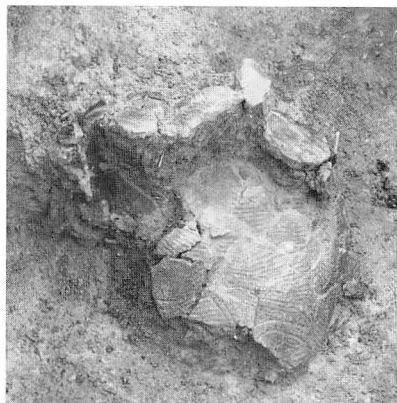
3 IH-6 調査状況 (西から)



4 IH-6 炭化材確認状況 (北東から)



5 IH-6 炭化材確認状況 (西から)



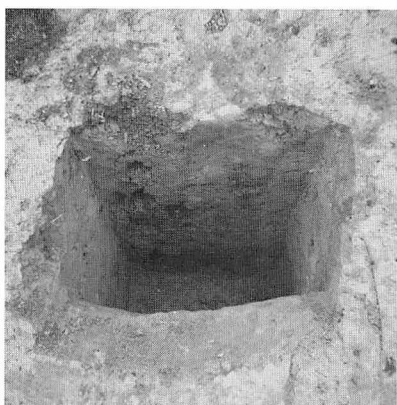
1 土器出土状況 1 (北東から)



2 土器出土状況 2 (北東から)



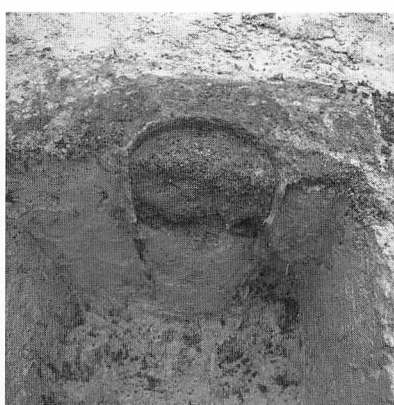
3 土器出土状況 3 (南西から)



4 HP-1 土層断面 (西から)



5 HP-3 土層断面 (南西から)



6 埋設土器土層断面 (西から)



7 IH-6 完掘 (西から)



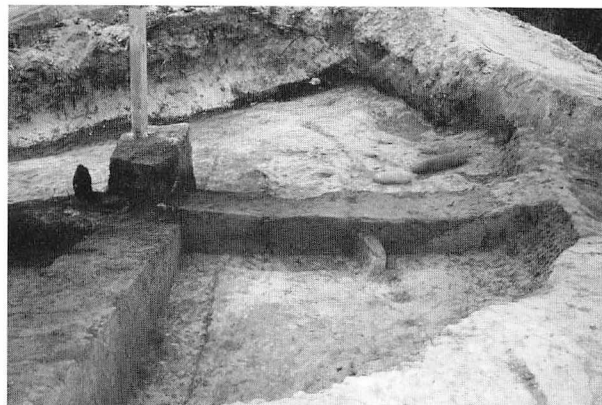
1 IH-7 土層断面 (西から)



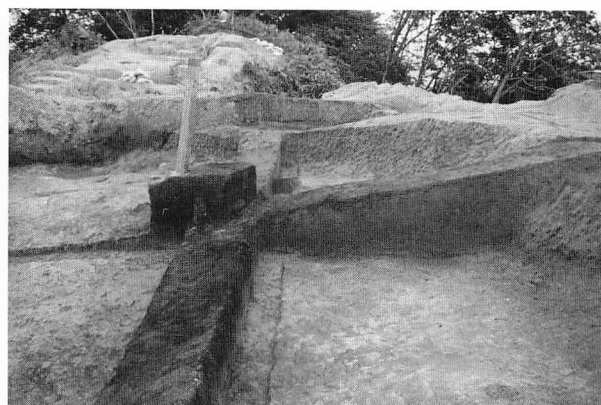
2 IH-7 土層断面 (南から)



3 IH-7 完掘 (西から)



1 IH-8 土層断面 (南東から)



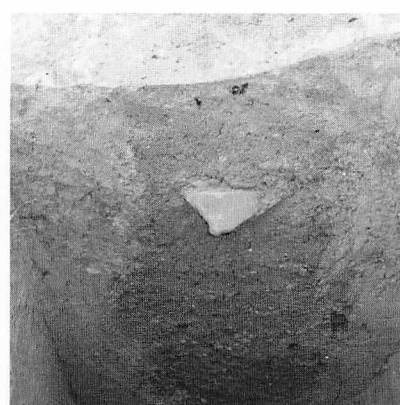
2 IH-8 土層断面 (南西から)



3 埋設土器出土状況 (北東から)



4 HP-4 土層断面 (西から)



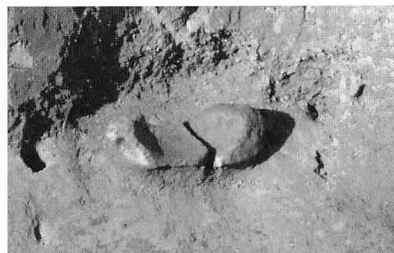
5 HP-1 土層断面 (南から)



6 IH-8 完掘 (南東から)



1 IH-9 土層断面 (南から)



2 砥石出土状況 (南西から)



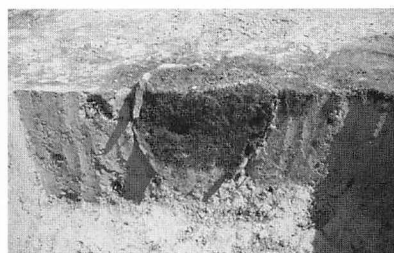
3 小礫出土状況 (西から)



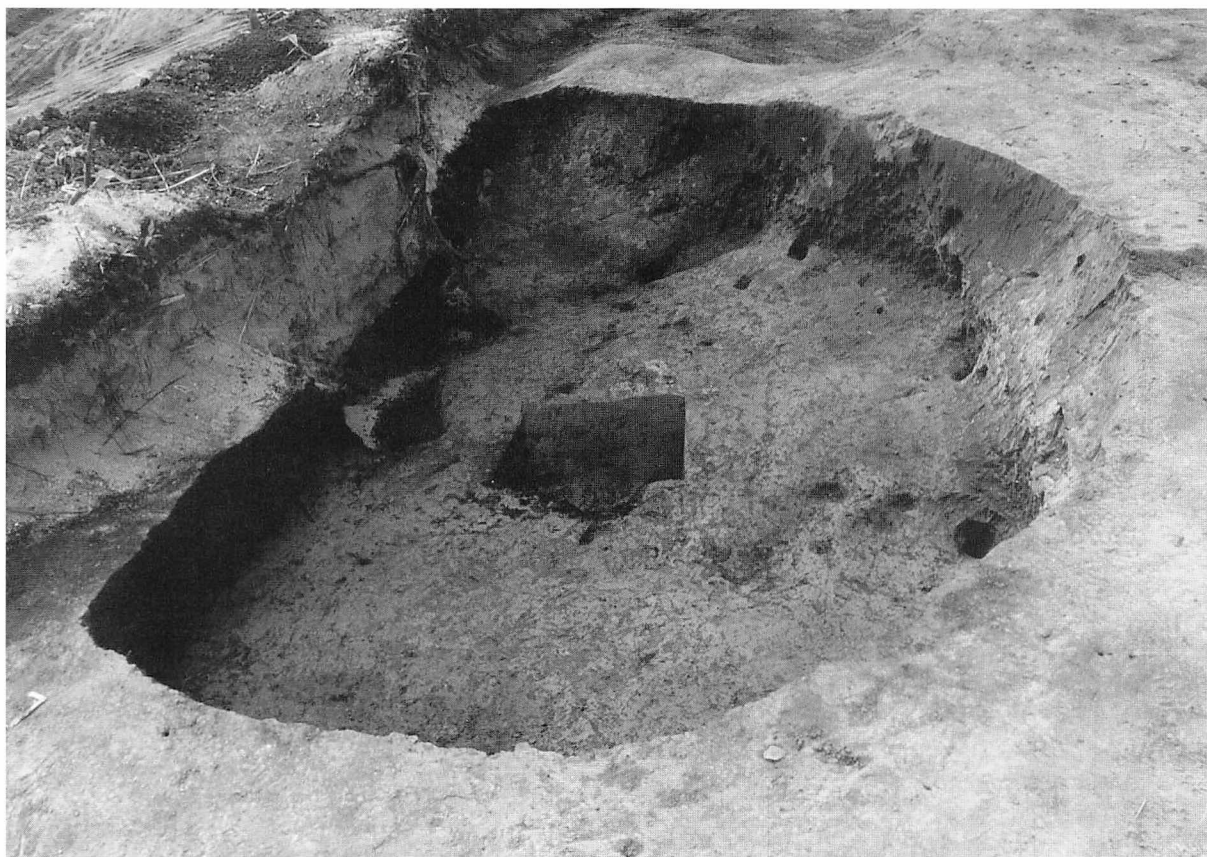
4 埋設土器確認 (北から)



5 埋設土器出土状況 (西から)



6 埋設土器土層断面 (西から)



7 IH-9 完掘 (南から)



1 IH-10土層断面（西から）



2 IH-10完掘（南から）



3 IH-10埋設土器出土状況（北西から）



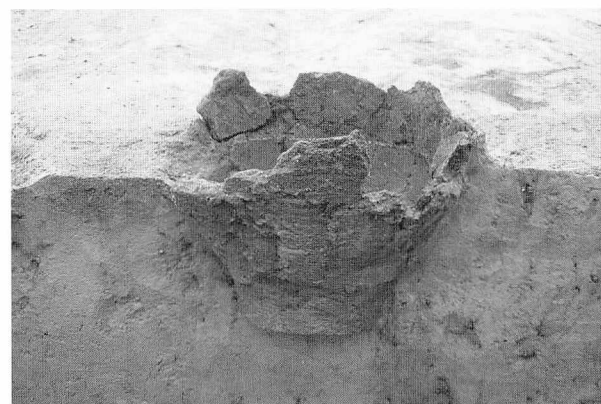
4 IH-10埋設土器土層断面（北西から）



5 IH-10・HP-1土層断面（南西から）



6 IH-10・HP-1完掘（南西から）



7 IH-11埋設土器出土状況（南から）



8 IH-11完掘（西から）



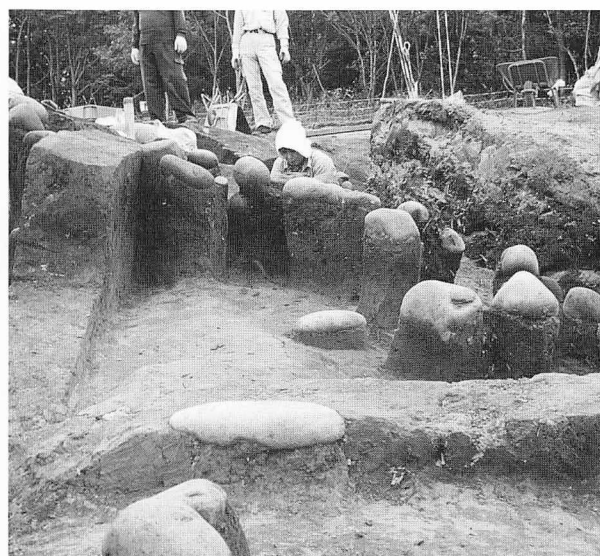
1 IP-9 土層断面 (東から)



2 IP-9 完掘 (北から)



3 IS-1 調査状況 (西から)



4 IS-1 出土状況 (北から)



5 IS-1 出土状況 (南から)



6 IS-1 出土状況 (南東から)



1 住居跡群調査状況（南から）



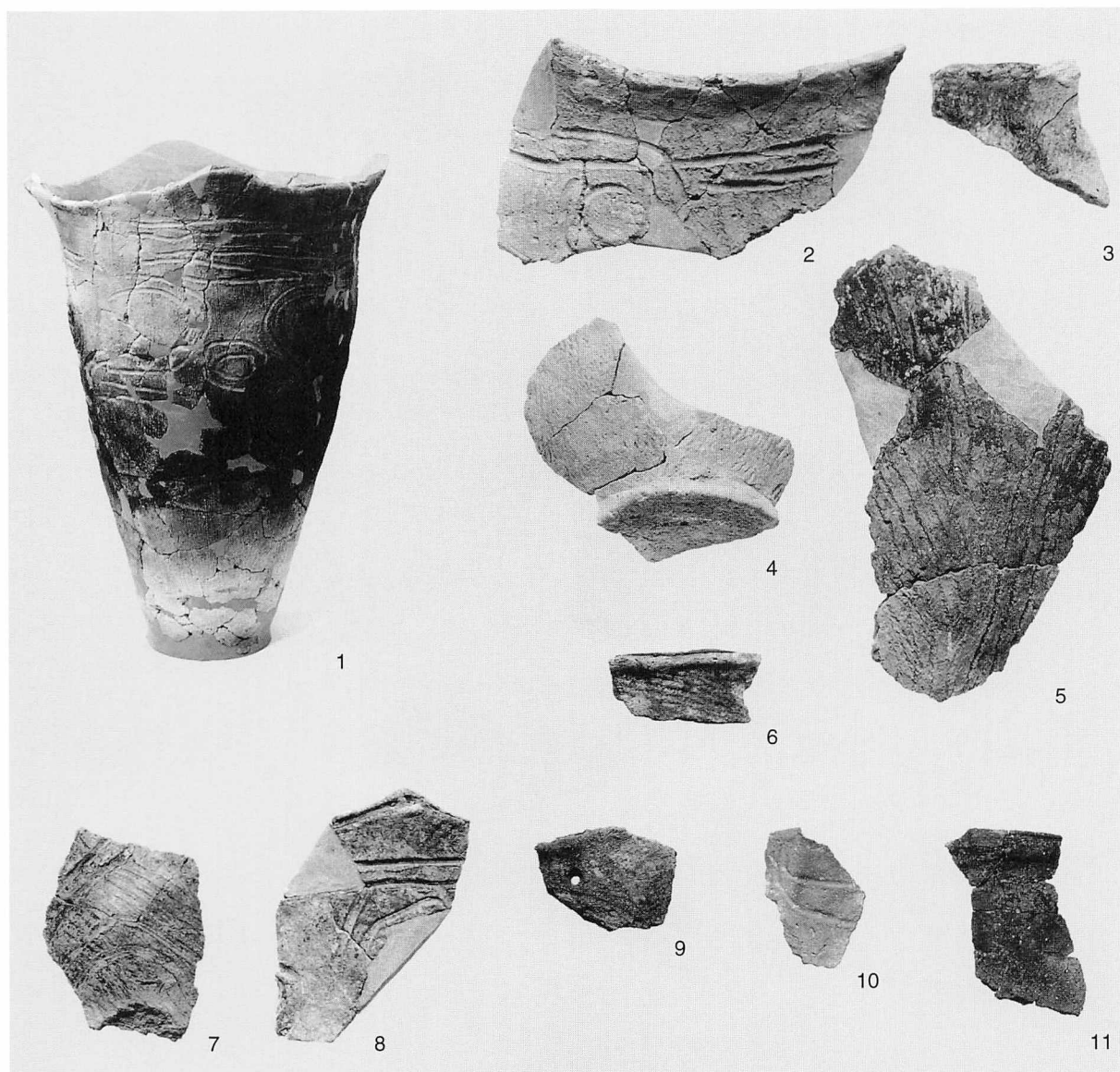
2 住居跡群調査状況（北から）



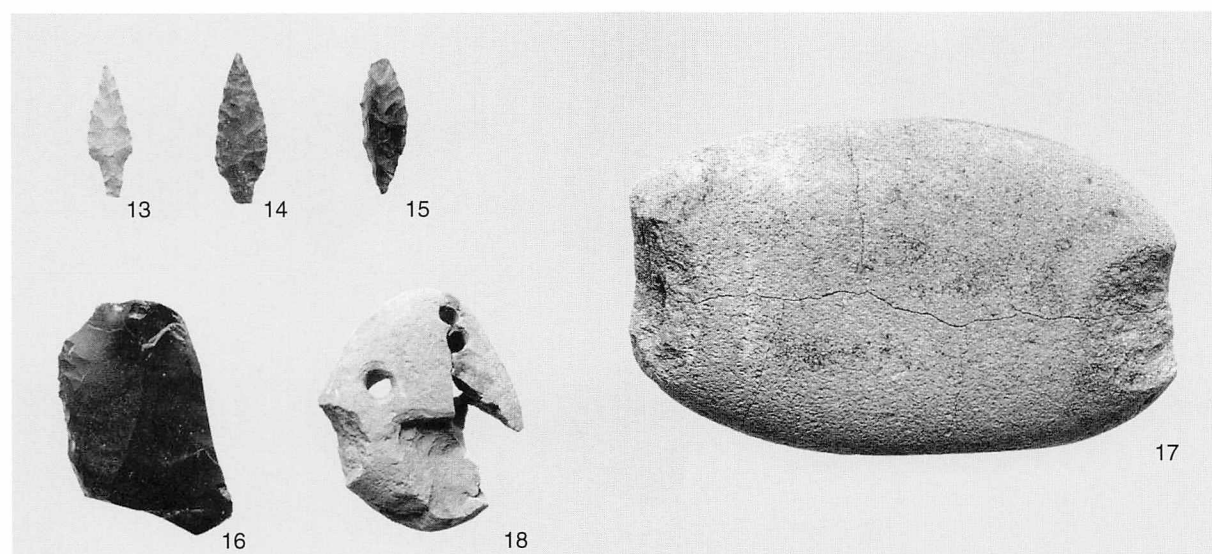
3 包含層調査状況（北西から）



4 住居跡群完掘（南から）



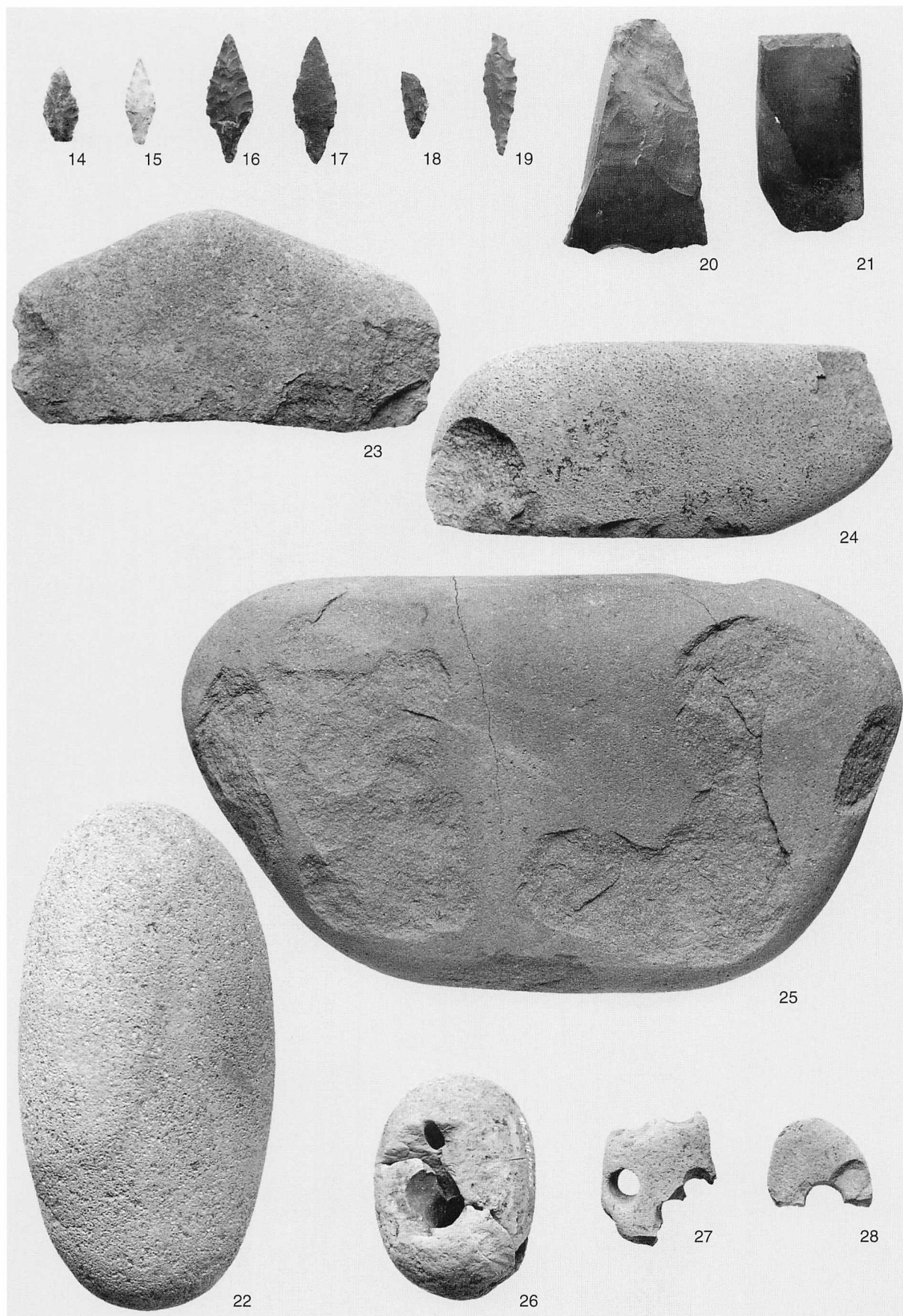
1 IH-1 出土の土器



2 IH-1 出土の石器



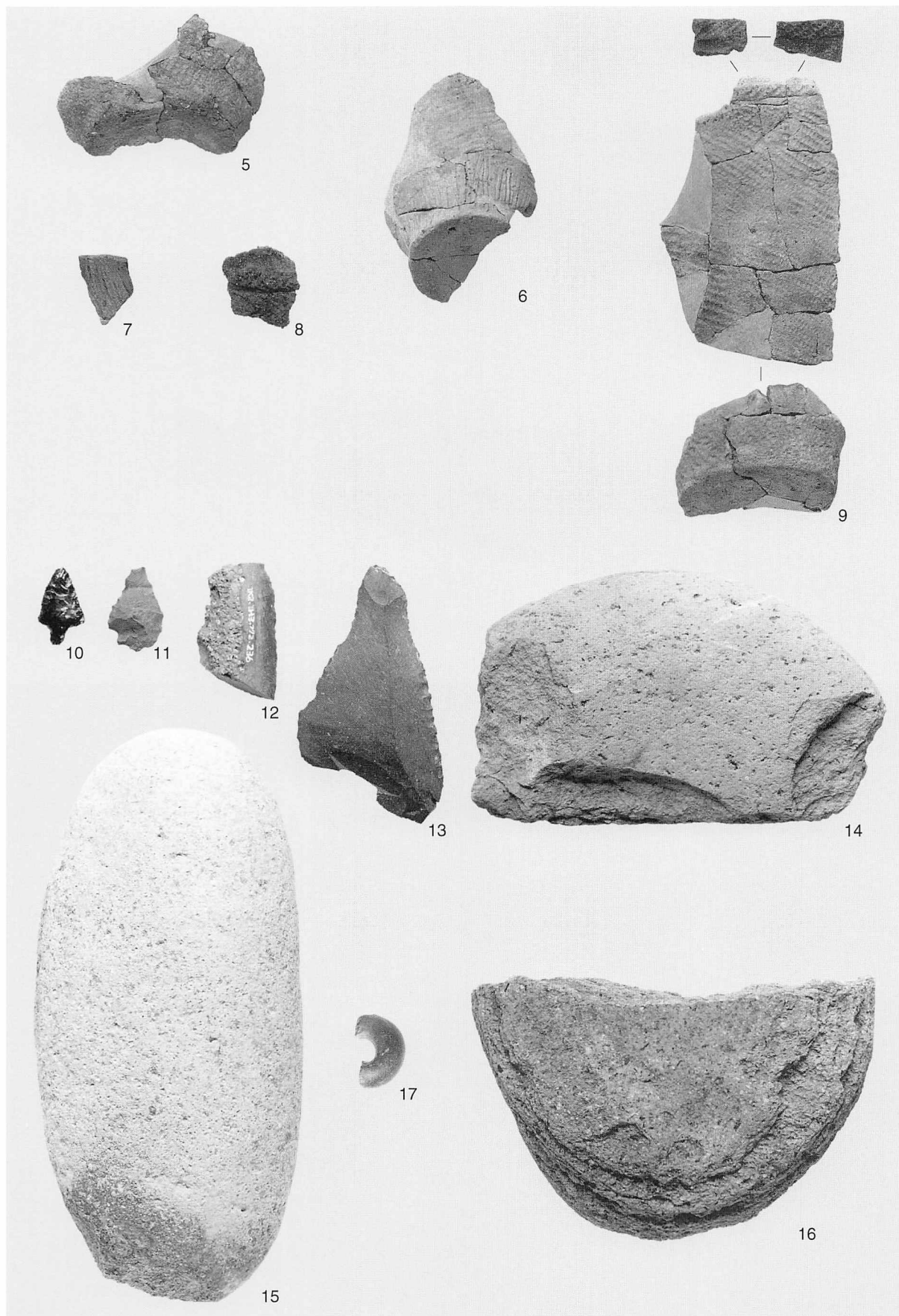
1 IH-2 出土の土器



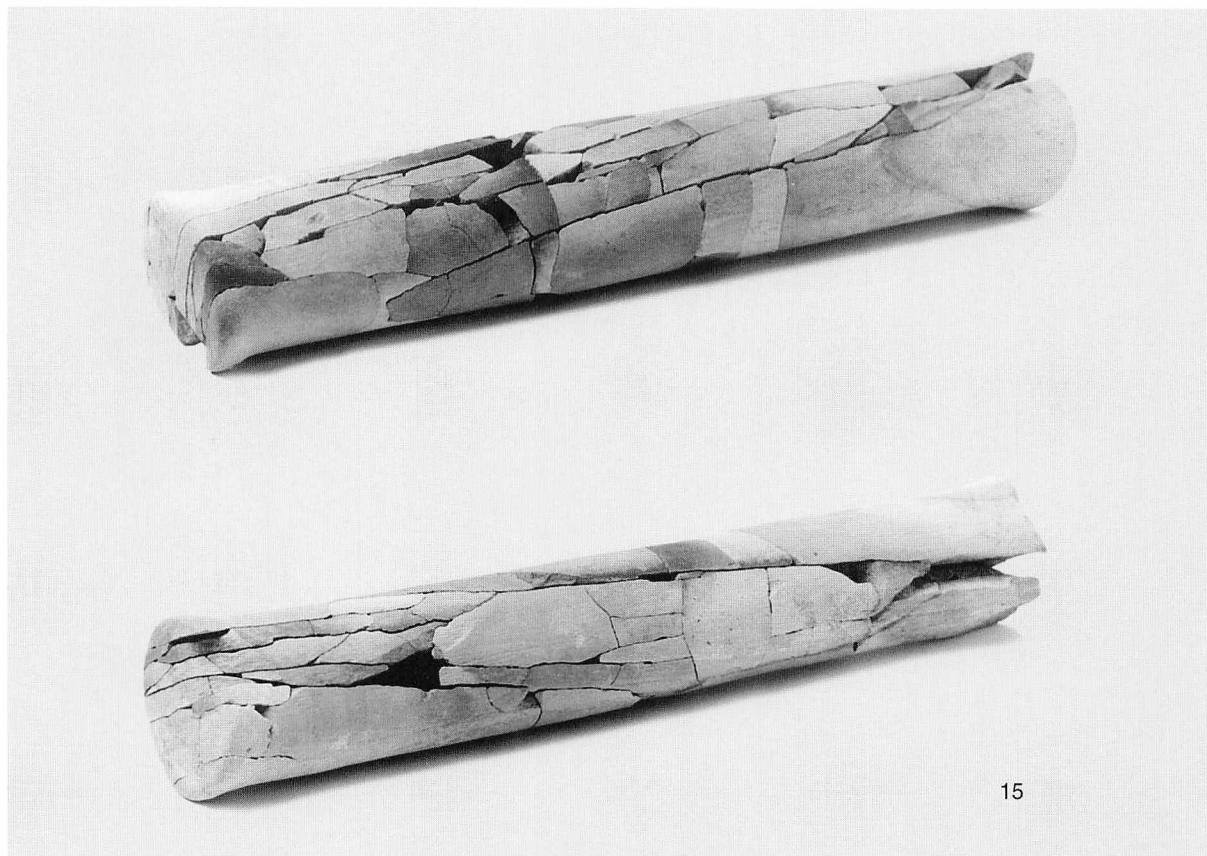
1 IH-2 出土の石器



1 IH-3 出土の土器



1 IH-3 出土の土器・石器



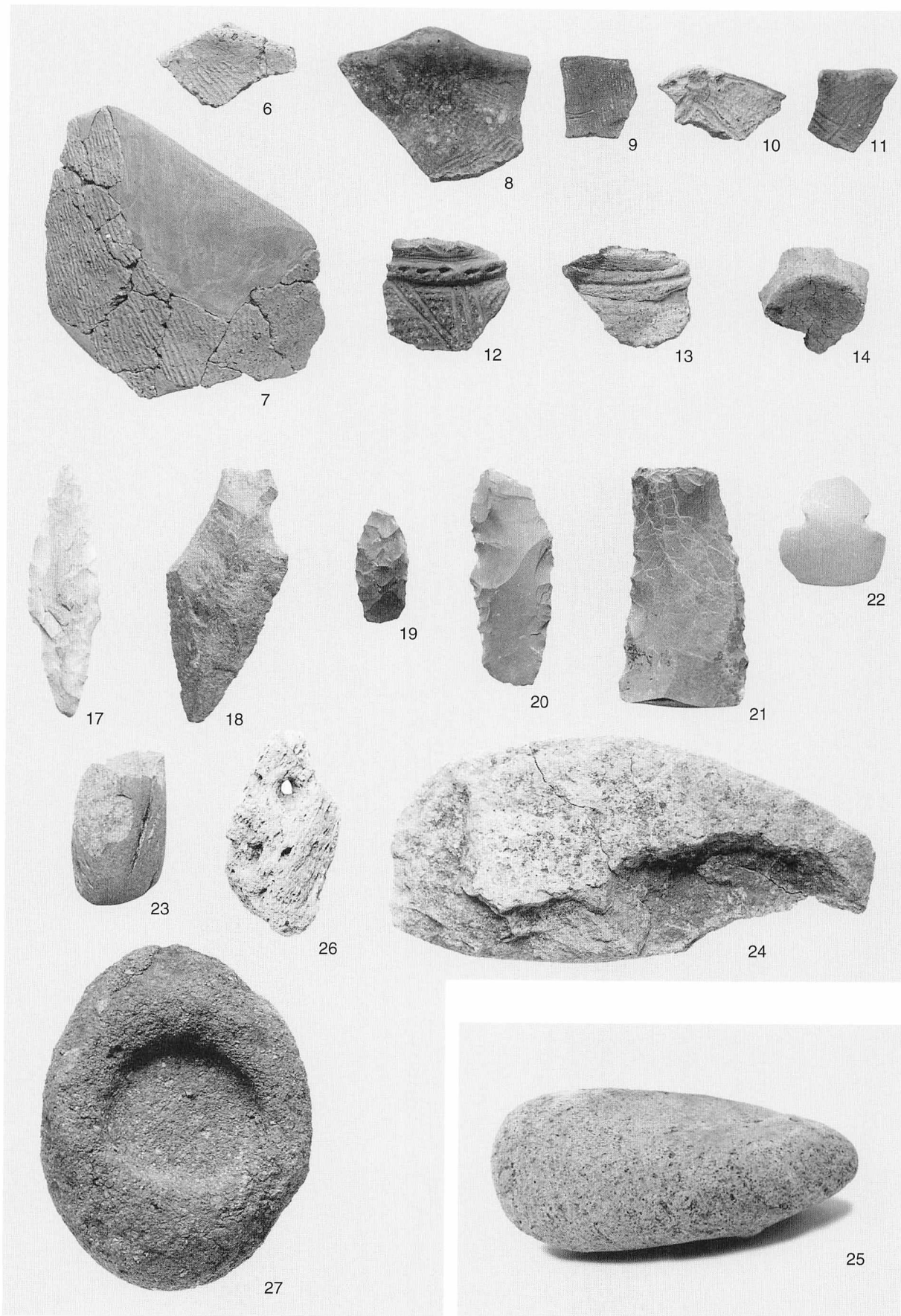
1 IH-3 出土の石棒



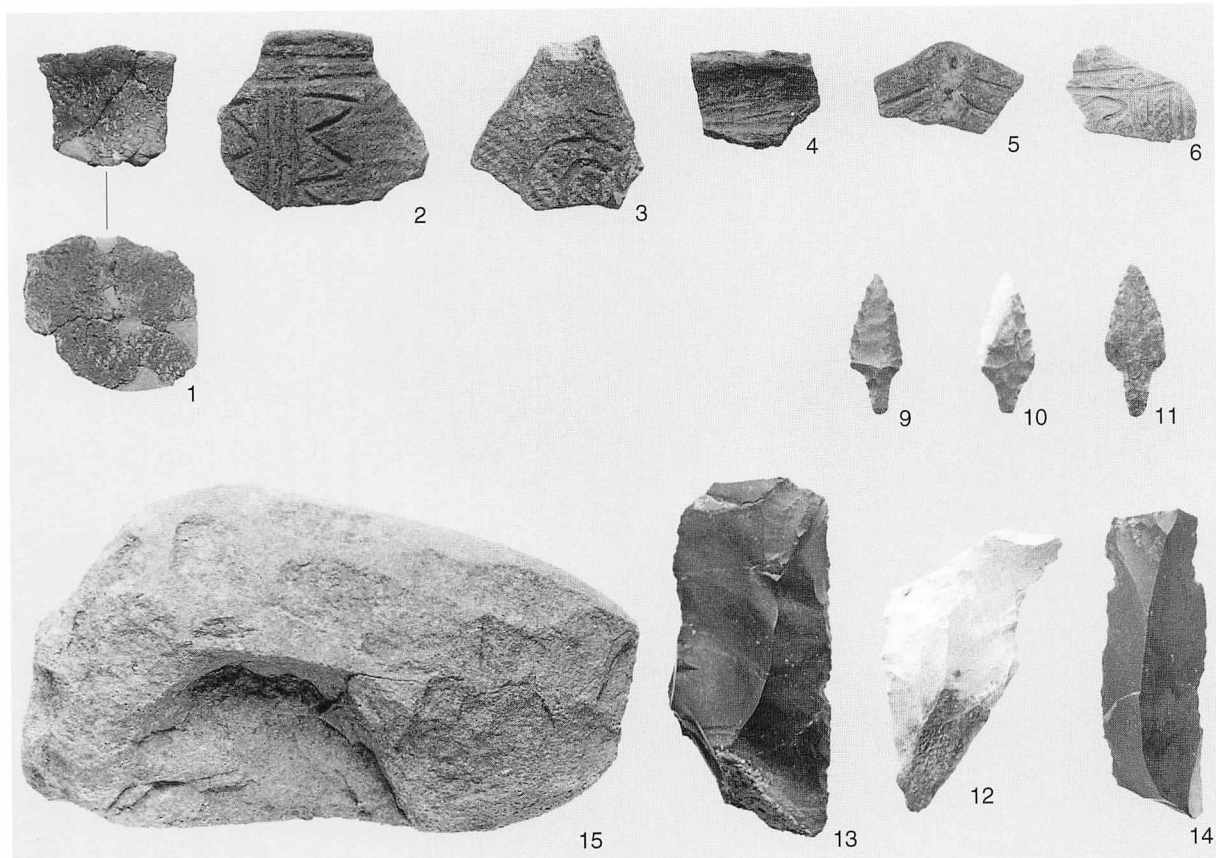
2 IH-3 出土の動物遺体 (イシイルカ)



1 IH-4出土の土器



1 IH-4出土の土器・石器



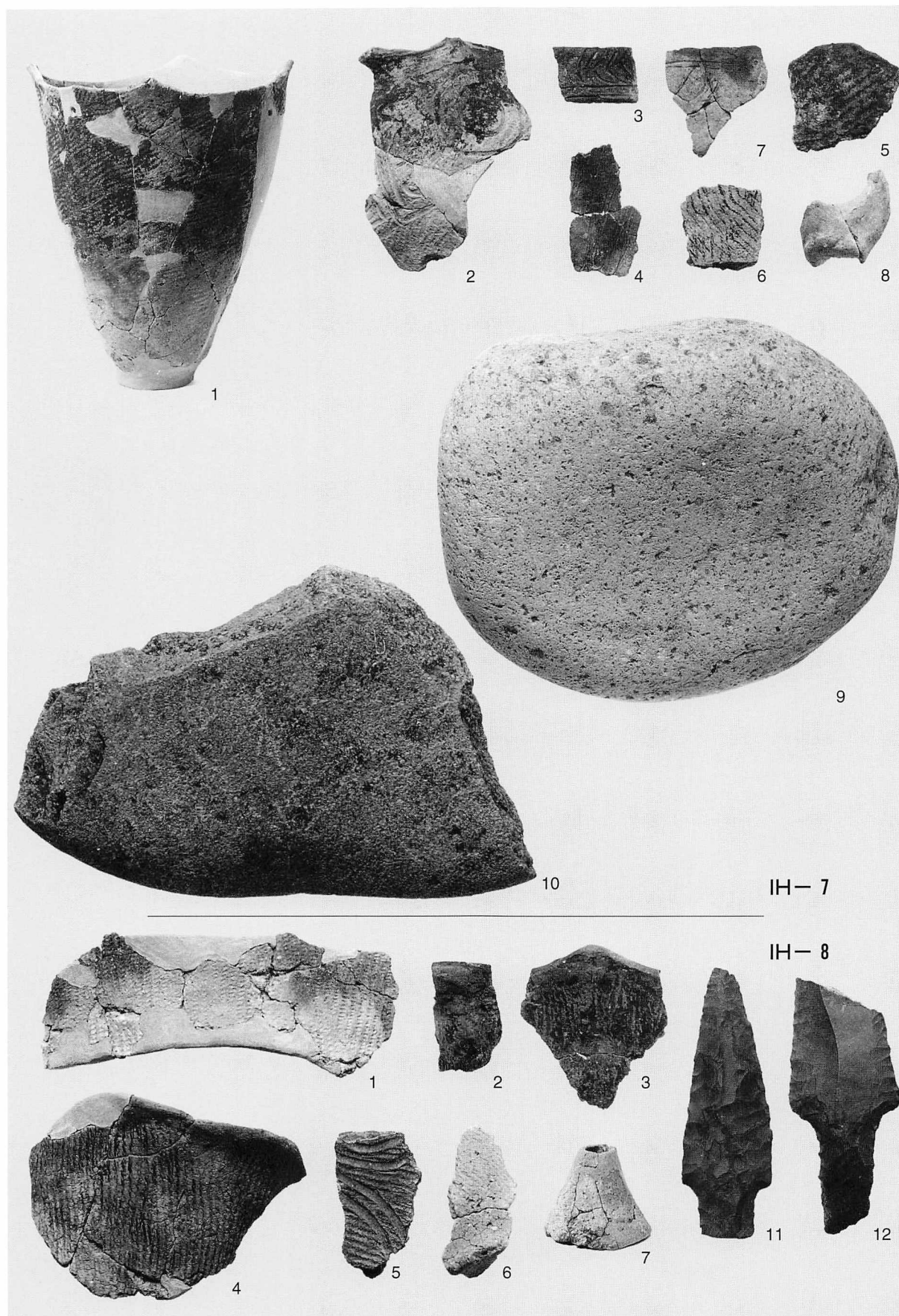
1 IH-5 出土の遺物



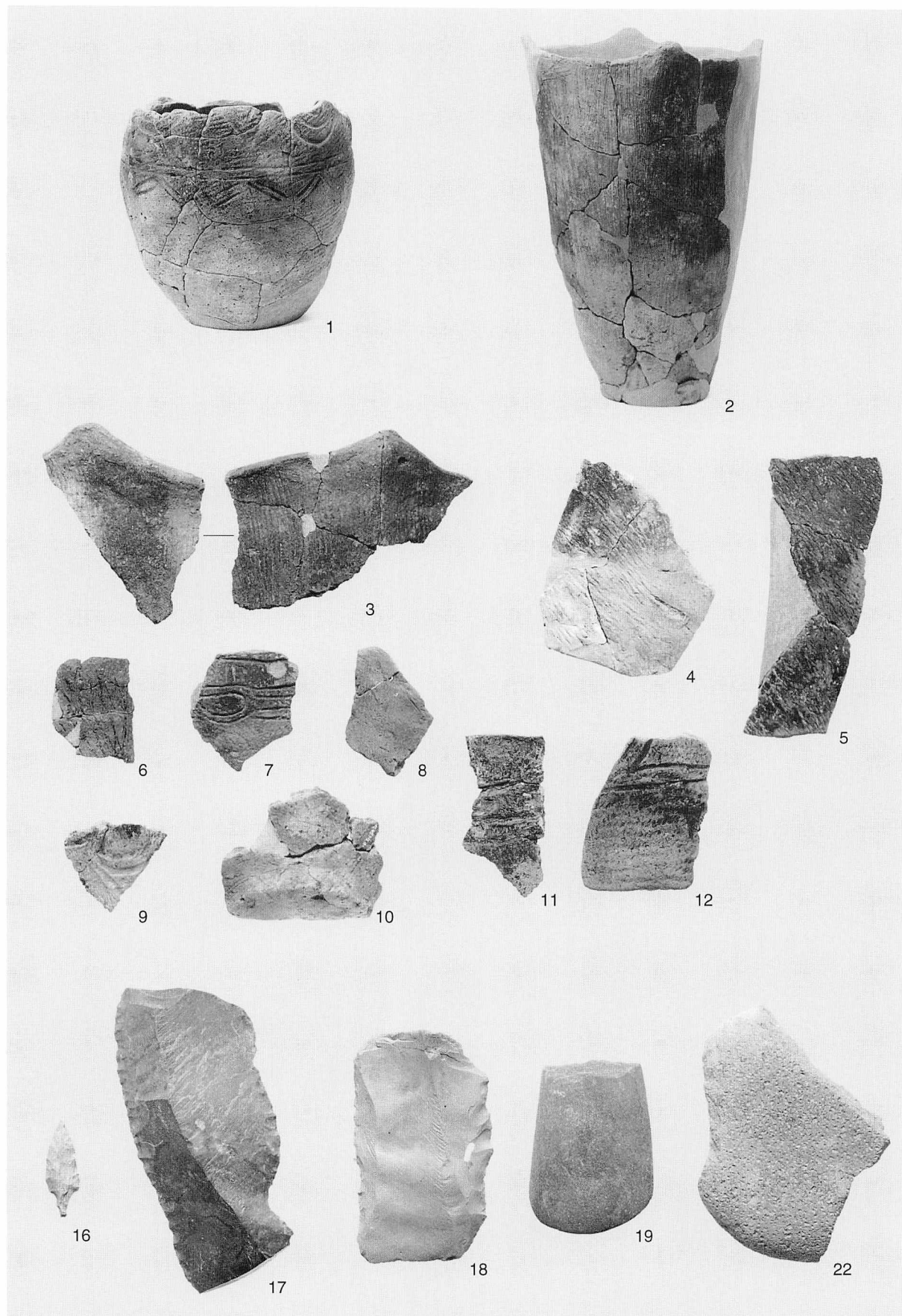
2 IH-6 出土の土器



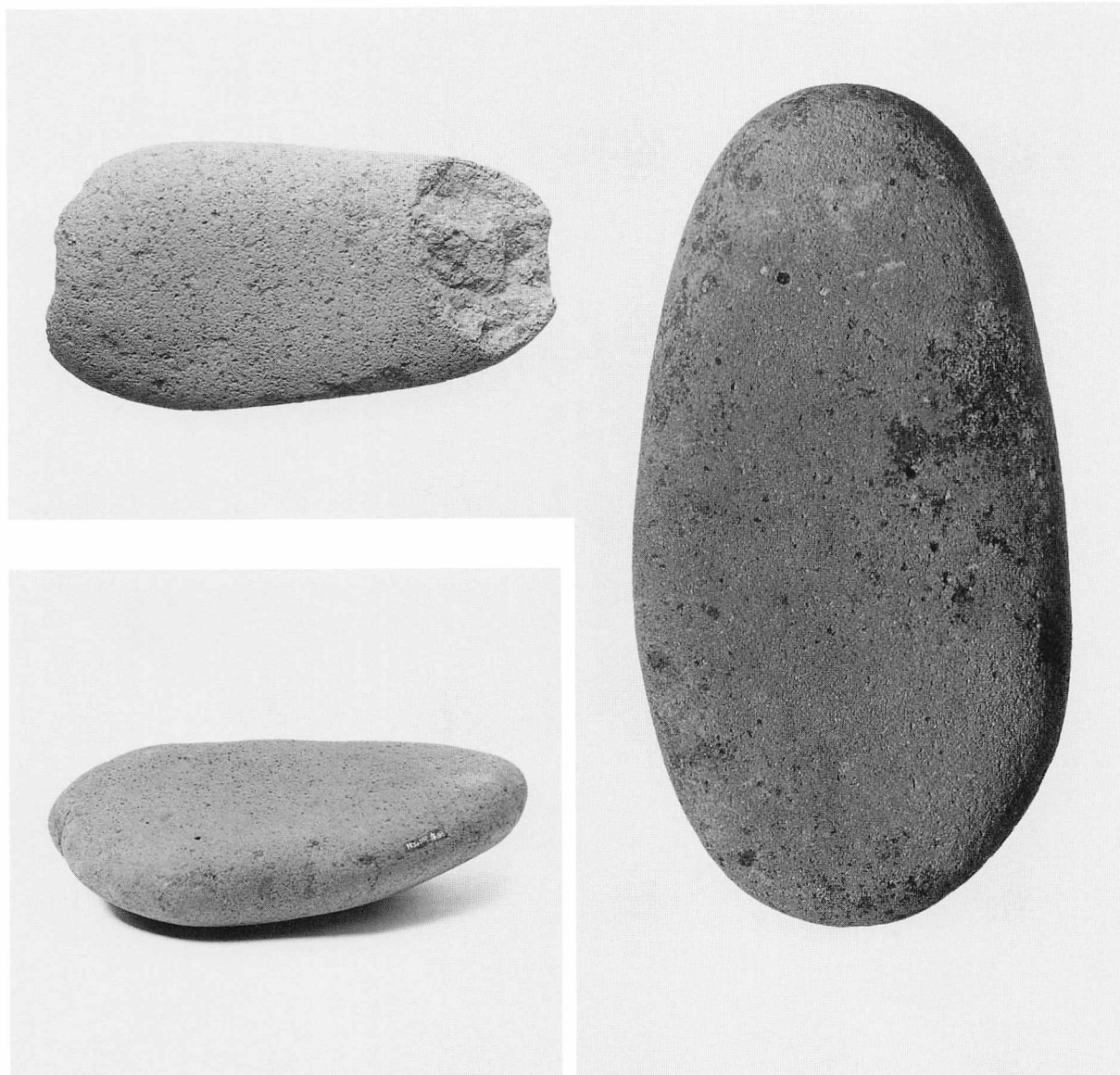
1 IH-6 出土の遺物



1 IH-7・8 出土の遺物



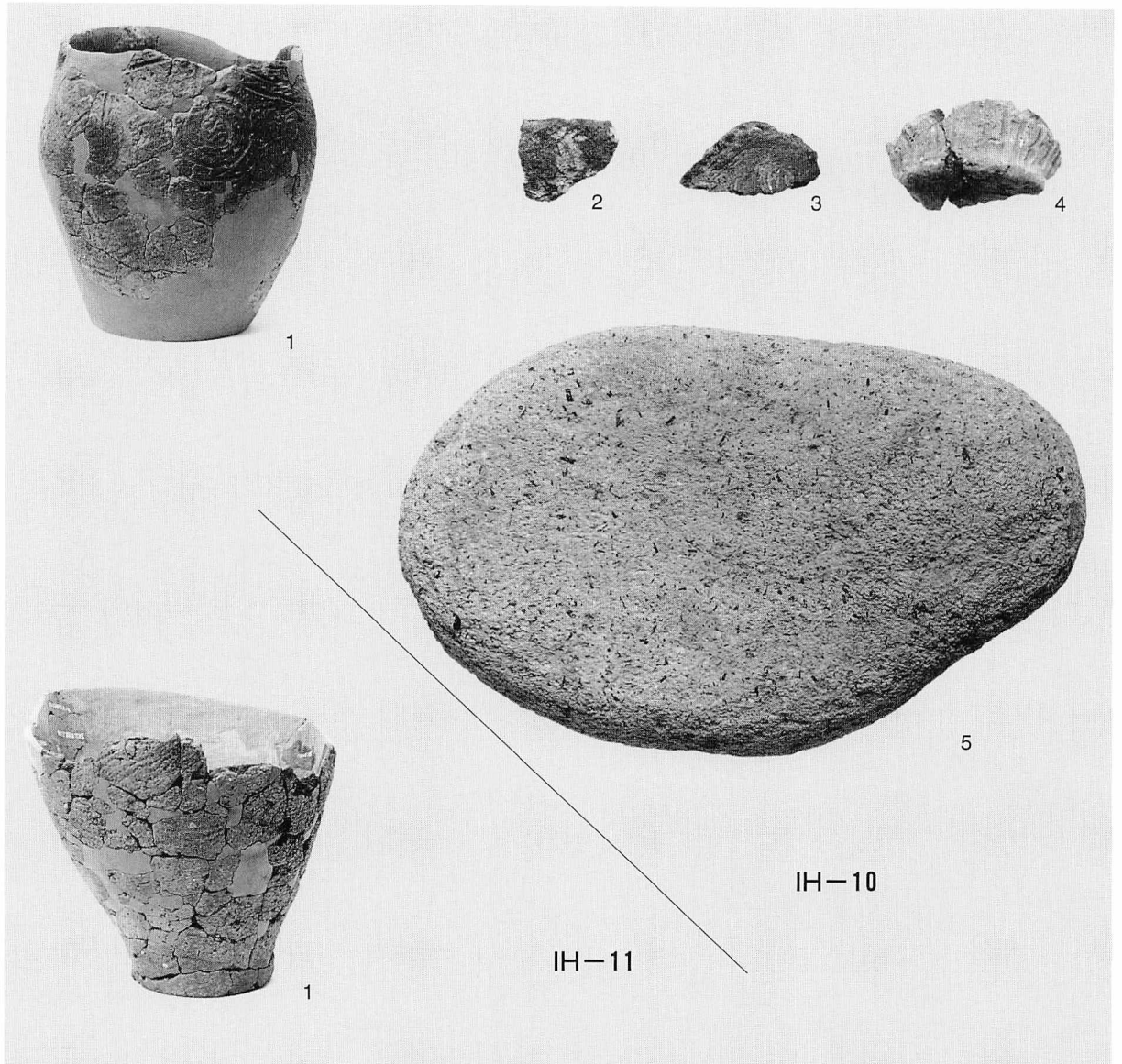
1 IH-9 出土の遺物



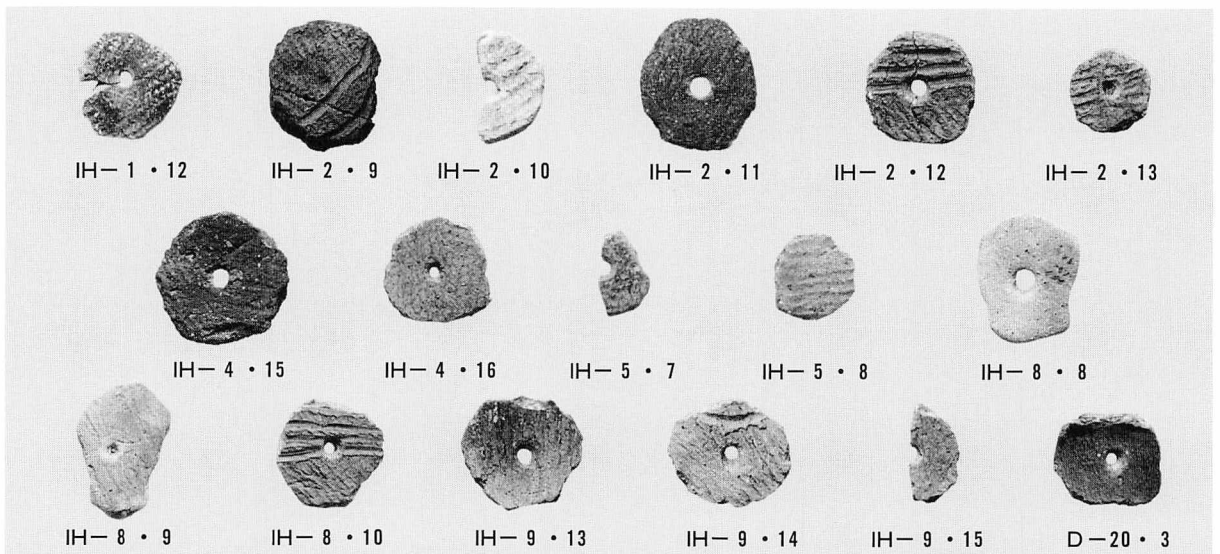
1 IH-9 出土の遺物



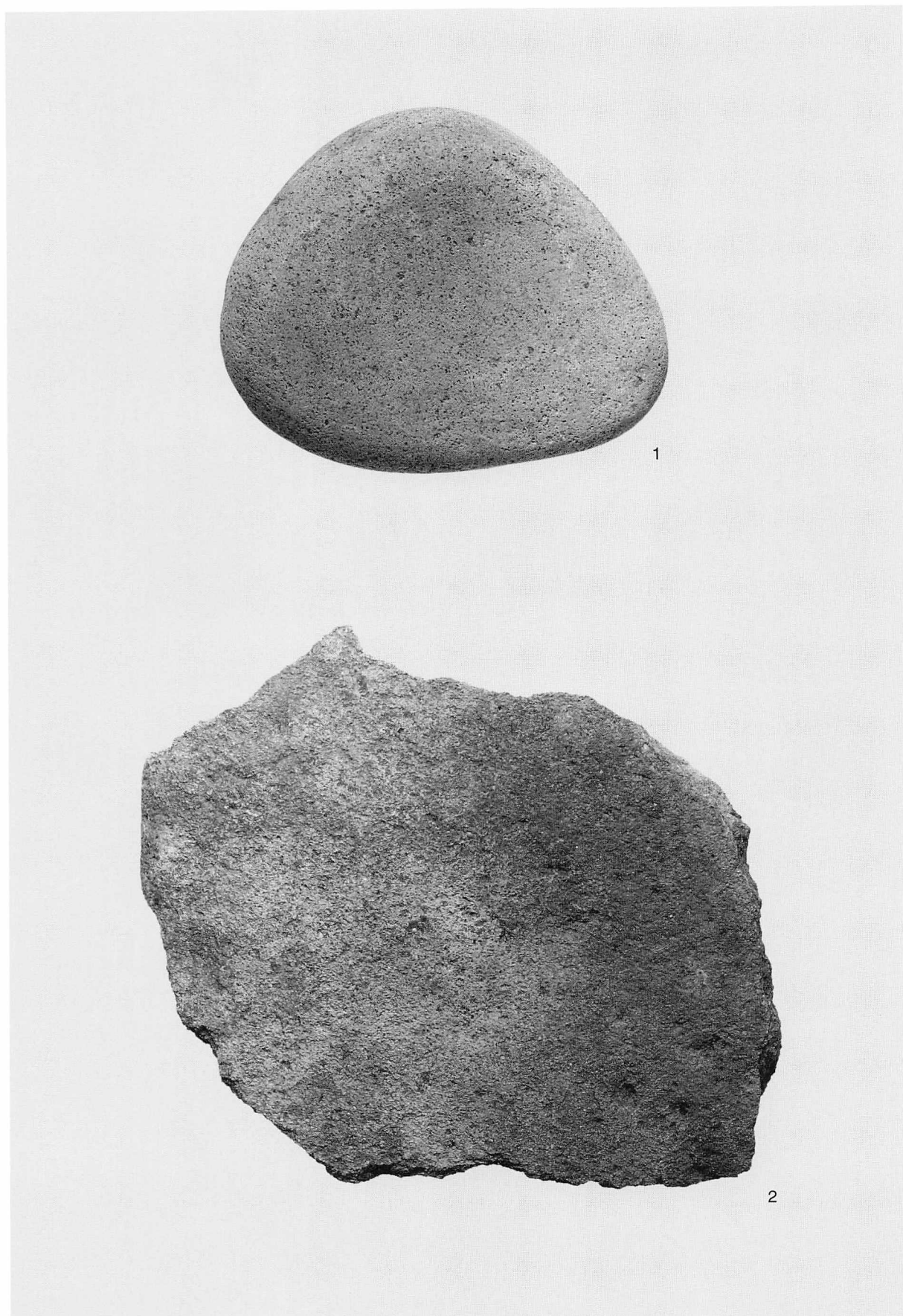
2 IH-9 出土の砥石



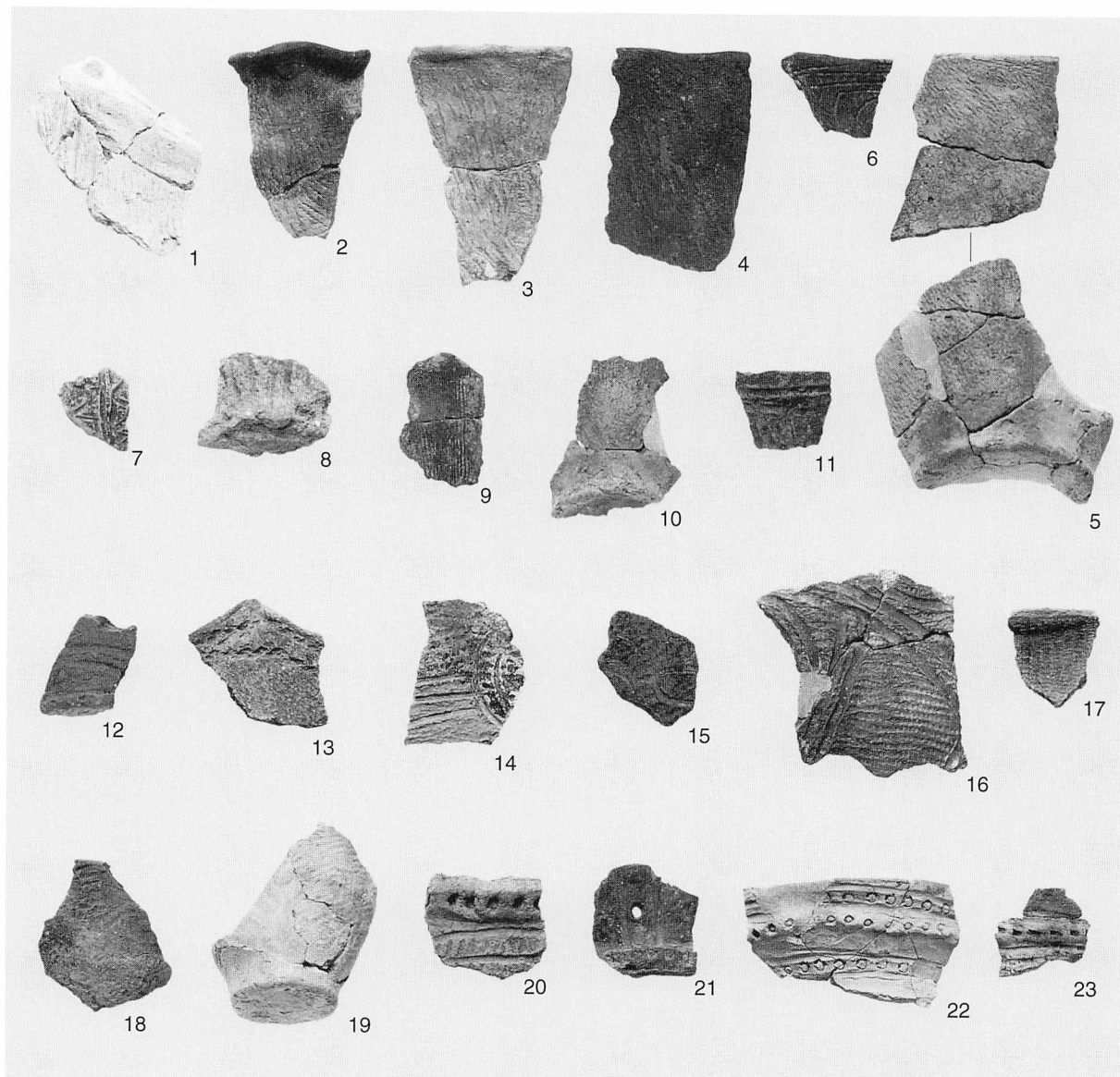
1 IH-10・11出土の遺物



2 B地区出土の土器片再生円盤



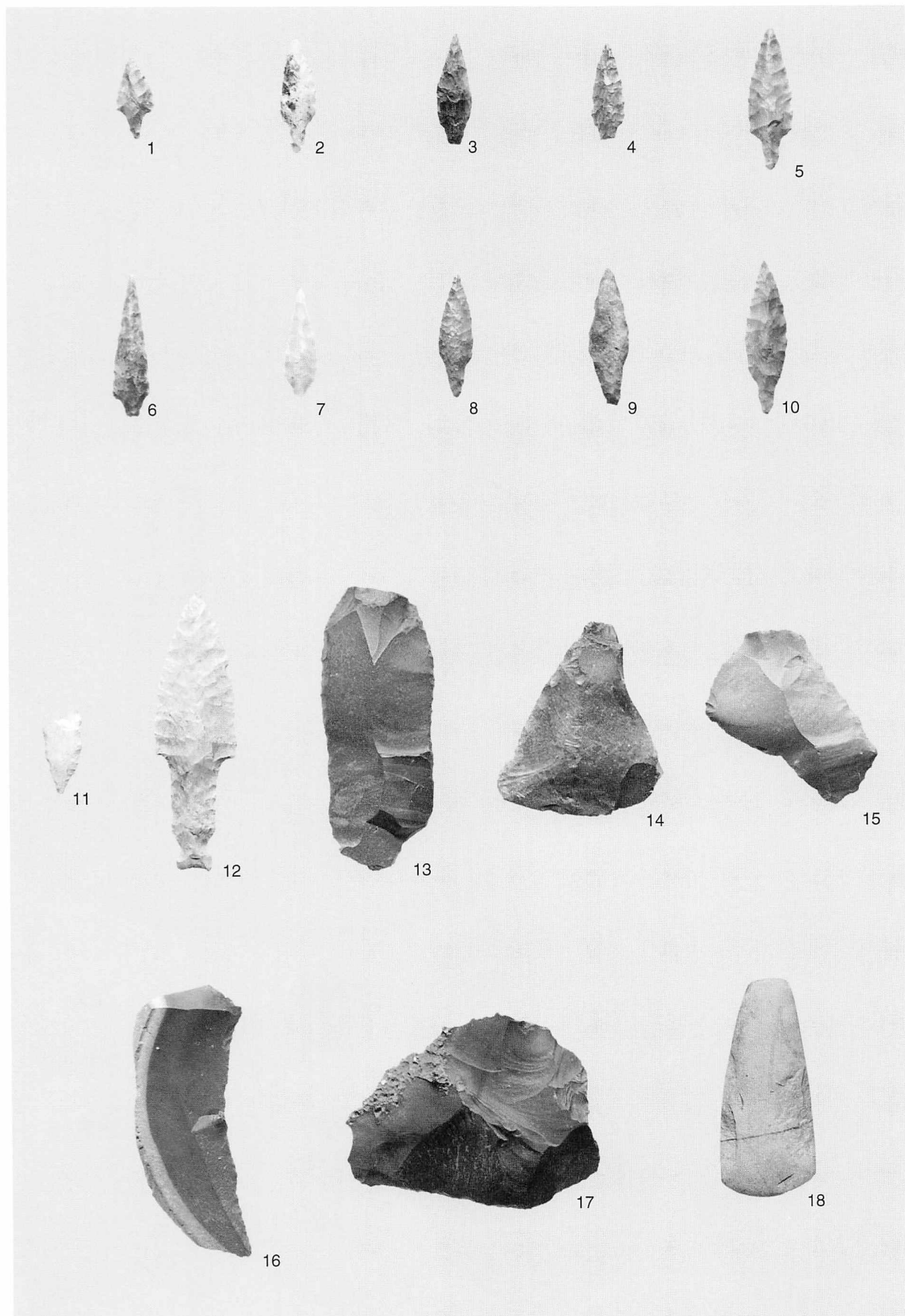
1 IS-1 出土の石器



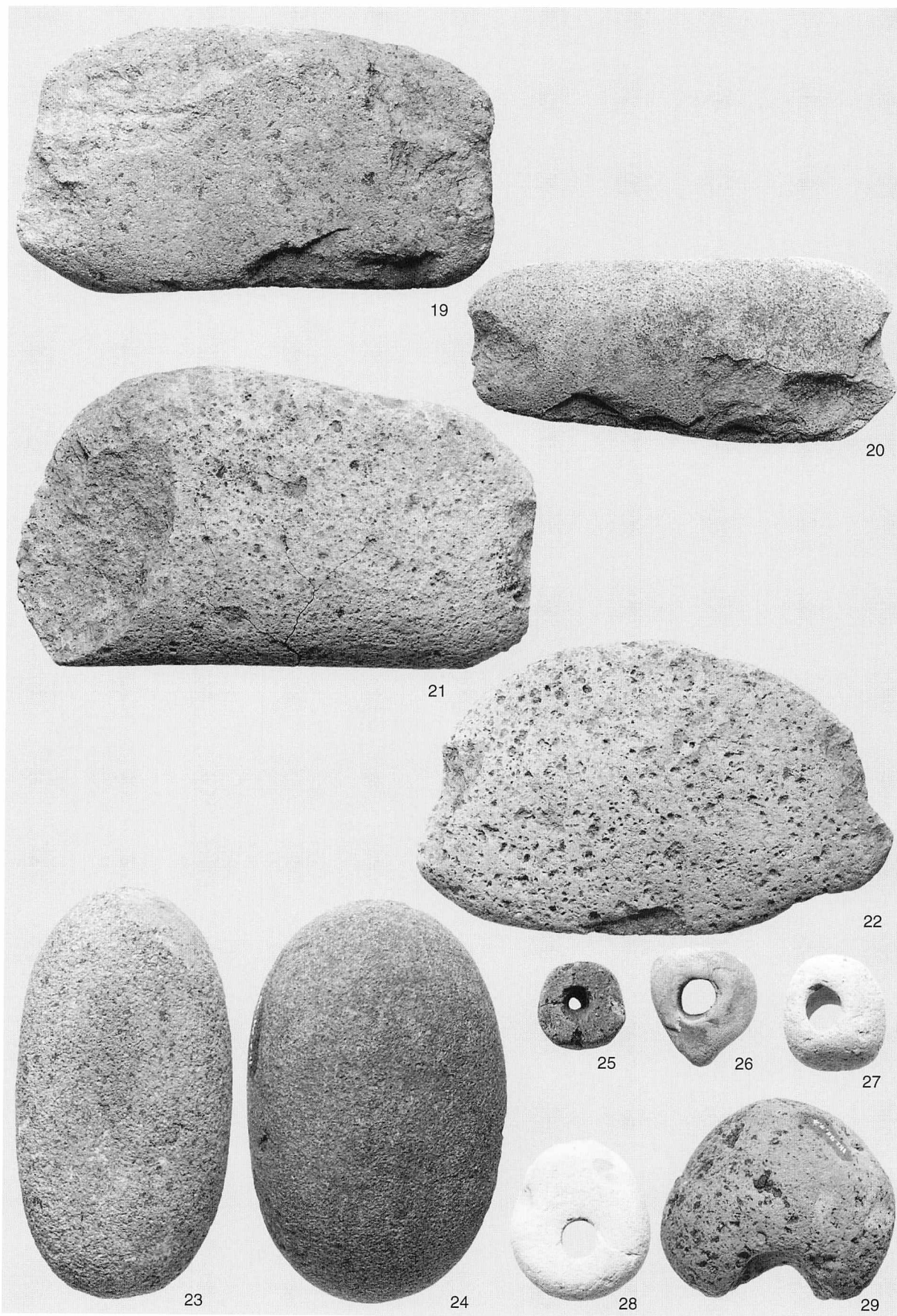
1 B地区包含層出土の土器



2 竪穴住居跡出土の土器



1 B地区包含層出土の石器



1 B地区包含層出土の石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまち いしくらにいせき							
書名	森町 石倉 2 遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）							
シリーズ番号	第197集							
編著者名	村田 大、阿部明義、石井淳平、種市幸生							
編集機関	財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2004年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしくら いせき 石倉 2 遺跡	ほっかいどう 北海道 かまべぐん 茅部郡 もりまち 森町 あざいしくらちよう 字石倉 町 306ほか	01345	B-15-32	42° 9′ 20″	140° 28′ 28″	20030506 ～ 20030808	2,324m ²	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石倉 2 遺跡	集落跡	縄文時代 中期後半 晩期後葉	竪穴住居跡 11軒 土壇 9基 Tピット 10基 焼土 2カ所	土器 縄文中期後半榎林式 縄文晩期後葉聖山II式 土製品 土器片再生円盤 石器 石鏃・石槍・石錐・スクレイパー・つまみ付きナイフ・扁平打製石器・石斧・たたき石・すり石・砥石・台石・石皿ほか 石製品 石棒・玉		細い尾根状の高位段丘上に竪穴住居跡群が検出される		

(助北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第197集

森町 石倉2遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 平成16年3月31日
編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL 011-386-3231
印刷 株式会社アイワード
〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5番地91
TEL 011-241-9341